

日本エイジノミクス原論

初の「三世代平等型社会」の達成

堀 亜起良 東洋哲学者

はじめに

世界の宝石鉱脈としての日本

二一世紀の日本は？

「だれにもわかつちやいねえよ」

と即座に勝安房（海舟）なら吐き捨てるようにいい、

「次の世紀に向かって話しかけなされ」

と熟慮して万札先生（福沢諭吉）ならおだやかにいいます。

ややあって、

「ニッポンは世界の宝石鉱脈である」

と無名の東洋哲学者堀亜起良は臆せずにいいます。

なぜ臆せずにいえるかといえば、はるかな遠い日に、東に向かった文化の波は漢・韓を通じ

て日本に達して開花し、西に向かった技術の波はローマ・西欧・北米を経てはるかに遠い日本に至って開化したと知られるからです。たどりついて開花・開化しなかった数多くのものは、この島のどこかに埋もれています。

それらは宝石鉱脈となって深く浅く横たわっているはず。

わずかな特例のほか、この国からは西へも東へも出て行った形跡がないからです。

本稿からしてがまずその証です。

「漢字かなカナROMA字まじり」の日本語は、世界の文化を撚り合わせて総合していますし、衣・食・住の日用品のありようは、世界の技術の長所を融け合わせて統合を示しています。

いまや東方にも西方にも、パーツ・アンノウン（知られざる地）はどこにもなくなりました。陸からも、海からも、空からも、最終便は着いてしまったのですから、もはや待っていても何もやってこないのです。

そんな溜め込み状況は、日本人なら見て、聞いて、触れて、気づいていること。

そこで、歴史と未来の短い風のタイムラグを見定めたいので、

「ニッポンは世界の宝石鉱脈である」

という二一世紀の今を予測するフレーズが、ここに日本語オリジナルで記されることとなりました。臆せずにいえるのは、子午線と卯酉線を重ね合わせて、二一世紀初頭の世界を航空写真のように仔細に観察したうえで、いちはやく確認したのが本稿だからです。

今世紀の初頭からすでに彗星のように輝きを増しながら姿を露わにしているモノがありヒトもおりますが、多くはなお原石のまま折り重なって呼び出し庄之助の声を待っています。

これからそれらの原石の一つひとつを揺り起こして、掘り出して、磨きあげて輝かせるのは、ほかでもない一人ひとりの日本国民が保持している知識と技術による力しごとです。

しずかに前世紀にまで思いをいたせば、世紀の前半に帝国主義が起こした二度の世界大戦は、世界各地に未曾有の戦禍をもたらしました。人間の産み出した技術が人類を滅ぼす予兆となった広島・長崎の原爆投下を含む名状しがたい大小の傷跡をこの国の各地にもたらしました。

各地の焦土に立った先人は、だれもがひとたびは茫然としたあと、悲惨な情景を眼の裏にとどめ、さらには骨に刻み、

「国破れて山河あり」

の杜甫の詩に思いを託し、「封建的」なものをそぎ落として過去と決別し、戦争放棄を訴える「憲法第九条」を掲げ、みんなして焦土と化した国土の復興に邁進したのでした。

ひもじさと貧しさをともにし、豊かさを等しく分け合って、前世紀の後半には歴史に希れな「九割中流」という「近似大同社会」（夜、戸を閉ざさずという社会）をなし遂げました。この誇るべき経緯については後の章で詳しく述べたいと思います。

そして今世紀の初頭には、平和であったことの実証として、平均寿命を世界一にまで延伸し、

だれもが国際的標準である「人生六五年」をはるかに超えて「人生九〇年」を望むことができる長寿国の先駆けとして登場しています。

「長寿はひとりの人間にとつて、そして人類にとつて普遍的な価値である」

と、いまのこの国でなら、青少年も中年者も高年者もそう言うことができるでしょう。

しかし新たな長寿社会は、だれもがそう思いそうなることを願っているだけでは成立しません。とくにこれまででなかった「高年Ⅱ円熟期」人生のためのモノや居場所やしくみを新たに作るには、そうすることのできる知識・技術・意欲をもっている高齢者のみなさんです。

そう願ってそうすることではじめて、既存の「青少年Ⅱ成長期」と「中年Ⅱ成熟期」の社会にこれまででできなかった「高年Ⅱ円熟期」の社会のしくみを新たにこしらえて、「三世代・三期」の平等社会が成立します。

三世代の代表が集って、いまある青少年期を語り、中年期を語り、将来あるであろう高年期を語り、議論を尽くすことで「三世代・三期」のモノと居場所としくみをもつ初の「日本長寿社会」の創出にむかうことになります。

そして恒久平和をめざす「憲法第九条」とともに、「三世代平等型長寿社会」の旗幟を明らかにして、東アジアの空に高々と掲げて、みんなして一人ひとつのかけがえのないわが人生の達成をめざすことになります。

*一生に四度は訪れてみたい国

「三世代平等型長寿社会」達成へのコアとなる一人ひとつのわが人生の足下の一步は、三世代のみんながそれぞれの足元にしっかりと印すこと。

この晴れやかな自作自演のステージは、これまでになくまたとない史的な舞台です。五大陸からの五彩のオリンピック・ライトを浴びて、ヒノキ舞台に立っている主役のなかに、長くワキ役だった高齢者のみなさんの姿も見えています。車イス姿の世界一の長寿者も。

「人生九〇年」、いま九〇歳まで生きる人の割合は、男性は二五・〇%ですが、女性は四九・一%です。女性は半数が九〇歳人生を過ごすのですから、成熟期・円熟期をどう過ごすかの工夫はもちらん、若い成長期からの工夫も大切です。こんにやくダイエットなどもってのほか。

「平均寿命」は女性が八七・一四歳で男性が八〇・九八歳。介護支援を受けずに生活に支障がないという「健康寿命」の延伸も着実につづいています。

日本女性の長寿世界一は香港の女性に奪われましたが、その秘訣は温かい朝のスープにあるということです。日本女性も朝一杯の温かい味噌汁を忘れないように。

だれもが「人生九〇年」の人生を目標にして過ごすことができるためには、とくに四人にひとり三四〇〇万人に達した高齢者（六五歳以上）が第三世代として登場して、活動するのに便利な居場所や通い場所やモノやサービスを整える必要があります。円熟した生活演技をみせることができるための舞台づくりは、舞台裏での作業をいとわなないフロンティアとしての高齢

者のみなさんが負うことになります。それはそのまま後の世代の人びとへの贈り物として。

世界大戦のあと、半世紀の舞台づくりの基本は、「みんなで力を合わせて」でした。

明治や大正生まれの先人がフロンティアとして食と衛生と医療と暮らしを便利にするモノと安心して休息を得られる住宅とを整えてくれて、その上で昭和生まれのみんなのたゆまぬ努力が重なって、総合してもたらされたものでした。平成生まれの人びとは、先人が植えてくれた木の樹蔭に憩えることに感謝と敬意を失ってはいけないでしょう。

なによりも重要なのは、いうまでもなく「食」です。

「食」の充足がすべてに優先しました。

幸せにもわが国の「食」は、MADE IN JAPANの優良加工製品の対価として世界中からもたらされて、飽食といわれるほどに満たされてきました。いまや首都東京の街筋には国際色豊かなレストランが競って店を開いています。夜になればミシュランの星もたくさん輝いて。

「和食」は世界文化遺産に登録されたことで、訪れる観光客の人気のマトになっています。外来の人びとに「和食」を知ってもらうことは、日本文化の粋に触れることですから大いに結構。

訪れて「日本食」を楽しむのは、観光客ばかりではありません。

さまざまな分野の国際会議やセミナーや製品展示会やスポーツ大会や姉妹都市・友好都市との交流が常日ごろから各地で催されています。国際空港の近くには国際病院がオープンしていてカルテを預けてやってくるリピーターがいますし、留学生・定住者・移住者も多くなっ

ます。その傍らには優れた知識・技術・品格をもった円熟期の教師や隣人や知人がいて、「おもてなし」をしています。

ここでひとつ、わが国が世界に誇れる特徴を確認しておきましょう。

天恵として「四季」があること。

南北に長く、海野丘山が展開する風土の四季折り折りの風物（食も祭りも）と迎える側の「おもて・な・し」の心とがあいまって、海外からのリピーターを増やす役割をつとめています。「一生に一度」ですまず「四度は訪れてみたい国」といわれるには、変容する霊峰富士の優美な四季の姿や新緑や紅葉に囲まれた温泉地やアキバの品ぞろえもさることながら、地域特有の四季折り折りの「食とおもてなし」が何よりの吸引力となるでしょう。工夫次第で、狭い日本を四倍にみせる法でもあります。

「はじめに」の最後にもうひとつ、毎年北欧の冬を際立たせるノーベル賞受賞式にも触れておきたいと思います。

ノーベル賞が二〇世紀一〇〇年につづいて二一世紀もなお各分野への貢献をていねいに国際的メッセージとして刻みつづけるなら、「ニッポン発二一世紀オリジナル」の成果として、東亜のこの国から重ねて医学・生理学、化学、物理学、文学の受賞者を毎年輩出していくでしょう。加えて世界の国ぐにの民衆からスタンディング・オベーションを受けながら平和賞を受賞する団体や個人も出てくるでしょう。誇らしい情景です。

そして最後に残されたのが経済学賞です。

本稿がここに掲げる「ニッポン発二一世紀オリジナル」を次々に達成して、世界初の安定して持続可能な「三世代平等型」の経済社会を作り出すとき、そこからすぐれた経済学者がオリジナルの「経済原理」を紡ぎ出すことになるでしょう。

そのためには、大正・昭和・平成期の「社会」をこしらえてきたわたしたちが、みずから参加して形成しつつある「地域生活圏」を確かなものにし、「モノ」や「サービス」の成果を享受しつつ、次の世代と高齢化途上国の人びとに伝承できる「長寿社会」の成功事例を築いていくこと。みなさんは本稿のあちこちから、日ごろの活動や小規模起業（ナノコーポ）のためのきっかけを発見できるでしょう。

「二一世紀の日本（ジパング）を磨きあげて世界史に輝く宝島とする」

とつぶやいたら、江戸生まれの勝さんは、

「それで文句はねえやな」

といて高笑し、福翁は、

「天は人の上に人を造らずといえり、人は国の上に国をつくれりといえり」

と微笑をしつつ、格差ではなく較差（こうさ）として納得されるでしょう。

第一章 日本初出のオリジナル人生

「加齢が価値でありつづける人生

カレイな加齢はみんなのもの

「はじめに」で、音量をあげて全編に響くように、

「長寿はひとりの人間にとつて、そして人類にとつて普遍的な価値である」

といたしました。そしていつまでも、馬齢ではなく華麗な加齢を重ねたいと思うのです。

カレイな加齢はみんなのもの、と願ってこの章を始めるにあたって、どうぞでしょう、ここはみなさんにも異論がないと思われるので、華麗にして端麗に七〇歳を迎えた吉永小百合さんにご登場ただこうと思うのです。華麗な加齢はだれよりもあなたのものですから。

となれば、ふたつ年上の橋幸夫さんにもご登場をいただいて、デュエットで「いつでも夢を」を歌ってもらうことにしたい。

「♪ あああ星よりひそかに 雨よりやさしく

あの娘はいつも歌ってる

声が聞こえる 淋しい胸に 涙に濡れたこの胸に

言っているいる お持ちなさいな

いつでも夢を いつでも夢を・・・



歩いて歩いて 悲しい夜更けも・・・

あの娘はいつも歌ってる」

・・・のところは歌える人はご随意にどうぞ。

作詞は佐伯孝夫、作曲は吉田正、一九六二年九月にビクターから発売されました。一九六四年の「東京オリンピック」の二年前のこと。当時はたちの人なら「古希」を過ぎて数年といったところ。戦争のさなかに生まれて、貧しい戦後の時期に育って、みんなして等しく豊かになろうと努めてきた敬愛すべき人びとです。

ここでは「いつでも夢を」と「歩いて歩いて」と「七十古希」という三つのキーワードを取り上げますが、まずは始めに「七十古希」に達したみなさんを言祝いでからにしましょう。

「人生七十古来希なり」

は、唐代きつての詩人杜甫が一二〇〇年余も前に詠んだ詩「曲江」の、

「酒債は尋常行く処に有り、人生七十は古来稀なり」

に由来するものとされています。

酒債（酒のツケ）がかかわっていたことは知らなかった人も多いでしょう。

お酒のツケは自分が行くところどこにでもあるけれど、人生七十は古来希れであると、目の前に有り余るほどあることと遠くに有りそうで無さそうなことを対比したものだ。四九歳のときにかこう詠った杜甫は、五九歳で願いむなしく長安に戻る舟中で没しています。

杜甫の「国破れて山河在り、城春にして草木深し」（「春望」七五七年から）のほうは、先の大戦の敗戦のあと焦土に立ちつくしただれもが口ずさんだ詩句でした。みずから目にした戦乱の災禍を「詩史」として詠った詩人を悼む後人の思いが、「七十古希」には込められています。千年余も希れのままにつづいた「七十古希」が、いまやだれもが達することができるといふ古来希れな時代を迎えています。

ところが、今でも「酒でも呑まなきややってられない」という声をよく耳にしますから、酒債のほうは減っていないかもしれません。が、こちらは本稿のテーマから逸脱しますから触れないことにしたいと思います。

つぎは「夢」について。

ここまで二〇行ばかりのあいだ、まだ胸の中を「いつでも夢を・・」がリフレインしつづけている人もいますでしょう。音楽とはそういうおとづれ方をするものだからです。人知れず胸のなかで鳴りつづけているのは、若いころすごした悲しい夜更けを思い出したからでしょう。

歌ってすばらしい。

歌のない人生はないですが夢のない人生もない。鼻歌もなく、語れるあすの夢もないようなら、あなたの人生はおしまいだ。

「夢・ゆめ・ドリーム」は人生にとって欠くことのできない存在です。

と、ここまでくると、これまでの学者ならかならず欧米の「夢」分析の成果を披歴すること

で知的点数をかせぐところですが、そういう後進（国）的な手法を本稿はとりませんし、とる必要もありません。これが本稿がニッポン・オリジナルを説くゆえんです。

いまこの国に見えている事例の中から恰好なものを取り上げて、みんなが納得できる「原理（理屈）」をみつけること。それが最良の解答になるからです。

なぜとって、この国の「今」はこれまでのどこの歴史にもなく世界のどこにもない、とんでもない状況下にあるからです。

一〇〇歳の人が六万人を超え、四人にひとりの三四〇〇万人が高齢者（六五歳以上）になつてなお進行中という社会は、日本史はもちろん「人類史」にとって初めての経験なのです。

と繰り返して声高にいったところで、当事者である個人にそんな誇らしい実感はないし、暮らしている社会からも「成果」を感じえないのは、みんなが意識していないからなのです。

うまく機能してきた社会のしくみを、思いきってみんなで意図して変えること。

「高齢社会」の当事者である高齢者がほうっておいてできるわけがなく、意識したみんなが意図して横比べに努めることで、初めて新しい社会として成り立つし、成果が実感されることになりません。国民みんなが意識して意図して、それぞれに小さな水玉模様のような実績をつくりながら推進することによって、やがて総体として「三世代平等型長寿社会」が見えてきます。

前述したノーベル賞を受賞した方々が、異口同声に、

「成果は自分の力ではなくみんなのもの」

と謙遜しつつ本音をいわれる。人知れず努力したつましやかな水玉模様が重なり合って、国際的な賞を受賞するに足りる成果が生まれる。「和」の絆の成果、それに違いありません。

そこでここでひとこと。

まことに残念なことには、経済学賞だけにはその気配すらないことです。

いまいわれるのは日本経済の「失われた二〇年」です。この二〇年に何が失われつづけてきたのでしょうか。経済学者の分析には「少子化」による労働人口の減少やイノベーションの遅れが継続している主因として指摘されていますが、この間のわが国の社会の際立った特徴である「高齢化」を要因とするもの、とくに「引退」高齢社員の知識、技術、未着手におわった企画や構想の喪失つまり総体としての民力萎縮（デフレーション）が含まれてきませんでした。

ここに本稿が目標としている「三世代平等型社会」が構想として掲げられ、国民の支持とくに高齢者層に理解されて実現にむかい、それぞれの世代が暮らしを豊かにするモノやサービスや場をつくりだす活動が多角的に活発におこなわれていけば、世界初の「日本長寿社会」を経済の面から明らかにする「経済原理」が構築されて、ノーベル経済学賞を受賞するに足りる経済学者がノミネートされることになっていたはずなのです。

北欧の受賞会場をにぎわして、この国からの経済学者が登壇して受賞のあいさつをしていたにちがいないのです。いずれは必ずその時がくることを確言しておきたいと思えます。ですからこれはなお本稿の「夢」なのです。

「加齢が価値である」という人間としての普遍的原理（尊厳）を一人ひとりが体现することによって、二一世紀にまず日本で実現する正夢が「三代平型長寿社会」なのです。

＊東洋哲学の存在原理は「生命体」

現代の超大国アメリカの大統領は、就任宣誓の最後に「創造主によりて (BY THE GOD)」と誓って終わります。もちろんオバマ氏もトランプ氏も。

超大国アメリカの大統領は見えざる創造主に宣誓し、従軍する兵士たちは十字を切って敵のいる戦場におもむくのです。

いま世界を覆っている「西洋の原理」の危うさに気づかなければなりません。

一神教の「原理主義」のぶつかりあいのはてに地上の「ヒト」が互いに「ヒト」を抹消し合ひ、人類は見えざる創造主と見えざる武力である放射線や電磁波によって絶滅することになり、見えざる「神の国」にある者のみが生きつづけることになります。

いま北朝鮮が開発し大国が保持している何千発かの原子爆弾は抑止力としてはすでに意味をなさないので。見えざる創造主が正義とする原理と見えざる手段によって地上から「ヒト」を抹消する人類滅亡の日は必ずやってきます。人類の未来にそんな危険が想定されていていいのでしょうか。

西洋の「原理」は、「モノ」と「ヒト」の二元論に起因します。

「モノ」に始まって「ヒト」に至る。進化論です。あるいは「ヒト」に始まって「モノ」に向かう。全能の創造主の存在論です。

「モノ」に向かったほうは極小の存在である原子・素粒子へ、極大の存在である宇宙・ビッグバンにまで至り、なお極小へあるいは極大へと原理は際限なく広がっています。

見えざる創造主（GOD）の存在を確かなものにするために追いもとめる見えざる手段によって、人類が滅亡するというのは極限の「悪夢」です。しかし西洋の歴史の先方からは抹消しえない「人類死滅の原理」がそこにあります。

それとは異なる「原理」が、この島にたどりついた人びとの生命に関する「原理（理屈）」にはあります。ひろくは「東洋の原理」といっていいものでしょう。

それは、はじめにまず「生命体」があり、その不断に変容する存在のありようとして「現在」の「ヒト」がいて「モノ」があると説きます。

生命体はある変化・発展の形はとりますが、新たに生じるものではなく、最初から在るものです。火も水も、金も土も、日も月も、そして木も、もちろん人間も。すべてあるものは生命の「現在」の一形態であり、不断に変容をしつづけています。

この東西の存在論・認識法の違いは文明論にまで広がりますから、ここではひとまず論議を制止しておきます。いずれ別の場で仔細に論じることとして。

本稿がここに掲げる「理屈」の範囲で述べれば、「加齢が価値である」という人間としての普

遍的原理（尊厳）が理解されるでしょう。

いま存在する生命体としての「ヒト」は、「からだ」と「こころ・こころざし」と「ふるまい」という三元（三身とも）からなっています。

これ以外に存在はないというのが東洋の「原理」なのです。生き身のおのれをよく観察すれば、「元気」のもとがこの三元であることにだれもが納得できるはず。

見て、触れて、感じられて、だれもが納得できるといいのがいい「原理」なのです。むつかしいへ理屈はいりません。

「からだ」「こころ・こころざし」「ふるまい」というのは・・

漢字で書けば「体」「心・志」「行」の三元。

生活者の立場でいえば、「健康」「知識」「技術」の暮らしの三元。

ケアの立場でいえば、「病気」「認知症」「介護」のケアの三元となります。

この「東洋の原理」を体得できれば、みなさんの暮らしは変化するはず。

なぜとって生活者の立場での「健康」「知識」「技術」の三元は、目前の課題だからです。

わたしたちは先進諸国で先行して有効だからといって、これまでヨコ文字の好事例を求めつづけてきましたが、そうするとともにこの国の事例から折り合いのよいものを取り上げればいいことに気づくことになります。

その好事例は眼前にいくらでもあります。

まずは三浦雄一郎さんがそう。

二〇一三年五月に八〇歳でエベレスト登頂を成し遂げた三浦さんは世界に輝く宝玉のような人のひとりであり、ここでの最良の事例なのです。

三浦さんのような人は、この国の「原理（理屈）」を説明するためのたいせつな人的資産です。次の八五歳での挑戦は、高山登頂ではなく世界屈指の高山の頂上から息子さんとともに滑降するというのが「夢」で、それをめざして日ごと二〇キロを背に負い、両足に五キロの負荷をかけて、銀座や渋谷を歩いているといいます。

「志」を遂げるために怠りなく「体・行」を鍛えている三浦さんに街中で出会った人もいるでしょう。傍らで激励しつつ激励されればいい。

八〇歳の三浦さんの「からだ||体」は六〇歳代で、わくわくする「夢」を成し遂げる「志」をたいせつにし、「歩いて歩いて」行動力の維持に努めているのです。

この「歩いて歩いて」という「ふるまい||行」による効能はみなさんもすでに体感しているところなので、ここで改めて説くまでもないでしょう。ただ若いときから定年期までデスクワークですごしてきた男性のみなさんは、「努めて努めて」歩くこと。

カレイな加齢のためのアンチエイジング（若づくり）は女性が先行していますが、何につけ男性がアンチエイジングに努めるこ



とが奥方とのエンディング時の六歳差を縮めるだけでなく、後に説くように、日本経済のインフレーションのための原資にもなるのです。

さて、華麗な加齢は吉永さんのような方なのですが、加齢が価値でありつつける人生はみんなが目標にすべきもの。

そうしなければこの国のデフレーション（萎縮）は終わりません。

「がんばらない3」と「がんばる7」と

世紀をまたいだけいくださいいぶん遠い記憶のように思えますが、働きづめに働いてきて、老後をどう暮らすかに思い悩んでいた人びとを慰労してくれたことばがありました。

「老人力」です。

建築家の藤森照信さんと二〇一四年に亡くなった画家の赤瀬川原平さんによる命名で、ご存じのように赤瀬川さんには同名の著書があります。

先の大戦後の復興と成長と繁栄を成し遂げて、その長かった労苦を少ない歯で噛みしめつつ、「やれやれ、よくぞここまで」

とためいきまじりにつぶやいた人びと。

その功労者を、「日本列島総不況」（経企庁長官だった堺屋太一さんの命名）が襲ったのは前世紀末のころでした。

働きづめに働いてきて、人生の晩期を迎えて、来し方の人生を納得した上で、がんばりすぎずにクールダウンしてゆくこと。そのクールな自己認知の能力を「老人力」と呼んだ同時代人のことばに納得して、人びとはみずからの判断で体を休め、疲れを癒した。多くの人が納得すること、**「老人力」**は流行語になり、『**老人力**』（筑摩書房）はベストセラーになりました。

赤瀬川さんは自分の体験に即して巧みに解説してくれています。

「老人力の伝道師」は亡くなりましたが、今でも高齢期をあれもこれもがんばらずに限界をわきまえて過ごすこと、**「捨てていく気持ちよさ」**を味わって過ごす**「老人力」**は有効ですが、おのずから表出される**「頑張り」**（本稿の丈人力）もまた人びとを感動させるものです。

近ごろは街に出れば、元気に活動する高齢者の姿を数多く見かけます。

健康のために**「一日三〇〇〇歩」**といわれれば家の中にはいられないからです。

外出スタイルとしては、男性はアウトドア・リュック姿が多いですが、女性はハイミセス・ファッションを楽しんでいます。

この街に出はじめた元気な高齢者について、いろいろな立場から実にさまざま言い回しが用いられています。

「アクティブ・シニア」「スマート・シニア」「アクティブ・アダルト」「ハイエイジ」「支え手の高齢者」「スーパー老人」「新老人」「創年者」「熟年者」・など。世代としては**「熟年世代」「プラチナ世代」「グラランド・ジェネレーションGG」**や**「アクティブ・エイジング」**・と

いう捉え方もあります。

そこで本稿からもみなさんの長い人生への励ましとなることばを提供しておきたい。

あの「三・一一東日本大震災」の被災地で、お互いの励ましのことばとして飛び交っていたのは何だったでしょう。思い起こしていただければすぐおわかりのように、

「がんばろう！」

でした。「頑張ろう」はその後、「復興へ頑張ろうみやぎ」（宮城県）や「がんばろう東北」（東北楽天ゴールデンイーグルス。星野監督や田中投手らと優勝まで頑張りを共有）、「がんばっぺ福島」や「がんばろう俺！」まで、復興活動のキャッチフレーズになってきました。

それにもうひとつ、被災地の現場では「だいじょうぶ？」「だいじょうぶ！」もまた、お互いの心を支えあって飛び交ったのでした。

「大丈夫」のなかには、美智子妃の被災地での「よく生きていてくださいましたね」とともに「だいじょうぶ！」という励ましのことばも記録されています。大きい声が必要としないでも、静かに心の深みに伝わる励ましのことばとして。

この「大丈夫」の「大」を横に置いて、男性をいう「丈夫」のうちの「夫」から二をはずしてみます。芯に残るのは「丈人」です。性別を問わず「だいじょうぶ！」といったときに、胸の内に包みもつ感慨が「丈人力」です。「がんばろう！」が外向きなのに対して、「だいじょうぶ！」はどちらかといえば、内にある力を呼びさまし励ましてくれることばといえるでしょう。

*「老人力」と交々に「丈人力」を

高度成長をなしとげて、バブル期を過ぎ、世紀をまたいで、高齢期を迎えてなお前向きで活力のあるアクティブ・シニアは、専門知識や高いレベルの技術を保持して暮らしています。

この「高年Ⅱ成熟＋円熟」期を迎えて保持している「知識」「技術」「資産」の有効な活用こそが、経済のデフレーション（萎縮）を脱却する「三本目の矢」であると本稿は注目して説いてきたのですが、若手の政治リーダー（といっても六〇歳前後）には実感がもてず理解ができず、活かす気配がありません。

「フレイル状態」（筋肉が衰えて活力に自在性が失われる段階）までは間がある元気な高齢者なら、だれもが保っている潜在能力を用いて何かをやってみたいと思っています。「自己実現」（自助）のためばかりでなく、自分の身の回りのみんなのためにも社会参加（互助）して活かしたいと願っています。ですから「丈人力」（自己目標を達成する潜在力）はおのずと湧いて出るものなのです。

といって「老人」「老人力」ということばの意味を「支えられる高齢者」に限定する意図も内容も持ってはいません。長い経緯をもつ「老人クラブ」や「敬老の日」（老人の日）の存在はたいせつな暮らしの基盤です。

「丈人」は「老人」とともに漢字の古語として対比しながら用いられる特徴があるので、高齢

期の人生を励ますことばとして、「丈人」「丈人力」をプラスして使っていただきたい。

「老人」ということばの積極的な意味合いをこれまでどおりに理解した上で、それに重ねて、現代日本の社会がいま必要としている「成熟＋円熟した高齢者」の活動をプラスしてとらえる意味合いをもって用いています。

これものに詳述しますが、この国の「高齢社会対策」が二〇年延滞してきたために、「老人」が本来もっていたはずの「敬老尊賢」とか「老練」「老師」「長老」といった熟成期の社会的な意味合いを失ってきましたが、それをフォローすることになるからです。

「体・志・行」が人生三元カテゴリー

家人がだれもない時にでも、そつと三面鏡を開いて、裸形の自分を映してみよう。

まぎれようもない年齢相応の自分の「からだ」が眼の前にあります。上半身・下半身とながめて、「まあ、いいか」と納得するのが「こころ」の動きです。そして男性なら腹部に、女性なら胸部に手をやるのが自然な「ふるまい」です。

この「からだ」体」と「こころ・こころざし」心・志」と「ふるまい」行」という三つが人間（人生）としての同時存在であり、この三つ以外に存在はないというのが、東洋の哲学の間観（人生観）なのです。

まとめて哲学ふうにいえば、

「存在と認識に関する体・志・行の三元論」。

ここはその場ではないので、多言をひかえませんが、西欧の「物・心」にわけてその発展形態として人間存在を考察する二元論ではありません。

最初から「生命体」が実存在であり、その存在の現形態が人間であり、「体・志・行」の三元であると説きます。先にも記しましたが、この東西の存在論・認識法の違いは世界観・文明観（一神教と多神教も）や歴史の将来にまで及びますが、ここでは小ぢんまりした「加齢は価値である」という人生論までで、その先の論争は避けたいと思います。

ここで重要なことなので再度繰り返しますが、東洋の哲学は「はじめに生命体ありき」であり、「創造主ありき」ではないこと。その現在での発現形態が「人間」であり、個の人間と種の人類という存在を正確に認識する基本は、「体・志・行の存在の三元論」による生命理解にあるとするとどこでとどめましょう。

一人の人間は地球と同じ存在なのです。

天動説より地動説が、地動説より人動説がより存在の真理に近いのです。

人無くしては天も地も無く、いまある天も地も人の認識能力による限定存在なのです。

科学的客観的であると主張したところで、人間という生命形態による認識など、天や地のほんの一角の人間の五感への反応にすぎません。東洋の哲人老子はそのあたりの人間能力の限界を「玄之又玄」として悟っています。

近代の作家埴谷雄高は、刑務所の独房の灰色の壁を透視して全宇宙の「誤謬史」を見て、その全転覆を試みて『死霊』を書きつづけて、当然のこと未完のまま生を終えて去りました。

ちよつとこむずかしくなりかけたので、ここで暮らしの場へもどります。

暮らしの場で確認できる次のような三つの現場での話になります。

だれにも理解されるし日常的な議論が可能になります。

からだ || 体 || 健康

食べる・薬・サプリメント・休息・健康体操・有訴・・・ ↓ 疾病

ころろ・ころろざし || 心・志 || 知識

しゃべる・考える・見聞する・情報・文化・歴史を知る・・・ ↓ 認知症

ふるまい || 行 || 技術

歩く・雑用をする・手づくり・芸能・技能・スポーツ・・・ ↓ 介護

生命体としての三つの存在とその意味合いは、ご自分の暮らしを省みてはめ込んでみて下さい。それが納得できるのは、高齢期になって機能のどこかに違和が生じて、暮らしの上で支障が生じ、生命存在への「畏怖（死）」が感じられてからでしょう。

「からだ（体）」のどこかに起きた症状が治癒しなくなり（すすむと有訴・疾病へ）、記憶ちが

いや物忘れが重なって「こころ（心）」への信頼が揺らいだり、「こころざし（志）」に萎えを生じたり（すすむと認知症へ）、「ふるまい（行）」が自在でなくなったり（すすむと介護へ）といった自覚症状が現れる時期になってからのことなのです。

＊健康寿命の延伸は「家庭内雑事」で

どこかの違和に気づいたところから、「体・志・行」の三元のバランスに配慮した暮らしを心がけます。

まずは「健康（からだ）」に留意し、その上で「知識や夢（こころ・こころざし）」をたいせつにし、「技術（ふるまい）」は衰えないようにして暮らすこと。

この「体・志・行」の三つを常に意識してバランスよく働かせることによって、「健康寿命」（日常生活が制限されることなく送れる期間）はおのずから延び、高齢期の実人生はどんどん先を見通せるものになります。

これが「人生九〇年」時代を豊かに過ごすためのたいせつな流儀のひとつです。

だれもがそれぞれに「青少年期Ⅱ成長期」から「中年期Ⅱ成長＋成熟期」という二期六〇年間に努めて積みあげてきた健康や知識や技術や有形・無形の資産や人脈には個人差があり特徴があります。

それらをよく知ってバランスよく活かしながら個性的な「高年期Ⅱ成熟＋円熟期」をすごし

ている人が、ここでの敬愛すべき「丈人」のみなさんです。

お気づきになった人もあるでしょうが、この三要素はスポーツでは「心・技・体」として認識されています。

それはスポーツでは心の構えが技・体を左右し力の差を克服するからで、高齢期の認識が「体・志・行」の順なのは、まず体を基本とし、その上で志・行を指向することになるからです。とくに頭脳労働（いわゆるインテリ）層で「心・志」知識を優先して、「体」や「行」を後回しにする性癖のある人の場合には、「体・行」にアンバランスを生ずることになります。

できれば五〇歳代の高齢準備期から「体・志・行」に配慮した暮らしを心がけることで長寿への三元バランスを得ることになります。

ここでまとめておきますが、日々の暮らしでのこの三つのカテゴリーのバランスが「健康寿命」を延ばす秘策になります。

平均寿命と健康寿命の差、男性で九年、女性で一二年もあるようですが、最晩年のこの期間を短くすることが、当人にとっても周囲の人にとっても望ましいこと。

まずは自助によって縮小の努力が求められます。繰り返しますが、とくに長い間デスクワークに従事してきた男性で、二つの要素のバランスを欠いてきたことに思い当たる人は多いはず。頭は明晰なのに足腰が・・などという症状の説明はほめたことではありません。甘やかしていると、いずれは周りの人に迷惑がかかります。長い介護の日々を奥方に負わせることになりま

す。症状が出ないうちに頭脳優先の暮らしを改めて足腰を鍛えること。

「家庭内雑事」はいとわずに探しても担うのが何より三要素のバランスに効果があります。奥方とのエンディング期を近づける秘策はこれしかありません。

□ 「二五年三期（成長・成熟・円熟）」の人生

「G型ライフサイクル」

これまでは「ライフサイクル」というと、次の八つの階層にわけて説明されてきました。

「乳児期」「幼児期」「児童期」「学童期」「青年期」

「成年期」「壮年期」「老年期」

がそれ。

この発達心理学から生まれた「八つのステージ」は、自分の経験としても、あるいは子どもの成育の経過や父母の生き方を通じて、だれもが納得できる分け方として認めています。

ところが史上に新たな「高齢化」という状況を迎えて、「高齢者」や「高齢社会」の実情をつぶさに考察しようとする、上の「八つのステージ」ではうまく把握できません。

当事者としては、やたらと長い「老年期」をもたもた「余生」として過ごすことになります。

もたもたが気になるなら、よたよたでもよろでもいいですが、とにかく先行き不安で過ごす余生が長すぎます。若い人からはやたら老人が多いなということになります。

なぜかはなはだ明解なのです。

このE・エリクソン以来の発達心理学による分類は、八つのうち五つまでが三〇歳くらいまでの「青少年期」に当てられていて、「成長期の社会」を反映しているからです。

ですから、いまも発達途上の国々でならこのままの階層でいいのですが、「高齢化する社会」つまり先進国が迎えている「成熟期・円熟期の社会」の把握には適当ではありません。

六〇〜九〇歳までの三〇年間の成熟・円熟期の人生に配慮した新たなライフサイクルが要り用なのです。

「ジェロントロジー」(gerontology 加齢学、訳し方はいろいろ)の観点から高年齢層に配慮した「G型ライフサイクル」の導入、これが「人生九〇年時代」の人生のありようを明解にし、三世代がそれぞれに暮らしやすい新たな社会を創り出すきっかけとなるのです。

*高年世代を加えて「三世代」を平等に

わが国の「高齢化」は、速さでも量的にも新世紀にはいって国際的トップランナーとして際立ってきました。その先行するようすを熟視しつつ対策を熟慮してきた本稿が実感をもとにここに提案する「G型ライフサイクル」は、「青少年期」「中年期」をすしおえて「高年期」にある人びとの暮らしのなかで納得されるものに配慮しています。そして「青少年期」や「中年期」にある人びとにはこれから迎える「高年期」への道案内としても。

やや長打をねらって大振りになれば、二一世紀の高齢化社会を生きる人びとの人生が、自然のめぐりである「春華秋実」のように、成長し成熟し円熟してゆく過程を示して、後人からも高齢化途上国の人びとからも受け入れられるようなものであること。

そのための「G型ライフサイクル」なのです。

「青少年期」 ○歳～二四歳 自己形成期 成長期

バトンゾーン 二五～二九歳 選択期

「中年期」 三〇～五四歳 労働参加・社会参加期 成長＋成熟期

パラレルゾーン 五五～五九歳 高年準備期・自立期

「高年期」 六〇～八四歳 地域参加・自己実現期 成熟＋円熟期

高年前期 六〇～七四歳 成熟期

高年後期 七五～八四歳 円熟期

「長年（長命）期」 八五歳～ ケア・尊厳期 達成期

ここでは学問的にうんぬんするつもりはなく、いまこの国で高齢期をすごしているみなさんが実感として納得できればいい。はらはら生きる「老年期」ではなく、たんたん生きる三つめの現役期である「高年期」にいて日又一日を迎えてすごすこと。

これが「人生九〇年時代」を豊かにするための第一の流儀です。

そこでまずはこの表にご自分の来し方行く末を当てはめながらゆっくり見直してほしい。

ここで「高年期」を中心に振り分けている「自立・参加・ケア・自己実現・尊厳」の五つは、国連が提唱している「高齢者五原則」で国際的指針になっています。

右の表は標準として整理されたものですから、個人的に異和を感じるところがあれば随意に修正されればいいのです。スミのミスをつつのがお上手な先生方の実用書にあるようなエンディング・ノートや遺言書を何度も書き直すよりは、着実に「高年期」（エイジング）を体感しながら、自己目標の実現や社会参加を可能にする。そういう人生に意欲的な人びとに期待して、少し説明を加えてみましょう。

お気づきのように二五年ずつの三期が「青少年」「中年」「高年」に当てられています。

「高年期」は三回目の現役期として平等の存在感をもって据えられています。

この三期を三世代がそれぞれ平等な立場で「成長」「成熟」「円熟」期として理解し合って暮らすことで、ニッポン発二一世紀オリジナルである「長寿時代の三世代平等社会」は成立することになります。

「バトンゾーン」（二五〜二九歳）というのは、青年期から中年期への個人的ライフスタイルによって生じる幅であり、青少年期としてすごすかモラトリアム期とするかは個人が選択することになります。大学院をおえたり、就職企業を選びなおしたり、若者の側が社会参加の場を主

体的に選択するために活かす期間です。青少年期を過ごし終えるに当たって、中年期から高年期までを遠くみて選択するので「バトンゾーン」と呼んでいます。呼び方をご自分に相応しいものに変えることは自在にどうぞ。

もうひとつの「パラレルゾーン」（五五〜五九歳）というのは、中年期から高年期への移行が「パラレルライフ」（ふたつの人生）期にあるということ、自己目標の発見のための「高年準備期」です。

このあたりの日本の知識労働者の自覚に早くから注目していたのが、P・ドラッカー博士で、「パラレル・キャリア」の提唱者であり、ご自分の先見的な提唱にかならず現実が追いついてくるといつていましたが、その結果を見ずに九五歳のご高齢で世を去りました。

こうして二〇世紀まで主流であった「二世世代+₂型社会の老年期」ではなく、三つの現役期のひとつとしての「高年期」と「高年世代」が成立して初めて「長寿社会」を実体のあるものにできることとなります。

これが世界に先駆けて「人生九〇年時代」を迎えている日本から世界に発信する「G型ライフサイクル」であり、おそらく同様の考え方は二一世紀を通じての国際的基準として世界に広がるはずのものでもあります。

ここでみなさんと確認しておきたいことは、「三世代平等型の長寿社会」は、国際基準という「高齢者」（六五歳以上）が四人にひとりという社会を最初に達成した日本だからこそ最初

に実現できる社会であり、国民みんなで磨き上げて輝かせる「ニッポン発二一世紀オリジナル」の重要な宝石のひとつだということです。

六〇〜八四歳は成熟十円熟期

国際的に「高齢化」社会が創出期にあり、わが国で最初に「成熟期・円熟期を体験できる場」が用意されつつあるという時代に遭遇しているのに、知ることもなく人生を終わってしまう高齢者がなんと多いことか。

そのあたりのことを、みなさんに本稿がなぜ声高に訴えるかというと・・

本稿がここに採用している長寿時代の「G型ライフサイクル」の特徴が、わが国の「高齢化」の実情を詳しく観察し将来の予測をした上で、三つの二五年期を据えていることにあります。

「青少年期」成長期 ○歳〜二四歳」

「中年期」成長+成熟期 三〇〜五四歳」

「高年期」成熟+円熟期 六〇〜八四歳」

わが身を顧みればおわかりのように、青少年期「成長期の二〇歳ころにはそれに相応しい「体・志・行」があり、その後の中年期「成熟期の五〇歳ころにはそれに見合う「体・志・行」があり、そしてそれに継ぐ高年期「円熟期の七五歳ころにはそれを実感する「体・志・行」があります。

「そんなものないすよ、いつだってわが身はひとつ」

という人は、二〇歳の孫の「体・志・行」とを比べてみればいい。

唐突な例ですが「淫夢」がわかりやすいでしょう。二〇歳の「青春の淫夢」（鈴木清順さんか）は激しいしお漏らしを伴いますが、七〇歳の「古希の淫夢」は柔らかく麗しいもの。三元は一貫しており、三元ともに異なっていると感ずるはず。それぞれの年齢層に応じたライフサイクルをもって経緯しているのです。

エイジングでは、さまざまに「老化」が進むのですが、では何が「円熟」か。

少なくとも感覚では味覚、蓄積された知識、バランスのいい考え方、優れた手仕事など、七五歳にはそれ相応の達成感があり、円熟した「体・志・行」のそれぞれの成果の享受、五歳層の同世代との交流によって確認しあえる人生の深い味わいなどです。語り合う話題は多彩です。

ご自分の「体・志・行」の三元ですから、いまどういう時期の自分であるかをだれかれと比較して確認してみてください。

たとえば「体」なら学友や兄弟やいとこたちと比較して、「志」なら親友、社友、クラブの会友と比較して。「行」なら隣人、街の人、手仕事なら自作品やライバル作品と比較して。

だれの成長期・成熟期・円熟期にもどこといつて明確な区切りなどがあるわけではありません。んから、今、自分がどのあたりの「体・志・行」をもった人生を経過しているかは理解できません。

前記の「発達型社会」でのライフサイクルとは逆に「G型ライフサイクル」では「高年期Ⅱ成熟＋円熟期」に重点をおいていることに気づかれたことと思います。このあたりが先行する日本の高齢化の実情に即したライフサイクルの標準的分類であり、ご自分の高年齢期を考える参考にしてほしいところです。

ここではさらに「高年齢」を次の三つの時期にわけています。

「高年期前期」（六〇～七四歳、成熟期）

「高年期後期」（七五～八四歳、円熟期）

「長年期（長命期）」（八五歳以上、達成期）

いうまでもなく高年齢になると「体・志・行」にはさまざま個人差が生じますから、年齢の幅は標準のものであって、実際にはご自分が決めればいいことです。その配慮の上で、自己実現や社会参加をどう繰り返りこんで暮らすかの工夫が、オリジナル人生をつくることになります。ご自分が想定する高年齢期を、無理なく「成熟期」「円熟期」「達成期」に三分して、ご自分なりの「G型ライフサイクル」をつくってみてはどうでしょうか。

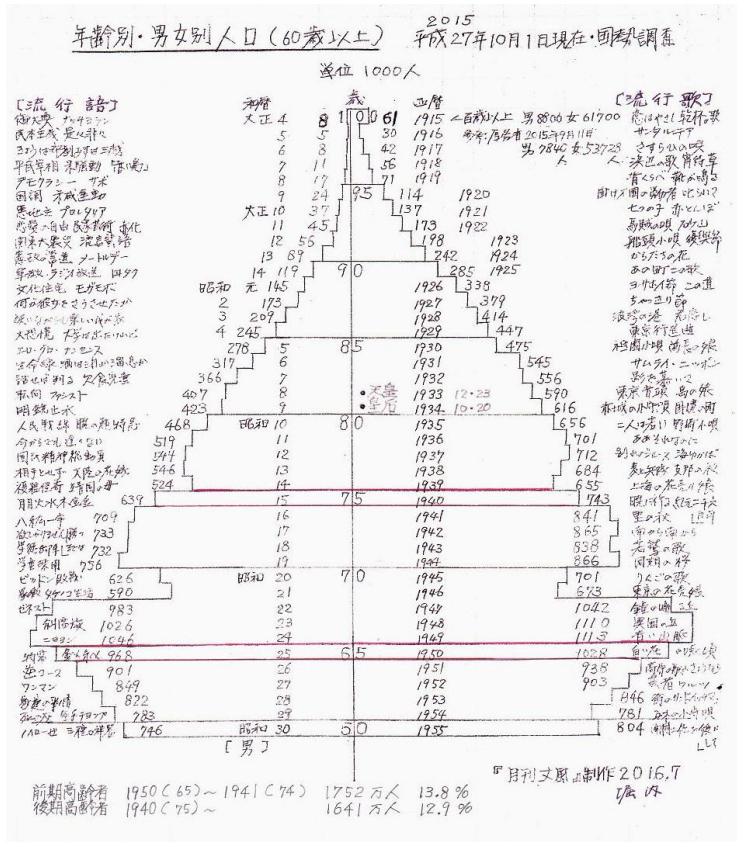
「三世代平等型社会」では、成長期にある若い人は次の成熟期の、成熟期にある中年の人は円熟期の先輩の優れたいとなみを見守り、円熟期の人は未踏の場に踏み込みながらも成長期と成熟期にある人の次のステージの形成に配慮する。それぞれ将来の生き方への糧を求めつつ情報を提供し合いながら、常に今、自分が人生のどのあたりにあるかの実感が持てればよい。実感を

ですから六〇歳で円熟期という人もいれば、八〇歳でもなお成熟期とする人もいます。暮らしの現場ではおおかたの高齢者は自分がかかなり年長であると思っっているようです。ですが、次の表で見ればおわかりのように、案外に若いことに気がづくでしょう。

先の戦争による影響が出ている年代を除けば、六五歳以上の高齢者三四〇〇万人は、安定したピラミッド型をしています。

実のところ、今の天皇もこのまま「生前退位」をなさるには早いのですが、何よりご本人の意思は尊重されねばならないでしょう。

まわりの高齢者のみなさんが元氣なようすを示すとともに、ご高齢天皇がこれからも上皇としてその象徴としてお元気に過ごされる事が、



海外からも敬意をうける「日本長寿社会」の姿といえるでしょう。

成熟・円熟という実感による理解とともに、七五歳を区切りにした健康保険の上の前期・後期高齢者の分割があります。とくに「団塊の世代」を含む高齢者層は史上に新たな「日本高齢社会」を形成するモノ・サービス・居場所・しくみを創出していくフロンティアとして国際的にも注目されている人びとです。

一〇年計画で先手を打って対策がはかられている「二〇二五年問題」というのは、この層のみなさんが七五歳の後期高齢者に達するときへの対策であり、それまでにつくり出されるモノ・サービス・居場所・しくみがどのようなものになるかによって世界初出の「日本型高齢社会」の評価が決まるといったいいのでしよう。

しかしそのために無視・軽視して許されないのは、その上の年齢層の人びとの人生です。先に七五歳〜八五歳（女性はすでに九〇歳）に達する高齢者層は、いま円熟した「日本長寿社会」を構成している主役の人びとです。

九〇歳からがいわゆる達成期としての余生。九〇歳代の男性は数は少ないのですが、戦中・戦後を生き抜いてきた頑強で自立心の強い「不死身」の大正人の方々です。

* 高齢後期から「フレイル」に要注意

国は七五歳以上の人を「後期高齢者」としています。

七五歳で階層を刻むことの意味はなんでしょう。

七五歳になって健康や暮らし方が截然と変わるわけではありませんが、「フレイル」（加齢にともなって筋肉が衰えて活力に自在性が失われる状態・日本老年医学会）期を迎えて、とくに男性の場合はからだの機能のどこかに症状が出て、それが元にもどらない状態がはじまる時期であることには注意する必要があります。

七五歳ころからは生命体としての心身の活力（元氣）が衰えるのを意識するとともに、諸病がまわりつく時期であることにも注意しようということなのです。

もうひとつ、「長寿時代」の「G型ライフサイクル」の特徴は、「高年期（前期・後期）」という六〇〜八四歳の第三の二五年期に繋いで、八五歳頃の「長年期（長命期）」を設けていることにあります。だれもが人生の成熟期・円熟期をすすななかで、持病を得たり、かけがえのない友人を失ったりします。そうしながら過ごして、穏やかに「無為自化」（老子のことば）という達成感を享受する「長年期（長命期）」を迎えることになります。

「わたしは一生涯、日々是好日（『碧巖録「第六則』」）だよ」

という禅好みの「長生現役」の方もおられますが、達成感をもってすすな時期であることにかわりはありません。作家の井上靖さんは食道がんの手術を終えて以降は、「天に任せる」という境地を得たようでした。

八五歳くという刻みについては、「それは男性主導の理解です」という女性の側から異議をと

なえる人がいるでしょう。

男女に六歳の「平均寿命」の差がある実情にあわせて、男性の「長年期（長命期）」は八五歳とし、女性の「後期高齢期（円熟期）」を七五〜八九歳として、「長年期（長命期）」を九〇歳と分けたほうが実態に近く納得しやすいかもしれません。

ここでは「平均寿命」（女性）が八七歳であるという現実にも留意しています。まずはご自分の人生設計と重ねあわせてエイジングの三時期をおさえてみてください。

お気づきでしょうが、本稿には「余生」ということばが使われておりません。

「余生」という人生の時期は扱っていませんから出てきません。「余生」ということばが好きななら、「年齢別人口表」でもおわかりいただけるように、八五歳〜（女性は九〇歳〜）からならいいのではないですか。

本稿をご覧いただければ、「六五歳の定年後は余生」などとする前世紀的意識がいかにも現実的でないか、高齢期の人生を萎えさせるかが知られるでしょう。

未踏の高齢社会を初代として拓く

いまま「何何先生の喜寿（七七歳）の会」とか「おばあちやまの米寿（八十八歳）の会」などとして賀寿は個人的に祝われていますが、先人は見定めえない人生の前方に次々に賀寿を設けて、個人的な長寿のプロセスを祝福してきました。

これはわが国が育てた素晴らしい伝統の高齢樹です。

今日のような長寿時代になって、多くの同年配者が傍らで次々に祝いの会を催す時代。

それなら同年配の仲間とともにお互いを励まし合って、前方に次々にやってくる「賀寿」をクリアしながら「百寿期」をめざすのもいいではないか、ということになります。

そこで次のような表が参考になるでしょう。(二〇一七年基準)

還暦期 (六〇歳～六四歳)	昭和三二年～昭和二八年	還暦 〓 六〇歳
禄寿期 (六五歳～六九歳)	昭和二七年～昭和二三年	禄寿 〓 六六歳
古希期 (七〇歳～七四歳)	昭和二年～昭和一八年	古希 〓 七〇歳
喜寿期 (七五歳～七九歳)	昭和一七年～昭和一三年	喜寿 〓 七七歳
傘寿期 (八〇歳～八四歳)	昭和二年～昭和八年	傘寿 〓 八〇歳
米寿期 (八五歳～八九歳)	昭和七年～昭和三年	米寿 〓 八八歳
卒寿期 (九〇歳～九四歳)	昭和二年～大正一二年	卒寿 〓 九〇歳
白寿期 (九五歳～九九歳)	大正一一年～大正七年	白寿 〓 九九歳
百寿期 (一〇〇歳以上)	大正六年以前	

右のような五歳刻みの「賀寿期五歳層」の人生。

ただ漠然といつまでか知れない不安な「余生」をはらはら・だらだらと過ごすのと、この「賀寿期五歳層」のハステージを、仲間とともに励まし合いながら一つひとつ迎えて「百寿期」をめざして過ごすのでは、高年期人生に雲泥の差が生じるでしょう。

それは初代として未踏の高齢社会を拓くことにもなります。

これが「人生九〇年時代」を豊かに過ごすための第二の流儀です。

* 仲間と昇る八段階の「賀寿期五歳層」

聖路加病院名誉院長の日野原重明博士は七月一八日に一〇五歳で亡くなりましたが、二〇一年一〇月四日に百寿に達して話題になりました。その翌年に映画監督の新藤兼人さんが到達しました。新藤さんは到達してすぐに亡くなりましたが、百寿到達が前向きな人生の目標として実感をもたれるところまできていることを知らせてくれました。

還暦から百寿に到達するまでの間を「五歳層八段階」（百寿期は別格）に分けて、五年刻みの年齢層である「賀寿期」の一つひとつを仲間とともに過ごす。

「還暦期」から「百寿期」までを八層飛びして「エンディング・ノート」を書いては書き直すなどは愚かなこと。「賀寿期」の一つひとつをたんねんに迎えて過ごしてゆく間にも「ちよつと、お先に」といって途中下車をする仲間を見送らねばならないことはありますが。

そんな友人の願いを引き連れて百寿をめざすこと。

普遍的価値である長寿を、一年また一年、たいせつに刻んでいくこと。

一人ひとりのそれが総体としてこの国に新たな国際モデルとなる「日本長寿社会」を形成することになるのです。

二〇一五年、二〇一六年には次の知名の方々がそれぞれの「賀寿期」に到達しました。

みなさんのお仲間の代表としてここにご紹介できるのは嬉しい。新聞・TVその他で出会って選ばせていただいた人びとですが、どうぞ掲載をお恕しく下さい。

「卒寿期」卒寿は九〇歳

◎大正一四年〓一九二五年生まれ

清水司、豊田章一郎、江崎玲於奈、小尾信弥、梅原猛、永井路子、富永一朗、橋田壽賀子、杉本苑子、大関早苗、色川大吉、杉下茂、岡田卓也、野中広務さんら。

◎大正一五年〓昭和元年〓一九二六年生まれ

森英恵、森亘、三浦朱門、松谷みよ子、安野光雅、河野多恵子、石井ふく子、祖父江孝男、鈴木孝夫、中根千枝さんら

「傘寿期」傘寿は八〇歳

◎昭和一〇年〓一九三五年生まれ

倉本聡、柴田翔、大江健三郎、李恢成、松岡享子、畑正憲、美輪明宏、高橋幸治、野村克也、

堺屋太一、根岸英一、富岡多恵子、吉行和子、羽田孜、小沢征爾、宝井馬琴さんら。

◎昭和十一年〓一九三六年生まれ

中村桂子、野際陽子、長嶋茂雄、高松次郎、佐藤桂子、若松孝二、柳田邦男、司修、横尾忠則、森洋子、林郁、村上陽一郎、角間隆、三谷太一郎、北島三郎、桑原史成、江原真二郎、さいとうたかを、舘野泉、清水邦夫、山口崇、里見浩太朗、東敦子、森内俊雄、加瀬英明さんら

「古希期」古希は七〇歳

◎昭和二〇年〓一九四五年生まれ

松原智恵子、東郷和彦、落合恵子、佐高信、宮城谷昌光、谷垣禎一、吉永小百合、栗原小巻、宮本信子、小此木政夫、増田実、鹿内春雄、池澤夏樹、タモリ、田中直毅、永井豪、福岡政行、水前寺清子、樋口久子、直嶋正行、櫻井よし子、岡本行夫、中曾根弘文、富司純子さんら。

◎昭和二十一年〓一九四六年生まれ

鳳蘭、松本健一、藤岡弘、宇崎竜童、松井孝典、田村亮、柏木博、堺正章、木の実ナナ、田淵幸一、菅直人、秋山仁、岩田一政、猪瀬直樹、藤森照信、倍賞美津子、三浦雅士さんら

ご覧のように、ご存じの方々がそれぞれの年齢層で「現役長生」の日々をすごしておられます。七〇歳の「古希」はやっと「第三賀寿期」に達したところ。まだまだ未踏の沃野があります。お仲間との新たな出会いを楽しむ日々が待っているのです。

第二章 マイホーム意識を改める

「MY・」がないマイホーム

団塊パパとママの憂鬱

わが家はあるけれど、いまわが家に「マイホーム」はない、と藤谷さんはいいます。
え？ なぜ？

藤谷祐さんは若いときから「マイホーム」しあわせ家族をめざしたひとり。

ひとつ年下の雅代さんと結婚し、団地の2DKから郊外の3LDKに移ってふたりの子どもを育てあげて、典型的な成功者と見えたのに、いまわが家に「マイホーム」はないといいます。
なぜ？ ここでは藤谷さんの言いぶんを聞かないわけにいきません。

マイホーム・

なんともいえず響きのいいことばです。これほどまでにやわらかくて生活感を内包しえたカタカナ語を他に探すのはむずかしいほど。耳にすると心が安まります。

・マイホーム。

繰り返しても変わりません。

それはいま高齢者となっているみなさんが、若い日からそれぞれの人生をかけて、二〇世紀後半の五〇年をかけて、その内容をつくった日本語と聞いていいでしょう。

ですから細部の意味合いは個人によって異なります。よき（良き、好き、善き）もの、ひよわなもの、やわらかなもの・・・のようなものを守る城として「マイホーム」は、先行の「家庭」や「わが家」に負けない温もりをカタカナ日本語として持つに至っています。

そこはかかない温もり。

ですからそのぶん「ホームレス」ということばがそこはかかない侘びしさを伝えます。

思い起こせば、戦後っ子だったパパとママは、企業戦士とかワーカホリックといわれた先輩に「マイホーム主義」とからかわれながらも、団地の2DKで身を寄せ合って暮らして、ふたりの子どもを育ててきたのでした。

大都市に出て職とマイホームを求めて得た若い人びとがつくった夫婦と子どもふたりの家族が都市型住民の典型となり、「核家族」と呼ばれました。

マイホーム・パパとママは、その後、2DKの団地の二段ベッドで育ったふたりの子どもたちそれぞれ一部屋をと考えて、というより子どもたちにせがまれて、職場までは遠くなくても、団地からさらに郊外のプレハブ一戸建ての3LDKに引っ越しました。そうできた人は「標準家庭」の実現者だったのです。

人生模様はあれこれあっても、そういう暮らしの体験をもつ人は少なくないでしょう。

右のような経緯を穏やかに保っておられる多くのご家庭は、ここでは静かに見守ることにして、築ん十年の家はある、でもいまわが家に「マイホーム」はないという藤谷さんのお宅を訪ねて、何

が起こっているのか、話を聞いてみようと思います。

首都圏の都市郊外の3LDKで、夫婦と子どもふたりの「標準家族」の実現者として穏やかに暮らしている藤谷家の「マイホーム」に、何やら亀裂が生じているもようなのです。

家は年を経て相応に傷んでいます。大手の建設元にも当時の資材がなく、というより費用がことのほか多額なので直せないといいます。

あのころは不安もなく人生のはるか遠い地点までを見透かすことができ、可能なかぎりの費用を工面してマイホームを獲得して、いまそのころ見据えていた地点の近くに高齢者として立っている。長かった来し方を顧みていま、築ん十年のマイホームの当主として、自分の存在感の薄かったことを感じている、と藤谷さんはいいます。

みずからの希望を抑えても、家族の希望をかなえることを優先してきた長い年月。

ですから不相应な応接セットや家具といった家族共用品はあっても、自分のために求めた専用品というのは少なく、**「モノと場」**に表わされる当主としての存在感が希薄なのにならながら気づいたというのです。

*アノヒトとかヒカラビてる人とかいわれて

子どもたちが自立をせず、家が「エンブティ・ネスト」（子どもがいなくなった空の巣）とはならず夫婦と子どもふたりの「核家族」の形をそのまま保っている藤谷家。

外から見るとかぎりでは、標準的な「しあわせ家族」そのものなのですが、いま「しあわせ家族」ではないという理由が、お会いしてもにわかにはわかりません。

娘と息子がふたりとも三〇歳をすぎても「パラサイト・シングル」（寄生独身者）をきめこんで、親元から出て行かない家庭。

「サッカードならイエローカード一枚ずつといったところ」

と藤谷さんは、暮らしている子どもにもペナルティを与えています。

藤谷さんは団塊世代でも最多の昭和二四年（一九四九年）の生まれ。奥さまは一つ下の「ぶらさがり団塊」である昭和二五年の生まれ。結婚が遅かったために、子どもたちからは年とつた両親はイヤだと無理難題をいわれたりするそうです。

イエローカード一枚の娘について。

「子団塊」のあたりを受けて就職難で、短大を出てからずっとフリーター暮らし。かせぎはほとんど衣装と旅行に消えている気配。気ままに過ごしてきたのに、近ごろは家に結婚資金の準備がなかったからオヨメにいかなくなったのだとはつきりいます。いい相手がいれば何としても費用は工面するといってきたはずだといっても、いまさらといって聞き入れません。

それは年をくった親が勝手に考えることで、友だちの両親は自分と将来の子どものためにしっかり貯蓄をしているのにと、ことあるごとに子どもへの配慮のなさをあげつらいます。それはまとまった小遣いをせびるときの切り札なのだそうですが、後輩である「ぶらさがり団塊」

の社員たちがそれほど保険やら貯蓄に熱心だったとは知らなかったと藤谷さんはいいいます。

娘の言いぶんはわかっているけれどいま家計以外にまわせる余裕はないです、と藤谷さん。

おカネの余裕。これがわが家に「マイホーム」がないという藤谷さんの訴えのはじまりです。

現役のころの藤谷家にはいつも貯蓄がなかったのはたしかだそうです。

「ほどほどの赤字人生が男のいきざまだよ」

と聞いていた戦中生まれ先輩に学んで做って、自分もおカネは貯蓄するよりは周りの人びとへの心づかいとそのときの家族の必要に応じて使ってきた。

会社の先輩のような人びとが周りに多くいて、みんなの暮らしぶりに差が生じないことを優先したからこそ「九割中流」の平等社会がつくれたのだと確信していますから、藤谷さんは自分が先輩のそれに做ったことに異和感はありません。ですから奥さまから幾度となく家計のことを指摘されても従わなかったことを、藤谷さんは間違っていたと認めることはしません。

最近の女性優遇の勢いに乗って、娘がそんな生き方を固執する父親への批判を口にするようになったことを不愉快に思っています。娘自身が当時はあんなケバケバしい装飾の式場で友人を呼んで式を挙げるなんてバカみたいといっていたのに、いまになって家に蓄えがなかったのが結婚をしなかった理由で、はじめから諦めていたといわれるのはつらいですが、それでも自分の人生選択が間違っていたとは思えないのです。

戦禍のあと、みんなして貧しさを分かち合い、亡くなった人のぶん、傷ついた人のぶんまで

合わせて三倍も働き、みんなして等しく豊かになろうとして、自分のためには貯蓄など考えもしなかった人びと。当時同じ思いだったにちがいない戦後復興の功労者に対して、いま貯蓄がないゆえに「下流老人」と呼び、「老後破産」というタイトルをつける配慮のない若手ジャーナリスト。そんな本が売れる風潮に藤谷さんは憤りを覚えるといいます。

「下流老人」と呼ばれようと、多くのこういう先人は一日一〇〇円でも生き抜く覚悟があり自負がありますよ。ひもじさと貧しさからはじまってまた貧しさとひもじさにもどった人生をわが人生と受け入れて、いまさら国や自治体からの救済なんか求めはしないはず、と藤谷さんは思いをこめています。

「それにくらべれば、わたしなんぞ腰砕けもいいところですよ」

定年を迎えて、住民税を払って急に軽くなった退職金の残りは、家の修理よりも娘の遅い結婚のための費用に当てようと決めているといいます。本人にもそういつてあるとのこと。

同じくイローカード一枚の下の息子について。

浪人はしましたが、ごく普通の大学をごく普通に卒業して、就職試験を受けて勤めはじめたふつうより名の知れた輸送会社だったのに、短期でやめてしまって家にいるのだそうです。

親のひいき目でもしっかりしてきたように見えるので、子どもの自主性にまかせているのですが、というより言っても聞かないから気ままにさせているのですが、同じ経緯をもつ友だちとパソコンやケイタイで情報のやりとりをしてすごしているとのこと。親が「ニート化」（N

EET。就業を希望しない若年無業者）を心配しているのを先回りして、時折り出かけて「職さがし」をしているといいます。

藤谷さんが毎日家に居るようになって、娘や息子の話を聞くともなく聞いていると、両親と同じ高齢者のことを「ヒカラビてる人」とか「ヨボヨボ・ジジババ」といつていることがある。時には父親に対して「アノヒト」、母親には面とむかって「キミ、元気かね？」とか「オマエは・・・」などと軽くあしらわれていると感じることがあります。父親の存在など意識せず気ままにすごしているし、車は運転しますがパソコンを情報源やコミュニケーションの手段にできない親父を軽視していることはありあり見えるといいます。

「この家はわたしが名義人なのだというのも愚かしいですね」といって藤谷さんは苦笑します。

壁面に娘が貼ったままの「のりか」（藤原紀香）のポスターほどには底値までさがった土地の築ん十年という家の壁に存在感があるわけではないですし。

「ヒッペガシ娘」vs「ツカエナイ親父」

「高齢者は資産を塩漬けにしているのです」

と、億ションを持ってカネ儲けにも抜け目がないと評される経済学者が、TV番組で、経済の停滞はそれが主な理由のひとつといい切る。

TV画面をみている藤谷さんの周りにだれもいない。

そんなとき藤谷さんは身を乗り出して、

「資産の塩漬け？ バカいうなよ」

画面の人物に向かって抗議をしながら、塩漬けにできる資産などどこにもないし、わが家では娘に強奪に近い形でヒツペガシ（資産移譲）されているのに・・・と思うそうです。

高齢者の「平均貯蓄額」が二三七〇万円という解説がはいり、暮らし向きに心配のない人が七割を超えると若いアナウンサーがいう。

こんな話題を同居の娘や息子に聞かせたくない藤谷さんは思う。

数字にいつわりはないとしても、「将来の不安」が貯蓄をした理由というのだから、貯蓄の多少よりも貯蓄など考えず将来展望をもって生きられるような国づくりをしてこなかったことを話題にすべきではないのか、と藤谷さんは思う。

かつて入社するときから信頼していた会社の先輩は、

「ほどほどの赤字人生が男子のいきさま（美学）だよ」

と、貯蓄など考えずにきっぱりといい、

「きちんと仕事をすれば、どこで何をしていても、ほどほどの赤字暮らしをするものだ」といい切って飄々としていたといいます。

察するところ、先輩はいま「下流老人」のひとりであるにちがいない。

後輩として藤谷さんは、赤字まではともかくゼロに始まってゼロに終わる人生を納得する覚悟ぐらいはしてきた。このあたりの考え方は、将来が不安で自分と子どもたちのために貯蓄をしたという「純正団塊の世代」や「ぶらさがり団塊」の考え方とは違うように感じている。

「将来の不安」を前提にした貯蓄を勧めて業界が成立して強固な基盤をつくって現在の現状を違えうと試みてもしかたないですけど、そしてその点では娘や息子には申し訳ないけれども、と藤谷さんは補足する。

戦後にみんなで等しく豊かになるといって自分のためには貯蓄といえるほどの貯蓄をしなかった人びと。いま貯蓄がなく暮らしが貧しいからといって、そんな功労者の高齢者に対して「下流老人」呼ばわりするのはなんとということですか。

戦禍からの復興の時期に、個人の貯蓄など考えられませんが。みんなで助け合って支え合ってきたからこそ「九割中流」の社会ができたのだし、その後もボランティアとして無償の社会貢献をしている多くの人びとに対してあまりに失礼ではないか、と藤谷さんは憤慨を収めきれずに何度も繰り返して語り継ぎます。

しごとはほどほどにして家にFAXを置かず、確定申告で税金逃がれをし、貯蓄にいそしんでいた同じ団塊Mの顔が浮かぶ。

「あいつが人生の勝手者かよ」

藤谷さんはしごととはとことんやってきたと自負しているし、まだやるつもりでいる。しかし

探すとなると高齢者のしごとは少ない。ここにも高齢社会対策の延滞が露呈していると藤谷さんはいいます。

近ごろ女性のしごとは「ダイバーシティ」（多様性）が騒がれて多様に用意されていて、女性がこれからの国の経済、社会の担い手になるとはやしたてるのはいいのですが、どれほどの女性が実力で仕事をし、自分のかせぎで暮らしているのだろうか、ローライズ・パンツ（体型ギリギリのヘソ出し衣装）からいそいそといつものデイオールのパーティー・ドレスに着替えて、「変衣変性」する娘の姿をみながら、藤谷さんは際限なしの「女性化」には懸念をもっています。

親の育て方がどうのこうのではなく、これが風潮なのだからとやかくいっても仕方がないとはわかつているのですが・・といってここで藤谷さんは黙り込む。

子どものしごとが不安定なこと。両親におカネの余裕がないこと。それが安心した「マイホーム」への亀裂だとしたら、藤谷さんのようなお宅が特別とはいえないのかもしれない。

*総理も女性と若者に肩入れ

若い女性を「時代の花」としてひたすら擁護し、女性の活躍に期待する風は巷のすみずみまで吹いているのはたしかです。

両親や祖父母の「六つの財布」からうまくせしめるのも実力のうちとする意見もあり、何よ

り娘たちは必要に応じての家庭内ヒツペガシを当然の権利と考えています。教育費一五〇〇万円までを孫のために無税譲渡する政策を素通りさせない。

それなら目前でいま必要としている娘たちの社会教育費としてまわすべきだという論法です。こんな風潮に耐えられるご家庭はどれほどあるのでしょうか。

ダボス会議の「男女格差報告（ジェンダー・ギャップ指数）」では日本はこれまで長く一〇〇位以下という女性活用の低さが指摘されてきました。それが改善されるまでにはまだのようですが、経団連や同友会までが女性の登用を言いだし、「ダイバーシティ（多様性）の推進」として積極的にすすめています。

日本女性への強い追い風は政界からも吹いています。

安倍総理はことあれば女性と若者の成長力に期待し、とくに女性重視を打ち出しています。

その女性重視の潮流の成果が七月二日の東京都議会議員選挙（投票率五一％）でした。小池百合子知事率いる「都民ファースト」の会が推した一七人の女性が全員当選を果たしました。

テレビの画面は、すでにどのチャンネルのどの番組も、はしやぎまわる女性たちで占められています。若づくりの男たちはわき役で出ていますが、高齢者は違和感があつて画面にあられません。「水準の低いオンナ子ども社会」などと不用意に言ったり書いたりしたら、知名人ですら白眼視されメディアから干されてしまうような勢いなのです。

「団塊の世代」の藤谷さんは企業の職場の雰囲気をこんなふうに表示します。

「団塊の世代」の男たちがいなくなってしまう職場は、残った男たちでは頼り甲斐がなくて活力がもたないのでしょうか。そこで女性社員が実力以上にはしゃいでいてくれたほうが華やかでいい。経営者側の見積もりにはそんなところもあるのでしよう。

家では人並みに応じられないと「ツカエナイ親！」としてあしらわれますが、職場では意に沿わないと「ツカエナイ上司！」となります。

藤谷さんには「お前こそヒツペガシ娘！」といい返せないところがつらい。

そればかりか、うかうかしていると心優しい高齢者がみんな居場所もない、おカネもないなりかねない世相だといえます。

新世紀になって、若い女性やIT青年たちとともに年輪を経て成熟した生活感性をもつ高齢者が、渋く輝いているはずの居場所もなく、その上おカネもないになるとは何たる仕打ち！

職場では若い社員に軽視され、IT音痴と揶揄され、はてはリストラの対象ともなった。

「ハローワーク」（公共職業安定所）の窓口の混雑ぶりや、上野公園や新宿などで見られた「ホームレス」用の青テントの群れや炊き出しに集まっていた人びとを思うたびに、藤谷さんには、戦後すぐごろの「上がり」に近かったところから「ふりだし」へと戻って行くように思えてきます。「基本法」のめざす「だれもが安心のできる老後」どころではないのです。

いったいだれが振った賽の目が悪かったのでしょうか。

どうする？孤立無援のパパ

もうすこし藤谷さんの暮らしに「団塊の世代」の特徴を見てみます。

本だなの本が動いていない。家具はどれも一〇年以上まえに購入したものばかり。二〇世紀の中古品ばかりです。一方、日々の暮らしの表面を流れていく日用品は百均（DAISO）やスーパーものが多くなりました。

シャツはユニクロ（UNIQLO）かアジア途上国製品です。妻や娘の持ち物にはブランド品もあって、ルイ・ヴィトン（LOUIS VUITTON）やプラダ（PRADA）やディオール（Dior）やシヤネル（CHANEL）などは藤谷さんにもわかるものもあります。しかしスーパー品とのアンバランスに父親であり夫である自分への無言の不満が隠されているように思えます。

藤谷さんのブランド品といえるものは、後にも先にもオメガ（OMEGA 終わりの意）の時計だけ。家族を優先してきたことでの専用品の希薄さは、みずからのために生きることへの自負の欠落ではないかとさえ思うのです。

暖かな雰囲気「マイホーム」を保っている人びとはそれとして、気づいてみたら「マイホーム」の形は保ちながら、家庭内で孤立し、ふり出し感覚で暮らしている定年余生タイプの人びと。

残り長い人生を前にして、おカネに余裕がない、子どもは独立できない、病気にまわりつかれはじめている。先行ききびしい問題をかかえている高齢者が多数いるのに違いありません。

*家庭内ホームレスの予感

わが家において「ホームレス」とさほど遠くない侘びしきを感じている戦後ツ子パパが増えていくといえます。高齢者を資産で見分ける「下流老人」や「老後破産」ということばが先回りして動いています。

パパが過ごすのにふさわしいステージが家庭の外ばかりでなく家庭内からもなくなりつつある。というよりこれまでもなかつたのに気づかなかつただけのこと。

テレビのチャンネル権はもともとありませんし、というより見るに値する番組がない。ラジオは深夜にふとスイッチをいれて、ほっとするいい人の話や音楽とめぐりあうことがあります。連夜の夜ふかしは体にいけませんし。夕刻からはどこのチャンネルもプロ野球ばかり。

クルマは一台しかありませんから行く先が違えば使えない。

というより子どもたちのようにあちこち行く場所がないですし。しかし車検・整備・ガソリン・JAF費用まですべて親持ちです。

食事は洋風が多くなりました。うどんよりスパゲッティ、おでんより肉料理。自分では急い作りようがないですから外食時代に好きだったものも食べられない。これがつらい。

外には「対策大綱」が掲げる「居場所」も「出番」も『高齢社会白書』では増えているといいますが、見えてきません。むしろ高齢者が社会参加する場が減るように思えます。

聞けばだれもが同様で、会社でのしごとがなくなつて、家にも居場所がなくなつて、「ホーム

レス」気分になる。といって屋外で長時間をすごせる居場所は限られていて、二四時間営業のファミレスか、公共図書館か、パチンコ屋の休憩室くらい。だからウォーキングでいらいらを解消するしかありません。

「ステージ」がない原因は社会のしくみにあるとはわかってても、どうしたらいいのかが解らない。わが家のなかにさえ「居場所」がなくなる気配。このまま推移しては、だれもが不安なく暮らせる「高齢社会」へ向かっていると感じられる暮らしは招き寄せようがないのです。

藤谷さんはリスクを負わない着実なタイプだけに大胆な解決には踏みきれないようです。外から見えないけれど、同じ悩みのマイホーム・パパは案外に多いのかもしれない。

ここは「マイホーム」問題の提起までで、どうするかは後の章で展開いたします。

■ わたしのモノの存在感

マドギワに「MY・チェア」を据える

ここではもうひとり、夫婦に子ども二人の同じ標準家族を保っている中村暁夫さんの暮らしを見てみましょう。

企業側の事情で藤谷さんと同じころにリストラに合ったときに、中村さんは給料は度外視してフリーランスの立場で同業他社に移りました。

子どもふたりのうち、上の息子は会社の出張で東南アジアに出ていますが、下の娘の方は当

然のようにして家庭内に居座つてのんびり暮らしています。

奥方の話によると、父親が不在の折りには同じ会社の恋人を連れてきて、いずれはここで妻の座をといったようすで居心地のよさをアピールしたりしているそうです。母親としては見て見ぬふりをしていますが扱いには困っているようです。

そんな中村家の「高齢化」のようすを覗いてみましょう。

中村さんは五五歳のとき人生の転機を感じて動いたことはいいました。つとめを「ジョブ型」にすると同時に、家庭内のリストラにも動きました。

動いたといっても家の中でのことですから、リビング・ルームの一画、ネコの額ほどの庭と室内の双方が見渡せるマドギワに、「シニア・スペシャル・シート」を据えることにしたのです。会社でもマドギワでしたし家でもマドギワと、居心地を合わせることにして。

それから旅先で入手したパピルスに画いた「狩猟図」とトンガの「タパ」を壁面に飾ることにしました。合わせて文字盤が気に入っているスイス製の置き時計をサイドボードの隅に。

中村さんの「SS（シニア・スペシャル）シート」は、高齢期の人生をゆだねる「コア（核）用品」として、含みのあるいい選択だったようです。含みというのは本人の「不在の在」としての存在感のこと。重量感より意匠センスより何より座り心地を優先して、いくなればわが家の「玉座」か「師子座」か「座禅座」かといった存在感としてです。

かつてインドでシャカムニが宝樹の下に座して思惟したように、わが人生の来し方と行く末

を半跣思惟する座なのですから、「SSシート」として大切に扱うことに。

すでに愛用のイスをお持ちのみなさんは「MY・チェア」と呼んでみてください。

座して高齢期人生の今日から明日を静かに思惟する「半跣思惟丈人」となる。わが国には椅子に坐して過ごす習慣がなかったので、親ゆずりの「MY・チェア」をお持ちの方は少ないでしょう。そこで、高齢期人生への投資をすることになります。

*即座の効用は「坐忘」の境地

「人間は誰しも『私の椅子』と呼べるような椅子を持つ必要があります、そうやって初めて自宅で本当に落ち着いた気分を味わえるのではないか」

というのは、中村さんがマイホームを建てたころの有名建築家の提言で、まことにその通りとは思ったものの、家族優先の当主としてはそこまでの自己主張をしませんでした。途中で何度も座り心地のよさそうな椅子を見るたびに思い出したことばです。

老い先長い高齢期を通じて使い込んで座り心地を熟成させてゆくのが「MY・チェア」。

中村さんのデパートめぐりの調べによれば、さすがに「座る文化」の歴史が長い欧米の製品はさまざまに意匠をこらして、見るからによく、座り心地もよさそうだといえます。

最高の座り心地を誇るのは頭と腰がほどよくフィットする北欧製リクライニング・チェア。競うのはドイツ製スツール、イタリア製アームソファ、カナダ製スウィング・チェアなど。い

ずれ劣らぬ居ずまいがあるし、値段も思いのほか幅があるようです。

そこで中村さんは調べの段階で思い悩んだ末に座ってみてドイツ製スツールにしました。長い高齢期を安らいですごす拠点が「MY・チェア」なのですから、これといったイスと出会ったら思い切って投資（浪費）をすること。

奥方からすれば腰を抜かすほどの値段。その上に初恋の人を失ったと同じ思いを二度することはない、というのですから、素直に喜ぶわけにもいきませんが。

一日の活動を終えて、「やれやれ」と腰を落とし、心を静めてひとときり一日をふりかえり、「さて」と気を引き締めて明日を思い、「よし」と意を決して立ち上がる。

それでいい。それが「MY・チェア」の即座の効用なのですから。

どっかり座って、からだの重みとともに過ぎ来し方への充足感と行く末への待望感を委ねる。時には座して陶然として、すべてを忘れる「坐忘」の境地にもひたれる。

それなくして何の人生か。

このあたりの選択と実行はアクティブ・シニアの中村さんならではのと思わせます。

わたしのモノ同士のモノ語り

高齢者意識をもって高齢期に使うモノのありようを考えることは、「家庭内高齢化（リストラ）」のはじまりであり、企業の高齢社員や社友がそこに気づけば、わが社の高齢化製品（Older

Person's goods OPG) を考えるきっかけになるはずだ。

そこで中小企業の熟練技術者が動く。それが高齢化経済への突破口になり、日本経済の立ち直りに寄与することになります。しかしユーザーの側からの強いたしかな要請がないかぎり、いま企業はリスクを負ってまでは動かない、というか動けない。

中村さんのような高齢者がさまざまな製品を求めて要請を出すことで、海外進出ができずに国内で「足踏み」していた中小企業が動く。動かなければ次のマーケットを外国製品に奪われることになるからです。

百貨商品でがまんしてきた日用品を、わが国の高齢者の生活感性に見合った優良な国産（地産）品に差し替えるチャンスになります。モノが良くて安心して使えて長持ちするならば、やや高でも高齢ユーザーは家庭内の「高齢化コア（核）用品」として入手するでしょう。

候補はいろいろ。中村さんは、しごとでの必要もあって、内外の日用小物を手元に置いています。デジタル化したので実用性を失った高級一眼レフも、シャッター音と手触りの感触に思いが残るからというので。それに部品やレコードを揃えるのに苦勞の多いオーディオ機器も。

あとは楽器類。碁・将棋・チェスや釣り具セット。中村さんはゴルフはやらない。

手仕事に感じ入っている碗・皿・硯。明かり、時計、置物などのアンティーク（西洋古美術品）。日ごろ忘れがちな彫刻や絵画。造形や色彩が精細な貝や蝶。さらには地球儀、船・飛行機・汽車・車のミニチュア。素朴な木製アフロ・グッズ・けっこうあるものです。

それにあちらこちらに散在していたのを全員集合！をかけてあつめた七〇冊ほどの愛読書。手元に置いておきたい本はそれで十分だといえます。

どれもお気に入り「わたしのモノ」であり、優良な国産「高齢化コア（核）用品」の候補です。その中から選び出して、室内に並べて時に並べ替えをする。暮らしの基点になる「MY・チェア」から動いて出会える範囲に配置すればいいとのこと。

家庭内に「高齢期用品のステージ」が立ち上がることとなります。

*「高齢化コア用品」を結ぶ暮らしネット

地球儀なんか意想外にもしろいのではないでしょうか。

極東アジアにある島国ではなく、太平洋リング（大洋弧）の一角にあつて、経済や文化の上で大きな貢献をして輝いている「海洋大国ニッポン」。領土では世界で六一位の小国ですが、領土に領海と排他的経済水域を加えると世界九位。海洋大国であること。を宇宙飛行士の視点で納得することができます。

極東（FE）の「小日本（シャオ・リーベン）」であるとともに、パン・パシフィック（PP）の海洋大国であるという多重性を理解することができて、将来への快い自信を与えてくれます。

本当の夢の旅は船旅にある。タンカーも必要ですが、仔細な日本的サ



ービスを徹底した豪華客船を太平洋航路に何十艘か就航させる。船中で外国の人びとと出会いながら、日本と日本製品の優良なところをおおいに話題にすれば楽しい。造船大国の再興は世紀をかける事業となります。こんな重要な提案をここに置いておいていいのかしら。

家庭内の話に戻しましょう。

手にいれるのは困難な貴重種だといいますが、蝶の皇帝「テングアゲハ」なら華麗に舞う姿を思うだけでいい。胡蝶に「物化」して舞った壮年の莊子の「周（莊子の名）の夢に胡蝶たるか、胡蝶の夢に周たるか」という「胡蝶の夢」は「坐忘」とともに味わって損はありません。

旨し「天の美禄」（酒）をとくとくと注ぐ「しりふくら」（徳利のこと。掌の上でのぬくもりは触れてなまめかしい）でもいい。もちろん親ゆずりの骨董品でもあれば、さりげなく実用にして活かします。高齢期の願望を仮想空間に委ねる「わたしのモノ」の候補はいくらでもあ
るはず。なければレプリカを置いてホンモノを探し出すこととなります。

レプリカとその現物化が重要なのは、みんながそれを期待し、企業の生産現場に声がとどけば、「高齢社会」のモノを豊かにする内需の契機となるからです。需要者と制作者をつなぐためのツールはネット時代のお手のもの。本稿にもさまざまなアイデアが記してあります。

ここしばらく途上国の粗悪品に耐えてきた円熟期の高齢者層が、「わたしのモノ」として終生愛用できるような生活感性を充足できるような「高齢化コア（核）用品」の需要と供給。

ここでエールを。そういう製品の要請に対して、保持する技術力で応えて創り出してくれる

各地の熟練技術者のみなさんに、ここでエールを送ってから先にいくとしましょう。この問題は重要なので、後の章でしっかり論じます。

みなさんが選んだいくつかの「高齢化コア（核）用品」とそれをめぐりいくつもの季節小物、それに奥方が所有する「わたしのモノ」の応援をえて配することで、存在感が希薄であった時に比べれば、パパとママの存在感を伝える「高齢化」のしかけが家の中に見えてきます。

はじめは気づかなかった同居人は、「パパのチェア」や「ママの手編みクロス」や壁飾りや日用品に示される「家庭内高齢化」の意図に少しずつ関心を強めることとなります。同じ機能のモノでも親と子に較差（格差ではない）があつていい。「わたしのモノ」による「家庭内の一品多様化」はモノを通じた親子語りのはじまりを意味します。

外へ出て優れたボランティア活動をしていても、わが家の中に高齢者としての存在感がないようでは、ほんとうに優れた高齢社会活動家とはいえないでしょう。

一日のテーマを「八方時刻」に振り分ける

だれもが何の疑いもなくさしたる不具合もなく、一日を二四時間として刻んで過ごしています。一時間の体感はかなり正確です。日ごろ、テレビの一時番組や三〇分ドラマや十五分ニュースや三分コマージュナルに接しているので、これらの長さを体内時計がうまく合算して、日々をつつがなくすごしています。

時計はデジタルが多くなりましたが、長短の針や数字に味わいがあるアナログ時計も、家のあちこちにあるでしょう。十二時、三時、六時、九時の三時間ごとの昼夜八つの刻みは目に焼き付いて鮮明に三時間の幅を示してくれています。アナログ時計の利点です。

「古時計」は、モノの多様性を活かす日用品のひとつです。

ここではそれを活かして、三時間ずつ八つの刻みを意識した「八方時刻」を、時間表示の多重標準としている小山起夫さんの暮らし方を紹介したいと思います。

「八方時刻」というのは、次のように一日を三時間ずつの八区にわけたものです。

更（ふけ） ○～三時

明け方 三～六時

朝方 六～九時

午前・昼前 九～一二時

午後・昼過ぎ 一二～一五時

夕方 一五～一八時

晩方 一八～二一時

夜 二一～二四時

一日を八区（八方）に分けることで、区ごとの印象が明解になり、それとともに行事や活動もまた明解な記憶を残してくれることになります。

*三時間ごとの生活実感

「更」は五更まであって三更からが日替わりですが、夜更けや深更として日替わりの感覚があるので、それをはじめの一区に据えます。

二区の「明け方」と三区の「朝方」には異論がないでしょう。正午をはさんで四区の「午前・昼前」と五区の「午後・昼過ぎ」そして六区の「夕方」を迎えます。

さて七区（午後六時〜九時）の呼称が問題で、気象庁は天気予報で「宵のうち」と呼んでいたのを、人によって捉え方が違うからという理由で、二〇〇七年四月からは「夜のはじめごろ」に変更しましたが、収まりがよくありません。そこで本稿では朝昼晩としての実績をもつ「夕方」を七区に据えました。そのあとが一日の終わりである八区の「夜」となります。

たとえば、小山さんのある一日はこんなふうになります。

某月某日。

「更」「明け方」は睡眠。

「朝方」にイヌをつれて散歩をしてから朝食をして朝刊を読む。

「昼まえ」には米寿を迎えたS先生にお祝いの手紙を書き、Tさんに電話。

「昼すぎ」には軽い昼食をすませて郵便局と図書館へ。

「夕方」にはYさんを訪ねて同窓会の話をし、商店街で日用の買い物のもと夕刊を読む。

「晩方」には晩飯をすませてTVニュースをみる。

「夜」にはEさんへメールをしてパソコン日録。夜更かしはしない。

日々を三時間ごとの八区に刻んで、そこで出合う「ヒト」や「モノ」や「場所」をしつかり配置して過ごす「八方人生」には、日々を着実に刻んでいるという充足が感じられます。その間、朝昼晩の三度の食事で「健康」に留意し、読書（朗読がいい）や会話で「認知症」の予防をし、よく歩くことと雑事で「行動力」を保持して過ごします。そうすることで本稿の「体・志・行」三元カテゴリーに配慮しながら日々をバランスよく暮らすという趣旨と重なります。「八方美人」ほど目立ちませんが、小山さんのような「八方丈人」には生活の実感があります。

目 広がった亀裂と格差

榎陀多(カンダタ)の話

「カンダタって知ってるよね」

と若い人に聞いたたら、きつと「ドラゴンクエストの悪役キャラでしょ」と応じるでしょう。

「その元ネタになった芥川龍之介の榎陀多(カンダタ)のほうなんだが」

といい添えれば、記憶の糸をたどって、かつて国語の教科書で読んだ芥川龍之介の『蜘蛛の

糸』の主人公を思い出ししてくれるでしょう。

大正七年（一九一八年）の作品というから一世紀ほど前のことになるが、芥川龍之介が子ども向けの雑誌『赤い鳥』創刊号に書いた童話の主人公のことです。

お釈迦さまが出てくる話ですから一〇〇年なんか昨年みたいなものですが、芥川はお釈迦さまがおおいでになる極楽とその対極である地獄との間で、一筋の蜘蛛の糸にすがっている犍陀多を主人公にする童話を書いたのです。もちろん天上が極楽ですから、蜘蛛の糸は極楽から地獄へと垂れてきたもので、犍陀多はその糸にすがって地獄から極楽への途中にいます。

本人は覚えていないのですが、悪党だった犍陀多がかつて一匹の蜘蛛を踏みつぶさずに助けてやったことがあって、そのことからお釈迦さまは仏界から一本の蜘蛛の糸を下ろして、地獄であえいでいた犍陀多を救ってやろうとなされたのです。上へいけば極楽へたどりつき、落ちればまた地獄という中間で、犍陀多が下をみると、蜘蛛の糸にすがって蟻のように後から後から罪びとたちが昇ってきます。

極楽へつながるのは一筋の蜘蛛の糸。そんなにたくさんさんの人の重さに耐えられずに糸は切れてしまう。

とっさに「自分だけはなんとか」と考えた犍陀多は、「下りろ、下りろ」とわめいたのです。と、そのときに糸は切れて、犍陀多は地獄へ落ちていきました。悪党だった犍陀多なのだから、とっさに自分の下で糸を切るくらいい思いついたとしても不思議ではないのですが、作家は

犍陀多にそんなことをさせるいとまを与えずに犍陀多の上で糸を切ったのです。

じつは芥川の「蜘蛛の糸」の話には元ネタがあつて、鈴木大拙が訳したポール・ケラーズ著『カルマ（因果の小車）』から得ているのです。やはり仏陀に「この糸を便りて昇り来たれ」といわれて、犍陀多は極楽へむかいます。が、後から後から糸にすがって昇ってくる人びとに気づいて「去れ去れ、この糸はわがものなり」と絶叫するところで糸が切れて地獄へ落ちていきます。

地獄へ落ちていく犍陀多を見る鈴木大拙と芥川龍之介とが感じていたところは同じではないでしょう。それを論じることもできるのですが、ここでは芥川のほうのモチーフに限って追ってみたいのです。それは芥川が原典にはない極楽の蓮の池の傍らを歩いているお釈迦さまを登場させて、犍陀多のようすを書いていることにも見えています。大拙はそんなことをしないし、できません。大拙が関心を持つのは凡夫としての犍陀多の心の動きだからです。

芥川が極楽と地獄という対極を明確に示したのは、おそらくは当時、鋭敏な作家の目の前で広がりつつあった「格差」を表現したかったからにちがいないからです。

そんなことに気づくこともなく、当時もその後も「蜘蛛の糸」を読んだ子どもたちは、率直に単純に「自分だけはないとか」と考えてはいけないうことと作品のモチーフに納得していたにちがいません。が、複雑な人生を歩んでいるおとなたちの中には、これを読んでもそうは思わなかった人もいたでしょう。衣と食と住には安心でも、芥川が表現するように極

楽は日々を過ごすには単調でつまらなそうに思えたということです。極楽にいつても自分を理解してくれるような仲間はいない。それなら極楽までたどる途中に他に何か別の世界があるはずで、そこで下からくる連中に糸をくれてやって塗中下車してもいいと思っただけでしょう。糸にすぎる俗世の凡夫としては、「自分だけは」という犍陀多の心の動きを素直に納得して、自分もまた地獄に落ちてもしかたがないと思っただけでしょう。ご葬儀での長いお経のあとの説法で、仏弟子の目犍連（もくけんれん）が餓鬼界にいる母親を助けにいった話などを聞かされていたらなおさらです。

*また大震災に遭遇して

その後の大正一二（一九二三）年に起こった関東大震災は「天災」による地獄でした。家族をちりぢりにし、住居を奪った天災。芥川が育った本所地域は火の海になりました。いま震災記念堂が残っています。芥川にその後起こった「人禍」である日中戦争・太平洋戦争がどこまで予見されていたかは知れませんが、大震災に遭遇した後、「唯ぼんやりした不安」に襲われて昭和二（一九二七）年には自死することになりました。将来の自分が生ききれない時代の人生を予見していたことは確かです。

「天災」である関東大震災と作家芥川を襲った「唯ぼんやりした不安」、そのあと引き起こした日中戦争から太平洋戦争の「一億総動員」の一四年戦争。

いま「3・11」東日本大震災のあと、世に「格差」が広がるなかで「外敵」が喧伝されて、「不安」に襲われている多くの国民。信頼からほど遠い政治状況。一〇〇年をすごして「戦争と格差」がまた、わたしたちの眼前に再現しつつあるのが現実です。

歴史は繰り返して起きるといのが「史不絶書」です。歴史を知らない者によって繰り返されるので、前もって記すことがむずかしいけれども必ず起きる。

繰り返すとすれば、次にやってくるのは、かつて昭和初期の歴史に記されている国粹化と軍国化。仮想敵国をつくって「軍隊」に国民の関心を誘導する政治家が支持を受けることになります。少数意見をかき消す大応援はすでにプロ野球やサッカーやライブ演奏の会場で培っていきます。だれにも止められないその波動がやってくるまで、戦禍を知らない若い人が心のなかの平和を護るために外に軍隊を要請します。おりしも戦後の平和を七〇年祈りつづけた明仁天皇の生前退位とともに終わる民族的鎮魂の時代、そして始まる不確実な時代。

「自分だけはなんとか」と願いながら、極楽へゆくことができずに遠からず自分も地獄に落ちていくのを察知している現代の健陀多。それでもできるかぎり遅くに自分の蜘蛛の糸がきれるようにと祈って。

胸の中に戦禍を収めて外界の平和を祈った大正人、胸中の平和を守るために外界に「軍隊」を要請する平成人。「戦争か平和か」という存在の多重性。その間を行き来する振り子のような世相。いま「平和から戦争へ」「平等から格差へ」と時代の振り子が振れる気配。

「九〇年人生」という長い高年期を得ても、将来への「不安」を抱えて過ごさねばならないというのは酷な話。そのなかで「自分だけはなんとか」という思いで暮らすというのも罪な話。酷でもなく罪でもない穏当な人生にならないものか。

近年になって「平和と平等」の地盤をゆさぶりながら際立ってきた「戦争と格差」への転回による地割れ。その亀裂のいくつかを取り上げてみましょう。

「非を飾る」若者たち

若者と高齢者。

まず若者たちと高齢者の間の亀裂から見ましょう。

七七歳の「喜寿」を迎えようとしている上田恒一さんは喜寿を喜べない。

喜べない理由はふたつ。

世相として世の中が高齢者に關心を持たなくなったこと、そしてとくに若者たちがオモシロクナイ大人の話に耳を傾けなくなったこと。上田さんは、先端的な若者の言動はワル乗りを越えていまや「非を飾る」域にあるといいます。

「？ 非を飾る」とはどういうものをいうのですか。

「際立っている例ですけれど」と前置きをしながら、上田さんは四つの若者のことばを並べた。「なまぬるい幸せなんか押しつけないでほしい。不幸な体験だっけてしてみたい」

「戦争の現場に出るなんて実感は人生の極みじゃないか」

「善意なんて何も生まない。悪意が行動のエネルギー源なんだ」

「毎日遊んでいるくせして、うるさいじいさんばあさんはいらぬ。遺産を残して早く死ね」
一回きりの人生だから不幸な体験もしてみたいという若者に幸せであることを願うことはできない。戦争を避けて平和を望むことも、善意から話すことも、そして先人として存在するにとすらできない。

いつの世も若者の変革への「知」は時代を先回りして待つ。

そして自分の耳に逆らうような「諫をふせぐ」ために知性が使われる。人間だれもが隠し持つ本性が露わになって、前の時代の意思を閉ざして時代は転移するものなのか。

上田さんはそう考えて楽しめないというのです。

*「もう時代に関わらない」という安保世代

少年の日に自分が蒙った戦争中の惨禍や戦後の混乱。それを繰り返してほしくない不幸な体験として若い人に伝えること。上田さんはそれが無力であり無益であると思うようになったといます。

「金輪際、わたしは関わりませんけれど」

上田さん。ちよっと待ってください。

たしかに上田さんがいうように、このところ高齢者は軽視・無視ときには蔑視までされていて、実人生でも「アベノミクス効果」から恩恵を受けていない。しかし上田さん、四人にひとりにまで増えた高齢者の保持している知識・技術・資産など膨大な潜在力が残されています。これを發揮して新たにつくる「成熟十円熟社会」は、新次元の事業にはなりませんか？

「・・・わたしには一〇年は遅いような気がします」

まっ白くなり、薄くなった髪を撫であげながら、上田さんはそういいます。

つい先ごろ「安民法制」反対で国会前までゆき、六〇年安保世代として若い母親たちと語り合ってきた上田さんのような人呼び戻す方策を、本稿の中で練り上げられるかどうか。

IT化と「デジタル・デバイド」

時流と潮流。

世相をよくみると、たしかにこのふたつの大きなうねりが重なって新世紀の時代層を流れています。ひとつはアジア唯一の経済先進国として迎えているグローバル化の時流であり、もうひとつは先行国としての対応を求められている高齢化という潮流です。この時流と潮流のふたつの課題を持ち越して世紀をまたいだ日本でしたが、この一〇年余りの際立った変容といえば、時流対応の「若年化」と「女性化」と「IT化」のほうだったといえます。

「デジタル・デバイド」(情報格差)がいわれます。IT機器のイノベーション(技術革新)に

高齢者が追いつかないために生じる情報の差で、個人差はあっても若い世代の対応力を主とする企業側の製品化によって生じています。

だからパソコンとケイタイを駆使する若い孫娘は、いつしか「わたしが主役！」として振る舞うようになり、「世の中ますます粗悪になる」とグチりつづけて何もできない祖父を脇役とみるようになります。すぐれた高齢者である上田さんのような人でさえも、家庭内では孫娘から軽くあしらわれているのです。

激しい時流への対応が優先するのはしかたがない。

それは身近なところでは、グローバル化による家庭内の日用品の「途上国産化」となり、企業内の「非正規社員の増加」となって実感されています。わが国よりひと足もふた足も遅れて成長期にはいったアジア途上諸国と付き合うためのいたしかたない「日本途上国化」なのです。

わが国の高齢者はこれはいつか来た道として、アジアの民衆が同じようなモノの豊かさを共有するまでの時流として納得して対応していると、上田さんは理解しています。

*スマホ娘はーTオンチ親父を蔑視

「グローバルゼーション」（地球規模化）といわれれば、地球レベルには違い不大的のですが、前世紀末にはじまった超大国アメリカと途上諸国が中心の経済が「グローバル化」です。ソビエト崩壊後の東西ドイツ統合をはじめとする地域内の混乱の收拾に手間どったEC諸国とは異なる

りましたが、経済のバブル崩壊と政界の離合集散のなかで世紀を越えました。しかし超大国アメリカ市場への途上国進出は日本経済をきしませながら新世紀へと舞台は回ったのでした。そして「BRICS」（ブラジル・ロシア・インド・中国、南アフリカ）をはじめとする途上諸国の台頭という時流にさらされることとなりました。

その対応に覆われてしまったために、もう一方の国際的潮流である「高齢化」は波がしらさえ見えなくなってしまうているのです。見えないけれども新世紀の国際的課題として底流しており、日本の対応は先行国として各国に注目されているのです。

「先進国型の高齢化社会」を迎えるはずが、「途上国型の若年化社会」に出くわしたのですから、日本の高齢者は二重の災難に見舞われることになりました。

ここまでの述べてきたように、政府の「高齢社会対策」の遅延が二〇年つづいており、対策を講じないうちに、さまざまな難題を引き受けざるをえなくなっているのです。

ほんとうは高齢者もまた日本社会で、若者・女性とともにシルバーのように流く、プラチナのように不変に輝いていなければならぬ時期を迎えているはずですが、そうになっていないのが実情です。シルバーやプラチナどころか、スマホ娘には、粗大ごみほどの扱いきえ受けているのです。とくにIT産業が発展段階で引き起こしている情報格差（デジタル・デバイド）は、個人間や世代間ばかりでなく、さまざまな場面で生じており、問題の根は深い。

ここではスマホ娘に「不恥下問」に徹して教えを受けて、家庭内での「デジタル・デバイド」

を克服して、高齢期人生の「尊厳」の確保に努めることとなります。

中年現役にはにぶい賃金上昇

中年現役と引退高年者の間で。

霞が関の「中堅官僚」は、国の安定を支えているのは国家財政と国家事業をあずかる「国家公務員」のわれわれであると当人が思い、周囲の人がいい、そのつもりでしごとをしていますからわかりやすい。もう一方で国を支えているのは、国の骨組みをつくって安定した経営をしている企業であり、その企業を支えて事業をこなしながら安定した家計を営んでいる「中堅社員」です。一人ひとりにその自覚までではなくとも、企業の実態としても業界の総体としても「中核」として事業を支えている人たちなのです。

わが国の企業は「同じ釜のメシを食う」という帰属意識の強い伝統を持っています。

いま各企業内の「中堅社員」が、企業と業界の将来のために「よしやろう」と考えて行動し、「IT青年」がそれに応じ、「女性」が新たに加わり、そして先輩「社友」が知識と技能とで支えている姿でないとオールジャパンの骨組みとして安定しているとはいえないでしょう。先輩である「社友」の愛社意識が問われているのです。

金融緩和という「前払い政策」で企業は潤いましたが、「中堅社員」がしつかりとその恩恵を受けているかどうかが問題なのです。会社の安定のための留保ばかりで、「中堅社員」へのそう

いう恩恵の声を聞きません。それでは「よしやろう」という意欲が湧くわけがない。金融緩和の後も「中堅社員」の側から「よしやろう」ではなく、「もう我慢できない」という悲痛な声すら上がっています。こんなことで経済が上向くはずがないではないですか。

ことあるごとに「成果主義」を強いられる。

正社員が減り、アルバイトと派遣社員が混在して同じ職場で同じしごとをする。しごと増なのに実質賃金の目減りがつづく。先輩から引き継いだ職責は重い。胸の奥に将来への不安がついつい。リスク回避型の経営者の自己保身の発言からは展望が見えてこない。同僚との間でも同業者との間でも親和の感性が少しずつ磨り減って働かなくなる。定年は延びたもののしごとのない高齢社員の意欲も萎える。新入社員には帰属意識が生まれにくい。

「中堅社員」が安定した気分を保とうとしても、それとは裏腹にいらだちに近い感情が自分にも社内にも強くなっていく。企業の生き残りに身を挺することを余儀なくされている「中堅社員」のしごとへの覇気は薄れざるをえません。退職社友には理解できないほどに職場環境は悪化しているのです。いらだちは公的年金、退職金、企業年金で暮らしている先輩「社友」にもむけられます。企業年金より現役の暮らしを優先せよという声すら上がるようになります。

異次元の「金融緩和」という前払い政策によって、企業や株主は潤っていることはたしかですが、新事業を企画して景気回復のために働くのは「中堅社員」なのです。

「よしやろう」ではなく「もう我慢できない」とは何としたことでしょうか。

どこかにしごとをしないで得をしている「事半功倍」の人がいて、しごとをしてもプラスにならない「事倍功半」の自分たちがいる。この不公平感が先に立ちます。若い労働者が不安定なしごとでも最低賃金でも働かねばならないのに、生活保護や年金で安定を得ている者がいて、「ナマ保（生活保護）で家族二〇万だってさ」なんていう話まで耳にします。

そのうえ四人にひとりの「高齢者」のうち、八割の元気な人まで「毎日が日曜日」でいったい何をしているんだ、という批判まで飛び出す。現役世代がムリして負担している年金を受け取りながら、ウォーキングをし、スポーツジムに通い、旅行をし、レストランで会食し、次の時代に「われ関わり知らず」として暮らしているのではないか。

「中堅社員」が不公平に思うのは何か。

資産として留保しているという約一四〇〇兆円の「家計黒字」です。戦禍を受けた人びとが貯蓄もせずに働きづめに働いてつくりあげた九割中流の社会で、しごとはほどほどにして貯蓄にいそしんでいた戦後世代が高齢者となって年金を得て暮らしている。ため込んだ平均約二二〇〇万円という貯蓄は手つかずのまま「いまや年金暮らしで」という気楽さについてです。

自分の親を見ればそんな資産はないことを知っているので、どこかに平均以上の貯蓄を「塩漬け」にしながらかきこもりの余生を送っている高齢者がいると思うだけで「中堅社員」の心にわだかまる不満は溶けていかない。時代の推移と連動しながら人も動くし株式や事業出資金にまわってカネも動くという欧米と異なっていて、日本では現金・預金のままで動いていない。

顔見知りの先輩たちに対する功労者としての敬意とない混ぜになって「中堅社員」の胸の内を右往左往していたらだちは、「高齢者資産」についてふたつの意見に集約されることになりません。

まずは同じ「将来不安」をかかえながらの「資産」の差です。同じ将来への不安をかかえてはいても、高齢者は「資産」を持ちながら年金で余生をおくっている。一方、企業を支えて働いている「中堅社員」は、貯蓄する余裕もなくしごとの「先行き不安」のまま日々をすごす。

高齢者の側の言い分は、この先どこまで分からない長い老後生活の不安を解消するためには、底まで知れている資産を「塩づけ」といわれても抱えこんでおくしかない。それは一人ひとりは小額でも、増えつづける高齢者とともに増えつづけて、それが総体として経済活動の効率を悪くし、企業活動の手足を縛っているのではないかというのが、「中堅社員」側からの「高齢者資産塩づけ」批判なのです。

*世代間に亀裂が広がる

国の財政をあずかる「現役官僚」の理解は少し違うようです。冷ややかというか冷静です。超一四〇〇兆円といわれる「家計資産」は、超一〇〇兆円の財政赤字を補てんするため安定した黒字財源としては動かないほうがいい。やたらに動いて減少してしまっただけは困るからです。やがてあと二〇年もすれば一世代一過性のものとして、相続とともに解消され、次世代

に移ることになります。ここはだれも声には出しませんが、それは自分たち世代の高齢期の安定財源ともなっているのです。同世代の企業内の「中堅社員」にもわかってほしいというのが、国を支える側にいる「官僚」の戦略としての理解なのです。

もとはといえば、この二〇年、「安心して暮らせる高齢社会」づくりのために出資されるべき資産だったのですが、「高齢社会」に対する国のブランドデザインが欠けていたために、「将来の不安」から貯蓄されることになったのです。

今世紀のはじめに、将来が安心できる「高齢社会ブランドデザイン」が掲げられていて、具体的な構想として納得できれば、高齢者になる途上で出資・出費すべきものだったのですが、構想がないゆえに「使うべき時に使うべき所に使えなかった資産」として、老後不安の支えとして個人の家計に積み重なってきたものです。「貯蓄過剰」といわれても、とくに団塊の高齢者なら実感として理解がいくところなのです。

高齢者側の言い分は、定年前の企業内では「グローバル化」対応と聞いて若手にしごとを集中させ脇役を余儀なくさせておいて、定年後には老後資金をねらうのか。現役は自分たちの力でやりぬいてくれないと困るではないか、となります。

企業を支えている「中堅社員」の側からは、年金や介護保険の財源の支払者として、「高齢者資産移譲」への要請が力を増すこととなります。使わない高齢者から使い手へ資産をトランスファー（移譲）すべきではないのかというもの。これは新しい財界をつくる勢いの若手オー

ナーたちが共有する持論でもあります。

いくら景気回復でもがいても、いっこうに進まない要因が、高齢者層の支援の欠如にあるというもの。使わないし使えないのなら、必要としている若手の実業家に資金を回すべきだというものです。この要請は想定外の金融緩和があつて、勢いはややおさまっていますが。

先ごろ個人レベルですが、「教育資金贈与」として一五〇〇万円までの非課税措置が決まりました。そのときには「愛情口座」といわれて若い母親たちの関心を呼びました。しかし高齢者がため込んだ貯蓄を孫のために動かそうという官僚の側からの「高齢者資産」ヒツペガシ策であり、上限とはいえ一五〇〇万円とはだれを対象にしての数字かという批判も出ました。

孫の学問支援のために、なけなしの福沢諭吉幣を工面している立場の人からは、一五〇〇万円という高額には実感がないし、だれが決めたのか不愉快ですらある。そんなことでは「高齢者資産」は逆に動かなくなるではないかというものです。

ところで「引きこもり」は、引退高齢者だけのものではなく、企業内でも起こっています。この傾向は正社員にも広がっていて、即戦力を期待されて入社したもの、適性と将来に不安をつのらせた新入社員の「ニート化」が少なからずあるといえます。藤谷さんの息子もその心配がありそうです。

そんな不安状況に包囲されている「中堅社員」は、気づかないうちに「自己チュー」（自己中心主義）に陥ってしまいます。これ以上すすむと企業の骨格が崩れてしまいかねないほど

なのです。

「高齢者になればわかるが、そう簡単に移譲などできるものではない」

と、後輩の苦しい立場に同情しながらも、高齢者になって年金支給にありついたらばかりの「団塊の世代」の人びとからは、後輩の甘えへの不快感を隠さない批判があがることになります。

世代間に亀裂が広がる。

これ以上に亀裂が広がらないために、中年世代に安心感を与えるためには、高齢者が資産や知識や技術を活用して、次世代が高齢者になったときにも使えるモノや憩える場所やしくみをつくること。これは「高齢者資産」を減らすのではなく増やすことになるからです。

「自分がその木蔭で憩うことのない木を植える」(W・リップマン)

という後人を思う姿勢を高齢者みんなで示すこと。

「中堅社員」のみなさんは、先輩の果敢な挑戦を見守るのがいい。得られる経済的な波及効果は将来にわたって大きいし、その成果はいずれ次世代のあなた方の資産となるのですから。

目「三同同(三世代同居型)住宅をつくる

国の骨格をつくる家族のかたち

このところの趨勢としては、「三世代同居」は減り続けてきて、高齢者(ここは六〇歳以上)の四〇%までが同居を望んでいるのに、実際に子・孫と同居している人はいまや二〇%台にな

っています。そんなことはないと思うでしょうが、諸外国と比べても親子の接触が少なくなっているのです。

どこの国も骨格である「家族」と「企業」と「自治体」のしくみが堅牢なことが、安定した国の支えであることにかわりはありません。

「家族」は安眠できる住まいによってむすばれています。わが国では、江戸時代を引き継いだ明治、大正期はなお大家族でした。都市部は別として、地方の住居は何百年もつ大黒柱のある家屋で、男性（長子）が戸主であり女性（嫁）の忍従によって成立していたといえます。

「三従四徳」が封建社会の女性の礼教育としてはいわれました。ご存じのように、「三従」は未婚の時は父に、既婚時は夫に、そして夫が死んだあとは子に従うこと。「四徳」は婦徳、婦言、婦容、婦功を教え込まれましたが、もちろん「三従四徳すこしも学ばず」や「三従四徳まるでダメ」という快女たちもいました。「不三不四」には女性の側のそんな陰の読みがあったにちがいありません。

女性解放と男女同権。戦後期待の家庭の姿「マイホーム」でしたが、「良妻賢母」意識を引き継ぎながら、新風に乗ってはじまって七〇年、経緯として現状を迎えています。が、「マイホーム」は国の骨格となるほど安定した家族の形をつくれないうです。

先ごろ来日して講演したイギリスのビジネス理論家リンダ・グラットンの説く未来社会（『LIFE・SHIFT』など）は、個人の多様な人生のありようを示して中年世代には人気があ

るようですが、この形の家族が広がると柔構造どころかこの国は崩壊してしまいます。

そこで「三世代同居」への回帰が緊急の課題となってきました。

世代同居が三割ほどは残っていないと、この国に伝来の「わが家三代の暮らしの知恵」が途切れてしまいます。国の骨格をつくっている家族の絆を強くし、「わが家三代の暮らしの知恵」をしっかりと子孫孫に伝えるには、やはり三割ほどの世代同居はどうしても必要な暮らし方であり、新しい標準家族が暮らすための「三世代同居住宅」は必要な住環境なのです。

そこで政府は、「一億総活躍社会」の具体的目標に掲げている「希望出生率一・八」に向けた少子化対策として「三世代住宅」の新築または中古住宅の増築に対する補助事業を開始しました。安心して子どもを育てられる環境整備の手段として、世代間の助け合いを図るための「三世代同居」を促進するために、税制上の軽減措置をすること。三世代同居を目的として、自ら所有し居住する住宅の三世代同居に對してです。

国土交通省住宅局住宅生産課（木造住宅振興室）がすすめる三世代同居に對応した良質な木造住宅の整備の促進（地域型住宅グリーン化事業の拡充）もそのひとつです。

県レベルでは、石川県「三世代ファミリー同居・近居促進事業」ほか福島県、富山県、鳥取県、長崎県などで同様の支援を。市レベルでは、熊谷市・蕨市の「三世代ふれあい家族住宅支援事業」、つくばみらい市の「三世代で同居・近居するための住宅支援事業」、綾瀬市・高槻市の「三世代ファミリー定住支援事業」、四街道市・本巢市・砺波市・小牧市・やまぐち市の「三

世代同居・近居住宅支援事業」、大分市の「三世代近居・同居ハッピーライフ推進事業」、輪島市の「三世代ファミリー同居・近居促進事業」、千葉市、大田原市、品川区、稲敷市、郡上市、防府市、横手市、山鹿市、黒部市、大分市、篠山市などで同様の支援をすすめています。

大都市周辺や中小都市でのこういう傾向は、地方創生の流れのなかで顕著になりつつあります。多世代利用型の超長期住宅あるいは長寿命型（長期優良住宅・新築木造）など力点は異なってもめざすところは同じです。多世代が長期にわたって利用する安定した住宅の広がりには、安定した国の骨格となる「家族」への支援となるものだからです。

*「実家依存症」といわれても

このままですと一般的にいつて「少子化」に歯止めのかげようがありません。それでも三〇歳の大台に乗って、その兆候があつて、なんとか二人目の子どもをと覚悟はきめても、不安定な夫婦の収入では将来、養育・教育費が重圧になるのは見えています。

学費は公立でも約一〇〇万円、私立だと約二三〇〇万円かかるというし、就学前の時期のたいへんさを聞き、マスコミを賑わす子どもたちにかかわる事件を目の当たりにして、不安はつづけるばかり。そこで、「カアさん力を借して」ということになります。

実情では子育てに母親の助力を期待しすぎると、「実家依存症」といわれかねません。

国はこれまで夫婦ふたりによる子育てを「エンゼル・プラン」（文部、厚生、労働、建設の四

大臣合意により平成六年一二月に策定）以来の目標として推奨してきたし、若いカップルを対象にして養育のしごとをしている専門職の側からは、祖父母の参加は歓迎されていないのです。みなさんは驚いてはいけません。「次世代育成」や「子ども・子育て」の現場では、そういう立場での「祖父母」という文言すら文書のどこにも示されていないのです。これでは孫にわが家三代の暮らしの知恵をと考えても宙に浮いてしまうのではないのでしょうか。

若いふたりによる大都市での子育てと地方の実家での子育てでは支援のしかたが異なっていると思うのですが、さまざまな事情があつて、二人が中心で祖父母は排除されているのです。「実家依存症」といわれても子育てに母親の助力（家族の含み資産）を期待して両親と同居して暮らすことを考える娘夫婦が少なからずいます。

「実家依存症」といわれてもという意識の变革が起きています。

M字型でなく真一文字型の就業へ

渡辺家では、母が力を貸し、娘がしごとを続けながら第二子の出産を実現することになりました。かつて専業主婦を求めた母世代の「核家族」指向から、M字型就業を避けて真一文字型の就業により専業課長でありたい娘による「三世同居」へのUターンを選択することにしたのです。そこで「三世同居」住宅づくりを進める渡辺家のご意見を聞いてみようと思います。

渡辺義則さんも中年期にぎりぎりまで工面して借り入れをして、団地よりやや広い都市郊外

の一戸建住宅を購入して転居しました。それでも「二世代住宅」が精いっぱい、このままでは「三世代住宅」にはなりません。

子どもがそれぞれに結婚して自立した後は、夫婦ふたりで暮らしています。卒業記念に地元の小学校在分けてくれた梅の若木を庭に植えたときのこと。息子が出場した国体のバレーボールの応援にいったときのこと。作文や家庭科の手編みを手伝ったときのこと。それぞれの恋人の確認に同道したときのこと・・・。

父として母としての立場でそれぞれに内容は異なりますが、子育て期のいくつもの困難をクリアしてきた父として母としての感慨のスペースであるとともに、この狭い実家はなお娘にとってほひそかな生活戦略にかかわるスペースでもあるのです。

孫はかぎりなくかわいい。

傷みは目立つものの住み慣れたわが家に暮らしている父と母として、子どもが巣立ったスペースを今度は孫のためにしつらえ直して、祖父母としてわが家の三代目を養育する場を用意することになります。多くの家庭がいろいろやりくりして「近居」や敷地内「隣居」や「同居」を成立させています。

「近居」の場合は、離れて暮らしている分だけそれぞれの独立とプライバシーは損なわれることはないのですが、離れている分だけ問題回避型の接触とならざるをえません。

幼い孫はかわいいし、暮らしに張り合いをもたらしてくれる。そこで出会いを待ち、会うご

とに何かと望みをかなえてやる、やさしいおじいちゃんとおばあちゃんになります。

きちっとした「孫育て」には限界があるのはわかっているけれども、現状ではこのあたりが標準的「しあわせ家族」となっています。ここでは「近居」がうまく機能している多くのご家族のしあわせを祈りつつ、減りつづけてきた「三世代同居住宅」をめざす渡辺さんの課題を見てみたいと思います。

娘が結婚して世帯を持ち、子どもが生まれる。

近ごろは「できちゃった婚」が並みの時代だから、結婚後一〇カ月のハネムーン・ベビーを待つよりも、結婚六カ月前後が最多とかで、案外すみやかに確実に「ノンプラン・ベビー」がやってきました。渡辺家では息子の長子がそうでした。出張先で妻子を同時に得て、「現地調達」してきたもの。第二子もノンプラン・ベビーだそうです。

渡辺さんの長女は第一子を産んだあと、二五歳までの予定だった第二子の出産期をはずすとあとは先延ばしして三〇歳代に。そしてその兆候が。

*「三同同(三世代同居)型」住宅をつくる

大都市近郊に住む渡辺さん夫妻は、近居して子育てをしてきた娘家族からの要望もあって、「二世帯三世代同居」型の住居への建て替えを決めています。

覚悟という大げさに聞こえるでしょうが、目をつむっても、どこに何があるかまでが分か

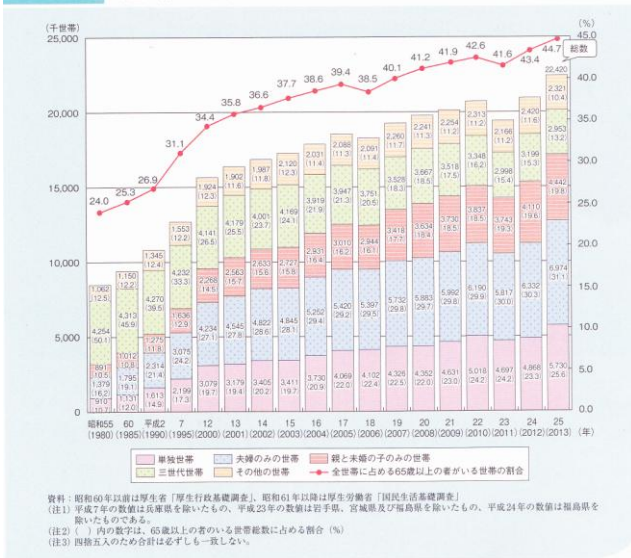
っている住宅から、新たな暮らしへの転換は、やはり覚悟がいるといえます。地方のお宅なら、敷地内での「隣居」が可能でしょうが、都市郊外住宅の場合は残念ですが、そこまでの土地の余裕がありません。だから建て替えて替えになります。

「三世代住宅」についてメーカーを通じて調べてみると、事例は決して少なくはないし、各メーカーともユーザー側のさまざまな要望に対応できるノウハウを持っています。住宅内のバリアフリー化はすみずみまで意識されています。渡辺さん夫妻にはこれが魅力なのです。

部屋の配置はもちろん、つまづいて転倒しないよう段差をなくしたり、手すりを設けたり、階段の勾配を緩くしたり、車イス（訪問客もある）を考慮して幅広廊下にしたたり、少ない動作で開閉できる引き戸を多くしたり・・・などが実現されています。「家族とともに成長する住まい」を提案しているメーカーもあります。

すでに建て替えて「三世代同居住宅」に住んでいられるお宅を実際に訪問する機会を提供しているメーカー

図1-2-1 65歳以上の者のいる世帯数及び構成割合（世帯構造別）と全世帯に占める65歳以上の者がいる世帯の割合



資料：昭和60年以前は厚生省「厚生行政基礎調査」、昭和61年以降は厚生労働省「国民生活基礎調査」
 (注1) 平成7年の数値は兵庫県を除いたもの、平成23年の数値は岩手県、宮城県及び福島県を除いたもの、平成24年の数値は福島県を除いたものである。
 (注2) () 内の数字は、65歳以上の者のいる世帯数に占める割合 (%)
 (注3) 四捨五入のため合計は必ずしも一致しない。

ーもあります。そこで渡辺さんは訪問会に参加してみました。

大手メーカーによる広域造成地での建て替え住居ですから外形も安定しています。樹木も育っていて、大ぶりに枝を広げたサクラも庭隅にあって、それを囲むようにしてL字型の二階家が建っています。

「ここを選んだ家内の母が子どもの成長とともに大事にしてきた樹でしてね」

渡辺さんの庭への視線を察して、ご主人がいう。夫妻のほかには高校生の娘と義母の四人家族。一階は母親の部屋と共用のスペース、二階に夫妻と娘の部屋と広いリビング。一角に書斎もあって、サザエさんのオムコさん「マスオさん」型の男性として「三世代同居」を成立させながら、マスオさんよりはずっと存在感があるように見受けられたそうです。

上下階の雰囲気には違和を感じさせなかったのは、母と娘の間に暮らし方の一貫性が保たれているからでしょう。「三世代同居型」住宅として申し分ないが、それでも義母の方の孤立遠慮がちな気配が構造やモノに表われているのが気になったといえます。

「長寿社会対応住宅」として「長寿社会対応住宅設計指針」（一九九五年、建設省。この年の一月に「高齢社会対策基本法」が成立した）が出て二〇年になります。住宅産業は、メーカーの配慮くらべて高齢化対応がもっとも進んでいる業界です。住宅メーカーによって取り組み方は異なりますが、どこも「二世帯住宅」のノウハウを十分に蓄積しています。

そこまでは結構なのですが、せっかくの二世帯同居型住宅にもかかわらず、どのメーカーの

小冊子のモデル設計を見ても、共用スペースのつくりつけが「ミドル＋ジュニア」主体に寄りがちになっています。だから「三世代型」住宅とは称しているものの、「離れた和室ひと部屋への高齢世帯の引きこもり」が推測できるものが多くみられます。ここにも高齢期が「余生」であるという旧来の高齢者意識が濃く反映されています。これではほんとうの高齢化時代の三世代平等住宅とはいえないのです。

「人生の第三期」の主役として、これから二〇年余の長い高齢期を「円熟人生」の主役としてゆったりと暮らす家ではない、と渡辺さんは気づいています。

暮らしの知恵を次世代に伝える

ここは妻であり子の母であり孫たちの祖母であるバアバちゃんの出番です。ア的位置が微妙なところ。ジージもそう。孫のいたずらであっても、ー（ひっぱり）の位置が下になると顔つきがかわしくなる。

孫の日々の成長につきあいながら、わが家の「暮らしの知恵」を伝えられる場としての居間（共有スペース）。そこを中心にして周りへ「三世代」のプライベート・スペース。孫と接点をもつ居間への動線。娘と共有する台所への動線。実質的主人であるバアバちゃんの工夫を織り込んだ「三世代住居」を実現すべく渡辺家は設計にはいっています。いまは三世代が揃っていないくとも、三世代が常に等しく扱われる同居住宅が「三世代同同居型」住宅（長いので「三同

同型住宅」と呼ぶ)です。

「家族みんなで考えていろいろ解決することができませんから」

と、渡辺さん夫妻は親・子・孫三代が出くわすさまざまな場面での処理にも気をくばる。

とくに女性のライフステージからの発想が重要になります。先に女性の「三従」を取り上げましたが女性の「三同」はあっていい視点です。未婚時は両親と、既婚時は夫と、夫が先に亡くなったあとは子孫との同居を想定して「住まい」のありようを考えること。「三同」であるかぎり形において女性の希望は活かされ課題は解決されなければならず、従うような同居ではなしに、「三世代同居」の形が標準住宅として考慮されることになります。

「三同同型住宅」を実現できる渡辺家は、「超」がつくほどの「しあわせ家族」ですが、国の骨格になる家庭の住宅の形として多くあっていいケースであり、優遇措置を講じて地方創生を担う三世代のための居場所を増やすことです。国の骨格を形づくる強くてたおやかな国民性は、「三世代同居」の家族によって培われて継承されていくのですから。

「三同同型住宅」の標準化のために、国や自治体は優遇措置をおこなない、建設業者はノウハウを蓄積し、企業は女性社員の地元勤務型キャリアの設置とともに、子育て期の女性が能力を十分に発揮できるよう支援する。地域と家族が総出で次世代を育てることとなります。

女性社員の六割におよぶという結婚時の「寿退社」とその後のアルバイトというM字型就業にかわって、渡辺さんの娘さんは高年齢まで真一文字型にしごとに集中できる人材として処遇

されることとなります。

*「ジージ」を自慢するジュニア

「近居」よりも「隣居」よりも、「三世代同居」によって、女系のつながりを有効に活かしながら「わが家の暮らしの知恵」を次世代に伝えることが可能になります。母と娘がやりとりする生活感の継続性、祖父母と接することによってもたらされる孫世代への生活知識の共有のメリットには計り知れないものがあります。中年期の父と母はともに充実してしごとに向かい、祖父母と孫たちは家の内でも外でもそれぞれのエージングの時を温かく見守ることになります。「うちのジージがね」

とって、ジージから教わった暮らしの知恵や悪知恵をなかに自慢するジュニアが三分の一ほどいないと、この国の先人が残してくれた「暮らしの知恵」が次世代に伝わらなくなってしまう。

次世代の成長を温かく見守る高齢者、高齢者をたいせつにするジュニアを育てる機会をもつ家族。これもまた「高齢社会」を構築するとともに、国の骨格を強くするために重要な「家庭」の創成であり、初の「三世代平等型長寿社会」をめざして活動できるステージ「高齢化コア（核住宅）」形成の先駆けといえるでしょう。

第三章 ものづくりオリジナル

1 「MADE IN JAPAN」のゆゑ

「サンパク以後」(三八九一五)は片下がり

三万八九一五円。

何の額だかおわかりですよ。

とくに経済に関心のある人でなくても忘れてもしない平成元年(一九八九年)一月二十九日、年の瀬の東京株式市場「大納会」で、「東証一部の株価」が三万八九一五円というピーク値を記録したのでした。平成になった年の暮れの晴れやかな記憶として残っています。

「三八九〓サンパク〓三白」というのは正月三が日に降る祝いの雪をいいます。

明けて一九九〇年正月の晴れわたった東京の空に、雪ならぬ株価が舞って、「サンパク以後」(三八九一五)はひたすら右片下がりの展開となりました。

それが経済の成長時代の終焉でした。

ご承知のように、経済を論じる場では決して「成長の終焉」とはいいません。対前年度比の指標がマイナスであっても「ゼロ成長」といいます。それが平成とともに一〇年つづき、二〇年つづき、「失われた二〇年」を過ぎてもなおつづいています。

平成になって二八年余、経済の成長を知らないまま平成生まれの子どもたちは成長して、新

世紀をむかえて、大学バカ化のキャンパスで強いられて学ばず、単位とともに笑いをとることの重要さを学んで卒業して、就職して、強いられて働くことをしない新入社員として、企業現場で成長力を活かして働いています。

かつて企業戦士とかワーカホリックとかいわれた上司からしごかれた経験をもつはずの上司だから、「自強して息まず」（清華大学の校是）といった新入社員を期待するところなのに、パウハラや労災を避けてやさしい。経済がゼロ成長なのだから自社は現状維持でいい。

前世紀に日本商品の評判をつくってくれた先人の成果が国際的に生きており、現状維持で企業収益は安定しているからです。

といて、あるべき「MADE IN JAPAN」のゆくえは探らなければなりません。

昭和の終焉。こちらの印象は明解です。

昭和六三年（一九八八年）の秋から重篤な状態に陥っておられた「昭和天皇」が、一〇〇日を超える闘病をつづけた末に、年を越して一月七日に八七歳の高齢で亡くなられたのです。このときの闘病から崩御そして二月二四日の「大喪の礼」に至るあいだの国民の自粛のようすを思われて、いまの天皇はできるかぎりそれを避けたいという希望を述べられて、「生前讓位」の理由のひとつとされています。

そして六月二四日には、「私は街の子」や「りんご追分」以来、戦後の日本を体現していた歌手の美空ひばりさんが、最後に「川の流れるのように」を歌って五二歳で亡くなっています。

「やれやれ、これで戦後が終わったのだ」

とつぶやいた大正や昭和戦前生まれの人びと。

とくに終戦を二〇歳〜三四歳で迎えて、戦禍のなかから働きづめできた大正生まれの人びとは、昭和の終焉のとき六四歳〜七八歳の高齢者になっての実感だったにちがいません。

* 高齢者に内在するデフレの要因

「昭和」が終焉し、「平成」（「地平天成 地平らかに天成る」から）を迎えたとき、高齢期にある人びとのなかには、みずからの来し方を顧みての終息感とともに、その後の「デフレーション（経済の萎縮）」を体感として理解した人が大勢いたのです。

戦乱で亡くなった人びとへの鎮魂の思いは心の底から消えなくとも、自分の肩にかかる荷だけは静かに降ろし、長かった戦後のわだかまりと緊張を解いたのでした。周りを見回しても、どこにも将来に新しい目標も構想も見当たらなかったし。

われにかえった高齢者の一人ひとりに生じた「内在する萎縮（デフレーション）」は、ゆつくりとした静かな変容であり、外から気づかれることはありませんでした。

戦争の惨禍を知り、どん底の貧しさを知るといふきびしい経験をもつ自分たちの後を、戦争も知らず、貧しさも知らない若い連中が一对一で引き継ぐことなどできないだろうという自負と憂慮をない交ぜにした感慨は、大正生まれの仲間同士の会話のうちに繰り返されました。

実際に目の前で土地価格が暴騰し、東京の都心を地上げ屋が徘徊し、ニューヨークでは三菱地所がロックフェラーセンター・ビルを買い取るといった起こってはいけない事象まで起きて世間を騒がせました。

ヨーロッパではベルリンの壁が倒壊し、中国では天安門事件が発生し、ソビエト連邦が崩壊し、アメリカ経済の低迷がありました。日本では金融緩和と財政出動が効果と副作用を伴いながら行き着くところまで行き着いて経済が破綻しました。引きつづいた金融市場の混乱はありましたが、直ちに国民の暮らしを大混乱させることはありませんでした。

多くの高齢労働者は、企業現場からの自分たちの隠退（労働力・潜在企画力の消滅）が、総体として会社や社会の萎縮をもたらすだろうことは予測できましたが、「列島総不況」に見舞われ、途上国による「グローバル化」で急迫されて百均商品に包囲され、まさかこれほど早くに高齢者となった自分たちの医療費の負担増や年金の減額や消費税増税が現実になり、あるうことか若年層から不公平との反発まで浴びようとは、思いもよらなかつたにちがいません。

九割中流という「近似大同社会」を実現

「もはや戦後ではない」（経済白書）

といわれたのが一九五六年。戦後わずか一〇年後でした。

そのあと戦後二五年の一九七〇年には、一億人を超える国の国民の九割までが「中流と感じ

る社会」を実現して、しかも長期に継続（一九七〇年～八九年、終始に諸論ありますが）したことは世界にも歴史的にも例が知られないことはたしかです。

「九割中流」は、わが国の高齢者のだれもがその経緯をリアルタイムで体験してきた稀有で誇るべき成果であり、個人の体験としても仔細に思い返して確認し直してみたい。

その時期に産業界の中心にいた「大正人」のひとり、盛田昭夫氏（当時はソニー会長、経団連副会長）は、

「日本は社会主義的・平等主義的・自由経済の国だ」

と一九八〇年代に外国人に向かって紹介していたのでした。

盛田さんは外国人に日本の「国のかたち」を問われると、自信をもってそう説明していたといます。国際的基準の中で、世界の開発途上国から目標とされるアジア地域の先進国として立ち現れたという理解においてです。

一九七〇年代、八〇年代がどんな時期だったのかを思い出す参考に、話題になったできごとで追ってみましょう。

一九七〇年には「進歩と調和」を掲げた「日本万国博」があり、「憂国」の三島由紀夫自決があり、光化学スモッグがあり、減反がありました。一九八〇年には絶頂期の山口百恵が引退し、そして一九八九年には昭和天皇が亡くなり、美空ひばりが世を去りました。

もう少し記憶を細かくたどればその間に、ゴミ戦争（七一）、列島改造（七二）、べるばら（七

四)、カラオケ(七七)、インベーダー(七九)、そしてフルムーン(八一)、おしん(八三)、くれない族(八四)、新人類(八五)、トラバーク(八六)、外にはペレストロイカ(八八)、ベルリンの壁崩壊(八九)、天安門事件(八九)・・・。

その間、「九割中流社会」といわれました。「近似大同社会」です。

中国では、三千年にわたって歴代の為政者が目標として成しえないのが「大同社会」(いまの中国は「小康社会」をめざしている)。それにほど近い理想社会であり、歴史的にも例のない貴重な二〇年の体験だったのです。

* 歴史的にまれな戦後平等社会

「大同社会」とはどういう社会なのでしょう。

わかりやすくいうと、『礼記「礼運」』では「外に戸を閉ざさず、これを大同という」といっています。梁山泊にこもって世直しをめざす『水滸伝「第一回」』でも「路に遺ちたるを拾わず、戸夜に閉ざさず」という太平の世を夢見ています。

夜、「外に戸を閉ざさず」に暮らせる社会のこと。この国の一時期にたしかにそういう時期がありました。「セキュリティって何？」という社会です。

「路に遺ちたるを拾わず」は、拾わないのではなく、落としたりした人のところへ戻ってくることで、そういう時期が戦後のこの国には確かにありました。拾ったものは必ず交番に届けたし、なく

したものや忘れたものは必ず戻ってきました。つい三〇年ほど前のこと。高齢者はみんなどこかで、この歴史的に稀有な時代を体験してきているのです。

その後、IT革命が本格化して世界が狭くなり、どこからでも侵入者や破壊者がやってくる時代になって、いまや、もはや二度とありえない社会です。

大戦後の東アジアの小世界「日本」だったから可能だったのでしよう。ボートピープルが命がけでめざしてやってきたあのころの、アジア諸国あこがれの国「日本」のことです。

いまでも「シニア海外ボランティア」の高齢者や日本企業の現地駐在の高齢社員が、開発途上国の現地の人びとから心からの信頼をかち得ているのは、まずは生産者としてユーザーが満足する品質（モノ）にこだわるとともに、背後に息づく品格（ヒト）がおのずから伝わるからなのです。

「みんなが中流」というのが当たり前だった平等意識に亀裂をもたらすことになる日本経済の「萎縮」（デフレーション）がはじまったのは一九九〇年代初めのころでした。

ソビエト崩壊後のヨーロッパの混乱、その後のアメリカ一極化、そして途上国の台頭・・・平成とともにじまった海外での激変が、海外との加工貿易の成功で、とくに戦勝国アメリカの傘の下で「九割中流」をなしとげた日本社会をそのままにしておくことはなく、じわりじわりと蚕食して、四半世紀のあいだ中流社会を崩落させつづけてきたことになりました。

「MADE IN JAPAN」の歴史

日本経済の頂上期に、それがいいすぎなら頂上期のソニーの盛田昭夫氏が書いた『MADE IN JAPAN』（一九八七年、朝日新聞社）は、企業家の立場からこう記しています。

「国内のマーケット・シェアをかけた激しい競争を通し、海外での競争力を養うのだ。エレクトロニクス、自動車、カメラ、家庭用電気製品、半導体、精密機械などが、その代表的なものである」

ひたすらに近代化（といっても戦勝国アメリカ化）をすすめた日本は、外国から素材を買い、丈夫で長持ちする良質な製品を作って売る「加工貿易立国」として、明治維新に次ぐ第二の開化を行い、国土の再建をめざしました。物量を誇る戦勝国アメリカの「民主主義」と「資本主義」の傘の下で、鉄のカーテン（ソビエト）や竹のカーテン（革命中国）のむこう側の計画経済をすすめる「社会主義」国の動向にも関心を払いながら。

盛田さんがあげた前記の商品は、国内でよく売ればそれは外国とくにアメリカ市場で評判がよかった。「MADE IN JAPAN」のトランジスタラジオ、カメラ、テレビ、小型車など良質な中級品は、実用品として認められてきたのです。それがまた日本人みずからの生活を平均的に充足し、中産化することになったのです。

「みんなが等しく中流」の実感がこうして生まれたのです。それならこれから国際的にむかえる高齢化社会のための円熟技術による高齢化用品（Older Person's goods OPG）を制作して、

わが国の生活感性の高い高齢者層がモニターとなって選別して、あらたな輸出品として貿易収入を増やすことで、高齢者層の九割中流を確保すればいいのです。

*丈夫で長持ちする中級品に評価

日本製品の多くは高級品ではありませんでした。「良質な中級品」つまり一般の人びとが安心して使える良質なものを作ることに活路を見い出してきたのでした。良質というのは、「使いやすく、丈夫で、長持ちする」という意味でいわれました。

いまでも優れた技術者が「良質な中級品」をつくり提供することが、わが国の立国の基盤であり、そのことは骨に刻んだうえ、心にも銘じておかなければならないキーワードです。

何度でも繰り返しますが、けっして一部の人のための高級品ではありません。高級品をつくっても、それは業余のこと。

だからどこの家庭でも日用品はどれも丈夫で長持ちする国産品があたりまえでした。わが国では舶来ものといえば、化粧品とか時計といった欧米からのブランド品が主だったのです。

そこへ「途上国産品」が混じり出し、目立つようになり、はては逆に国産品はどれというようになりました。そうなるまでに、せいぜい一〇年余といったところだったでしょうか。

前述しましたが、流行語にもなった「日本列島総不況」と堺屋太一さん（経企庁長官だった）が日本経済を評したのがたしか一九九八年のこと。当時すでにアメリカ一極体制の下で、アメ

リカ市場での途上国主導の経済活動（グローバル化）が進行していたということになります。日本のノウハウを求めるアジア諸国への対応は、ヨーロッパ勢や韓国に二歩も三歩も遅れることになりました。

それまで途上国からの輸入品といえは「山海珍味」であるパイナップルやマンゴーなどといった果物でいどで、わずかに韓国製の「衣料品」が目立つくらい。日用品は輸入せずとも丈夫で長持ちする国産・地産品でこと足りていたからです。

ロ 途上国産の日用品に囲まれて アジア開化で「途上国産品」がニッポン乱入

「衣料品」からはじまった家庭用品の「途上国産化」の他製品への広がりには、日新月異の勢いで足早に進んでいきました。このあたりの経緯にはみなさんの関心のありようにも濃淡があることが想定されますが。

暮らしの中で「MADE IN KOREA」から「MADE IN CHINA」や「MADE IN THAILAND」・・・といったアジアの国々からの日用品が次々に国産品に入れ替わる度に実感されてきました。

「えッ、これもか」

と驚くほど早く、「モノの途上国産化」は進んで、ついには精密機器にも及んでいきました。「日本列島総不況」の下で、収入が減ったわが国の消費者は、国産品や製作技術の将来を危惧

しながらも、やや粗悪ですが「安価」な途上国製品を購入することになりました。「丈夫で長持ちする純国産の優良品」に囲まれて暮らしていた時代と比較すればよくわかります。

一九八二年が小売店のピークだったといえます。そのころは全国に商店が一七二万店、商店街は一万四〇〇〇カ所もあったといえます。数もそうでしたが商店街には人をひきつける活気があって、馴染みの店に寄るのが楽しかったのです。商品知識ばかりか人生の先達があちこちにおいて、モノを買ってオツリと元気がもらえたのです。

「モノと暮らしの情報源」

それが商店街でした。とくに歳末の商店街の活気はどこもなつかしい記憶になりましたが、そのころに購入した優良品のあれこれはまだ暮らしの中で生きています。

*「アジアの共生」(モノの豊かさ)を実感

日本企業の海外進出は、アメリカ市場での業績悪化の果ての生き残りをかけての荒療治となりました。アジア市場ではヨーロッパ系企業や韓国企業にあきらかに時期遅れではじまったものの、現地での日本企業への歓迎と期待には大きいものがありました。

あこがれの日本から、有名企業がやってきたのです。

「日本製品を使って日本人のような暮らしをしたい」というアジア途上諸国の人びとの願望が叶いつつあるのですから。

決して褒めすぎでも言いすぎでもなく、「アジアの共生（豊かさの共有）」へむかって、わが国の進出企業による公益的成果として、日本ブランドは成立しています。アジア各地にしっかりと着床しているのです。

競争にさらされているし、企業の現場は厳しいのですが、世紀の視野でみて、日本が誇っている国際貢献です。いま毎日の暮らしで用いている日本ブランドの生産地を逆にたどれば、アジア諸国の人びとの暮らしに日本企業がもたらしている貢献は推察することができます。

いうまでもなく、現地を仔細にみれば、先行の欧米企業や韓国企業、最近では中国企業の進出もあって、現地の日本企業はなお生き残りを懸けて事業を展開しているのに変わりはありません。現場での事業活動の成果は、熟練派遣社員のていねいな指導とそれを受けて日に夜を継いで移入に努めている現地従業員の熱意の結果でもあるのです。

わかりやすい例でいえば、日本で成功して海外へ進出した「ユニクロ・UNIQLO」や「大創（ダイソー・DAISO）」は現地で大衆に受け入れられていますし、その動向をみれば、「アジアの共生（豊かさの共有）」が時流としてアジア各地で奔流となっていることが理解されます。

前世紀には戦場となった東南アジア地域でも、「平和裏」に日本企業によって展開される「モノとヒト」の交渉や製品化プロセスを通じて、わが国が平和国家であり、民主主義によって「しくみ」をつくり、ユーザーが納得する「モノ」づくりをし、従業員に差別なく接していることを理解して信頼されているにちがいありません。

国内で敗戦後にみんなで豊かさの共有をめざした「日本型マネジメント」を、現地で活かしている日本企業とその社員は、ほめすぎでなく、わが国を代表する平和遣使なのです。

家庭に「百均グッズ」・職場に「非正規社員」

中国へ進出した日本企業は、上海だけでも三〇〇〇社を超えるといいます。それぞれ社名の漢字表記に工夫しているのはご存じのとおり。

いくつか例をあげてみましょう。

たとえば「優衣庫」(ユニクロ)、「三徳利」(サントリー)、「索尼」(ソニー)、「施樂」(ゼロックス)、「佳能」(キヤノン)、「樂天」(ロッテ、まぎらわしいですが音ではルオ・ティエン)、「華歌爾」(ワコール)、「百樂」(パイロット)、「養樂多」(ヤクルト)、「日波」(サンウエーブ)、「可果美」(カゴメ)など、「資生堂」「富士通」「麒麟」「味之素」「朝日新聞」などはそのまま。しごとの現場では、技能でも人格でも優れた多くの派遣社員が、ことばや生活習慣の違い、国民感情に配慮しながら業務に当たっています。

サード(THAAD)の配備いらい韓流への風圧が強まって、各地の「ロッテ」(LOTTE 楽天)が閉店に追い込まれたりしています。

前項でもみましたが、途上国主導の「グローバル化」の対応に遅れた日本企業が生き残りをかけた荒療法が、生産拠点の途上国シフトと社内リストラでした。両方ができる企業はそれを

急ぎました。

その結果として引き受けざるをえなかったのが、家庭内の日用品の百均商品化と企業内の社員の多層化でした。途上国製品の質を一気に上げえないように、正規社員化も無理にはできない相談です。

幸せなことにわが国は、素地もあつて前世紀にアジア地域でただひとつ、モノの生産での「欧米追随型の先進国化」をなしとげることができましたが、同じアジア諸国の人びとの近代化への熱い思いを理解していたとはいえませんでした。

アメリカ一極化のもとでのアメリカ市場で起こった途上国主導の「グローバル化」が、日本企業の優位性を危うくするにおよんで、それにうながされた日本企業は「サバイバル（生き残り）」をかけたの「アジア進出となり、資金、人材、ノウハウを移出して、途上国の需要に見合う日本ブランド品の生産をめざすこととなったのでした。

* 途上国日本化による日本途上国化

アメリカ一辺倒で、アジアには背を向けていた日本企業の中で、いち早くアジア進出をしていた企業は、現地で比較にならない良い人脈と体制を保持しえています。しかし出遅れて急ぎよ海外進出した多くの企業は、その結果として国内での対応が混乱し、これまでの「終身雇用」型の正社員では経営がもたなくなり、アルバイトや派遣社員で支える「日本企業の途上国化」

が急速に進むことになりました。

したがって正社員への回復は「途上国の日本化」の進捗とともにゆっくりもどさざるをえないのです。グローバル化の経緯のなかで起こるべくして起こった混乱であり、わが国の企業に現れて当然のグローバル化症候群なのです。

日常的に使う電球や電池は安くなりましたが、すぐに切れる粗悪品になりました。メーカーを見ると日本を代表する企業です。広州では、

「あの日本の索尼（SONY）がこんな製品をつくるのか」

という風評が立たざるをえなくなります。これもアジアの共生のための「日本企業の途上国化」の実態を示すものであり、「余儀なく受けざるをえない悪評」というべきものなのでしょう。

家庭内の電球は、やつと「ライト・イノベーション」（ベンチャー企業名になっている）によって、やや高ですが長持ちで安心して使える日用品になりつつあります。こうして途上国製品で我慢してきた家庭内日用品は、ひとつずつ優良な国産・地産品に戻ることになるでしょう。

高齢者が余儀なく受けざるをえなかった暮らしの停滞は、ひとつまたひとつ解消することに向かいます。

高齢者なら若い日の体験としてわかることですが、かつて日本がたどったX地点まで戻って足踏みしながらおこなうアジア共生のための「共同歩調」であり、先進国日本のなすべき責務なのです。現地で力を尽す高齢社員にとって、現地社員から「ありがとう」と率直な謝意を受

けることはしあわせなことですし、受けた謝意の半ばは、戦後に「企業戦士」として働き、会社の基礎をつくってくれた先輩に捧げるべきものでしょう。

日本の熟練技術者は、途上国の日本化のプロセスとして、途上国産の粗悪な家庭用品が「日進月歩」で質の向上をするのを、アジアの時流として「足踏み」をして待って来たのです。それゆえの「足踏み」でしたから、時をまって再開するやや高だが丈夫で長持ちする優良製品の製品化のための技術や意欲まで失うことはなかったのです。

途上国製品が安価粗悪を脱するとき

遅速はありましたが、日本企業が次々に海外進出して二〇年近くなり、この間に日本ブランドの海外製品の種類は増えつづけてきました。だからといって国内の熟練技術者の技術を越える製品が次々にできて、生活感性の高いわが国の高齢者の暮らしが快適になったわけではありませんでした。いわゆる百均用品で我慢してきたのです。

この間、日本の熟練技術者はどうしていたのかといえば、実直に赤字を背負って事業をつづけながら、途上国製の百均用品を手にして、現地生産による質の劣悪化のためにいきをつけていたにちがいないのです。自分たちがかつてたどったと同じ道をたどって、アジア途上諸国の技術者が製品をつくり、品質をあげること。それを待つてひとしきり、「足踏み」をして見守ってきたのです。「足踏み」をしてというのは、技術力を保持しながら、再び動き出す機会を待つて

いたということです。

アジア途上国産の製品が「粗悪品から中級品」に近づいたのを見届けるようにして、海外へ出た企業は役割を果たして次々に戻ってきます。技術移転がおわって現地従業員で経営が可能になれば長居をするメリットはありません。もどって少量生産による「やや高」だが「品質が安定」しており、「安心して使う」ことができる優良日用品（高級品ではない）の企画・製造・販売に取りかかることになりました。

優良日用品の先例として、今治のタオル（IMABARI）がよく引かれ有名になりました。吸水性のいい「使って気持ちが良いタオル」をとことんまで追求してえた技術結集の成果であり、「やや高だが安心して使える優良地産品」のモデルになっています。

*「足踏み」していた熟練技術者が動く

スーパーで日用品の中に「MADE IN JAPAN」を見つけると、うれしい。

国民としては技術の保持にほっとするし、滞らせていた生活感性がもどってくる実感も生まれます。日本製の下着の肌に触れる心地良さは日々の暮らしの張りにもつながります。男性なら途上国製の電動髭剃りの傍らで、チタンコートの手動髭剃りを使ってみるとよい。剃り味抜群であっばれの心地良さなのです。生活の萎縮（デフレーション）からの脱却は、こういう生活感性の小さな実感の重なりから本格化するのにちがいありません。

優れた生活感性をもつわが国の高齢者にとって、使って心地の良い「国産・地産優良品」は、企業内で窓際族といわれてきた高年社員の起死回生のアイデアから生まれるはず。

こういう優良日用品の再生と新生は、「平和団塊の世代」などのシニア・ユーズーからの要望によって動き出しています。大手家電はシニアが家電に抱いている不満を聞いて開発した新製品を売り出しました。紙オムツから車まで、「雨過天青」といった晴れやかさで技術レベルの高い国産・地産の高齢化新製品（Older Person's goods O P G）が次ぎ次ぎに現われてきます。がまんして待っていた高齢者の暮らしを豊かに快適にすることでしょう。

改めてひとことっておきますが、この高齢者による高齢者のための生産活動は、若者・女性の活動から奪って成立するものではないのです。

目 頼れる優良国産品が再登場 やや高安心の優良国産品

この一〇年余り、だれもが体験してきたことは、「家庭用品の途上国産化」でした。国も企業も国民もその時流をアジア途上国の発展のためとして受け入れてきたとあってよいでしょう。それは日本製品の対価としてもたらされた海外各地からの食品が「飽食の時代」といわれるまでにこの国の食卓を豊かにしてきたことで実感されています。スーパーの食品棚の食品には産地の名が記されていますから、日本製品や日本企業がたどりついてその住民の暮らしを豊

かにしている地先の姿が見えるのです。

そんな中であって、日本の地産食品はどうでしょうか。

ひとしきり市場で苦戦を強いられてきましたが、山梨のモモといい、青森・長野のリンゴといい、山形のサクランボといい、産地の努力がうかがえるほどに質の良さが歴然とし、価格がほどほどに収まっていれば、「やや高だけれど優良な国産・地産食品」として受け入れられます。それらはわが国のユーザーにしっかりモニターされた「優良な輸出品」候補なのです。一次産品で証明されているのですから、他の技術系の商品ではなおさらです。

生活感性の高い日本の高齢者は、「モノの途上国産化」による「生活水準の途上国化」にはがまんしながら、「やや高だけれど優良な国産・地産品」の登場を待っていたのです。

*生産現場よりも流通現場から対応

都内のデパートは、さすがに変わり身がはやい。

顧客ターゲットを若者・女性層から高齢者層に切り替えて改装をおこなったところもあります。「製品」の生産現場より顧客に近い「商品」の流通現場のほうから反応がはじまっています。

大震災のあと二〇一一年秋に幕張メッセで催された「エキスポ・スーパー65+」の展示会やイオンの「GG（グランド・ジェネレーション）」戦略などがそれですが、人生を楽しむ「グラジェネ世代」の用品要請がまだ生産現場に届いておらず、それに応えるに足る新製品が間に

合わない段階であり、時代の烽火として不可欠の事業活動として認められるものの、収益には結びつかなかったようです。

しかし注意すべきことは、ここでも「較差」と「格差」の意識が混在して動いていることにあります。

デパートの若手担当者が「高齢者の富裕層を対象にして」と口をすべらせたように、「格差」としての商品を求めていることにあります。いま求められているのは、少数の選ばれた人が用いるための高級品ではなく、途上国製品との比較において優れている「較差」であって「格差」ではないのです。

わが国の熟練生産者は、途上国産品の質の進み具合を見たうえで、その上をゆく優良品、生活感性の高いわが国の高齢者が心地よく使える優れた国産・地産品を提供しようとしているのです。流通部門がそこを間違えると企業回復を阻害することになるのです。

「みんなで豊かになる」という日本企業の基本理念はアジア全域で生きています。誇らしいことです。何度でも繰り返し返しますが、わが国が追求するものは決して高級品ではないのです。

「成熟+円熟」商品（OPPG）がGDPを拡大

「アベノミクス」（女性と若者主導の経済）が停滞し沈静化するとき、それを高齢者の生活感性を納得させる新製品による「エイジノミクス」（高齢化経済）が上支えする。そういう局面を迎

えています。

とはいっても、目前の時流である途上国主導の「グローバル化」に忙殺されてきた企業にとつては、同時に底流しているとはいえ、「高齢化」には反応しづらいにちがいません。

生活感性の高い三四〇〇万人のハイエイジ層のみなさんが、自分たちの暮らしを快適にするモノやサービスを企業側に要請する。それに技術や知識や経験をもつ企業側の熟年社員が応じて新しいモノやサービスを作り出す。これが「エイジノミクス」（高齢化経済）の原点です。いずれは「成熟＋円熟」商品（Older Person's goods OPG）がGDPを拡大することになるでしょう。企業内の窓際高年熟練社員が待望していた出番がやってきたのです。

そういう方向にいま進んでいる業界は、旅行、スポーツ・フィットネス、コンビニ、配食、百貨店、介護ロボット、ヘルスクエア、住宅・不動産、自動車、食品・外食、家具、電気製品、ペット、衣料・・・。

高齢者の暮らしのさまざまな場面に快適な「MY・・・」が次々に増えていく。肌で感じられるほどに「優良な国産品」が身のまわりに安定した存在感を示すとき、成熟力＋円熟力によるモノづくりにおける「日本高齢社会」の成立を示す姿が見えてきます。たしかに内需による持続可能なホンモノの「一億総活躍」の経済活動の展開となるのです。

そうしてはじめてアジア地域の「グローバリズム」のために「足踏み」していたわが国の各地各界の中小企業が動き出し、自社製品の新開発に挑む体勢を整えることとなります。引退し

た社友も参画して、成員みんなが愛着をもって新たな自社ブランド製品をつくって世に送り出す。高齢社会ルネサンスです。

「いい時代に生まれちゃったじゃないか」

高齢者そして高齢期にむかう人びとがそう言いあえる社会の到来です。

その成果を集めて幕張メッセを賑わすような「国際高齢化製品展示会・MAKUHARI」が催されて、外国バイヤーが集まることになるでしょう。

これを支えるのは「壮心不已（壮心にして已まず）」とする日本高齢者層の積極果敢な人生への挑戦です。これは広州でも上海でも不可能な日本がリードする「国際高齢化製品展示会・MAKUHARI」であり、世紀を独走する国際イベントとなるはずで

す。高齢化優良製品に成功した企業が増えることで、現有のグローバル化経済圏にさらに「高齢化製品経済圏」を着実に上乘せする「子ガメの上に親ガメ」といった趣きの経済活動「アベノミクス+エイジノミクス」（長寿社会経済）が展開されることになります。これが六〇〇兆円とはいわないまでも、GDPを拡大する本流の政策なのです。

この機を逃がしてしまえば、もはや巨大な赤字財政を克服してプライマリーバランスを立て直すチャンスはやってこないでしょう。日本シニアが持つ「世紀の役割」を感知できず、能力を発揮する環境を整えることなく、二〇年を延滞させてしまった政治リーダーは「君子豹変」して謝罪し、その展開のためにみずから奮い立たねばならないでしょう。

リスク回避型の経営者時代は終わり、積極的な経営姿勢を押し出して、「長寿（成長＋成熟＋円熟）社会」に対応する自社製品の一品三種化に取り組む体制をつくること。先手必勝の局面を迎えているのです。

二〇年の「高齢社会対策」の延滞を一気に取り戻す道は、今ここにのみ残されていることを知るべきです。世紀初頭の政界の世代交代の嵐のなかで見通せなかったとしても、責任は政治リーダーであった人びとにある。それは歴史の目には見えているのです。

*エイジノミクスを支える「終身・年功型」意識

一九八〇年代には「日本型マネジメントは世界一」（ジャパン・アズ・ナンバーワン）とみていた学者や海外投資家に、三〇年後には日本企業の利益率が低いのは「終身雇用のせい」とまでいわれるようになりました。

「新商品開発の遅さ、人事異動の不活性、非採算性など、みんな日本企業のもつ特殊性です」という国外のマイナス評価をうけて、アメリカ型の個人能力にインセンティブを期待する「個人主義」や社内競争による「成果主義」を導入した経営者にとっては、それは難題を次々に解くマスターキーでもあるかのように思えたのでした。

したがって給与体系も、終身・年功型給与の基本である「年齢給」や「勤続給」を縮小あるいは廃止して、能力優先の「職務給」にシフトします。新しいベンチャー企業ならいざしらず、

日立製作所までが世界企業化にむけて「ポスト型賃金」を導入しました。ついに「日本型マネジメント」の根幹に傷をつけるような変革にも着手してしまったのです。

わが国の企業風土では、成果を個人に還元する「アメリカ型の成果主義」はインセンティブとして効果を生まない、というか長くは生みつづけることはないでしょう。戦後のきびしい企業風土の中で先人が労苦して育てあげてきた「日本型マネジメント」をそうやすやすと放棄するのはいかなるものでしょうか。

家庭の、地域の、企業の、国家の根幹に据えてきた「和の絆」、日本を支えているのは働く人同士の信頼と協働です。企業活動を弱らせ、製品の輝きを失わせ、企業の社是を歪ませてしまう風潮にはつきりと異議をとなえて、まず立つのは内需型「百年企業」と推測されます。

導入してみてもアメリカ型マネジメントのもつ脆弱性に気づけば、日本企業の「終身雇用」と「年功序列」がいかに高齢化商品と高齢社会づくりに有効な「日本型マネジメント」の骨格であるかに思い及ぶはずです。いま加速している「高齢化」をモノの面から支える良質な「高齢化製品 (Older Person's goods O P G)」。その開発のために生活感性の高い熟練高齢社員を活用すること。その際には年齢差別のない「新・終身雇用制」を企業インセンティブとして捉え直すこと。「高齢化経済 (エイジノミクス)」の進展の現場では、わが国の企業に伝来の先輩に敬意を表する「終身・年功型」の気風が社内を温かくするでしょう。

「終身雇用制と呼ばれてきましたが、実際には六〇歳定年制が一般的だったですよね」

といわれれば、その通りです。

たしかに「終身雇用」といっても終身ではなかったものの長期（無期）であり、先輩から後輩へとわが社流儀を伝えながら生涯支えあう信頼と平等の絆の表現として「終身雇用」は引き継がれてきました。定年後も終身のつきあいを建て前とする「愛社意識」として保たれてきた「和の絆」の伝統なのです。それはこの国の温和な四季の風物とよく似合います。満開の桜の花の下での宴、飲み食い語り歌う無礼講や豊作を祝って舞い踊る秋祭りの饗宴は、和の絆を強靱にし、企業や社会を頑丈にし、国家に揺るぎない安定感を与えてきたのです。

先輩を敬愛する「年功序列」の太い骨組みも変わりありません。企業の将来と現役社員の幸せを思う旧友・社友会も健在です。ここで立ち上がりを期待している伝統のある「百年企業」には今もそのまま根づいており、息づいています。

ここでこれまでの旧友・社友会にもひとこと。

健康・長寿を喜び合う親睦会の意味合いはそのままとしても、わが社の技術による高齢者むけ円熟商品（Older Person's goods O P G）を議論するような、そしていい企画ならば後輩に伝えてつくらせるよう手立てを講じたり、自分たちで起業したりする社会参加は必要でしょう。同業他社に先を越されないためには急ぎ実施せねばならないことです。

入社したてのフレッシュ社員は、企業の骨格を支えて製品を育ててくれている先輩社員を敬愛し、中堅社員は生涯にわたって愛社の心を失うことのない社友を敬愛する。それが率直に表

わされることが「終身雇用」の安心感となり、「年功序列」として先輩への信頼となり、後輩への親愛となり「和の絆」として企業の安定感となり、しごとへのインセンティブとなる。これがユーザーへ最良の製品を提供する日本企業の「社是」の根幹であり、それが国の骨格と企業の品格を支えている「日本型マネジメント」による生産活動なのではないでしょうか。

「S W I T型会議」が新日本型マネジメント

ここはスウェット (sweat 汗をかくきつい仕事) ではなく「スウィット」(swit) です。シニア (Senior) 社員、女性 (Women) 社員、IT (Information Technology) 社員による新製品開発のための合同会議が「S W I T (スウィット) 会議」です。

現有の主要製品のラインを確保しながら、新企画の製品を開発するための拠点のひとつ、それが「IT製品開発」部門と「女性製品開発」部門に、さらに「高年化製品開発」部門の三部門によって構成するのが「S W I T (スウィット) 会議」です。それぞれが競って新製品開発での成果を期する布陣をかまえた上で、さらに家庭内の暮らしを多彩にあるいはコーディネーターする一品三種の新製品の開発が三者が加わって検討されます。

ここにひとつの「新日本型マネジメント」の生き生きした現場が登場します。

それぞれ生活者として異なった立場からの多角的な検討を、新製品開発の場で三者がとことん加えるという社内協議の体制ができた「日本型企业」が、家庭向けにコーディネーターされた

最強の商品開発力を発揮します。協議の結果として、個人の成果にインセンティブを置くアメリカ型の改革に動いた企業に圧倒的に勝利する新製品を登場させることになるでしょう。

生産者側のマーケット・リサーチと利己的判断に基づいて製品化するという現在の「グローバル・スタンダード」（国際標準）を超えて、わが社の利とともに、それにも増して消費者の家庭の益を思う「モノづくりの志」が製品として明確に表現される日本製品。「和の絆」がおのずから製品化に発露されるその生産活動が「ヒューマン・スタンダード」（全人標準）に最も近くにあるということをも、「S W I T型会議」のプロセスを通じた製品が示すことになるでしょう。

*「和の絆」（愛社意識）を製品に組み込む

「S W I T会議」の成果としての製品によって、モノを丁寧扱いヒトを優しく思う品性としての「和の絆」（愛社意識）を組み込んだ日本型企業の国際的先導性が明らかにされるでしょう。高齢者のデジタル・デバイドは会議でのIT社員との論議が解消に有効に働くこととなります。業種にもよりますが、日本の風土が潜めている温和さと暮らしの伝承に培われた繊細さを取り込み、若年・女性・高年に受け入れられる「一品多種の新製品」の成果を実感できるまでには、生活者としての三者の熱い議論が必要です。その結実として、家族みんなのための最良のコーディネート製品が生まれてこないわけがありません。

比較的に適応性のある業種は、世代間でライフ・スタイルが異なるとされる分野です。アパ

レル、化粧品、音響機器、住宅・家具、食品・料理、流通・広告、情報メディア・出版、スポーツ・レジャー、観光・などが考えられます。

たとえば「ウェアラブル」（着られるもの）なども、ITを内蔵した「IT＋女性」によるファッション性が先行していますが、それとともにIT補助機能を内蔵する高年者向けウェアラブルに市場性があり、シニアと女性とIT社員代表による「SWIT会議」での企画テーマとなります。

さらにたとえば、家電企業が「家族化」をテーマとし、家庭内ネットワークを形成する「ホーム・ネット家電」という融合概念をもつ新製品開発を進めるに際しては、想像力ゆたかな社員を集めて「SWIT会議」を立ち上げて、三者のアイデアを取り込む家族的会議で製品の検討に入ることになれば、これまでゲームやコンテンツ（映画や音楽などのソフト）事業を中心に若者をターゲットにしてきた企業ばかりか、市場をも刺激することになります。

家族一人ひとりの衣装の趣向、多様化する食と調味や栄養のバランス、住表現の多種多様な・それぞれお互いの立場からの「多重標準」のありようを認めたいうえで、一つひとついねいに製品化されることになります。嗜好や指向の違いが際立ちながらもみんなが納得して家庭内用品として楽しんで利用できる製品とするには、「SWIT型会議」でのみんなの納得が前提となります。

家庭内にコーディネートされた住空間が次第に形づくられる。新製品開発の場で、さまざま

な視点と知識と経験がない交ぜになって展開する「SWIT会議」から最良の家庭用品が生まれる。こうした会議は、日本企業の「新家族主義」への可能性を蔵しています。

未知の領域に挑む「IT製品」と、日本社会を質的に多彩に変える「女性向け製品」と、経験を裏打ちにした完成度の高い「高年化製品」を開発する部門の社員が合議する場合は、職場に穏和なふんいきを醸成する核として機能します。開発された新製品は、外国企業から畏れられる存在になるでしょう。個人の力を生かしながら個人の成果に片寄らず、日本型企業ならではの企画・製造・販売の検討を経た製品だからです。

企業現場への高年者をふくむ「新・家族主義」の導入、これが終身雇用を基本としてもつ日本型中小企業の来歴を活かした社内改革としての本筋です。

現有の活動を支える中年パワーと合わせて、「IT青年」「女性」「高年」という三つの社内パワーが製品開発の現場で凝集して発揮される。こういう社員によって企業は守られ家庭生活は豊かになり国家は潤うのです。

そうして「成熟した日本社会」（三世代同型社会）の形成に立ち向かう「日本型企业」内でのヒューマン・スタンダード（全人標準）の表現としての姿が見えてきます。そうして生まれた技術力の高い「国産優良品」は、さらに日本の家族にモニターされて、「MADE IN JAPANの優良品」として輸出されて、海外で苦闘しているグローバル企業を支えて、世紀初頭の「第三の立国開化」は軌道に乗ることになります。

Ⅲ 「新地産ブランド品」で全国制覇

「地域特性」が息づくまち

「奪うよりは与え合う」というのが、古来からこの国で暮らす人びとのもつ良き伝統でした。貧しいときは貧しいなりに、豊かになれば豊かさをお互いに分け合う。日ごろ付き合いのある隣近所だけではなく、地域（生活圏）で暮らしに必要なモノや場の「横並びの平等」が、先の大戦の惨禍のあと、生残った人びとによる復興事業の基本となってきました。だから地方のどこにいても安心して地元の事業に精を出すことができたのでした。

この意味では国のしごとに関わってきた有能な国家官僚の半世紀にわたる事業分配のみごとな業績といえます。

ですから列車の窓から見ても、駅の周辺以外はどこと違って際立たないような街並みが形成されてきたのでした。これはまた地方議員の「モノ」の配分におけるみごとな平等主義の実現でもあります。

こういう長い期間での経緯を評価することなしに、「国が事業を独占している」と批判するのでは、官僚が善意で積み重ねてきた「みんなが平等に」という国是の実現を無視することになってしまふ。

その証として、小さな町でも隣の大きな市に劣らず、横並びの「基本課題」を共通して持つ

ており、それを担当する同じ名前の課係があり、職員がおり、そして地域に等しく予算と事業を配分することを主なしごととする地元選出の議員がいました。

こうして進められてきた「均衡ある国土の発展」がほぼ達成されたところで九割中流がいわれて、その後に「個性ある地域の発展へ」という骨太の政策転換が登場しました。

ここでの「くへ」は、AからBへの転換ではなく、Aの上に重ねてBへの転換です。均衡を確保した上での特性ある地域の展開、これが国土開発政策における「多重構造」です。単純に間違えるとまちづくりではなくまちこわしになってしまいます。

当然のこと、国が主導する「均衡ある国土の発展」はこれからも基本政策として継続するのですから、自治体は新しいまちづくり事業を展開するからといって、せっかちに従来の課係を解消するような拙速な変更は避けなければなりません。そんな改革を急ぐと職員も住民も混乱してしまふ。新旧ふたつの課題をうまくつないで対応する新たな課をつくり、多重性を理解できる職員を配置すること。従来の課係をなくすのではなく、重ねて新しい地域課題を担当する部署を構成し、柔軟に対応できる職員を配置することになります。

みなさんの自治体はいかがですか。

住民の新たな課題を受け入れる窓口業務がうまく機能していますか。

多くの自治体で「個性ある地域の発展」へむかって活動しているのが、「まちづくり推進課」「子育て支援課」「高齢者支援（高齢社会対策）課」「伝統産業育成課」などです。そのほかに

二課を合わせた部課、たとえば「健康福祉課」（福祉優先の「福祉健康課」よりも住民の健康への意識が進んでいる）、「産業観光課」（観光と産業とをつなぐ）「スポーツ生涯学習課」（知能と技能を分けない）などが内容を調整しながら活動を推し進めています。

これまで住んでいる地域との関係が薄かった人は、こういう新しい課系の窓口をたずねてみることをおすすめしたい。自治体はそれを用意して「参加」（地域資産の活用）を待っているのですから。保持している技術や知識を活かせる地域活動（生きがい）に出合えるでしょう。

「地域包括支援センター」と「シルバー人材センター」は、これまでも地域住民の健康、生活の安定、しごとづくりを支援をする公的機関として機能してきましたが、いま多数の高齢者の本格的な参加によって、実が入る時期を迎えています。

そしてもうひとつ、やや遅ればせながら、まちづくりの人材養成機関として、「生涯学習センター」が設けられて、高齢期の暮らしに必要な知識、技術、生涯の友人を得られるような機能の充実が図られるでしょう。

ここで整理しますと、自治体による共助のしくみとしての「地域包括支援センター」と「生涯学習センター」と「シルバー人材センター」が、それぞれ住民の「体・志・行」とかかわって要請に応えられるかどうか、問われることになります。

民間団体である「社会福祉協議会」は、官民協働の活動が多くなり、自治体と住民に付かず離れずの関係を保ってきました。官民の関係のありようによって自治体からの人材が社協の活

動のために経験を活かしてしごとをしています。社協は二万法人あるそうですが、これから「地域支援構想」の生活支援コーディネーターや協議体の編成にあたって高齢者住民とどう関われるかで自治体の活動の成果に違いが生じてくる重要な時期を迎えています。

＊地域のみんなでつくる「新地域特産品」

「地域特性が息づくまち」をつくり出すには、まずみんなで手分けをして「地域の特性」を掘り起こす作業が求められます。これまでのように周辺の地域との横並びの「均衡」を基盤としながら、その上に周辺の地域にない「わが町の特性」を活かした横比べのまちづくりをめざすこととなります。地道に特性を探し出す活動と活かす活動が積み重ねられる。そういう「まちづくり」事業がいま全国の自治体で競われているのです。

ですから一般的にいえば、住民が保持している知識・技術・経験・人脈・資産は「地域資産」として活かすこととなります。その上で、全国制覇をめざした地域特性比べがはじまっているのです。

これまで内閣府が進めてきた「中心市街地活性化」の基本計画には、横比べの「特性あるまちづくり」が掲げられています。それぞれの地域住民が練り上げてきた計画を活かした「特性のあるまち」が遠からず競いあいながら姿を現すに違いありません。

ほんの一部ですが、参考のためにようすを見てみましょう。

城下町では「街なか回遊」（彦根市）・「回廊」（会津若松市）、港町では「みなとみらい21・OLD&NEW」（横浜市）・「港町スクエア」（気仙沼市）・「海DO戦略」（下関市）、そして「まると博物館」（有田町）、「都市型高感度市街地」（宝塚市）・「体感スポット点在のまち」（久留米市）、「フアッション・ジュエリー都市」（甲府市）・「リ・ガラスのまち」（水俣市）、「こみせ・まちづくり」（黒石市）・「詩情公園都市」（小諸市）・「市（いち）の復権」（市原市）、「まちなかづくり」（臼杵市）・「へそのまちのへそづくり」（富良野町）・・・。

もちろんどこも街並みの整備、歩きやすい環境づくり、いこいの場の設置、観光資源や歴史資源の活用、イベントなどにも特性を活かしたまちづくりが企図されています。

地域活性化の場に、地元高齢者の経験と知識を取り入れながら実施する事例に事欠きません。潜在する知識・技術の宝庫ですから。

先駆的な事例として、富士市の「まちなかカート」がよく取り上げられています。環境未来都市（平成一九年二月）構想に指定されている「コンパクトシティ」富士市は、またOECの「ケーススタディ都市」にも選定されています。「高齢者参加」での展開が「歩いて暮らせるまちづくり」への成果として一歩進んで具体化されています。

富士市のようなまちへ移住して高齢期を過ごすというのも人生選択のひとつかもしれませんが、アクション・リサーチの手法を活かして、富士市のような先駆的な事例に学んで「わがまちづくり」をすすめるほうに積極的なエイジング都市の成果が想定されます。

全国版「地産ブランド品」を競い合う

全国制覇というのを思われますか。

まずは来年第一〇〇回を迎える甲子園球場での夏の「全国高校野球大会」でしょうか。全国四〇〇〇余校が参加した地方大会を勝ちあがって甲子園で全国優勝の覇を競う。

いま身近な実例としては、各地の「ご当地」ものがあります。「ご当地グルメ」や「ご当地キヤラ」や「御当地ソング」がよく話題になります。「ご当地グルメ」は地産品を素材にして、地域農業の「六次産業化」をすすめながら発展させているもので、競えば競うほど地域特性が磨かれることとなります。「全国ご当地グルメ祭」が開かれていて、いまや年中行事になっており、勝ち抜けば新たな全国版の「新・地域ブランド品」の誕生となります。

食のほかにも環境に関する「エコ・ライフ」や「スロー・ライフ」による地域特有の活動や居場所づくり。それに「ホタルの里」や菜の花・レンゲ・コスモスといった「花の里」、「和紙の里」といった各種の伝統地産品の里づくり。そして地元の素材と意匠による焼き物・織物の再生。和太鼓・歌舞伎・踊りなどの伝統文化・芸能の復活。民俗・お国ことばの保存と伝承など「地域特性」を活かした活動の成果が、暗いニュースの多いなかに割って入って、地域の明るいニュースとして紹介されています。

千葉県外房の夷隅地域にあって廃線寸前だった「いすみ鉄道」が、いまや人気路線になって

いるのは、他地域にはないあるいは失ってしまった特徴を掘り起こした地元の人びとの「急中生智」の成果であるといえるでしょう。

これまでの全国版「地産ブランド品」といえば、お中元やお歳暮の贈答商品として、JP（日本郵便）のリストなどでも紹介されてご存じのとおり。地域で生まれて国を代表する商品になった製品です。地域名のついた伝統製品は、いまでも地域の人びとの並み並みならぬ努力のたまものとして持続しているのです。

*「農業六次化」とご当地グルメ

いまや、これまでの全国版「地産ブランド品」もおちおちしていきたくないのです。そこで地元では伝統を守りながら新たなアイデアを活かした新製品の制作に挑んでいるのです。

みなさんに親しい全国版「地産ブランド品」の例を少しあげてみましょう。

北から南へ。アイヌ民芸品、石狩鍋、松前漬、津軽塗、津軽こぎん、南部鉄器、三陸わかめ、鳴子こけし、仙台たんす、曲げわっぱ、秋田八丈、紅花染、米沢織物、会津漆器、相馬焼、喜多方ラーメン、笠間焼、結城つむぎ、益子焼、日光彫、鹿沼土、桐生銘仙、藤岡瓦、川口鋳物、草加煎餅、秩父銘仙、狭山茶、房州うちわ、黄八丈、鎌倉彫、小千谷紬、富山家庭薬、加賀友禅、九谷焼、輪島塗、越前竹人形、越前がに、山梨ワイン、信州そば、野沢菜、岐阜提灯、静岡茶、安倍川餅、瀬戸焼、伊勢海老、松阪牛、彦根仏壇、西陣織、京友禅、丹後ちりめん、清

水焼、宇治茶、堺緞通、灘清酒、奈良漬、三輪そうめん、紀州みかん、鳥取梨、出雲石灯籠、備前焼、吉備団子、備後表、広島かき、萩焼、赤間硯、阿波鏡台、讃岐うどん、今治タオル、伊予柑、土佐鯉節、博多人形、久留米がすり、八女茶、有田焼、伊万里焼、長崎カステラ、球磨焼酎、豊後表、宮崎はにわ人形、薩摩揚げ、桜島大根、大島紬、芭蕉布、沖縄泡盛・・・。

八〇点余を上げましたが、まだまだあります。名だたる地域特産のブランド保持のためには、地元の職人や企業のたゆまぬ努力とともに、なによりそれを支える地元住民の関心と支援を必要としているのです。ふるさと納税の返礼品として人気のものも多くあります。

その上にいま新たな特産品づくりが全国で展開されているのです。

どこのどんなものが全国征覇にむけて勝ちあがってくるのか。ものによっては最初から世界制覇をめざしたイメージですすんでいるものもあります。日本中小企業の国際化戦略です。これまでの欧米ばかりではなく、アジア、アフリカ、南アメリカの民衆の暮らしの場を意識することに新しい契機があります。

すべての住民が参加して「地域特性」を掘り起こす地道な試行から、多くの「地域特性を活かした製品」が生まれるでしょう。一人の傑出した技能をもつ職人が案出して、みんなで協力して展開することもあるでしょうが、いずれにせよ、それらはシニア世代の成熟・円熟した知識・技術を活かすことで、「地域生活圏」を高齢者の暮らしに見合った姿にかえる道に重なることとなります。高齢者の持つ知識、技術を活かす現場はいくらでもあるのです。

地域で暮らす高齢者が生涯にわたって便利して使える生活用品を自分たちの力でつくり出す。そういうさまざまな地産品がまちの展示会で知られ品評会で競われて評判になる。地元や周辺地域での人気が際立つようになれば、それは「新・地産ブランド品」誕生のチャンスとなります。優れたものは国内の姉妹都市や海外の友好都市を通じて広く高齢者にも受け入れられることになれば、MADE IN JAPAN の有力な輸出品になるに違いありません。

三世代の意欲的企画の合流点

ここでの主題は「世代交代」ではなく「世代交流」です。

天皇の生前譲位の課題も「摂政」（世代交流）型ではなく譲位（世代交代）論が優勢です。今世紀にはいつての「高齢化」にかんする議論もまた、「世代交流」より「世代交代」を主軸にしてすすめられてきました。

ご記憶にもあるように、今世紀にはいつて政界の「世代交代」の大合唱はすさまじいものでした。「世代交代」の大合唱によって、静かに実績をあげてきた高齢政治家まで排除されて、「小泉チルドレン」や「小沢ガールズ」が国会に呼集されて若返りはしたものの、国政の場に四人にひとりに達した高齢世代の代表が少なくなりすぎるといふ結果を生じています。

二世議員や親族議員が増えることで経験の継続（世代交流）が図られるといえるのでしょうか。それは他の分野にも波及して、組織内での高齢熟練者から次世代への知識・技術の伝承と

いう「世代交流」をむずかしくしています。

内閣府主催で毎年開かれている「高齢社会フォーラム in 東京」も、これまでは高齢者による高齢者のための「高齢社会フォーラム」の感がありました。平成二六年度のフォーラムからは「多世代からみたシニアの意識改革」とか「シニアと多世代がつながるために（ICTの活用）」といった分科会が設けられて、世代をつなぐことでみんなが協力して「長寿社会」への契機をつくろうという意図がうかがえます。

そこではこんなシニア像が指摘されました。

「嫌われシニア」「愛されシニア」「孤独なシニア」「アクティブ・シニア」「プラチナ・シニア」「良いシニア」と「困ったシニア」「悪ガキシニア」・などです。

「嫌われシニア」や「困ったシニア」の特徴は、差別をする、空気が読めない、自分のことばかりいうなど。一方の「愛されシニア」や「良いシニア」は、潔い、自他がわかる、甘えさせられる、など。「甘えさせてくれる」には苦笑してしまいますが。

「プラチナ・シニア」は強く輝いている高齢者で、品格があり、明るい。

思いのほか「悪ガキシニア」の評判がいいのは、意識しておいていいでしょう。

地域での世代間の出会いの場といえ、地域の「老人クラブ」と「子ども会」の間での地縁的な交流が知られるていどです。「全老連」（全国老人クラブ連合会）がおこなってきた「地域を豊かにする活動」（旅行や将棋など）がそれで、「伝承活動」や「世代交流」はいま組織をあげ

ての活動の柱になっています。余力をもつクラブは、地域文化や芸能・民芸や手工芸、郷土史などを子どもたちに伝承しています。クラブの若手会員による独自の活動も見られます。しかしその影響の範囲はこれまでの活動の延長であって、大多数の地域の元気シニアの自発的な交流活動が胎動しているとはいえません。

*「三世代ふれあい館」なんていいね

円熟期の高齢者のエイジングと成長期の青少年のエイジングは、同じエリアで重なって進行しているのですから、「世代交流」はそのまま地域活性化の課題なのです。

子どもたちが当面している問題は、どこの地域でもこれまでの「老人クラブ」と「子ども会」の間だけでは担いきれないほど山積しており、同じエリアで暮らしている高齢者のみなさんが「地域生活圏」での日常活動のひとつとして、次世代とどう「世代交流」の場をつくり実現していくかが問われているのです。

高連協の提案事業のひとつである「世代間交流」は、NPO日本世代間交流協会が江戸川区の実践を事例としながらひとつのモデルを提案しようとしています。

大都市近郊でのベッドタウンでの事例としては、千葉県柏市での活動があげられます。

柏市と東大高齢社会総合研究機構とUR都市機構との協働で、ここをベッドタウンとしてきた高齢世代が、保持している知識や技術を活かしてさまざまな就労の場をつくり出しています。

海外勤務の多かった商社マンが子どもたちに生きた英語を教えたり、技術者が理科系の知識や技術の伝授に一役かっています。無理のない次世代育成の場をつくるとともに高齢者の就労の機会をつくりだしています。柏市型の活動は大都市近郊ではさまざまな分野で広く展開が可能であり、お互いの成果を分け合って「世代交流」ネット形成への展開が想定されます。

もう一歩進んだ形の「三世代交流」はどうか。

そのためには高齢者がモノづくり、文化、趣味などのテーマをもって自主参加する「地域三世代会議」といったしくみの設立が必要になるでしょう。そこから分野別・世代別の要望を知って実現するための「三世代会議」が、高齢世代の主導で立ち上がり、その先には常設の施設「三世代会館」が、将来はどこの自治体にも設置されて、「まちづくり」の拠点として機能することになるでしょう。

すでに「三世代交流館」（大洲市）や「三世代ふれあい館」（土岐市）など「三世代会館」を称する先駆的ネーミングや活動もみられますが、三世代の代表者がそれぞれを代表して交流し、合議する場として「三世代会議」が運営できるようになれば、それぞれの立場をお互いに理解しあい、「世代交代」ではなく「世代交流」による支援と実践が可能になります。合同の集会や文化事業の拠点として有効に機能するでしょう。

とくにエイジングをとにもする青少年と高齢者がそれぞれに要請する「モノ」や「サービス」が明らかになることで、持続可能性のある事業が成り立つこととなります。

第四章 まちづくりオリジナル

1 ひとときを憩う中心街

夜はコンビニの明かりが頼り

スーパーの明かりが消えて、パチンコ屋の営業が終わって、最終電車が着いて駅舎に人が動かなくなったあと、なお明かりがともる二四時間営業の「セブンイレブン」や「ファミリーマート」や「ローソン」といったコンビニは、頼りになる生活支援の拠点になっています。やや親しみに欠ける警察分署や頼りがいのない宿直員だけの役所よりはずっと。

あなたの住むまちも、いまやどのまちでも見られる風景といえるでしょう。

それでもわがまちのありようとしてはどこかへむかう途中の姿だと思っています。

駅に人が溢れ、明日へのあいさつが飛び交い、駅につづく商店街がにぎわっていたころがなつかしい。何より明日への期待と安心感がありました。

移動がクルマ中心になるとともに、日用品が国産から安価な途上国製品になるという「マイカー＋グローバル化」がすすんで町の郊外にいくつものスーパーができて、駐車場のある途上国産の廉価品を扱うスーパーに客を奪われて、長く住民に親しまれてきた国産・地産の優良品を扱う商店街は求心力を失っていきました。

生活感性の高い中・高年者は粗悪品で我慢することになったのですが、とって日用品に途

切れが生じたわけではなく、ふつうに使えて安ければそれで我慢はできる。なんといっても敗戦後の貧しさを知っている高年者は我慢強いからです。

それがアジアで先行して豊かになったわれわれに、遅れていたアジアの民衆の暮らしが追いつくプロセスであると思えば、文句はあるが我慢ができるのです。

貿易不均衡によるアメリカでの日本製品たたき（アメリカで日本車が壊されたり燃やされたりした情景はショックだった）があつて、日米構造協議があつて、「大規模小売店舗法」の改正（一九九一年）からはじまった「まちこわし」（商店街の閉店・シャッター通り化）は、アメリカ製品の流入より日本ブランドの途上国製品を扱うスーパーの安売り競争で極まっています。

商店街をまるごと取り込んでしまうような大型ショッピングセンターやモールまで登場。あえぎながらも営業をつづける旧来の商店街・流通網では守るにも攻めるにも手立てはないように見えます。だがスーパー商法は、いざれ生活感性が高く優れた日用品を選んで求める消費者から見放され、行き着く先は見えています。あのマックが赤字になって二四時間だった明かりを消し、コンビニが出来たり消えたりし、同時にからだに感じられる程の微震ですが、確実に地産品によって旧商店街が動き出しているからです。

＊商店街は「モノと暮らしの情報源」

小売店のピークは一九八二年だったといえます。そのころは全国に一七二万店、商店街は一

万四〇〇〇カ所あったといひます。

商店街や商店の数もそうですが、街には人をひきつける活気と魅力があつて、商品ばかりか人生の先達があちこちにおいて、元氣も暮らしの知識もそして割引もしてもらえたのです。

歩行型の住民にとって「モノと暮らしの情報源」であつた中心街の崩壊が、この二〇〇三〇年で住民から何を奪ひ、何をもたらしたのかはみんなが体験しています。そして二〇〇三〇年後に何が必要であり何を回復すべきであるかの帰り道もおよそ。

再生への努力はさまざまに試みられていますが、後継者のことまでを考慮にいれると、なお頑張つて営業をつづけている江戸創業の老舗といへども猶予はない状態がつづいています。

明らかな「構造の問題」でしたから、商店主の努力では太刀打ちできなかつたのです。

まず細々と商いをしていた小売店で儲けが出なくなり、投資ができなくなり、将来に魅力を失つて後継者がいなくなりました。それでも原因は商店主の才覚の有無に封じこめられて、商店主は煤を払つた神棚にむかつて、何代目として創業の先人に不明をわびながら店を閉じたのです。

江戸時代以来の日本社会を支えてきた流通の骨組みがこわされたのです。

マイカーが増え、じわりじわりと鉄道客やバス客が減りつづけ、商店の店じまいの時間が早くなりました。それとともに商店街に防犯用シャツターが増えました。シャツターに絵を描いたりしましたが、街を歩く人びとへの親しさを閉ざしたのはまず商店街でした。めっきり人

通りが減り、店内で話し込むお客の姿も少なくなっていました。

「え、あの店も？」

といった話題になりながら、中心街の道筋の中心にどっしりと店を構えていた地元資本の古手商店までが消えていきました。

みなさんのまちなちもそうでしょうが、まことに惜しまれますが、もはや再生が不可能な商店も含まれています。その中には江戸期からの歴史を持ち「地域の顔」を支えていた特産品の老舗が含まれています。和紙・毛筆・べっこう・陶磁器といった工芸品の店や、呉服・家具といった伝統品を商っていた有名老舗までが次々に看板を下ろしていったのです。

地道に地方出版を手がけて、地域文化の拠点になっていた老舗書店も、大型店舗の駅前出店のあと、しばらくしてひっそり灯りを消していったのでした。

そして地方の流通を支える砦であり、地域住民に馴染みの濃かった地元資本の百貨店、たとえば宇都宮市の上野百貨店や和歌山市の丸正百貨店といった有名店舗の経営不振が伝えられるのと同様にして、M市でも地元資本の百貨店と家具店が同じころに倒産しました。市民に商品流通の変貌と優れた国産品、地産品の製造停滞を決定的に納得させることになりました。

三〇年でこうも変わるものなのか。

ではこれから三〇年でどうすればいいのでしょうか。

「歩行生活圏」と「車行生活圏」

全国のまちづくりの中に、「歩くまち」をテーマとしている都市があります。

秩父市、倉敷市、安来市などがそう。高齢社会への移行を見越して、「買い物物空間にとどまらず、心地よく歩いてすごせる時間消費型の生活圏をめざす」として、街を歩行者モール化する都市もあります。車で訪ねて行ってまちを歩いて、つまりライド・アンド・ウォークで成果を見てみよう。

「車行」と「歩行」との使い分けは生活スタイルの多重化です。

富山市ではじめた歩行補助車「富山まちなかカート」が評判になっています。高齢者が歩いて出かけるのを支援す試みとして進められ、「歩行圏コミュニティ」の実現に一役買っています。地域のまちの中心街は「歩行生活圏」として再生し、「車行生活圏」との使い分けを明解にする必要があるからです。

* 中心街に溜まり場をつくる高齢者と子ども

まちの中心の「歩行生活圏」のおもな利用者は、日課として小一時間ほどの散策に出動し、使いなれた生活小物や茶菓を購入し、店主や出会った知人と語り、人を通じて暮らしの情報源を得ている高齢者。そして日用の買い物と井戸端ならぬ道端会議をする女性たち。そして同じ「居場所」でスポーツやゲームや読書や芸能を楽しむのは子どもたちです。

「街に子どもの姿や歓声が聞こえないようなら活性化に明日はないですよ」

とM市駅前通り商店会を代表して中心市街地活性化の「基本計画」作成にも参加している上野さんは熱意をこめてそう語ります。

テーマは「街ごと四季ステージ化」です。

そこは日課としてやってくる高齢期の人びとと子どもたちがいっしょにすごせる「歩行生活圏」であり、出合いの場となります。学校や役所や市民会館や図書館ほかの公共施設や「地域包括支援センター」なども至近の距離にあります。

まちの中心街（商店街）は、高齢者同士が、そして祖父母と孫が、母と子が、そして女性同士が、安心して買い物をし、おしゃべりをし、居場所としてすごせる「世代交流のステージ（溜まり場）」なのです。

大事なテーマに子どもたちの安全な居場所づくりがあります。

たとえば野外なら遊具を固定せず子どものアイデアで変化させる児童公園（まっ白い広場づくりなど）がありますし、屋内なら「一八歳以上お断り」といった「ブック&ゲーム・子どもセンター」があります。子どもたちは好きな本を読み、絵を描き、ハイテクのメカやソフトに存分に触れながら、友だちと歓声をあげて楽しめる。そんな子どもたちのための安全な居場所づくりは、次世代を育て、まちを活性化する重要なテーマです。

こども園や小学校を終えて、塾がよいのほかに、週に何日かはこういう街なかの施設で仲間

と夢中ですごすのは、養育の過程ではたいせつな道くさなのではないでしょうか。

「三世代四季型中心街」でひとときを憩う

全国のまちづくりの中に「歳時記の感じられるまち」（長岡市）や「歩いて楽しむ街、四季が感じられる街」（盛岡市）をめざすところがあります。「わがまち」を論じる際に、そういう一歩進んだ各地の街を訪ねて歩いてみるのもいい。

まちの中心街でもある商店街の催事は、これまでは「中元」（夏）と「歳末」（冬）の二季だけでした。それに春・秋を立てて季節ごとの「四季の催事」として構成し直す。住民が季節ごとに街空間を楽しみにしてくり出し、さらに次の季節への期待を抱けるような「四季」のステージ、「季語」を先取りするような街ステージの演出に、商店街の賑わいを取り戻す契機があるといえそうです。

その演出者はいうまでもなく地元の「街元氣リーダー」（経産省の用語）である店主や高齢住民が担うことになります。もちろん町の文化人である俳人や華道の師匠をまじえて、夏冬二季型から魅力が多い春と秋を加えた四季型商店街へ。

「三世代四季型商店街、生き残りはこれですよ」

しかし商店街を元気にする立場にいる上野さんの声に元気がない。商店会としては理屈としてはわかるが、年二回でさえすぐ次がやってくるというのに「年に四度はムリ」といいます。

「ムリして二度ではなく、ムリなく四度ですよ」

地域の隅々をよく知る「地識人」の住民が加わって、「季節ごと四つのステージ」を街空間に取り込んで賑いを呼び戻すのだからといって、商店会のリーダーは首をタテに振れない。これではM市駅前通りは中心街活性化の先陣を務められそうにありません。

四季折り折りの地域の風物を取り込んだ春（三〜五月）・夏（六〜八月、中元）・秋（九〜一月）・冬（一二月〜二月、歳末・新年）を表現する季節ごとの街装飾をほどこすのにムリなかないのに。

「三世代四季型中心街（商店街）」の演出のために、わがまちの歴史・伝統、産物、風物、人物、芸能、技能といった特性ある「地域資源」に目を配り、わが中心街の演出として取り込む。こななまちづくりをわが人生と重ねる「地識丈人」なら呼びかければいくらでもいるというのに。

*季節の風物に安らいでお国ことばで語る

日常生活に必要な品々を商う店が並んでいた「商店街」の役割は何だったのでしょか。

地元住民が暮らしに必要なとする商品を頼めば必ず手にはいるユーザー優先の流通拠点であり、商品知識の豊かな店主がいる情報源でした。

そういうユーザーの要望を取り入れた新たな流通拠点が、地元生産者と商店会と商店主と高齢住民が協議して運営する「地域流通スクエア」といった形態の「みんなのためのおみせ」で

す。「モノもカオも見える」流通拠点であり、商品性の高い「地場（季節）商品」を主力商品としながら、スーパーやコンビニでは入手できない「超スーパー・コンビニ商品」を提供し、サービスで地域の人びとの要望をサポートする。商品知識の豊かな店員がいて、住民からの注文と配達を一手に引き受けてくれる。自治体、地域包括支援センターとも対応して介護者への商品の配達などもおこなう。もちろん二四時間フル営業です。

地元住民が必要とする商品情報、公共機関・施設の情報をネットでむすんだ「中心街の中心核」として、「地域流通スクエア」のような施設を成功させることができるかどうか。

そういう「情報源としてのみんなのおみせ」を組み込むことで、「商店街の求心力」をつくりだす。二四時間営業の「超（スーパー）・スーパー」機能をもつ頼りになる流通拠点が登場することになります。

ここで「歩行生活圏」の「三代四季型中心街（商店街）」のようすを画いてみましょう。

町全体が「地域の四季」をたいせつにするようになれば、その中心街には色濃く反映されまです。地産品をはじめさまざまな季節用品が集まる。街の伝統行事が公開され広報される。そして次の季節が待たれる予告のステージ、それが「三代四季型中心街（商店街）」なのです。そういう姿になれば、地産（季節）商品中心の「わが街の商店街」が「歩行生活圏」に再生されて、途上国産品中心のスーパー型「車行生活圏」と共存することになるでしょう。

「商店街って、おもしろいじゃん」

と、通りかかった無季節・無機質そだちの若者たちが言うでしょう。

「季節の風物」に安らぎながら、ふと出会った知人とひとしきり気軽に街談巷議を楽しみ、ケーキ屋のテラスで一杯のコーヒーと店自慢の自家製ケーキで手造りの味を味わい、あるいは茶を商う老舗で一服のお茶と和菓子で「甘余の味」を味わう。気軽な「和風街着」で訪れて、ひとときお国ことばで語りあい、暮らしの声や音を快く聞き、子どもたちの遊ぶ姿を見、歓声を聞き、街の臭いを胸に収めることができる街。だれもが小一時間ばかりやってきて、みんなにくつろぐ。そんな「三世代四季型中心街」なら、今日にでも行ってみたい。

□ 住み慣れた地域で暮らす

現風景に「ふるさと原風景」を重ねる

終戦から七〇年が過ぎて、戦後生まれの人びとが「七十古希」に達しました。高齢期をどこで迎えているのか。これから以後をどこでどう暮らすのか。

高度成長期に「ふるさと」を離れた人びと。都会に将来の夢と人生を求めて出て、そのまま職に就いたり、大学で学んでから就職をして、都会暮らしをし、結婚をし、次世代を育ててきて、定年を迎えた人びと。

その中には定年後もそのまま都市郊外の団地に住んで、子どもを送り出して、「高齢化する生活圏」に居つづけて、最後はひとり住まいになって「都市浮遊型の人生」で終わる人も多くい

るはず。もう十分に働いたからあとは勝手にさせてくれという「引退余生」型の人生を選択した人びと。戦後復興と繁栄に貢献した功労者の暮年が穏やかであることを祈って、後の章で別の場でまたお会いすることにします。

ここでは緊急性を増している「地域ふるさと生活圏Ⅱふるさと」のありようを論じなければならぬからです。多数派とまではいえぬものの、ふるさとに回帰して、高齢期から終末期までを過ごす「エイジング・イン・プレイス」での成果を、帰郷する人びとの高齢期人生に期待するからです。

都会でのしごとを終えて、あるいは終える前から、暮年を「ふるさと」にもどってすごそうと考えている人びとを「Uターン」型（族）、あるいはそういう「ふるさと」指向の人生をもつ人びとを「J・Iターン」型（族）と呼んでいます。どちらの人にも「ふるさとの原風景」があつて、静かに「ふるさと」（大正三年・一九一四年、一〇〇年前に作られた）を歌えば、うさぎやこぶなやなつかしい山や川は変わることなく眼の裏に浮かびます。

「♪いかにいます父母・」

となると、父母はすでになく記憶の中の存在になつていく人も多いでしょうが、あるいは大正生まれの母上がひとり、まだご健在にいるかもしれませぬ。

「ふるさとの現風景」は、この三〇年ほどのあいだに、地元に住居た人びとが求めていたものともずいぶん違う姿になつてしまつていくようです。

*Uターンする人びとの願い

この三〇年間に「ふるさと」が失ってしまったものの多いことに気づきます。

失ったものといえば——安心して歩ける小路と生垣。緑ゆたかな里山や鎮守の森。ヒバリやカエルの声。赤とんぼも。わら屋根の篤農家。商店街の活気。そして屋外で遊ぶ子どもたちの歓声や腰の曲がったお年寄りの笑顔・もちろんまだまだあります。

得たものといえば——舗装された真っ直ぐな道路、ブロック塀。メカニクな騒音。コンビニ、スーパー、駐車場。ウサギ小屋どころかハチの巣集合住宅、コンクリート造りの学校、新庁舎。マイカーとプレハブ造りのマイホーム、付き合いのない隣人・もちろんまだまだあります。

三〇年での変容。国家は地方に事業を委譲し、国家の意図や意思は政治家によって現場に示されますから、将来構想もなしに行なわれたとすれば、地方を変容させたのは「三〇年にわたる失政」ということができます。

三〇年後の二〇四〇年までに八九六自治体がなくなるというシヨッキングな予測を示して、みずからを含めての「失政」を指摘したのは「日本創成会議」（座長・増田寛也元岩手県知事）です。将来の明るい国の創成を説き、全力で走り出していた「まち・ひと・しごと創生」の仲間を激励する意味合いをこめて。

「人口減少」がその主因だといいますが、名指しでなくなるといわれた自治体は戸惑いが隠せません。「創生」や「創成」よりも何より「創政」こそが真つ先の課題ではないかと横やりがはいるところ。

目の先の「人口減少」だけで地方の未来は測れないし、暗い未来も意味しない。大都市での人生が浮遊して終わるのに対して、全国各地ではいま高齢者が参加して、泉が湧き出るように新しい生活空間が造成されているところです。

山形県川西町の「きらりよしじま」方式などがモデルにされますが、高齢期人生の活動の舞台「エイジング・イン・プレイス」は国や自治体からの要請で始まるのではなく、地域に住む個々人がみずからの人生のために始めるものです。

ふるさとに「ニシキ」を飾って帰って、しゃれた家を建てて余生気分で暮らす人もいます。ところが、地元に戻って残っていた仲間とともに「ふるさと再生」事業に加わる人もいます。後者のような気構えを持ってUターン・Jターンする人びとの発想と意欲に可能性を見出すことができます。

小島さん夫妻は戻って農業をやることを決めています。篤農家だったおじいちゃんには見るに耐えがたかった休耕田の時代も終わります。

「帰りなんいざ」の思いが現役のふたりの言動に溢れています。

「ニシキ族」より「キキョウ族」

いま、ふるさとに「ニシキ」を飾って帰って、違和感のある色や形の家を建てて、地域と融け合わない暮らしをするような人（地閉症といいます）は期待されていません。「ふるさと生活圏」をともにつくる気構えで「キキョウ（帰郷）」する人が求められている時節なのです。

五〇代初めの小島さん夫妻は、小・中学時代からの同郷です。ふるさとに終の棲家をつくるなら、高齢者専用ではなく、都会暮らしをしている子や孫がもどって来てすごせるような、あるいは孫を呼び寄せて育てられるような二世帯住宅にするつもり。

そして将来は孫たちが、かつて祖父母や父母が「エイジング・イン・プレイス」として暮らした地に、「ふるさと」として戻ってこられるような。

国交省住宅局（安心居住推進課）と厚労省が共管事業として都市内ですすめる「都市型高齢者住宅」への税制上の優遇は、「地域型高齢者住宅（ふるさと創生住宅）」でこそ活かしてほしいところです。「地域型高齢者住宅（ふるさと創生住宅）」は、とくに五〇歳代後半の高齢準備期・助走期のみなさん、小島さんのような人生選択をするUターン型の人びとへの支援として「地方創生」の柱になるからです。

一方で厚労省主導の「地域医療・介護推進法」が二〇一四年六月に成立しました。

その内容が「新地域支援構想」として、自治体の現場で二〇一五年四月から実施に移されています。三年の間に、介護支援のしくみとして地域支援コーディネーターと協議体が各自治体

に置かれて、子育て、認知症、障害者、生活保護、ニート対策などの実務が自治体に移されることになって、「助け合い」のネットづくりが競って進められることになります。

政府一体というのなら、内閣府主導の「地域創生」事業と厚労省主導の「新地域支援構想」との連携を図るべきではないでしょうか。政策が二本立てタテ割りで地域の現場においてきますから、その関係を現場である自治体も高齢者もよく理解しえていないのです。

「まちづくり」の活動主体が「国から地方へ」と移譲されていると広く理解したほうがいいでしょう。政策の中心が全国的な均衡のためではなく地域特性・地域資源を活かすことに移っているのです。活動主体が「国ではなく住民と地方自治体にある」として国が認めざるをえない世論の動向があるからです。

*新たなふるさとのための「地方創生住宅」

市町村合併のあと、どれほどの地域がどれほど元気であるかを知るためにおこなわれた調査がありました。「地域再生に関する特別世論調査」（内閣府・二〇〇五年六月）がそれで、少しい間をおいた数値ですが、その後の状況は「国から地域へ」の方向に着実に進展しているので見落とせないデータです。

ご記憶のように、市町村合併の協議は、「生活圏の広域化」や「少子高齢化」などを課題としたものでしたが、ひと段落したところで内閣府が調べたところ、自分が住む地域に「元気がな

い」と感じる人（四四％）が、「元気がある」と感じる人（三八％）を上回っていたのです。「元気がない」と答えた人は、その主な理由として「子供や若者の減少」（五九％）、「中心街にぎわいの薄れ」（五一％）、そして「地域産業の衰退」（三九％）などをあげています。いまのみなさんの実感ともそう遠くはないでしょう。

そして何にも増して内閣府がショックだったのは、活動の中心となるのが国（一八％）ではなく、住民（四八％）と地方自治体（三八％）であることがはっきりしたことでした。国の一八％というのは、もはや活動の中心が「国ではなく住民のみなさんと地方自治体です」と国がいわざるをえないほどの低率だったからです。これも地域で暮らすみなさんにあまり知られていない数値です。

増えつづける「支えられる高齢者」のための「地域包括支援センター」の充実は、同時に地域に増えつづける「支える側の高齢者」が協力して動かないでは成果などおぼつかないことがはっきりしたのでした。

PPK（ピンピンコロリ）でないかぎり、高齢者はだれでも健常期のあと、介護期、医療期、入院期、終末期のプロセスを踏んで一生を終わります。ところが、急速な高齢者増によって、だれもがこれまでのように治療を病院の外來で受け、重篤になったら入院して病院で死を迎えるという時代でなくなります。施設完結（病院）型から地域（自宅）完結型に替わらざるをえない実情がすでに目前にあるからです。

まだ「支える側」にいるうちに自主的に地域活動に参加する（互助）。これからはそういう「ふるさと回帰」をする人にとって参加しやすい環境が整うこととなります。それとともに「子ども・子育て」もまた両親と施設から、地域が助け合って次世代を育てようという転換期を迎えています。Ｕターンして父母の「ふるさと」で暮らしながら、可愛い孫を預かっているなかで育てる。都市に残った若いふたりは、もう一人産むチャンスを得ることになります。

地域の「子供や若者の減少」には「少子化」があり、「中心街のにぎわいの薄れ」には商品流通の変化があります。そして「地域産業の衰退」には大資本による系列化、グローバル化による生産拠点の海外移転といった事情がかかわっています。

そこで自治体は小ぶりでも特性を活かした地域産業を支援・振興し、「子育て」を施策のNO.1にして、みんなで安心して次世代が育つ「しくみ」をこしらえる。子どもたちが集まってくるまち。孫たちを呼び寄せるまち。こんなまちなら人口は減ることなく増えるでしょう。

同じ「ふるさと」の同じ場所で、高齢者は子どもたちとともに暮らし、情報源になる街の中心をつくり、地域産業を起こす原動力になればいい。都会から地域へという「ふるさと生活圏」への人の動きが、新たな地域を創生する原動力になります。地域問題は人口減少ではなく、高齢者の実人生にかかわる参加選択の問題でもあるのです。

なんといっても国民の四人にひとりが高齢者なのですから。

横並びの均衡、横比べの特性

新幹線の座席でうとうとした後で、身を起こして窓から外を見る。

「ん？ いま、どこさ走ってるん？」

流れ去ってゆく風景からでは、どこを走っているのかがわかりません。

外国での話ならともかく、わが国の国内での話。新幹線を利用した人ならだれもが経験していることなのです。次々に展開する畑も野山も家並みも、変化はするのですが、どこも同じような風景なのです。広告はどれもTVでおなじみの大企業のものばかり。

「ここはR町 △△が特産」といった程度の看板くらいは車窓から見える風景の中に立っていてもよさそうですが、地方特性（特産）が立ち上がっていないのです。「地方の時代」といわれずいぶん経つというのに、とまづはそう思っています。

無理からぬことですが、それは見方の違いによるのであって、いずれの地も凸もさせず凹もさせずに、「富を等しく分かち合いながら、ともに豊かになる」という、先の大戦後にわが国の先人が選んで目標としてきた「日本的よき均等性」の成果なのではないでしょうか。

「豊かになれる者からなれ」

とはせず、個人差や地域差をなくして、等しく成果を分かち合おうと務めてきた善意の人の
とによる積年の成果なのです。

その意味でなら、これまでも「地方の時代」だったといえるでしょう。

都会優先、東京一極集中という風潮の中で、どの地域も優れた人材を都市に提供しながら、地元に残った人びとは、「モノと場の平等な豊かさ」のためにたゆまず努力をしてきたのです。みんなが等しく貧しかった時代、のちに企業城下町ができるほどに、若者たちは地方から都市へと向かったのです。地元に残って貧しさや不便にも耐えながら辛苦した人びとがいまいました。いまはその姿は遠くなって定かではありませんが、地元のために尽くした先人の努力を無視・軽視しては、現状の公平な豊かさに対する理解の公平さを欠くことになってしまふ。合併前の旧市町村長室には、歴代の首長の写真が、だれもが充足したい顔をして、かかっています。並んだ先人に見下ろされて現役首長はしごとにはげんだのです。

*「国土の均衡」に「地方の特性」を上乗せ

新幹線を利用しながらこう語るのはいへん失礼になりますが、
「善く行くものは轍迹なし」（『老子』から）

という先哲のことばに耳を傾けたい。耳からだど、「よく」が善であり「てっせき」がわだちの跡であることには説明がいるでしょう。各地の首長の営為が執務室の写真一枚にわずかに許されたその誇るべき証なのです。

すべての業績を周囲の人びとに振り分けて、みずからは轍の跡を残さずに去っていくことに努めた善意の人びとの姿を忘れ去るわけにはいきません。

だれもが等しく富を享受するために先人が選んで始まった「国土の均衡ある発展」という政策が、時を経て「横並びの安心感」による自意識の欠如となり、推進力を失っている。ここでも成果主義といった個人の目先の競争誘因を取り込まねばならない転機を迎えようとしているのです。

そんなことをしたら地域の基盤があぶない。そこで、その危機感の表現として政府が掲げたのが、「国土の均衡ある発展」から「地域の特性ある発展」へという「骨太の方針」でした。ここで注意すべきことは、「くからくへ」というのは「くを転換して」ではなく、「くに多重化して」「くの上に重ねて」と理解することです。

「特性」ある発展だからといって、「均衡」を一八〇度転換するのではなく、これまで国がリードしてきた「横並びの均等化」によって得た現況に、さらに地元の発想で「特性の多重化」をおこなって、地域の活力を呼び起こそうということです。

国家が支えつづける基盤としての「均衡」の上に地域が掘り起こした「特性」を重ねる。そう理解しなければ先人が善意で積み重ねてきた「みんなが平等に」という営為をまるごと無視することになってしまうことになります。

「地域に根ざした暮らしの知恵がどこの地方にもあるはずなのだが」

と思いつながら、新幹線の客は、どこかわからないまま車窓から目を戻す。前方の出入り口の上の小さな空間をニュースが流れ、「あと三分でN・・」というお知らせが流れました。

わがまち独自の「地域助け合い」

高齢期を地域で暮らしている人びとには、経歴に三つの特徴があります。

まずは地元の新制中学校を終えて、仲間が次々に町外へ出て行ったあとも、生まれ育ったふるさとに残って、地域の物産や伝統行事を守り、次世代を育ててきた人びと。次に述べる新住民とのかかわりで旧住民（Q字型）と呼ばれる寡黙な多数派の人びとです。

次がふるさとを離れて都会に出てさまざまな活動・事業をしたあと、高齢期（エイジング期）から終末期（エンディング期）までを、ふたたびふるさとに戻って過ごすUターン住民（U字型）の人びと。

そして魅力のある町には、これまで関係を持たなかった人びとが都会から離れて高齢期を過ごすためにやってきます。こういう人びとを新住民（J字型・I字型）と呼びます。

こういうQ・U・J・I型の異なった経歴と能力と生活感を持つ人びとが、国の骨太の方針が「均衡ある国土の発展」から「特性ある地域の発展」に移ろうとする時期に、各地でいっしょに暮らしています。旧住民を除けば、同じ生活圏で暮らしながらお互いに関係をもたずに過ごしています。U型の人とは時とともに商店街や地域に馴染めますが、J・I型の人びとは必要に応じて公的機関にゆき、必要に応じてスーパーやコンビニで日用品を仕入れていますから地域に馴染まずにすませています。行政も自立している新住民と旧住民の交流をはかることな

しに、ありようにまかせてきたといえるでしょう。費用が発生する医療や介護といったケアにかかわらない元気な高齢者を、行政も地域参加を呼びかけることなく軽視してきたといえるでしょう。善意に理解すれば、繁栄の時代をつくってくれた功労者として、地域で「温存」してきたということでしょうか。

J+I型の高齢住人は、地域ではお互いにそれほど関心を持たず持たれずに、功労者として過ごしていればよかったです。それぞれに蓄積してきた知識や技術や経験や人脈や資産などは、有効に活かす場もなく、そうする必要もなく、高齢期を迎えて静かに暮らしていけばよかったのです。とくに「団塊世代」のみなさんは、見定めえない長い老後のために、数による国の保障に限度を察して、みずから節約して老後のための貯蓄につとめてきたのですし、お互いに静かに質素に余生をおくればいいと思ってきたのです。

ところが、その「団塊世代」のみなさんが地域で高齢者に加わったここ数年、政府の「特性ある地域の発展」の政策に加えて「地方創生」が動き出し、「一億総活躍」がいわれ、財源不足の先を見越して自治体は「介護」の担い手として元気な高齢者の社会参画というまちづくりを進めることになりました。

各自治体が「団塊の世代」が後期高齢者に達する二〇二五年までに、高齢者による高齢者のための社会をどう安定させるかにまかせることになりました。周辺自治体との横比で「特性あるまちづくり」競争が始まったのです。さまざまな「人的地域資源」「物的地域資源」を総動

員して、みんなが住みやすいまちにするために潜在能力を提供しあうことになりました。これが「新地域支援事業」の具体化として、地域の特性を活かした「高齢社会」づくりの核になっています。

「余生」をのんびりいなかで自分だけの暮らしを考えていたJ＋I型高齢者にとっては、居心地のよくない状況の変化になるでしょう。それぞれが保持している知識、技術、資産が地域の「人的資源」として注目されているのです。お互いさまの助け合いのしくみがどう実現できるか、地域の「人的資源」を活かした「しくみ」を形成すること。それが自治体の自治力の差を生むことになるからです。

*「地域協議体」が地域活動の拠点に

二〇一五年四月から三年の間にということで、各自治体に「生活支援コーディネーター」（地域助け合い推進員、有償）が置かれました。自治体は「地域医療・介護推進法」の実施にあたって「生活支援コーディネーター」（地域助け合い推進員）を認定して、官民協働の「助け合い」活動を進めることにしているからです。遅速の差はあってもすでに動き出しています。

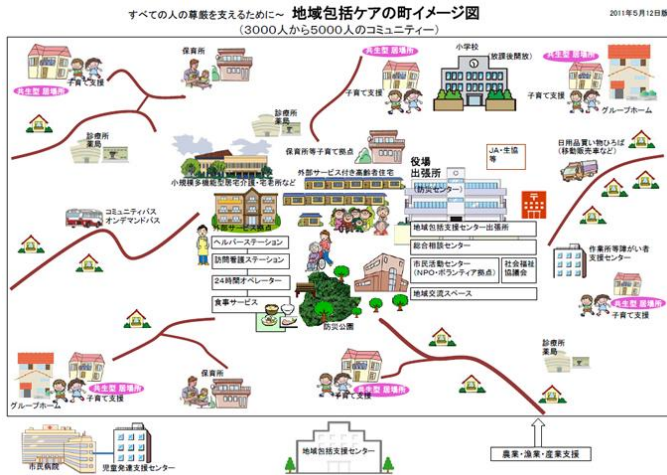
その後、「地域包括支援センター」ごと（ここまで有償）に設置され、さらにその後は地域の要望に応じて認定する（ここは無償）ことになります。

この「生活支援コーディネーター」（地域助け合い推進員）と協力して活動を支える組織が「地

域協議体」です。この「しくみ」の形成の遅速・巧拙によって、自治体間に差が生じることとなります。そこで横比への競争が始まるわけですが、実際には地域の高齢者もつ潜在力をどこまで引き出して活用できるかによって、活動の広がりには差が生じます。特性のあるわがまちの発展は、新設の「生活支援コーディネーター」(地域助け合い推進員)がもつ裁量と「地域協議体」の結束力にかかってきます。「さわやか福祉財団」は総力をつくして、この意味合いの理解を全国の自治体と地域住民に訴えています。

どこも充実させるのはこれからですが、自分が長い高齢期を過ごすことになる生活圏には、すでに「地域包括支援センター」(健康)、「シルバーク人材センター」(就労)があって、さらに「生涯学習センター」(生涯学習)のもとに第二層の「生活支援コーディネーター」(地域助け合い推進員)

が配備されて、中学校区単位での「しくみ」として「地域大学校」の創設が想定されます。どういう「しくみ」(資格・カリキュラム・修業年限など)になるかは現地の実情によりますが、高齢期の暮らしやまちづくりに必要な知識・技能を学ぶとともに生涯の友人を得ることができ



る施設になるでしょう。

就労のための「シルバー人材センター」では「地域大学校」で身につけた知識・技能を活かしたしごとを用意することになります。また「地域包括支援センター」では住民のだれもが適切な介護・医療を受けて、最後は施設（病院など）ではなく、地域や自宅で穏やかに終末のときを迎えることができるよう配慮することになります。三つのセンターの有効な機能の分担によって、「高齢化」問題は各自治体が独自の経緯によって解決していくことになるでしょう。

自治体は新設の「生活支援コーディネーター」（地域助け合い推進員）と「地域協議体」の力を活かしながら、元気な高齢者の参加意識を醸成することになります。「健康」「就労」「学習」の三つのセンターがタテ割りにならず重層的に動けるよう配慮することがたいせつになります。高齢者は他の自治体と横比べをしながら、エイジングの時期を住民として生きがいを感じながら過ごすことができるようになります。元気なうち（未病気期、フレイル以前）はさまざまな地域活動に参加して、できるかぎりの支援をする。それはいずれの日にか自分（介護）にもどってくる「共生支援」であることに間違いありません。

目 中学校区に「地域生涯大学校」を創設

明治・昭和の「大合併」では人材養成

明治と昭和のふたつの町村大合併のときには、それぞれに新しい自治体が地域発展のための

人材養成（教育）を重要な目標の一つとしたことに改めて注目したいと思います。

明治維新後の「明治の大合併」のときには、わが村の「村立尋常小学校」が合併のシンボルとされました。村立小学校は子どもたちに多くの夢を与え、地域を発展させる人材を育成しました。その夢はいっしかお国のためとなり、半世紀の後には戦争へと子どもたちを駆り立てていきましたが。三〇〇〇〜五〇〇〇戸の規模で教育（学校一校）、戸籍、徴税、土木、救済などが課題でした。七万一千四町村が三九市一万五八二〇町村に合併されました。期間は明治二一〇一八八八年〜明治二二〇一八八九年。当時創立された小学校は一〇〇年を越えており、みなさんもたぶん創立一〇〇年の伝統をもつ小学校を卒業したにちがいありません。

大戦後の「昭和の大合併」のときには、わが村の「町立新制中学校」が合併のシンボルとされました。子どもたちは新設の町立中学校を卒業すると、多くは都会へ出て行って高度成長の担い手となりました。八〇〇〇人規模で、新制中学一校、消防、保健衛生などが共通した課題でした。昭和二八〇一九五三年〜昭和三一〇一九五六年。九八六八市町村が三九七五市町村になりました。

みなさんは創立三〇年くらいのみならず立派でない木造二階建て校舎の中学校を卒業したことでしょう。その後、教育を優先する自治体は新築や改築を進めました。

さて二一世紀の新時代をめざした「平成の大合併」（一〇〇〇基礎自治体、一二万人が目標）では、新しい自治体は将来の地域を担うどんな人材育成をシンボルとしたのでしょうか。

平成の今回、国（文科省）は「少子・高齢化」への対応として、これまでの生涯学習のほかには明確な指針を示さなかったのです。平成一一―一九九九年三月にあった三二三二の六七〇市一九九四町五六八村は、平成一八―二〇〇六年三月には一八二一の七七七市八四六町一九八村に合併されました。

素朴に考えてみても、新市設立の大学校が考慮されて当然のところですよ。

明治の村立尋常小学校、昭和の町立新制中学校、そして平成の市立生涯大学校です。合併の課題の一つが「高齢化」だったので、対象は高齢者が想定されました。しかし合併協議でその旨の議論がすすめられたという報告を聞きません。

*「村立尋常小学校」と「町立新制中学校」

明治の「村立尋常小学校」と昭和の「町立新制中学校」という合併時のステップからいくと、平成の合併では、「市立の大学校」であり、それも合併協議の「少子・高齢化」に見合う意味からいって六〇歳から三〇年の長寿をえた高齢者を対象とする教育機関となるべきものでした。

このあたりのことは高齢者には必要性の実感があるのですが、現役の若手官僚にはわからないのでしよう。「市立生涯大学校」といった趣意と態様のものが中学校区単位で想定され、優れた構想力と想像力を兼ね備えている国家官僚が気づかなかつたとは考えづらいところです。

すでに各県・各市には住民から要請を受けて六〇歳以上を対象とする「地域生涯大学校」（高

高齢者大学校・シニアカレッジなど名称は多様）が開設されていて、高齢人材教育の成果をあげており、本来なら合併協議の場で、文科省と厚労省が協議した上で二省共管で地域自治体の主導において設置を検討するよう指示すべきところだったからです。

この欠落は教育史的に問われなければならないでしょう。のち懸案だった「少子化」のほうの、幼保一体化（文科省管轄の幼稚園と厚労省管轄の保育園）による「認定こども園」が実現したように、高齢者にたいする生涯教育でも両省の定番だったのです。

ここでの使い分けからすると、生涯学習は年齢にかかわりがない「長寿社会」のための「生涯学習センター」があり、「市立生涯大学校」は高齢化時代の「地域高齢社会」のための高齢人材養成機関（対象は六〇歳代が中心）として設立されてよかったです。

まことに残念だったのは、平成の市町村合併の先駆を担った地方の自治体にはそういう構想がなかったことです。そして文科省にそういう高齢人材養成を推進する部署や機関を新設するまでの強い意向がなかったことです。

なかったというのほもちろん言い過ぎでしょう。

あったけれども、省としての意向にならなかったと言うべきでしょう。実際に文科省には当時、高齢者教育を担当する部署はありませんでした。高齢者教育は健康福祉にかかわる厚労省に任せられたまま合併協議は経過していきました。

歴史は過酷です。日本の官僚機構が、増えつつける高齢者に高齢者意識を醸成し自らの長い

高齢期人生を切り開く知識と技術を養成する「しくみ」の議論を、合併議論の課題としなかった結果の露呈は、もうすぐ目前に迫っているのです。

わが国は、二〇年前に、新世紀のこの国の姿として、

「長寿をすべての国民が喜びの中で迎え、高齢者が安心して暮らすことのできる社会の形成」
（「高齢社会対策基本法」前文）を掲げ、

「二十一世紀初頭の本格的な高齢社会を目前に控え、国民の一人一人が長生きして良かったと実感できる、心の通い合う連帯の精神に満ちた豊かで活力のある社会を早急に築き上げていくためには、経済社会のシステムがこれにふさわしいものとなるよう不断に見直し、個人の自立や家庭の役割を支援し、国民の活力を維持・増進するとともに、自助、共助及び公助の適切な組合せにより安心できる暮らしを確保するなど、経済社会の健全な発展と国民生活の安定向上を図る必要がある」（「高齢社会対策大綱」の策定の目的）

を目標とする、優れた官僚と構想力豊かな政治家をもっていたのです。

いいスタートを切った日本高齢化社会形成の事業は、のちの政治リーダーによって引き継がれずに実現に向かわないまま新世紀をすごしてきたことはきびしく検証すべき経緯なのです。

「市立（公立）生涯大学校」の基準型

平成の市町村合併の時に各自治体が検討すべきだった人材養成について成果をみなかったこ

とをここに記しておきたい。もちろんこれからでも遅いということではありません。

合併の課題のひとつに人材養成があつて、新しい自治体を活性化させる人材の養成に当たつて、平成の合併では市立（公立）大学校が想定されたことはすでに述べました。

しかしその対象者は若者ではなく、高齢化時代の六〇歳以上の高齢者です。

これから三〇年余に及ぶ高齢（エイジング）期を地域で安心してすごすための知識や地産品づくりなどの技術を学ぶとともに、住みやすいまちづくりに知識と技術を提供し、社会参加で生涯をともしする友人を得る機会となる高齢人材養成機関です。地域で高齢期をすごし、その能力をみずからの人生の充実と地域の発展のために活用する高齢人材です。

地域自治体にはすでに医療・介護・福祉を担う「地域包括支援センター」があり、就労のための支援をする「地域シルバー人材センター」があり、それとともに、「地域生活圏」を支える人材を養成・確保する「地域生涯学習センター」が設けられることとなります。

中学校区単位の「地域支援コーディネーター」（厚労省）と「生涯教育コーディネーター」（文科省）が担当する「市立（公立）生涯大学校」という位置づけが想定されます。

「生涯大学校」は中学校区の規模ですから五〇〜八〇人ほどの定員を設けて二〜三年の修学期間を目標にして、自治体か官民協働で運営するのが基準型となるでしょう。なにより大切なのは就学者同士の同学意識です。お互いに生涯にわたる課題を共有することで生涯の友人を得ることを優先すべきだからです。

いま全国の各自治体は、厚労省管轄の「地域支援コーディネーター」（第一層）の設置で動いています。文科省管轄の「生涯学習コーディネーター」（資格認定は社会通信教育協会）がすでに自治体（中学校区）で活躍しています。今回の第二層の「地域支援コーディネーター」（厚労省・新地域支援事業）とともに「生涯学習コーディネーター」（文科省・「長寿社会における生涯学習の在り方」について報告書・二〇一二年）が加わった「生涯大学校」設置にむけた活動が期待されます。第二層の「地域支援コーディネーター」と「生涯学習コーディネーター」が両省共管の自治体での当事者であり、小学校・中学校に継ぐ将来の地域大学校（生涯教育）の鍵をにぎっているといえます。

* 高齢期に必要な知識と地域カリキュラム

「生涯学習センター」というのは、住民が地域で暮らすために必要な知識・技術を習得するための施設で、年齢層や期間には関係なく必要に応じて開設されますが、その中に「平成の大合併」時の検討課題とされるべきであったのが、高齢社会対応の高齢人材養成機関としての「市立（公立）生涯大学校」でした。高齢者には長い高齢期を安心して暮らすための知識や技術の習得が必要であり、自治体の側にとってもまちづくりの人材として知識・技術を保持している高齢住民の養成と確保は人的地域資産として必要だからです。設置を担当するのは新市であるとしても、設置基準などの大綱は文科省が提供すべきであったでしょう。

結局、文科省は合併終了後も省内に高齢人材の養成を担当する部局をつくらずに過ぎましたが、これは厚労省と合議して「日本高齢社会」形成へむけた高齢人材の養成と管理をする機関として共管すべき課題であり、文科省の緊急かつ必須の事業としていまもある課題なのです。

幼保一貫型の「認定こども園」の「少子化」教育とともに、新たな「長寿社会」に対応する高齢人材養成の「高齢化」教育が、厚労省と文科省の共管によって検討され、各自治体によって「地域生涯大学校」の設置が、中学校区単位で進められる時期にあるからです。

ここでもまた政治リーダーは、二〇年の延滞を認めた上で、なお高齢化が進行するわが国の「人生九〇年社会」の課題として、政府一体での検討と取り組みが必要でしょう。「人生九〇年」時代への意識変革を促し、高齢者に社会参加を要請しているのは、ほかならぬ「高齢社会対策大綱」(二〇一二年九月改定)なのですから。

高齢者が、六五歳からの長い「成熟+円熟(エイジング)」期の「人生」を送るに当たって、健康づくり、就業、社会参加、生活環境、世代交流といった分野の知識や技術を得て、生涯にわたる友人を得て、お互いの人生を豊かに過ごすことは、地域活性化の必須条件のはず。

とくに合併の結果、それまでであった特性や精気を失っている地域にとつて、設置した「市立(公立)生涯大学校」(中学校区)を修学中の人と卒業した人とが力を合わせて継続するまちづくりが地域社会の活性化に与える影響には測りしれないものがあるでしょう。

生涯の友人・生きがい・まちづくり

多くの県が「教育立県」を宣言しています。何よりも地元で暮らして地元を豊かにする人材の養成に力を入れていくからでしょう。

すでに全国各地で成果をあげている「地域高齢者大学校」（生涯大学校、シニア・カレッジほか名称はさまざま）は、個人の生きがいとなる知識や技能の習得とともに、地域活性化を担う高齢人材を養成するために、それぞれに地域性を加味したカリキュラムを構成しています。

修学するのは六〇歳をすぎた高齢者。これまでの経験に重ねて「人生九〇年時代」の高齢期人生を見据えて、有意義に過ごすための知識や技術を新たに習得し、生涯の同学を得る。熱中できるテーマがあり、その人びとが地域でいきいきと暮らす姿が増えるための「地域カリキュラム」は重要な要素です。

ここではモデル実例として、兵庫県の「いなみ野学園」を見てみましょう。

全国に先駆けて一九六九年に開設した四年制高齢者大学校で、六〇歳以上が入学資格です。週一回の講義で、学科は園芸、健康づくり、文化、陶芸の四つ。

クラブ活動には高齢者らしく、ゴルフ、詩吟、ダンス、盆栽、謡曲、表装、太極拳、ゲートボールなどがあります。

より専門性をもつリーダー養成の大学院も設置。注目すべきは一九九九年の「国際高齢者年」



に「いなみ野宣言」を出していることです。学科の設定でもクラブ活動でも、高齢者が個人的に夢中になれる教科であることが重要な要素になっているようです。

＊まちづくりに知識・技術を活かす

全国の「地域高齢者大学校（生涯大学校）」は名称もいろいろ。

沖縄県は「かりゆし長寿大学校」（一年制）、島根県は「シマネスクくにびき学園」（二年制）、
檀原市は「まほろば大学校」（二年制）といった名称に地域の特徴があります。

生涯大学校は全国各地で多様な構想で実施されており、たとえば東京の世田谷区生涯大学シニア・カレッジ（二年制）、江戸川区総合人生大学（二年制）、成田市生涯大学院（三年制）などではそれぞれに独自にカリキュラムの模索を重ねながら、個人的な生きがいの開発、あわせて地域社会が必要とする知識・技術の多様な能力の養成などの目標を掲げて活動しています。

ほかにもそれぞれの特徴を活かして開校している市民大学校には、栃木県シルバー大学校（二年制）、千葉県生涯大学校（二年制）、鳥取県ことぶき学園（一年制）、長崎県すこやか長寿大学校（二年制）、明石市あかねが丘学園（三年制）、明石市好古学園大学校（四年制）など。

官民協働で地域特性を活かした「市立（公立）生涯大学校」（中学校区）の全国展開が、地域創生のために急がれる時期にあります。

第五章 「失われた二〇年」

「二〇年に何が失われたのか」

高齢者対策は進展、高齢社会対策が延滞

本稿のつくりつけとしては、ここから始めることもできたのですが。

しかし空港に航空機が降り立つ前のように、時空の切迫するのを感じる時、複雑な現状の分析・判断を走りながらするのはむずかしい。いま急ぎなすべきことを優先して、その中で整理して後に語るのがいいと判断して、「終章」に近いここに置くことにしました。

目次をみて、そんな本稿の苦衷のうちを推量して、まず「終章」に近いここから読みはじめてくれた深読みのみなさんに感謝しつつ、「失われた二〇年」を顧みようと思います。

今から「二〇年」を文字通りに遡れば前世紀の一九九七年です。

その二年前の一九九五年には阪神淡路大震災とサリン事件という「天災人禍」に襲われた年がありました。阪神淡路大震災はそののち毎年、慰霊の催しをつづけていますから、ここからおよその時間距離がわかります。それから起算してここまで「失われた」となれば相当の時の量が想定されるでしょう。

「失われた二〇年」がひと足先に二〇一〇年にいわれました。それは一九九一年に始まった日本経済の低迷が一〇年、二〇年とつづいているからで、いまやアベノミクス効果も薄らいで

「失われた三〇年」も語りはじめられています。

成長のない「ゼロ成長」の時代。先進諸国がともに長く陥っている「ゼロ成長」の状態からの脱出を、経済における「失われた二〇年」はテーマにしています。わが国もその要因を西欧諸国と比較しながら一〇年、二〇年と仔細に論じてきているのですが、内外に共通の要因の回答を求めても脱出口が見えてこないのです。

「この二〇年」、日本社会が欧米諸国より際立っているもの、先行しているものは何か。比較としてではなく、特徴としているものは何かについてここで触れておこうと思います。

それが何かとなれば、ここで本稿が課題としている史上初の「高齢化問題」であり、そのうちの「高齢社会対策」なのです。

経済の側面からは、「少子高齢化」「労働力減少」「過剰貯蓄」「生産性低迷」「団塊世代」などについて論じられています。しかしさらに重要なことは、他国との比較がしづらいあるいはできない特徴を、近代の歴史や独自の社会動向（世相）を通じて抽出して、仔細に検証しなければなりません。

史上初といわれる「高齢化問題」については、高齢者個人にかかわる「高齢者対策（ケア）」と社会のしくみの変容をすすめる「高齢社会対策（参加）」とがあります。

そのうちの「高齢者対策（ケア）」のほうは、「医療」「介護」「福祉」「年金」など、急増する財政上の負担にどう対処するかで、「社会保障」の面から多く論じられてきました。

とくにわが国は、国民皆保険、介護保険の充実が図られ、医療の面ではノーベル賞の医学・生理学賞を受賞する人が出るほどの貢献を残していることで知られます。

問題は「高齢社会対策（参加）」のほうにあります。

これは各国の国内事情によるもので数値の比較はしづらいのですが、それゆえに独自の検証が重要なのです。増えつづける高齢者の高齢者意識の醸成、就労の継続あるいは高齢者起業による高齢者にふさわしいモノやサービスづくり、居場所・通い場所の設置、生涯学習（高齢期に必要な知識・技術の習得）のしくみ、「世代交代」ではなく「世代交流」、暮らしや介護やエンディングを含む地域での「支え合い・助け合い（互助）」、ユニバーサル・デザインの行き届いた住居や移動の問題そのほかがあります。

ひとつ「労働力減少」の問題を取り上げてみても、「高齢化率」（六五歳以上の人口比率）の高まりとともに単純に「労働力減少」が指摘されていますが、減少ではなく「労働力変容」でなければ「高齢社会対策（参加）」にはならないのです。本稿の「長寿社会Ⅱ三世代（青年・中年・高年）平等型社会」の形成の過程に即していえば、増えつづける高年世代の参加による「すべての世代のための社会づくり」への変容です。

長年かけて積み上げてきた知識と培ってきた技術とが活かされて、磨き上げられて保持されている生活感性にふさわしい新しいモノ・サービスが発案され造出されて暮らしを豊かにし、新しいしくみが創出されることが、史上初の「高齢化問題」のうちの「高齢社会対策（参加）」

での成果ということになります。

ですから各国はそれぞれの高齢者の参加のありようによって独自の展開をすることになります。いずれにせよ社会の総体としては「労働力減少」にはならないし、新たな持続可能な経済成長が見込まれているのです。これまでの「成長力」による経済の成長にプラスして、これからの「成熟力+円熟力」による経済成長をどう展開するかが問われているのです。

「失なわれなかった二〇年」であれば、これまでになかった成熟力+円熟力による新たなモノとサービスが各分野、各場所で創出されて、増えつづける高齢者のみなさんは生活感性にふさわしい居場所に集い、優良な国産・地産品に取り巻かれて過ごし、後人に敬愛されて、生き生きとエージング時代を過ごしているはずでした。

まことに残念なことは、先に指摘したように、ノーベル賞の他の部門はすべてにノミネートされ受賞しているのに、経済学賞に日本経済を対象としてその気配すらないことがその証です。一九七九年に「ジャパン・アズ・ナンバーワン」と評価されて国際的に関心をもたれていた日本経済が、その後の道を選び間違えてきました。だれかが「高齢化」の本筋を間違えて選択し、それが「高齢社会対策（参加）」の延滞を生じ、増えつづけてきた高齢者の保持する知識・技術・資産・人脈などの軽視を生じてしまい、それらを活用することでありえた独自の経緯をもつ日本の経済社会の不在を招いているのです。

＊高齢化対策は二〇年の「片肺飛行」

前世紀末に新世紀にむけて、「長寿をすべての国民が喜びの中で迎え、高齢者が安心して暮らすことのできる社会」（前文）をめざすとして、「高齢社会対策基本法」（村山富市内閣）を制定したのが一九九五年一月でした。

次年の一九九六年七月には、中期目標としてなすべき事業を掲げた「高齢社会対策大綱」（橋本龍太郎内閣）を閣議決定しています。高齢化先進国のフロント・ランナーとして、国際的にみてもいいスタートを切ったのでした。

「大綱」はそののち五年ごとに見直され、「小泉純一郎内閣」（二〇〇一年）と「野田佳彦内閣」（二〇一二年）で改定されています。

実務を遂行したのは時代感覚に優れた官僚と若手学者とでした。一九九九年の「国際高齢者年」のフォーカルポイント（窓口機関）として全国展開したのも当時の総務庁高齢社会対策室でした。ここで見落としていけないことは、それらの事業に底流しているのは、時代をつくってきた先人への感謝であり、慰労し敬意をもって功労者を遇しようとする官僚や学者の「善意」であったということです。

にもかかわらず、国のなすべき「高齢化」対策事業は「高齢者対策」のみであり、「大綱」に取り上げられた「高齢社会対策」は進んでこなかったのです。それが本稿のいう対策の「片肺飛行」であり「失われた二〇年」であり、なすべき社会対策がなされてこなかったゆえに、

「社会保障」財政は雪だるまのように赤字を拡大しつつ増えてきました。

赤い色の雪だるまなどというものは世にありえないイメージです。

一人ひとりの高齢者は、長年にわたってみずから努めて培ってきた「健康」「知識」「技術」「経験」「人脈」「資産」をたいせつに保持して暮らしています。みずから努めてきて得たものですから、その総体は本人にしか分からないところ。外からは見え、本人にしか知れない「熟練技術」や「専門知識」や独自の「構想」などが、多くは退職して「余生」を過ごすあいだに社会的に活かされずに失われつつけているのです。

「温存」がいつしか「軽視」になっていきます。

あまりに惜しい経緯ではありませんか。

「この二〇年」、戦後の復興と成長に成功をもたらしてきた経済社会システムは、「高齢化」での変容を受けいれずに過ぎてきました。

その間、政治の側は「基本法」の趣意、「大綱」にあるような事業を動かさず、「高齢社会グランドデザイン」を掲げることせず、増えつつける高齢者に対して「人生九〇年」という長寿への意識を醸成しながら、到来する社会への参加を要請しなかったのです。

それが年々増えつつける高齢者の将来への不安を醸成し、その経緯が裏返って家計資産を一四〇〇兆円にまで積み上げさせてきたのです。将来に不安がなく、将来にむけて参加すべき事業が明解であれば、元気な高齢者は積極的に社会参加し、保持する「健康・知識・技術・経験・

人脈・資産」を活かして、社会の活性化に貢献できていたはずなのです。

したがって「高齢社会対策」の延滞の要因と責任は、政治の側にあります。しかし主因は何事もせず過ぎてきた国民の側にあります。そしてその延滞により露呈してくるすべてのツケを受けるのは政治家ではなく高齢者なのです。

「あれから二〇年」、まことに残念なことですが、政争や「世代交代」の嵐のなかで初めの一步を誤った「高齢社会対策」は、出口のめない迷路にまぎれこんでしまったままです。

本来なら「基本法」二〇年の節目に当たって、政府筋から経緯を振り返り、成果を確かめ、しっかりと将来を見据え直す行事があってもいいところですが、その気配は見られません。

グローバル化はあったものの、底流している「高齢化」の姿をしっかりと見据えて、高度成長を成し遂げたあとも元気な高齢者層に対して、「三世代平等型社会」の形成に努めることを要請できていれば、今ごろ「一億総活躍」をいい出しながら三四〇〇万人の高齢者を軽視するような政策はとらなかつたはずです。これまでの二〇年は高齢者を対象としてきた「高齢者対策」中心だったとしても、それに加えてこれからは「高齢社会」を対象とする「高齢化対策」を同時進行することになるはずなのです。

二〇一二年末の組閣以来、「女性と若者の成長力」に期待し優先してきた安倍晋三首相は、二〇一五年九月に「一億総活躍」を呼びかけたものの、高齢者層に対しては際立った参加要請をしていません。「迷路」にはまってしまった政界からは、もはやこの国の高齢社会の姿が見

通せなくなっているとしかいいようがありません。

ではだれがそれを見通しており、どうすればこの国の経済社会の姿を国際的本流にもどすことができるのでしょうか。

ともにここまでたどり着いてくれたみなさんと熟慮して実現に努めたい。

高齢者はすべて「社会の被扶養者」という固定観念

今世紀の国際的な潮流が「高齢化」であることを知りながら、政治の側は、とくに注目される先行国として、新しい社会のしくみづくりをどこまで議論し実施してきたのでしょうか。

とくに政治リーダーは、「高齢社会大綱」が提案している事業、高齢者意識の醸成、就労、健康づくり、社会参加、学習活動、生活環境、市場の活性化、全世代の参画といった各分野ごとに、なすべき活動を仔細に検討し実施し、国民に「グランドデザイン」として提案してきたでしょうか。国会議員は衆議してえた「高齢社会グランドデザイン」を、増えつづける高齢者に呼びかけながら地域活性化に活かしてきたでしょうか。

この歴史的にも国際的にも重要な世紀の課題を公開し、実現に努める時期に、当時の首相は「所信表明演説」（二〇〇一・五・七）で国民にむかって何と行ったのでしょうか。

将来の高齢者増による「ケア」の負担増を取り上げて、「給付は厚く、負担は軽くというわけにはいきません」と言い切ったのです。このときに「長寿をすべての国民が喜びの中で迎え、

高齢者が安心して暮らすことのできる社会の形成」（「高齢社会対策基本法」前文）へむかうはずであった活動のすべてが萎えてしまったといっているのです。この責任は重いのです。

発言の内容が間違っているといっているわけではなく、発言の対策が「高齢者対策（ケア）」であり、「高齢社会対策（参加）」でなかったことに問題があるのです。予算折衝に当たっての焦眉の急が、高齢弱者の人びとへの「福祉・介護・医療」と「年金」だったことはだれにも確かではありませんが、それとともに、

「元気な高齢者のみなさんは社会の支え手になってほしい」

とひとこと訴えて、将来の財政難を説きつつ、増えつづける元気な高齢者層に「自助・互助」意識を醸成するとともに、高齢者みずからが暮らしやすい社会の創出を官民協働で進めるよう訴えるのが政治リーダーの構想力だったのではなかったでしょうか。構想力のある首相といわれていただけに、「所信表明演説」を聞いて、天を仰いで慨嘆した官僚や学者や高齢社会活動家やジャーナリストや多くの高齢者がいたはずです。

このままですと、これは記したくないのですが、

「年老いて負担がかさむと考える心優しい高齢者が、善意で死に急いでくれて、日本高齢社会は思いのほかスムーズに形成できました」

なんてことにならざるをえないのではないかと思われました。

新世紀のはじめに、先の「所信表明演説」をしたのは、時の小泉純一郎首相です。そして一

二月には橋本内閣以来の「大綱」の改定を閣議決定しているのです。さらに「世代交代」の大合唱のなかで、優れた大物高齢政治家までを年齢で区切って、政治の表舞台から追い払ってしまったのでした。

いま「原発の全面禁止」を訴えておられますが、「高齢社会対策」の延滞をもたらした政治リーダーを代表して過ちを認めて、ここはみごとに「君子豹変」ぶりをみせてほしいものです。

*みんなで渡った「霞が関の赤信号」

今世紀のはじめに、政界の「世代交代」（世代交流ではなかった）の突風にあおられながら、チルドレンを誘導して「霞が関の赤信号」を渡ったのは、かつて優れた厚生大臣と評された小泉首相でした。その後の内閣は、七年にわたった「一年一相」時代を含めて、迷路のなかをさまいっづづけているのです。

安倍首相のリードした「アベノミクス」（女性と若者優先の経済）は、もはや迷路の行き詰まりまでできているのです。この間、高齢者は何の恩恵も受けず、広がった格差の底で、

「この国の将来の姿はもう見たくない。孫、子に少しでも遺産を残せるうちに死にたい」

とつぶやき、エンディング・ノートを書くような国をだれが望んだのでしょうか。今世紀に入っても政治リーダーは、「高齢者は社会の被扶養者である」と位置づけて、社会保障予算の措置には努めたものの、ありうべき「高齢社会」の姿を構想できなかったのです。

「医療・介護・福祉・年金」といった施策では国際的水準で評価を得たし、平均寿命や健康寿命では世界のトップレベルの成果を示しています。これらの「高齢者対策」については率直に世界に誇っていいでしょう。

しかし先の小渕内閣で5%の「消費税」導入のとき、「社会保障」のための完全目的税にするよう当時の宮澤喜一蔵相を説いて認めさせた藤井裕久氏は、

「そういう構想力は政治リーダーにはなかった」と率直に述懐していました。

政治家にはなくとも、官僚と学者にそういう認識がなければ「高齢社会対策大綱」の改定はできなかったはずです。二〇〇一年一二月、小泉内閣は五年ぶりの「高齢社会対策大綱」の改定を閣議決定しているのです。その記述の中に、なすべき対策は埋めこまれているのです。政界が若手からの「世代交代」の渦中にあつたとはいえ、官僚と学者が時代を底流している「高齢化」の状況に理解力が働かなかつたわけではないでしょう。想像力が働かなかつたのは政治の側でした。

九割中流から「下流老人」への酸欠流下

「失われた二〇年」を隠しおおせずに実例として露呈してしまったのが、「老後破産」や「下流老人」の存在です。

ここでも繰り返しますが、「長寿をすべての国民が喜びの中で迎え、高齢者が安心して暮らすことのできる社会」を掲げた「高齢社会対策基本法」の前文がむなしく聞こえます。

「高齢社会」の現状に対して、高齢者の側からではなく、現役世代の将来不安を契機にした報告が話題になったのです。

本のタイトルが『老後破産』であり、サブタイトルが「長寿という悪夢」です。

二〇年前にめざした「基本法」の理念を逆なでするようなこのキャッチコピーが、本が売れない時代にウリを立てるためのワル知恵で、「老後」や「長寿」のすべてではなく限られた条件のものであることを百も承知で付けたとしても、制作者としての「貧性」を問いたいところですが、反響に包まれている間は言っても遠吠えにしか聞こえないでしょう。

いま、ひとり暮らしの高齢者に何かが起きている。その経緯はわからないが現場からしか議論は始まらないと決めて、NHKスペシャル取材班は現場にはいったのでした。

議論の切り口は「経済的困窮」です。タイトルにしているキーワード「老後破産」とはどういう境遇の高齢者をいうのかというと、

ひとり暮らしの高齢者で、収入が生活保護水準（月約一三万円）を下回っていても生活保護を受けていない（受けられない、受けようとしらない）人で、預貯金の蓄えがないか乏しく、年金（国民年金六万五〇〇〇円＋）だけでギリギリの生活をつづけている人。だから病気になったり介護が必要になったりすると、とたんに生活が破綻してしまう――

こういう境遇の高齢者を対象にし、番組（NHKスペシャル）のプロデューサーが「老後破産」と呼ぶことにしたという。ざっと二〇〇万人余がおり、増えつづけているという。「長寿という悪夢」のサブタイトルには、生きつづけることで追い詰められていく（「預金ゼロ」へのカウントダウンも）現実の苦しさ、厳しさ、虚しさが込められています。これでは長寿の日々が楽しいはずがない。それが取材の前提でした。

「失われた二〇年」は、九割中流をなしとげて高齢者になった功労者を、「下流老人」と呼ばれる境遇にするには十分の長さでした。

NHK取材班は、さまざまな問題をかかえて「老後破産」寸前にいる高齢者を対象に選んで、個人の喜怒哀楽の声を聞いていきます。

必死で働いてきたのに報われない老後――

だれもが口にするこのつぶやきは、二〇〇万人にとどまるものではないでしょう。

都営団地に住む八〇代の菊池幸子（仮名）さんは、その典型のような暮らしをしています。

菊池さんは八年前にまだ独身だった四〇代のひとり息子を失った。そして三年前には夫をガンを失って、ひとり暮らしになった。夫の生前はふたりで一三万円ほどの年金で暮らしていたのですが、その後は毎月八万円（国民年金六万五〇〇〇円十）に。

専業主婦だったから厚生年金はない。経費は家賃（一万円）、介護サービス（三万円、要介護二）、生活費（公共料金を含む、七万円）で、毎月必ず出る三万円ほどの赤字を預金（残り四〇

万円になった）を取り崩して充てており、「老後破産」へのカウントダウンがつづいています。菊池さんにしてもそうですが、「多くの高齢者はその権利（生活保護）を行使しようとしな」と取材者は感じ取っています。

「贅沢は敵」とばかりに、出費を切り詰め、耐え忍んでいる。生活保護を受けることは、「国の御世話になること」でもあり、罪悪感を伴うと訴える声も多い――

と実情を報告します。

取材の対象は八〇代が多いですが、この年齢層の大正から昭和初年生まれの高齢者は、戦中・戦後のきびしい暮らしを自立してしのぎ、その後も自分のために貯蓄などせず、みんなが等しく豊かになるために努めてきた。そういう人びとのおのずからの善意が歴史にまれな「九割中流」社会をつくったのではなかったでしょうか。

菊池さんの夫は工務店の主人として、働く人たちが豊かになることに配慮し、自らの老後のための預金を積むことなど考えていなかったでしょう。そういう「みんなが等しく豊かに」を貫いてきた人びとの人生を、最後まで保てるような「高齢社会対策」を講じないできて、「生活保護」をとという配慮の浅い「社会保障」で対応する政府も自治体も信用されていないのです。

戦争と戦禍を経験し、一日でも長く生きることの命の尊さを知る人びと。その願いを閉ざして、「もう生きたくない」と吐露せざるをえないような環境に置かれているのです。

一生懸命に働き、一生懸命に生きてきた普通の人たちが報われない、それが今の日本の老後

の現実なのだ――

そういうところに結論は行き着かざるをえないのです。

こういう社会を呼び寄せてしまった責任はだれにあるのか明らかです。

その責任はきわめて重い。

***無策連鎖が「下流老人」「老後破産」を生む**

一方、『下流老人』というタイトルは、筆者の造語だといえます。筆者は、さいたま市で一二年間、生活困窮者の支援をしてきた三〇代のNPOの運営者（ソーシャルワーカー）であり、年間三〇〇人ほどの生活困窮者からの相談を受けている。そのなかで多くの高齢者の困窮した惨状をみてきました。

「下流老人」というのは、「生活保護基準相当で暮らす高齢者およびその恐れがある高齢者」と定義していますが、実感の裏打ちがある巧みな造語です。いいかえれば、国が定める「健康で文化的な最低限度の生活を送ることが困難な高齢者」です。

そして三つの「ない」が指標とされることになりました。

収入が著しく少ない。十分な貯蓄がない。頼れる人間がいらない。

つまりあらゆるセーフティネットを失った状態をいいます。

上記の『老後破産』と同様の趣意で同じところに発刊されましたが、両書ともベストセラーに

なっています。上記書と違うところは、親世代だけの問題ではなく、「介護離職」などで子ども世代が共倒れすることや、少子化を加速させる（子どもがいなければ十数年間は下流にならずにすむ）といった次の世代への影響を指摘しているところにあります。

「自分がこんな状態になるなんて思いもしなかった」

とつぶやくのを、筆者は相談にきた高齢者から異口同音に聞いています。

老後の貧困は想定外の事態であり、立ち至った事由はもともと貯蓄がなかったり、思いのほか年金が少なかったり、親の介護で職を辞めたり、同居の子どもが病気（うつ病）だったり、自分が大病をしたり、といういろ。事由は個人的にみえますが、社会のしくみの問題であり、全世代にかかわると問題を提起しています。

「下流老人」は、姿を見せないようにして隠れているといえます。

そしてとくに一定の年代より上の人は「オカミの世話になりたくない」という意識が根強くあると指摘します。筆者はそのような考えに到ってしまった過程に目を向け、生活保護を受けやすくすることが必要と訴えています。

「オカミの世話」を大正期から昭和戦前の生まれの人は期待していないのです。

戦争を起こし、自由を奪い、若者の命を奪い、戦禍の苦しみをたらしたからです。戦後もとくに「オカミの世話」を受けずにみんなして働いて豊かになった。その成果を、「一定の年代より下の人」は不安な将来の老後のために貯蓄することで守ろうとします。

筆者は、現実の声を聞き、さまざまなケースを統計類を駆使して一般化し社会化することで、読者の納得をえることに苦心しています。「一億総中流」社会がこのまま放置したままだと、いずれ「一億総下流」の時代がやってくると、危機感をもって受け止めています。

いずれにしても率直にいえば、こういう本は現役世代によって出されてはいけない本であり、売れてはいけない本なのです。

□ 歴代の高齢社会対策担当大臣に責任

高齢社会対策の「基本法」「大綱」の経緯

「高齢社会対策」に関する「大綱」の事業の延滞で、「基本法」を制定した村山富市氏を責めるわけにいきません。いまでも現役で元気に過ごしておられる高齢者の星、「眉雪」の美しい村山さんには、制定時の志を思い出していただければそれでいい。

それ以後の政治リーダーに責任はあるのです。

翌一九九六年七月には、橋本龍太郎内閣によってその実現への指針として「高齢社会対策大綱」が閣議決定されています。橋本さんの活動にはその後も実現への志を見たのですが、残念ながら早く世を去ってしまいました。

「基本法」も「大綱」も、双方とも当時の優れた構想力のある国家官僚と学者の創意によって起草されたものであり、策定した人たちは新世紀のはじめにみずから高齢者として「喜びの

中で安心して暮らす」姿を想定していたに違いありません。

いまやその達成にむかっていないことを感じているはずです。

政治の側の責務として、国際的にみてもわが国の「高齢社会対策」はいいスタートをきったのですが、いまや目標を見失っている状態なのですから、周回遅れか途中棄権すれすれといつてもいいすぎではない状況にあるといえるでしょう。

「高齢社会対策大綱」の策定の目的にはこうあります。

「二一世紀初頭の本格的な高齢社会を目前に控え、国民の一人一人が長生きして良かったと実感できる、心の通い合う連帯の精神に満ちた豊かで活力のある社会を早急に築き上げていくためには、経済社会のシステムがこれにふさわしいものとなるよう不断に見直し、個人の自立や家庭の役割を支援し、国民の活力を維持・増進するとともに、自助、共助及び公助の適切な組合せにより安心できる暮らしを確保するなど、経済社会の健全な発展と国民生活の安定向上を図る必要がある」

と。さすが策定者である優れた官僚は、このワンセンテンスの中にそのエキスをすべて詰め込んでいます。しかし推進者は国民から選ばれてその役割を付託されている政治家です。

どの顔を思い浮かべても、この「大綱」の文章を読んで、「官僚の文章はごちゃごちゃしていてよくわからん」といつて投げ出してしまったような気がします。読みもしなかった人もいたのかもしれない。いずれにせよ、経済大国を成し遂げて、成熟・円熟期にある人びとに、「高

「齢社会」達成への参加要請をした政治リーダーを知りません。

* 諸事業羅列のまま世紀をこえる

事業延滞の犯人さがしをつづけましょう。

安倍首相は唐突に「基本法」から制定二〇年目にあたる二〇一五年九月に「一億総活躍」をいい出しました。そしてご存じのように、一〇月の内閣改造で「加藤勝信・一億総活躍担当大臣」を登場させました。オールジャパンをいうのですから、当然のこと、知識も技術も資産も持っている高齢者層への参加を呼びかけるものと発言を待ちましたが、そういう趣旨の後追い発言はしませんでした。延滞責任の先端か末端かにいることを意識していません。

任命を受けた加藤勝信担当大臣は、大急ぎで各省の担当官僚を集めて、霞が関からの視野にはいる人材によって「一億総活躍国民会議」を発足させました。その急場しのぎの手法にぬかりはないのですが、ただし国民の四人にひとりには達した高齢者（六五歳以上、約三四〇〇万人）が持つ潜在力の活用を要請できる広い視野で、「国民会議」をリードできる高齢有識者を探した形跡がありません。

「国民会議」のメンバーに、本誌にも登場していただいた何人かの方が代表として参加していないのがその証です。高齢世代の人の声が反映されなくては、オールジャパン・オールエイジズの議論にはならないのではないのでしょうか。

歴史の裁断はまぬかれえないでしょう。

新世紀の一五年、高齢者が四人にひとりになる時期までの社会対策の延滞は、中年期に「九割中流」社会を達成した功労者である人びとを、高年期になって「下流老人」にするには十分でした。今世紀のはじめから着々と対策を講じていけば、「下流老人」現象は露呈しなくて済んだプロセスなのです。そうできなかったのは他の道を選んだということであり、それは政治リーダーである歴代総理の責任であり、直接的には歴代の「高齢社会対策担当大臣」の無策連鎖の結果であることに疑いの余地はありません。

一九九九年に都知事になった石原慎太郎氏もそのひとり。石原さんは一〇月一日の「国際高齢者の日」の東京での記念式典で高齢者に期待する「あいさつ」をしているのです。いまご自身の人生に関わる「高齢社会」形成への政治家としての責務も見直してほしいものです。七〇歳代の小泉さんと八〇歳代に達した石原さんの「君子豹変」する姿は見てみたいものです。

一九九六年以後、毎年の『高齢社会白書』の公刊を担当してきた大臣はもちろんみな直接の責任者です。そしていま、その責任は誰にあるのでしょうか。いうまでもなく「一億総活躍担当大臣」であり「高齢社会対策担当大臣」でもある加藤勝信担当大臣にあります。

といわれて、加藤さんご本人すら実感がありませんし、納得がいかないでしょう。二〇年の延滞で、政界における責任はそこまで希薄になっているのです。

問うのも恥ずかしいことですが、消費税論議の最中だった二〇一二年九月に一二年ぶりに「高

「高齢社会対策大綱」が閣議決定（野田内閣）して改定されましたが、高齢社会にかかわる財源とともに実態にかかわる「大綱」の内容に関心をもった政治家がどれほどいたのでしょうか。

「大綱」の重要な改定点は「人生六五年」を二五年延伸させて「人生九〇年」への意識の醸成を求めていること。と同時に、就業、健康づくり、社会参加、学習活動、生活環境、市場の活性化、全世代の参画といった各分野への「支え手の高齢者」の参加を呼びかけていることにあります。

別の章で詳しく述べますが、青少年（成長期）＋中年（成熟期）＋高年（円熟期）の「三代平等」の意識を醸成しつつ、オールジャパン、オールエイジズ社会をめざすこと。

二〇年の対策の延滞を取り戻した上での「日本高齢社会」の創出は今ならまだぎりぎり間に合うのです。高齢者が四人にひとりになった段階からの成功事例としての「日本高齢社会」達成への道は閉ざされてはいません。本稿はここに、新世紀一五年の経緯をつぶさに見てきた立場からの救済策を示そうとしているのです。

二〇一二年に「大綱」を改定

「基本法」の目的にむかって「大綱」の取り上げる諸事業を実現しなかったのは政治家ですが、そうさせなかったのは国民です。

高齢者への国の対策の指針となる「高齢社会対策大綱」は五年刻みに見直され、その改定が

二〇一二年九月におこなわれましたが、ご自分の人生にかかわる重要な改定の内容なのに、高齢者のみなさんはおそらく知らないでしょう。

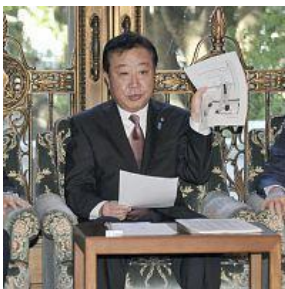
一九九九年に「国際高齢者年」がありました。

二一世紀にはもはや世界規模での大戦争が不可能になり、平和のうちに世界規模での「高齢化」がすすむとして、国連が二〇世紀末に設定したものです。際立って急速に「高齢化」がすすむわが国では、ここを機会にして、新世紀にトップランナーとして迎える「高齢社会」の構想、国際的な視野での「高齢社会グランドデザイン」を衆議して掲げるチャンスだったのです。

国の政策としてそれがありませんでした。高連協が独自に「高齢者憲章」を起草しているのが知られる程度です。

「高齢社会対策大綱」は、二〇〇一年末に小泉純一郎内閣が見直しをしていますが、その後も見直した事業はすすまなかったのです。一方で世代交代をすすめて高齢政治家を排除し、チルドレンを呼招した小泉総理の責任は免れえないでしょう。

二〇一二年改定の「大綱」（野田佳彦内閣）にはなすべき事業として、「人生九〇年」の意識の醸成や就業、健康づくり、社会参加、学習活動、生活環境、市場の活性化、全世代の参画といった課題が上げられています。有識者検討会（清家篤座長）が提言をし、関係省庁が見直し、内閣官僚がまとめた「新大綱」を野田内閣が閣議決定したのです。



「人生六五年」から「人生九〇年」へと一足飛び二五年の高齢者意識の延伸を求めていることから知られるように、歴代内閣が事業の継続性を軽視し、新世紀一五年の「高齢社会対策」の延滞（政治不在）がつづいてきているのです。

安倍内閣は際立ってそう。みなさんもお気づきのように、安倍総理は女性と若者の「成長力」とくに女性に期待して、ことあるごとに参加を呼びかけていますが、「成熟力＋円熟力」を持つ高齢者には言及がありません。新世紀歴代の政治リーダーは、「高齢者」は「支えが必要なる人」という固定観念を持っており、「社会参加」に意欲と能力のある人びとに「支え手」に回ってくれるよう訴えることもなく、「大綱」が列挙する対策を講じることもなかったのです。高齢者への敬愛の思いが年々薄れていくと感じている高齢者が多いのは、こういった社会対策の延滞によるところが大きいのです。

*情報を知らされない高齢者

高齢者のみなさんは知らされなさすぎます。そこで知らなすぎるのです。

あの大震災があった二〇一一年の一〇月に、民主党政権の蓮舫担当大臣（蓮舫議員が「少子化」と併任の「高齢社会対策担当大臣」だったことを、どれほどの人が知っていたでしょうか）のもとで、有識者検討会（座長清家篤慶応義塾大学長）を立ち上げて報告書を作成、その後、内閣官僚の検討を経て、二〇一二年九月七日（このときは中川正春担当大臣）に閣議決定をし

ました。内閣はもちろん民主党の野田佳彦内閣です。二〇〇一年の小泉純一郎内閣以来の一年ぶりの「対策大綱」再見直しでした。

残念なことですが、多くの国会議員が高齢社会対策の担当大臣がだれかを知らず、内閣府に専任官僚がない（併任ばかり）というのが現状です。「対策大綱」を練り上げ、改定した有識者と内閣官僚には重要性を増していく課題と分かっているにもかかわらず、肝心の政治リーダーにその認識がなかったことの証をここにも見ることができます。

一年ぶりに内閣府で「対策大綱」の改定を検討しているというのに、衆参両院議員は何をしていたのでしょうか。日々、まことに熱心に「社会保障」費の財源となる「消費税増税」というおカネのほうの議論をしており、肝心の高齢社会の具体的なありようについては、ほとんどないといつていいほど関心が薄かったのです。

ですからマスコミ報道も閣議決定のその日かぎり、内容については多くの国民の知るところとなりませんでした。無理もないことですが、若い厚労省クラブの現役記者は、「高齢社会対策」については「認知症」ほどには肝心な問題として認知していないからです。

バトンを受けた歴代の「対策担当大臣」に責任

責任者であった「高齢社会対策」の担当大臣を見てみましょう。

毎年出されている『高齢社会白書』（内閣府刊行）の閣議への提出者をみると、平成二一年度

版は小渕優子大臣が、二二年度版は福島みずほ大臣が、そして二三年度版は蓮舫大臣が、二四年度版は小宮山洋子大臣が、二五年・二六年度版は森まさこ大臣、二七年度版が有村治子大臣が閣議決定時での担当大臣となっています。連ねてみると明らかに「少子化・高齢化」を合わせて担当する人選であり併任であり、それも「少子化対策」の方が主であることが知られます。

民主党政権時代だけで九人の担当大臣がいました。そのことを議員どころか閣僚どころか本人すら知らなかったのではないか、と思われるほどなのです。

参考までですが、民主党政権の九人というのは、福島みずほ、平野博文、荒井聡、岡崎トミ子、村田蓮舫、細野豪志、村田蓮舫（再）、岡田克也、中川正春各議員です。中川議員が「高齢社会対策大綱」改定時の担当大臣でした。時節がら重要性を知っていれば、少時とはいえ併任で担当となった岡田副総理は、おそらくそれ相応の対策をとったことでしょう。

これは記すのをためらいますが、改定した「高齢社会対策大綱」を閣議決定した野田（佳彦）総理でさえ内容の理解が浅いのです。

高齢者の活動がいまの社会にもたらす有意な影響には触れていますが、それが高齢者自身の実人生を活発にし新しい社会の形成に向かう力になることには触れていないのです。当時五五歳の若き総理には高齢者の実人生には理解が及ばなかったようです。それは六〇歳の安倍総理にもいえることです。

*内閣府に専任の担当大臣を

担当大臣としてしごとも少なく、予算も少なく、組閣時に「高齢社会対策担当大臣」として辞令も出ないために、恒例の組閣後の記者会見でも関連する質問が生まれません。「日本高齢社会」の形成は国際的にも歴史的にも大事業なのに、今世紀にはいつてからの歴代リーダーはその重要性を認知しないままできています。

内閣府内部の扱いも「共生社会政策」の一分野として、内閣府政策統括官（共生社会政策担当）が担当しています。「高齢社会対策担当」の参事官や政策調査員がいるにはいますが、兼務だったりしますから、「高齢社会対策」を担う太い導線が内閣府内に整っているとはいえません。要するに内閣府内の主要な職務として扱われなくなってしまうて久しいのです。

「高齢化」を一過性のものとし、「少子化」を恒常的なものとする施策は、この国の将来を二重に誤ることになるのです。

遅れを取り戻すには、まずは内閣府内に「高齢社会対策」を担当する太い導線を形成して、高齢社会推進のしごとを総括して進めねばならないでしょう。世紀を通じた国際評価につながる「高齢社会対策」を重視すべきときなのにもかかわらず、国会議員はなおその重要性に気づこうとしないのです。地元選出の議員に理解を求めて、その上で国会へ送り出しましょう。

全国津々浦々から三四〇〇万人の高齢者が、衆口一詞の声を合わせて、
「高齢社会対策の専任大臣と強力な部局を！」

と叫んで、国会周辺の大地を揺さぶる必要があるのです。

世界の高齢者が期待する「日本高齢社会」形成への新たな烽火を掲げるべき時であり、時は切迫しているのです。

目 高齢者間にみる較差

かつては功いまは罪の「急流勇退」

まだしごとが十分できる現役のうちに惜しまれて引退する。

そういう引退のしかたを「急流勇退」というようです。プロ野球の松井秀樹選手にもそういうところがみられました。なかなかできないことなのです。先ごろアニメ映画の総帥、スタジオジブリの宮崎駿監督が引退表明をし「急流勇退」しましたが、こちらはのちに「急流復活」。これもできづらいこと。

企業内でもかつては敬愛する先輩のそういう「いさぎよい進退」が、後輩に活動の場を与え、将来への励ましを与えてきました。企業や組織の「高齢者リストラ」が始まってすぐのころには、少々の退職優遇を受けながら、優れた経験と人格をそなえた企業人が定年を持たずに潔く職場を去っていったのでした。後輩としてはだれもがそういう潔く身を引いて「引きこもり」の人生にはいった先輩の姿を思い浮かべることができるとしよう。

進退に関しては時代を越えて、

「君子は進み難くして退き易し。小人はこれに反す」(『宋名臣言行録「司馬光」』から)
という評価が知られます。

志の高い人は出世に執着することなく潔く進退しますが、志の小さい人はこれとは反対に役職にこだわって動く。一般人はそうはいかないから、さしたるしごとがなくとも定年まで勤める。ありがたいことに、年金が始まる六五歳まで定年がゴムひもを延ばすように延びてつながつてくれたのです。企業の業績によるのではなく福祉対策として国は想定外の金融緩和によって市中の資金を支え、「団塊の世代」の退職期のための企業の内部留保を支えたのです。

*「隠退」で知識・技術を持ち去る

一方で企業の芯になっている事業を支えている「中堅社員」はといえば、しごとが増えていくのに減収を余儀なくされているという実情に置かれています。

職場を離れたアフター5の街談巷議の場では、中堅社員から、経営陣については口角泡を飛ばして、現役が働いて負担している年金を受け取りながら「われ関わり知らず」として「引きこもり」の暮らしをしている社の先輩もふくめて高齢者への不満が、ビールを呑み呑み吐き出されます。

引退後の気楽な「余生」が、若い人には人生の終末までの長すぎる無為徒食が不公平なのです。先輩を功労者として敬愛はしているものの、それは「余生」がほどほどで高齢者も少な

ったころのこと、いまや高給社員は高齢期に見合いのしごとがないまま過ごして、六五歳で退職金を得て去って企業年金を合わせて年金暮らしにはいる。

それでは困るというのです。早期退社して退職金と年金で何もしないで長生きするのは、かつての先輩にみた美談でもなんでもないのです。会社で培った能力を活かして延びた定年までの間に厚生施設の費用と企業年金分くらいは稼いでから去ってほしいのです。

しごとまみれの中堅社員としては、しごとなしで四半世紀を「余生」として過ごす高齢者がうらやましいより忌々しい。そこから敬意が湧くわけがないというのです。

年少者からは年長者の人生の内実は分からないのかもしれないかもしれませんが、二〇歳のころ読んだ漱石の『こころ』の先生と私の生き方から学んだそれは、やはり二〇歳での理解だったということでしょうか。七〇〇万部を越えて文芸書としては売上一位、連載一〇〇年に当たる二〇一四年四月に朝日新聞に再連載されましたが、再読して他人の生への理解は深まったのでしょうか。

高齢者の人生として、ここでは典型的な引退の事例として、六五歳をすぎし終えて晩年期にはいった高齢者の三様の暮らしぶりを見てみようと思います。だれもが外見ほどには安泰ではなく、それぞれに高齢期の課題をかかえているのがわかります。

「隠退ウーピース」として

まずは「急流勇退」をして会社を去ったあと、「われ関わり知らず」こそ先輩の道とわきまえ

て「引きこもり」の人生を送っている大島修一さんの暮らしぶりから。

大島さんは、君子然としてあたりを払うような風采ではないですが、聡明さだけは疑いようのない広い額に細い目で、とくに笑った顔が安心感を与える風体の人です。

だれもが名を知っている並一流の企業を当時の六〇歳定年まであと二年を残して早期勇退してのち、「家庭人」（と大島さんはいう）に徹して一〇年余を静かに暮らしてきました。

一〇年は長いようですが、思えば早かったといえます。

「古希」を迎えて急に体力の衰えを実感してからは、これからは「老齡期」と率直に認めることにしたそうです。新聞社の調べでは七〇歳からを「お年寄り」と思う人が半数以上というのですが、七〇歳の大台を迎えて自分でもそう思う。

男性の平均寿命である八〇歳まではあと一〇年ですが、自分は平均より健康だからあと一〇年とは思っていない。一〇年ではちよつと短い。十五年はほしい。そこで七〇歳の余命を加えた八五歳までを健康寿命として、そこまではあれこれ楽しんで過ごせればという。からだのどこかにもとに戻らない症状（フレイルといいます）が残って健康寿命が終わる。

そこから約五年が介護（多分、自分より長寿の妻に）を受けながらの「余生」となる。

こういう人生設計を大島さんは立てています。

会社人間でしたから地域に知り人はいませんが、学友や同僚があちこちにいるし、それにかず離れずに暮らす妻と近居している娘の家族がいます。そして額に汗して旬の食材を得る「自

「営菜園」が日課になっています。住宅ローンがなく小菜園ができる土地を残してくれた岳父に感謝しているといいます。

典型的な「君子的引きこもり」の人といえます。

肝心の生活費はどうでしょうか。

細目までは知れませんが、公的・私的（企業）年金のほかに資産収入もあって、近居している娘や孫の支援、病気や不慮のできごと、車の買い換えや築二〇年を越えた住宅・設備の修繕（これが思いのほか費用がかかる）、そしてふたりのささやかな葬儀費用まで含めて、「生涯準備金」（預金と国債・株式が半々）はいままでのところ崩していない。

それでも小遣いは月八万円以上。この以上というところに余裕が感じられます。ありえたかもしれない他の暮らし方と比較して、いまの「家庭人」としての暮らしに不服も不安もないといえます。

まことにありがたいことにデフレで目減りをしつづけていた資産が、金融緩和の株高で、最後の安定した暮らしを支える安全圏といわれる四〇〇〇万円（高齢者の一六％という）に補充をえました。

正直に言えば、健康に不安はなくはないのですが、二〇一四年六月に一一六歳で亡くなった世界一の長寿男性であった木村次郎右衛門さんが、郵便局長をつとめて退職した後は九〇歳まで農業をして長寿だったことから、「できる間は農作業を」と考えています。

同年齢の妻の余命は一九・五なので八九歳。お互いに健康に留意しているから、自分は八五歳からの余命五・九を加えて九一歳だが、妻は五・八を加えて九五歳まで行ければと思っている。

「自分はムリかもしれないが、同い年の妻の方はクリアできると予測しています。」

いっしょにエンディングという希望は持っていない。申し訳ないが、ほどほどの期間は妻の介護に期待しているというのです。

*「一陽来福」型の高齢者層

大島さんは、岳父と同様に住居と敷地のほかは資産を残すつもりはないと決めています。

そう子どもたちについてあるので、囲碁、釣り、ゴルフなどの趣味を楽しみ、旅行でも観劇でも食事会でも、学友や同僚から声がかかれば可能なかぎりは参加しますし、浪費も積極的にします。

同窓会の名簿を見ると、死去がちらほら、半数近くには有訴の記載がある。だれその認知症の程度や医療・介護の話をする耳にすると、ドック検査による健康状態の良好な自分が、めぐまれたひとりに思える、と大島さんは自慢のひたいをさすります。

日本経済に関しては、下降へむかう時期にあると感じていますが、大島さんは「われ関わり知らず」と固く決めているので、職場のことで後輩が知恵を借りにやってくるのにも、

「いまさら会社のために、わたしまで引き出すのはやめてくれよ」と、冗談としてではなくいつて態度を崩さない。

後輩からしごとに関する声がかからなくなり、七〇歳を過ぎて、みずからも体力の衰えを実感する日はさみしい。とくに知人の思わぬ死報に接すると、テレビも見ず、新聞も読まず、終日、気分の晴れないこともあるといいます。惜しい知名人の訃報にもよく出会いますし。八〇歳で亡くなった同名の大島渚監督の死はことのほか骨身にこたえたといいます。

独居を愉しむ「君子的引きこもり」の境地にはなお遠いことは自覚していますが、大島さんは自分では幸せな「隠退ウーピーズ」（豊かな高齢者層）だと思っているそうです。

「ウーピーズ」などと勝手にヨコ文字で自得したところで、父祖伝来の土地の一部を切り売りして、億単位の資産を得て安全圏にいる都市近郊の「金満農家」とは違って、たかが「一園農民」にすぎませんから、日本経済の急降下が起こって頼みの資産が吹き飛んでしまうことのないことを願って暮らしているといいます。

大島さんは明日もまたいい日であるようにと日また一日をていねいに迎えて過ごす「一陽来復」型の高齢者。

だから御用学者と財務官僚がさまざまな手法で高齢者の資産を切り崩す政策を取り始めたのが気がかりです。官僚のそんなやり口には、

「後人としてあるまじき行為！」

と不満顔が似合わない大島さんも不満を隠しません。といっても「引きこもり」に徹した生き方を変えるつもりはありませんから、思いのほか早々とやってきた「高齢期じり貧人生」とつきあう覚悟だけは固めています。それでもひそかに自分はなんとか安全圏にいると確認しているようです。

せめて大島さんくらいは「基本法」の前文に掲げるような生涯を安穩に過ごしてほしいのですが、このままの状況で推移するとすれば、いまは自分は安全圏と考えている人びとが生涯を安穩に過ごしきれぬかどうか。ましてや「現役六五年」をすごし終えて、平均的人生をよしとして過ごしてきた高齢者の七〇%までが、このままで将来も平安平凡に過ごしきれぬと感じているようですが、このままではそう言い切れない事態が想定されるのです。

「ほどほどの赤字人生」が男の美学

相川進一郎さんは、このままだとかなりきびしい高齢期を送らざるをえなくなることには、だれよりも自分がわかつているといいます。

父親の後を継いで中小企業の経営者になった「生涯現役の跡継ぎ二世」です。二〇年ほど前、平成になってすぐに四〇歳代なかばで二代目経営者となりました。ですから「六五歳定年」という区切りはないのですが、会社のほうには「七〇年破産」という結末があります。

父親が元氣だった高度成長・繁栄期といわれた時期も、やたら忙しかっただけ。とりわけ家

が豊かになったわけではなかったといえます。周囲の人びとが世間並みに暮らせるようにと、父親がひたすら心を砕いているのをみてきました。家族の贅沢にもきびしかったから、社員の子をうらやましく思ったこともしばしばあったそうです。

父親は経営者として教育（学歴）がなかったことを生涯の負い目と感じていたから、「おまえは大学を出にゃいかん」

と口癖にいつて、家業の手伝いを強いず、子どもが高等教育を受けて意気揚々とした人生を送ることに期待しつづけたといえます。晩年には「親孝行進学」で大学を出た息子が期待していたほどの人生を歩んでいないことを知ることとなったのですが。

「MADE IN JAPAN」の質の良い日本製品を底辺でささえる会社に誇りをもっていた実直な父親と労苦をともにする社員に囲まれて育ち、いま二代目として跡目を継いでいる相川さん。見回せば、わが国の戦後の復興期からいわゆる高度成長期（一九五五〜七三年）のころに設立され活動した中小企業には、相川さんのような跡継ぎ二世は決して少なくないはず。

同じような経緯をもつ機械製造の大企業の子会社（親会社ではないが海外進出をして元氣）から下請け品を求められれば、資金繰りをしては設備投資を重ねて製品を納めてきた孫会社である相川工業所は、見方によっては重ねてきた設備投資の借入金返済するために働いてきたともいえます。もちろん借入金も父から引き継いでいる負の資産です。

父から引き継いで間もなく迎えた世紀末の「列島総不況」。相川さんのような小さな事業所も

軒並みに襲った総不況の行く末を心配しながら、父親は世紀を越えることなく世を去った。

その後、一〇年余り。人を減らしながら景気回復を待ちつづけてきました。下請け（孫請け）に徹して生涯現役で亡くなった父親には申し訳ないが、ここ五年ほどの経緯からみて、もはや自力での再生の手立てはないところに来たといえます。かつてはそれほどの重さには思えなかった一〇〇〇万円単位の借入金を返済する余力が出ないのだそうです。負担が年々重くなるばかり。朝の寝ざめがつらいといえます。

*「先憂後楽」型の高齢者層

「生涯現役の跡継ぎ二世」の相川さんが引き継いだ父親のもうひとつの遺産である草野球リーグ名門チーム「I」も、社員が減って紅白戦が成り立たなくなりました。

「男というものは、きちんと仕事をすれば、ほどほどの赤字暮らしをするもんだ」

というのが、父親がよく口にし、自分も受け継いだ相川さんの負け惜しみ半分の人生哲学です。前出の藤谷さんの会社の先輩と同じ生き方です。

周辺の人より先に豊かになるというのが父親の「先憂後楽」の考え方で、親父は先憂ばかり多くて後楽の少ない人生を、日また一日迎えては送って、働きづめで亡くなりました。

製造ノウハウを持つ親会社は、みずから生き残るために、まずは主要なパーツ以外は中国や東南アジアの途上国に生産拠点をシフトしました。その後、製品化まで海外となつて、子会

社はともかく孫請け企業は回復どころではなくなりました。「ほどほどの赤字人生」といつてられないほど、朝起きるたびに借金の重みが増し、倒産の日が刻一刻と近づいてくるのを感じているといいます。

独自でのしごとにもドがたたず、下がりつづけた担保資産との見合いの末に、遠からず不良債権の処理対象として銀行から見放されるでしょうが、こちらの意欲が萎えるまでは、会社と社員と家族を守るつもり。金融緩和で潤った銀行は、いまは二の足を踏んでいます。日本での焦げ付き融資を清算して海外にむけたいという意図は見え隠れしています。それほど長い猶予期間があるとも思えない。分かっているのですが、独自の道が開けないのです。

さしたるぜいたくもせず、父と同じ「先憂後楽」の心意気を貫いて、輝く「二世の星」(父の口ぐせ)たちを見上げながら、自分だけは沈没船の船長よろしくどこへでもゆくつもり。戦後に父の時代にゼロから始まって自分の時代にゼロに終わる七〇年余の会社人生を、相川さんは納得しているようです。それはそれで昭和時代の一隅を輝いて生きた「二代企業」の終始のつけ方としてです。

まことに残念ですが、相川さん。あなたは「先憂後楽」に徹してきたゆえに、「高齢社会」を豊かにする「高齢化用品」のメーカーでありユーザーであるという点でも「後楽」の人のようです。まず自分を豊かにする自社製品への「先楽」の発想がゼロなのではないですか。

「相川さんの会社が蓄積した技術力は、この国の高齢者が必要とする新製品の製造には活かせ

ないのはいですか」

「孫請けだったわが社ではむずかしいですね」

返答は明快ですが、発想をかえて、感性の高い高齢者の暮らしを豊かにする日用品のために技術を活かして、自力製品で活路を開くことができないものか。そういう中小企業の成功事例をあちこちで聞くのですが。

相川さんが父親以来の下請けの現場で、良質な製品の製造に努めて獲得した製品化の完璧主義を崩すことなく、なんとかして仲間と知恵を出し合って、中小企業の自立の道を切り開いてほしいのですが。三代目に「先憂後楽」の心意気を引き継げるような。

中小企業の保持する熟練技術を駆使した「高齢化優良国産品」MADE IN JAPAN が再登場する時期がそまできているように推察されるのです。

同時多発で湧き上がるような高齢化用品への要請が交错して、熟練技術者の技術と経験が「高齢化新製品」の製造に活かされる。高齢者層の生活感性が満たされる製品の数々。同時多発の内需で新たな経済活力が生まれることになります。

相川さんの寝ざめが軽く明るいものになるような。

「貯蓄ゼロの日」へのカウントダウン

給与所得者は二〇一三年四月からの「改正高年齢者雇用安定法」の施行によって、定年が六

五歳まで延びました。企業側は営業利益でないこの出費増を金融緩和により生じた内部留保によってこの急場はしのいでいるようです。国からの要請があっても昨今の経営トップはリスクの想定される新規起業には積極的には動かない。リスクを負わないこと、内部留保を確実にすることがいまの経営トップの心得であるためです。だから退職を前にした高齢社員は、新たな事業を考えたり実行する場を与えられることなく、業務替えになったり収入減を余儀なくされながら、「定年待ちの日々」を送ることになります。

多くのサラリーマンは、なんとか定年まで勤めて、行く末が不安な程度の退職金と年金を合わせ計算しながら、家族とどう暮らすかに思い悩むことになるわけです。

横田博さんはそのうちのひとり。技術畠ひとすじに四〇年を会社勤めですごして、改正安定法にはかからずに定年退職しました。途中で転職など考えたこともなかったし、退職後も前職を活かしてできる仕事があればと願ってききましたが、この高齢者リストラ時代。「ハローワーク」（公共職業安定所）にいつて登録はしてきましたが、該当するしごとは見つかりません。再就職をあきらめた失業率には計算されない潜在的求職者を思えば、失業率5%以下など信じられない数字に思えます。

横田さんは、少ない退職金から住民税（これが大きい）を支払って急に重量感を失った貯蓄から、さっそく定期的収入が減った分への「貯蓄取り崩し」がはじまりました。これまでほとんど病気らしい病気はせずに健康で過ごしましたから、給料天引きの健康保険料の負担は感じ

ないできましたが、年金からの健康保険料の支払いは大きい。諸税が月々追いかけてくる。先行きの不安はすでに身辺に渦を巻いているようです。

横田さんは多数派である「戦々兢兢」型の高齢者のひとり。

「退職したあと、いや、その前から選択的支出の削減に努めています」

と横田さんはいいます。旅行や観劇、書籍・雑誌の購入、外食などを減らしてそれでも生活用品の値上げや日常経費、医療費（薬代）や税負担など「基礎的支出」が確実に増えることから、将来の家計の先行きはとどなくきびしい。だから技術は活かせなくとも赤字を埋める程度のしごとをしたい。五万円から八万円がいい。先述の大島さんのお小遣いとほぼ同額です。「私企業でしたし、さして優れたことはしてこなかったかもしれないけれど、必死で働いてきたつもり自分までが、高齢者になって見捨てられることはないでしょう」と

と横田さんは国の将来の施策を楽観的に理解しています。

*「戦々兢兢」型の高齢者層

長生きをすればいつかまたわが家に「スイトン時代」がやってくるかもしれないが、それでも平和なら生きられるだろうと横田さんはいまは楽観的に思っています。

不安のはじめは財政負担を軽減するための「公的年金」のカット。実施された「消費税増税」。長年つれそってきた妻の持病とそれにちなむ出費。いつわが身に降りかかるかもしれない「医療

費」の自己負担。企業業績の不振による「企業年金」の減額。あと三年つづく住宅ローン。そしていつまでも独立できない子どもたちへの支援出費。実は「ペイオフ」（預金の限度内払い戻し。一〇〇〇万円）に届かないほどの預金額だから、長生きなどしなくとも途中で必ず訪れるにちがいない「貯蓄ゼロの日」への不安。

「貯蓄ゼロの日」へのカウントダウンは、すでに始まっています。「薄氷を履む」ような日々がこれから長く続くことになるのです。

通信機器の優れた技術者であり、つい最近まで会社の主力製品のひとつになっていた機器の共同発案者。といって横田さんは、社員が企業内で発明対価（成果主義）を求めるのは違うと思うてきました。青色発光ダイオード（LED）で企業から三億円を得て、ノーベル物理学賞まで得た中村修二さんは天才で特別な人だから許される。自分がかつて会社から受け取った企画奨励賞が三万円であったことに不服はないといいます。それも得た次の日にはみんなの歓送迎会のための部会費になったことも当然とと思っています。

「将来への希望はしごと現場の活力にある」

と技術者であった経験から横田さんは確信しています。

自分は細身だったのでヘルメットは似合わなかったですが、NHKの人気シリーズだった「プロジェクトX・挑戦者たち」で、仲間と工夫を重ねて事業に貢献した人びと、いかにもヘルメット姿が似合う人びとの姿をみ、話を聞くのが楽しみでした。だれもが成果を自分のものとせ

ず、みんなの協力の結果だという技術者たちがこの国の骨格を支えているという信念に今も変わりはありません。

番組が終了してずいぶん経つというのに、横田さんの胸の奥に刻まれたように、気がつくといまも、中島みゆきが歌ったテーマ曲の一節、

「♪つばめよ、地上の星はいま何処にあるのだろう」

が繰り返し体の中を流れています。仲間との苦闘のあとを思いながら、溢れる涙をじっとこらえていた技術者たちの顔・顔・顔はいまも忘れられません。

Ⅳ 大正生まれの人びとへのオマージュ（賛辞）

かあさんは許さない

青木志げさんは、関東大震災があった大正一二年（一九二三年）一二月の生まれ。

「卒寿九〇歳」をむかえた年の終戦の日選ばれて、長女の俊子さんに連れ添ってもらい、地下鉄に乗り、九段下から坂を登って、しっかり歩いて日本武道館での「全国戦没者追悼式」に参加しました。

先の戦争で次兄と夫を失った青木さんには、毎年聞いてきた天皇陛下のおことば、「ここに歴史を顧み、戦争の惨禍が再び繰り返されないことを切に願い・・・」には心に沁みる実感があつたといいます。次兄と夫のふたりは英霊として靖国神社に祀られています。しかしA級戦犯

を同時に祀っている靖国神社へは青木さんは参詣しません。昭和天皇と同じ立場に納得がいくからです。あの戦争は軍人政治家であっただれかが責任をとらねばという西欧や中国の側に論理に整合性があり、日本政府がいう亡くなればすべてが英霊というわが国の論理には国際的に無理がある思っています。

父が男性の戦争の論理として次兄の死を許容したとき、
「かあさんは許さない」

と、生命を生み育てる女性の側からの告発として母は、志げさんに聞こえて父には聞こえない声でいったといえます。

長兄は震災の日に小学校へいったまま行方知れずになりました。二人の子どもを「天災人禍」で失った両親とよく似た状況にいま自分が立ち合っているのではないかと青木さんは感じています。「戦後」が平和ではなく「戦前のはじまり」として。いつか遠い日に何の責任もない母親から戦場でわが子の命を奪い取るシーンが見えているといえます。

今とよく似た世相があったというより今がよく似せられて動いている世相であること。昭和のはじめのころのことで、子どもころの記憶とも重なってよみがえると青木さんはいいます。

関東大震災からの復興がつづくなかで、世界恐慌のあおりを受けて不況に。失業者が東京の街にあふれて、閉塞感が街の隅々にわたる。政党政治への失望がことあるごとにいわれ、国家改造（昭和維新）へと青年たちの意思がささくれ立つ。

中国大陸では関東軍が「満州事変」を起こし、巷に熱狂型の世論が湧きたつなかで、挙国一致で軍国化がすすみ、国際的孤立が拍手で迎えられる。今とよく似たリフレ金融緩和（当時は財閥の救済）。情報の統制、売れるが勝ちのマスコミ。

そしてエロ・グロ・ナンセンス。

青木さんはそんな時期に生まれた四人の子どもの末っ子の長女として育った。両親は明るい将来を約束できなかっただろうが、暗い家庭ではなかったと記憶している。小さいころは「童謡」で過ごしたが、そのうち兄たちといっしょに「軍歌」を歌い、戦争ごっこに混じって遊んだ。

子どもたち（小国民）の意識と暮らしの振り子が、童謡（家庭）から軍歌（国家）へと大きく振れていく時代。雪の二・二六事件。そして国家総動員へ。空襲、疎開、竹やり訓練そして空襲、敗戦・・・。

先の戦争の敗戦と惨禍の代償として得た「平和」の時期を七〇年、日又一日、必死にすごしてきて、今、次の戦争への予兆を感じる青木さん。

進み出したら引き戻せない「戦争へのプロセス」を、この国はまたたどることになる気配。戦争へとむかったら決して戻らない振り子。

「歴史は学ばない者によって繰り返す、学んだ者によって繰り返す」

軍国主義の戦前に歴史を教えた父親は、平和主義の戦後に歴史を教える娘に、歴史（戦争）についてそう繰り返していったといいます。

*再演「亜流歴史劇」のプロローグ

衣装を替えた登場人物たちによって「歴史悲劇」の再演ということになるのではないか。

いままさに日本発の恐慌すらありうる経済状況。マイナス金利。下流一〇〇〇万家計への三万円ずつのお恵み。閉塞感、財政難、デフレ脱却のための想定外の金融緩和による格差の拡大。

軍国化と国防軍礼賛。「尖閣問題」と中国国際網からの孤立の気配。そして「歴史から学ぶ」想像力が感じられない政治リーダー。拙速の「特定秘密保護法」の成立、「集団的自衛権」の閣議決定。ペーパーからデジタルへのマスコミ情報の混乱、国家や軍国化に抗する言論への圧迫。絶叫型の世論、大衆受けする映像（テレビ番組）、エロ・ナンセンス。

両親が直面していたとよく似たシーンに立ち合っているのではないか。一つひとつのこともりも世相としてのありようの類似性。いずれは回避する力を持ちえなくなつて、不幸な結末を負うことになるのは、何も知らない将来の母親と子どもたち。

青木さんが父親から繰り返し返された「歴史から正しく学ぶ」というのは、国際的に孤立（とくに近隣諸国）しないこと、国防を国防軍に頼らない国民意識の醸成、冷静な世論をつくること、そして何よりも国民の中に格差をつくらないことだといえます。

現政権はそのどれに対しても反していて、歴史を危うくしているといえます。それでも安倍総理は女性の登用によって内閣支持率をせり上げています。

「でも、かあさんは許さない」

遠い日に母から聞いたことを青木さんは傍らの娘の俊子さんにいいます。

「わたし人生に二度も放り出されたのよ、政府の政策不在によって」

という友人の佐藤君江さんの話を聞いた。

一度目は子どものころ、大陸の荒野で「みずから生きよ」として放り出され、二度目は介護も受
けずに一人暮らしのまま、「みずから生きよ」として放り出されているというのです。

「でもいいのよ、志げさんもわたしも口ずさむ大好きな童謡がたくさんある」

青木さんと佐藤さんを慰め支えているのは、将来が安心できる国の政策ではなく、母親から
教わった童謡なのです。軍歌のなかで失わなかったやさしい心を支えてくれた数々の童謡。

「春の小川」「鯉のぼり」「海」「朧月夜」「故郷」「浜辺の歌」「宵待草」「背くらべ」「靴が鳴る」

「叱られて」「七つの子」「赤とんぼ」「砂山」「からたちの花」「あの町この町」・

そして「出征兵士を送る歌」「同期の桜」・

戦場へ兵を送ること。天皇のお立場では、兵を送る場合には常に「有征無戦」（征有れども戦
うことなし）を前提にして裁下されるはず、と青木さんはいいます。戦場へ兵を送っても双方
に犠牲者が出ないように作戦をおこなうことが「有征無戦」です。大義によって立つのであれ
ば、戦闘をおこなわなくとも制圧して勝利を得ることができるといのが前提にあります。正
義の兵であり戦わずして勝つには、兵士もまた和平を願う「有志之士」でなければならぬは

ずなのです。

平和主義の「憲法」を持つ国からの軍隊として送られ、イラクの「戦場」で一兵も損うことなく任務を成し遂げた「日本国の自衛隊」。その稀有な国際的イメージを変容させる「集団的自衛権」についての「閣議決定」がなされた。お互いに若い命への救済と平和への手段を語らず、戦場での協力による抑止力ばかりをいう内閣。信じられますか。

そんな話を佐藤さんと一回りしてから、青木さんは娘にもう一度、
「でも、かあさんは許さない」

今度は自分にも言い聞かせるように青木さんはきっぱりといいました。

「良妻賢母」に育てられて

「良妻賢母」と「賢妻良母」。

日本では「良妻賢母」がふつうですが、中国では「賢妻良母」といいます。

これは語順の違いというばかりでなく、両国の女性観や近代の女性の果たした役割の違いが認められている成語なのです。

日本の場合、明治維新のあと、西洋留学から帰った啓蒙家が女子教育の指針としました。「富国強兵」で働く男子を支えて内助に努めて「良妻」となり、子女を薫育して「賢母」となるという目標が定着したからです。初代の文部大臣であった森有礼は、「良妻賢母教育」こそ国是とすべき

とっています。

一方、中国の場合は日本に留学した康有為や梁啓超が「賢母良妻」教育として移入したのが定着しませんでした。生涯名を変えず、男女がともに家を出て働き、ともに子育てをし、平等の社会的役割を果たしてきた革命中国では、毛沢東主席が「女性は天の半分を支える」（婦女能頂半边天）といって女性の活躍をうながしたように、自意識を持つ「賢妻」であり優しい「良母」となることが志向されたのです。

優先順は違っても両国ともに近代化のために「賢良な妻と母」を必要としたということは確かです。

*大正生まれの母たちの人生

日本の男性は「忠君愛国」で育てられ、女性は「良妻賢母」に育てられ、男性は戦場に赴き、女性は銃後を守りました。

青木さんは夫を失い、次兄を失い、家を失った末に与えられた「男女同権」「国民主権」の中で、新たな希望を託して子育てをし、戦争をしない国を支えてきました。ことばには出しませんでしたが、両親はもっと過酷な記憶を心のうちに秘めていたにちがいないと思っています。

育ててくれた亡き父母の恩を思う「哀哀父母」（哀哀たる父母、『詩経「小雅」』）ということばが古くから言い継がれてきました。みずからその労苦を知るころには父母はすでにこの世

にはいなかったからです。

いま史上にまれな長寿時代。「一人暮らし」の女性の中には、戦争で夫を失ったあと戦後の労苦に耐えて母一人で子どもを育て、「平和」を守ってくれた大正生まれの母たちがたくさんいます。生きているうちに親孝行が可能になりました。

そこで「哀哀父母」ではなく「愛愛父母」という新しいことばが日本から生まれます。生きているうちに恩返ししようという明快さが「愛愛父母」にはあります。『日経新聞「日経プラスワン」』が、二〇一四年の目標や決意をあらわす「四字熟語」を募集する企画を立て、その「人間関係」編に寄せられた応募作のなかから「傑作」として選ばれたのが「愛愛父母」でした。哀哀から愛愛への展開も語感もよく、何より現在の世相をとらえてあたたかい。どうか「一人暮らし」の母（もちろん父も）をこの新四字熟語「愛愛父母」の証としてたいせつにしてください。

大正生まれの人びとへのオマージュ（賛辞）

大正生まれの人は今、平成二九年〓二〇一七年には九二〓一〇六歳です。

先の大戦後にゼロから始まった人生なのだからゼロに帰ることを厭わない心の持ち主です。独りで暮らして「孤独死」だって厭わない人びと。

大正（明治四五年〓大正元年〓一九一二年七月三〇日から大正一五年〓昭和元年〓一九二六

年一二月二五日）生まれの人びとは、男性も女性もだれもがたいへんでした。

男たちは「富国強兵」教育の下で育てられて、大陸や太平洋の戦場で戦って終戦の昭和二〇年一―一九四五年には二〇―三四歳。生き残った者たちはこんどは「企業戦士」となって、死んだ者、傷ついた者の分まで働いたのでした。

女性たちは「良妻賢母」教育で育てられて、銃後をまもり、父や夫や兄弟を失い、戦後は子どもを育て、戦禍の記憶を胸の深くに閉ざして、身をもって平和を伝えてきました。前説の佐藤君江さんのように、かつては子どもころに中国東北で「自ら生きよ」と放り出され、いままた年老いて一人暮らして「自ら生きよ」と二度も放り出された人もいる。

力をつくして高度経済成長を成し遂げた大正生まれの人たちは、昭和五〇年一―一九七五年には五〇―六四歳でした。

*働きづめに働いた人びとの本音

そのころ次の歌が歌われました。

「大正生まれ」 小林朗 作詞 大野正雄 作曲

1番

♪大正生まれの俺達は 明治の親父に育てられ

忠君愛国そのままに お国の為に働いて

みんなの為に死んでゆきや 日本男子の本懐と
覚悟は決めていた なぁお前

2 番

♪大正生まれの青春は すべて戦争（いくさ）のただ中で
戦い毎の尖兵は みな大正の俺達だ
終戦迎えたその時は 西に東に駆けまわり
苦しかったぞ なぁお前

3 番

♪大正生まれの俺達にや 再建日本の大仕事
政治、経済、教育と ただがむしやらに三十年
泣きも笑いも出つくして やつと振り向きや乱れ足
まだまだやらなきや なぁお前

4 番

♪大正生まれの俺達は 五十、六十のよい男
子供もいまではパパになり 可愛い孫も育ってる
それでもまだまだ若造だ やらねばならぬことがある
休んじやならぬぞ なぁお前

しつかりやろうぜ　なあお前

「大正生れの歌（女性編）」 小林朗　作詞　大野正雄　作曲

1 番

♪ 大正生れのわたし達　明治の母に育てられ

　　勤労奉仕はあたりまえ　国防婦人のたすきがけ

　　みんなの為にとがんばった

　　これぞ大和撫子と

　　覚悟を決めていた　ねえあなた

2 番

♪ 大正生れのわたし達　すべて戦争（いくさ）の青春で

　　恋も自由もないままに　銃後の守りまかされた

　　終戦迎えたその時は

　　たのみの伴侶は帰らずに

　　淋しかったわ　ねえあなた

3 番

♪ 大正生れのわたし達　再建日本の女房役

姑に仕え子育てと だがむしやらに三十年
泣きも笑いも出つくして
やつと振り向きや白い髪
それでもやらなきや ねえあなた

4 番

♪ 大正生れのわたし達 五十、六十のいい女
子供もよいパパママになり 可愛い孫のお守り役
いまでは嫁も強くなり
それでも引かれぬことがある
休んじやならない ねえあなた
しっかりやりましょ ねえあなた

作詞者の小林朗（こばやし・あきら）さんは大正一四年の生まれ。二〇〇九年二月二日に亡くなりました。

「大正生れ」の歌は一九七六年に、「大正生れ（女性編）」は一九七九年にテイチクからレコードが出されています。

大正人の優れた業績を垣間見るために、少しだけ知名人をみてみましょう。二ページほど紙

幅をいただいで。**赤色**は平成二四年以降に他界した方、**青色**は現存の方である。

一九一二／元年 一／太田薫 二／双葉山定次、三／都留重人 四／**新藤兼人** 五／林伊佐緒
六／大友柳太朗 八／田島直人、福田恆存 九／成田知巳、松下正治 一二／木下恵介

一九一三／二年 一／荒正人、田中英光 二／中原淳一 三／尾上松緑（二代）、金田一春彦、

三・二八**篠田桃紅** 五／森繁久弥 六／杉浦民平 九／家永三郎、丹下建三、豊田英二、**吉田**

秀和 一〇／織田作之助

一九一四／三年 一／深沢七郎 三／丸山真男 五／前畑秀子 六／**呉清源**、霧島昇 七／木

下順二、笠置シヅ子、八／後藤田正晴、平岩外四 九／宇野重吉 一一／田村魚菜

一九一五／四年 一・二**むのたけじ** 二／二葉あき子、水の江滝子、野間宏、小島信夫 三／

濱谷浩 四／飛鳥田一雄 六／和歌森太郎 九／高川格 一一／春日野八千代

一九一六／五年 一／福武哲彦、岡晴夫 三／有島一郎、五味川純平、斉藤茂太、岩谷時子 四

／木下忠司 七／坂田道太、鶴岡一人 八／藤村富美男、五島昇 一〇／渡久地政信

一九一七／六年 一・一一**日高六郎** 一・一二**秋山ちえ子**、中村歌右衛門 二／沢村栄治、山

田五十鈴、横山泰三 三／柴田錬三郎 四／島尾敏雄 七／浜口庫之助 一〇／角川源義

一九一八／七年 一／小暮実千代 二／池部良 三／中村真一郎、福永武彦、升田幸三 五／

田中角栄、五・二七**中曾根康弘** 七／堀田善衛、近江俊郎 九／高橋圭三 一二／高峰三枝子

一九一九／八年 一／**田端義夫** 一・二三**園田天光光** 二やなせたかし 三／水上勉 六／岩

波雄二郎 七／長洲一二 八／大野晋 九／加藤周一、九・二三／金子兜太 一一／佐治敬三
 一九二〇／九年 一／長谷川町子 二／山口淑子 三／川上哲治 四／三船敏郎 五／森光子
 五／安岡章太郎 六／秋山庄太郎、梅棹忠夫 七／竹内均 一二・二四阿川弘之
 一九二一／一〇年 一／谷桃子、吉田正、盛田昭夫 二／庄野潤三、大松博文 三／貝谷八百
 子 四／犬養道子 七／藤原弘達 一〇・一三塩川正十郎 一二／山本七平、五味康祐
 一九二二／一一年 一／橋川文三、二／三根山隆司、安川加寿子 三／山下清、和田寿郎 四
 ／岩井章、三浦綾子 五・一五瀬戸内寂聴 六・一八D・キーン、六／鶴見俊輔 七／丹波哲
 郎 八／石井好子 九／塚本邦雄、九・一二内海桂子 一〇／別所毅彦 一二／大下弘
 一九二三／一二年 一／池波正太郎、三國連太郎 三／大山康晴、田村隆一、遠藤周作 四／
 四・一九千宗室 五／五・二四鈴木清順 八／司馬遼太郎 一一／白井義男、一一・五佐藤愛子
 一九二四／一三年 一／佐藤亮一 一・一六京極純一 二／石本美由紀、岡本喜八 二・一八
 陳舜臣、越路吹雪、淡島千景 三／安部公房、三・三村山富市、三・二五京マチ子、高峰秀子、
 高田好胤 四／團伊玖磨、吉行淳之介 六／芦野宏、六・二五丹阿彌谷津子 一〇／石橋政嗣
 一一／山崎豊子、青田昇、一一・一四鈴木登紀子、吉本隆明 一二／鶴田浩二
 一九二五／一四年 一／三島由紀夫 二／栃錦清隆、二・二七豊田章一郎 三・一二江崎玲於
 奈、三・二〇梅原猛 五・一〇橋田寿賀子 六／藤沢秀行、加藤芳郎、六・二八大関早苗 七
 ／芥川也寸志、藤沢嵐子、七・二三色川大吉、八・二一篠原一、丸谷才一 九／杉下茂、辻邦

生 一〇／中村雄二郎、一〇・二〇野中広務、一一・六桂米朝
一九二六／一五年（一二月二五日）一／一・八森英恵、いいだもも、一・一二三浦朱門 二
／榊莫山、松谷みよ子 三／萩原延寿、犬丸一郎、三・一五辻久子、三・二〇安野光雅、加古
里子 四／宮尾登美子 七／奥野健男 八／古田武彦 九・一／石井ふく子、星新一、今村昌
平、九・一九小柴昌俊 一一／根本陸夫、一一・三〇中根千枝

*第六章 ニッポン発二一世紀オリジナル

「三世代平等型長寿社会」の達成へ

「歴史的正午」の光を浴びて

わが国の高齢者のみなさんは、いま「歴史的正午」の明るい陽射しを浴びて暮らしています。「歴史的正午」の光、感じていますか。

そういわれても、正午の陽射しはたしかに明るいけれど、際立ってどうということはないさうです。身の周りを見、国の統計で「高齢化率」（六五歳以上の人口比率）が二六％に達してお世界最速で高まりつづけていると知らされて、「高齢者社会」で暮らしているということは納得できても、新しいしくみとしての「高齢化社会」構想が示され、実現にむかって進んでおり、そこに参加しているという実感がなからずしょう。

「高齢化」時代に見合う高齢者参加による「社会の高齢化」。

「超高齢化」（人口の四人にひとりに）時代に対応する三世代参加による「長寿社会」の創出。そういう「高齢化社会→高齢社会→長寿社会」構想が国民的レベルで納得されて進められていて、それが国際的レベルの先行事例として注目されつつあるという実感が当事者の高齢者層にはありません。個人的に迎えて送る日々をつつがなく過ごしているだけで、周りの老人たちをみても変わったようすもない。正午の陽射しはいつもの通りに明るい、別段際立って明る

く感じることもない。

そんな国際的モデルになるような「構想」は、この国のどこにあつて、だれが旗振り役で実行しているのでしょうか。ましてや国際比較の意識に慣れていないこの国の大多数の高齢者は、みずからは判断のしようもないことでしょう。

歴史的にみるとこれまでの日本は、文化も暮らし方も海外からさまざまな優れたものを受け入れて、この国の風土に馴染ませて、この国で暮らすみんなの人生を等しく豊かにしてきました。国境を接するヨーロッパ諸国とは大いに異なつて、極東の島国からその成果を海外に発信するなどということは、ほとんど経験したことがなかつたといつていいのです。

ここで「歴史的正午」というのは、それらの優れた舶来物を宝石鉱脈として蓄積してきた宝島・ジパングから、いま成果物として世界に発信する時がきているということなのです。

といつて一般庶民がそんな国際化を意識して暮らすなどということはこれまでになかつたことですから、うっとうしくてまともにもできることじゃありません。すでに高齢者の暮らし方あれこれが国際的な注目を受けているなどといわれたら、これまでと変わりなく暮らせなくなつてしまいます。

いったい何が？

何も意識しないで暮らしている人が圧倒的多数であるなかで、いったい何が国際的に五彩色のオリンピック・ライトを浴びているのかというと、どうやらとくに際立つものではないよう

なのです。

たとえば、高齢者が多くなっているにもかかわらず、暮らしへの支援が全国どこでも同様に行なわれていることが、外国からみると驚きであり関心のマトなのです。

どこでもふつうに見られるふつうの生活感性をもつ高齢者による暮らしぶりやそのためのさまざまな「モノ・サービス」(これが熟成したものにみえる)や、異なった知識や技術や経験をもつ人びとが集って語り合う「居場所・通い場所」、そして地域での包括支援センターや高齢者同士の互助の「支え合い」や「世代間の交流」など、どれもすでに身の周りにあるもので、実感としてはむしろ不足ぎみや延滞ぎみである日常的な事例なのです。

そこにいま国際的ライトが当たっているというのが、「歴史的正午の光」の実態であり、「クール・ジャパン」の実景なのです。

たとえば、モノ(日用品)についてはどうでしょう。

世界中から生鮮野菜がやってきていますし、アジア途上国産のニッポン・ブランドの百貨商品が品不足を起こさずに流通していることも驚きのようですが、同じ用途の地産優良品(Older Person's Goods OPG)があって生活を豊かにしていること、これが途上国の人びとからみると超がつく驚きなのです。

また気軽に通えるカフェや居場所はそう多くありませんが、それでも高齢者の笑い声(とくに女性)が絶えない居場所は各所に見受けられますし、日ごろの互助の「支え合い」は国際的

にみてマネができそうにないレベルのもののようにですし。

世代間では亀裂が広がるようなできごとがニュースになる世情ですが、若い人の高齢者への敬愛意識は希薄になったとはいえ、ごく自然なすがたで身につけていますし。

外国からの人が自分の目でみて、こんな驚きを率直に話したら、日本の高齢者からは、「見方が浅いですね。地域には知識・技術をもっている人材がいるのに活かされていないし、元気な高齢者は活動に前向きなのに社会の風潮は参加を求めない逆風行舟が実態なのです」といった答えがかえってきたといいます。

逆風行舟？

そんな風はどこから吹いてくるのでしょうか？

むろん、永田町・霞が関のあたりから巻いて吹いてきます。

あのあたりでは、年々の予算配分の多いことが重要ですから、医療・介護・年金といった「支えられる高齢者」むけの嵩高が多いところには関心が高いですが、予算に関わりをもたない自立して元気な高齢者に対しては「どうか、ご随意に」とばかりに軽視しているのです。

ところが先進的平和国家の「高齢化」の検証にやってくる途上諸国の人びとは、善意から無視や軽視ではなく高齢者をもつ潜在力の「温存」として評価します。いまさらながら宝島・ジパングの豊かさ、可能性に憧憬の思いを深くするようです。

*「長寿社会グランドデザイン」構想を掲げる

すでに繰り返し述べてきたことですが、大多数の高齢者が「社会の高齢化」をわがこととして認知するには、何よりもまず政治の側が動くこと。衆参両院で議論を尽くして、「日本長寿社会グランドデザイン」構想を決議して、国民に訴えかける時期にあるということでした。

その後に政・官・産・学・民の衆知をあつめて構想を具体化し、一般の高齢者層を巻き込んで実現をめざすことになりましたが、それを推進するのは政治の側の役割です。にわとりと卵の先後議論ではありません。

その核芯になるのが、内閣府の高齢社会対策担当大臣、あなたです。

今なら併任している加藤勝信・一億総活躍担当大臣、あなたです。

あの大震災があった二〇一一年、野田佳彦民主党政権の「高齢社会対策担当大臣」が「少子化」と併任の蓮舫議員だったことを、どれほどの人が知っていたでしょうか。蓮舫大臣のもとで、一〇月に有識者検討会（座長清家篤慶応義塾大学塾長）を立ち上げて、報告書を作成、その後、内閣官僚の検討を経て、翌年の二〇一二年九月七日に閣議決定をしました（このときは中川正春担当大臣）。二〇〇一年一二月の小泉純一郎内閣以来一一年ぶりの「高齢社会対策大綱」の再見直しました。

まことに残念なことですが、実務として改定「対策大綱」を練り上げ、改定した有識者と内閣官僚には重要性がいよいよ増している課題であると分かっていても、肝心の政治リーダーに

その認識がないことの証をここに見ることができません。国会議員の多くが高齢社会対策担当大臣がだれかを知らず、内閣府に専任官僚がない（併任ばかり）というのが実情です。

政策不在のままバトンをつないできた「高齢社会対策担当大臣」、最近は次の方々でした。

一九九六年以来、毎年閣議決定されて公刊されている『高齢社会白書』（内閣府刊行）の閣議への提出者をみると担当大臣がわかりませんが、平成二一年度版は小渕優子大臣、二二年度版は福島みずほ大臣、二三年度版は蓮舫大臣、二四年度版は小宮山洋子大臣、二五年度版・二六年度版は森まさこ大臣、二七年度版は有村治子大臣が閣議決定時での担当大臣となっています。連ねてみると明らかに「少子化・高齢化」を合わせて担当する人選であり、併任であり、それも「少子化対策」が主であることが知られます。

三年三カ月の民主党政権時代だけで九人の担当大臣がいました。

内閣府内部の扱いも「共生社会政策」の一分野として、内閣府政策統括官（共生社会政策担当）が担当しています。「高齢社会対策担当」の参事官や政策調査員がいるにはいますが、兼務だったりますから、「高齢社会対策」を担う太い導線が内閣府内に整っているとはいえません。内閣府内の主要な職務として扱われなくなってしまうて久しいのです。

「高齢化」を一過性のものとし、「少子化」を恒常的なものとする施策は、この国の将来を二重に誤ることになりませんか。

一〇年余の遅れを取り戻すには、どうすればいいのでしょうか。

まずは内閣府内に厚労省・文科省・通算産業省の関係部局をつないで「高齢社会対策」を担当する太い導線を形成して、高齢社会推進のしごとを進めねばならないでしょう。

世紀を通じた国際評価につながる「高齢社会対策」を最重視すべきときであり、もうこれ以上、国会議員がその重要性に触れないでいることは許されないので。

このままで推移すれば、今世紀の歴代首相と担当大臣は、政策不在の責任者として一蓮托生、歴史的責任を負うことになるでしょう。歴代の高齢社会対策大臣であった人びとすべての責任において、まずはだれかが政治の側を代表して、三四〇〇万人の高齢者にむかって、

「みなさんとともに日本長寿社会ブランドデザインを掲げよう！」

と呼びかけるときなのです。歴史的な雄たけびとして。

国際的に期待されている「日本高齢社会」創出への新たな烽火を掲げるべきときであり、時は切迫しているのです。

頼り甲斐がある高齢社会対策担当大臣（専任）が内閣府にどっしりと構えているようであれば始まらないのです。

二〇一七年は、野田佳彦内閣が二〇一二年九月に改定してから五年、「高齢社会対策大綱」の検討年に当たります。今回の「対策大綱」の検討は、「高齢社会対策」を最優先とする起死回生の歴史的ビッグ・チャンスです。もちろん野田さんも発声者のひとりです。

まずブランドデザイン構想の芯となる報告書は、しっかりと高齢学識経験者を加えて討議を

重ねて、「日本長寿社会」の骨格を示して、三四〇〇万人の高齢者に参加を呼びかける旗印として公開することが始まりとなります。

これは今世紀一〇年余の「高齢化」を検証してきた本稿から政治の側への渾身の訴えです。これを推進する旗振りリーダーの登場がかならずあるはずです。若手では高齢期実人生への理解が及びませんから、ここは現役の高齢議員か引退長老が背筋を伸ばして、出番をつくらねばならないところです。

これはこれまでの厚労省がフル稼働で実施してきた「高齢者対策」とともに、内閣府あげての「高齢社会対策」であり、両院の総意を込めた「長寿社会対策」であり、国民参加の総力をあげた「日本長寿社会」創出の歴史的事業なのです。政治の側が「一億・一」を持ち出すとき、その時々々の「国難」に遭遇しているという認識があるからで、それに対処するほんものの「一億総活躍」の場の形成をはからなければ克服できません。

これまで国会は「社会保障」の財源を確保する「高齢者対策」に終始してきましたが、これからは肝心要の「高齢社会↓長寿社会」の新しい姿を示して高齢者をふくむ国民全体に参加を呼びかける「高齢社会対策」に努めねばならないのです。

一九九八年に小渕内閣が「消費税」五％を導入したときに、「社会保障」のための完全目的税にするために、宮澤喜一大蔵大臣と談判をされた藤井裕久民主党顧問は、「そういう構想力は政治リーダーにはなかった」

と率直に述懐しておられます。もちろん当時の野田総理を支えておられた藤井さんの発言に、野田さんを含めて異を唱える政治家はいないでしょう。

ですから「憲法論議」は「国際紛争」ではなく「国際平和」のために議論を尽くすこと、それとともに、「日本長寿社会グランドデザイン」構想を合わせて議論して、堂々と世界にむかつて発信すること。それを要請し実行するのが、「平和憲法」のもとで過ごしてきたわが国の高齢者のなすべき国際的役割でもあるのです。

どこにも例のない「平和裏の先進的高齢社会」をどう成し遂げるか。そこにいたるプロセスは、いまアジア地域（高齢化途上国）をはじめ世界規模で注目されていることです。

それに応えるには、まずは「高齢社会対策基本法」制定二〇年（制定の時期も内容もよかつた）を機会に、経緯をかえりみて、だれもが理解できて納得できて実行できる「日本長寿社会グランドデザイン」構想を決議して公開し、国際的に発信することでしょう。

これが「歴史的正午」の光を意識することなのです。

「雄々しく立てんかな、この旗を！」であり、そうすべき時期なのに、そこへ向かおうとする意欲がなお政治の側に乏しいのです。そこでみなさんと衆口一詞、声を合わせて、

「日本長寿社会を達成する政治リーダーはまず一人立つべし」

「歴代の高齢社会対策担当大臣は不明を恥じてこの歴史的事業に参画せよ」と政治の側に要求しましょう。

消費税八％が国会を通ったあと、二〇一二年一月から二〇一三年八月まで「社会保障制度改革国民会議」（座長・清家篤慶応義塾大学塾長）が検討したのは、「医療・介護・福祉・年金・少子化」までであり、そのうち年金は結論を出していません。

つまり本格的な「高齢社会構想」の議論には踏み込んでいないままなのです。

座長を務めた清家篤塾長は、若き日に「高齢社会対策大綱」の制定にかかわり、その後、第三次の改定（二〇一二年）まで有識者会議の検討委員として参加しており、第三次の有識者会議でも座長をつとめておられます。だれよりも経緯を熟知しているのですが、前記の「国民会議」では座長でもあり多数意見を尊重する立場からか、本格的な「高齢社会構想」についての発言はされていません。

国際的・歴史的観点からいって、民間から専任で清家篤高齢社会担当大臣を登場させるくらいでいい。一九九五年の制定以来二〇年、「基本法」の目標にも清家さんの活動にも何の曇りもありません。四人にひとりに達した高齢者に清家大臣が呼びかければ大地は動きます。

慶応義塾の塾長も重要なつとめですが、国際的・歴史的事業である「日本長寿社会グラウンドデザイン」構想の検討と実現への清家塾長の参加には、一〇〇年を隔てて福沢諭吉塾長も、「しっかりとやりなされ」

と賛同されるでしょう。

「平和団塊」世代が長寿社会を体現

やや失礼とは知りながら、敗戦後の一九四七年～一九四九年に生まれた人びとを、ここでも「団塊の世代」と呼んでいます。一九七六年に作家の堺屋太一さんが『団塊の世代』を書いて、そのボリュームゆえの社会的影響を指摘して以来の呼び名であり、当人も含めてみんなが納得して用いることで流行語になったのですが、ずいぶん長命な流行語です。カタカナの「戦後ベビーブーマー」では実感においてとてまかなわれない。いまでも約六五〇万人というボリュームを保持しています。

ですが、本稿が用いているのは「平和団塊の世代」です。

同じく二〇〇万人を越えて生まれた一九五〇年と、少数とはいえ本稿の課題では決して存在を無視してはいけない終戦翌年である一九四六年生まれの一四〇万人の人びとを含んでいます。戦後の五年間で二世紀を迎えたとき一〇三七万人（二〇〇〇年一〇月）で、いま九七〇万人（二〇一五年一〇月）を数える戦後ツ子の人びとを指しています。

このアクティブ・シニア、高齢者ニューフェイスの「平和団塊」の人びとが、二〇二五年に七五歳に達して、なお「人生九〇年」をめざして創出する史上初の長寿社会が、「ニッポン発二一世紀オリジナル」の重要な支柱なのです。

「平和団塊」の人びとは、戦後七〇年余を先輩に引きまわされながら精いっぱい生きてきて、おおかたの人の髪は白くなりました。「戴白の老」（長寿者）です。

「戴白の老も干戈を睹（み）ず」

というのは、髪が白くなった老人すら人生に一度も戦争に出会わなかったという幸運を伝えるいいことばです。それは長く平和であった証であり、二〇世紀の後半の日本がそういう歴史に稀有な時代にあったことの証なのです。

戦後七〇年、戦争の現場を知らずに「戴白の老」となった「平和団塊の世代」のみなさんは、戦場はもちろん兵役すら知らずに、「平和」が当然のこととして「干戈を睹ず」に暮らしてきました。戦禍を知っている先人がいなくなったことで戦後が遠くなったぶん、次の戦争の戦前との間の休止符のフェルマータ（延長記号）の時期に生きているという感覚が弱まって、そして次にくるのが戦争へのリピートマーク。

外国からの政治的そそのかしを受けて、若い世代の人びとに、平和から戦争へという振り子意識が働くのは、歴史に学んで戦禍を胸中に蓄えることなく、歴史の繰り返しを選ばざるを得ないからにちがいありません。

次の戦前へとリピートする予兆。

そういう国内に生じた危険な芽を未萌のうちに摘んでしまうためには、「平和団塊」のみなさんが戦禍を知っている先人の胸中からわが胸中へと戦禍を受け継いで、「平和憲法」を護持して「制定一〇〇年」をめざすしかないのです。

*「平和団塊」のみなさんの横顔

「長寿」は人生にとつての普遍的な価値であり、そのための「平和」は普遍的な条件です。したがってわが国の先人が一九九五年に制定した「高齢社会対策基本法」前文の「長寿をすべての国民が喜びの中で迎え、高齢者が安心して暮らすことのできる社会」の形成は、個人にとつても国にとつても国際的にも納得のいく平和指向の文言です。

わが国の高齢者は、二一世紀の国際社会に向かつて平和を訴える「憲法第九条」と、長寿への尊厳をめざして社会改革を訴える「高齢社会対策基本法」前文というふたつの旗印を掲げて、ともに先人からの「心火」を引き継いで共有しているのです。

幸せにも幸せにも、戦後の「平和」のもとで生まれ、ともにひもじく貧しい時期に育ち、競って学び、勤めて高度成長を支え、新世紀には健常な高齢者となった「平和団塊の世代」のひとびとが、競って努めて「長寿」でありつづけること。そのことに上記ふたつの目標が託されているからです。

「平和団塊」のみなさんが、日本のそして国際的な「平和」を守らなくてだれにできますか。

国際的な要請と期待を受けて、「人生九〇年（六五―二五年）時代」の日本に国際的なライトがあたっています。ライトを浴びてひのき舞台に立つ「平和団塊」のみなさんの動向に、本稿もまた熱い思いで注目し、敬意をもってその創造的歴史的ステージを見守っているのです。

ここで「ニッポン発二一世紀オリジナル」の主演をつとめる「平和団塊」のみなさんの横顔

を、ほんのちよつとだけ紹介しておきたい。新聞・TVなどから勝手に選ばせていただいた方々ですが、どうかお恕しを願いたい。

一九四六（昭和二一）年生まれ・七一歳に。

仙谷由人（政治家） 鳳蘭（俳優） 松本健一（作家） 宇崎竜童（歌手） 美川憲一（歌手）
北山修（歌手） 新藤宗幸（政治学） 柏木博（デザイン） 岡林信康（歌手） 堺正章（TVタレント） 坂東真理子（官僚） 田淵幸一（プロ野球） 菅直人（政治家） 秋山仁（数学教育） 藤森照信（建築史） 倍賞美津子（俳優）・・

一九四七（昭和二二）年生まれ・七〇歳に。

橋本大二郎（政治家） 衣笠祥雄（野球評論） ビートたけし（TVタレント） 星野仙一（プロ野球） 尾崎将司（プロゴルファー） 西郷輝彦（歌手） 鳩山由起夫（政治家） 津島佑子（作家） 千昌夫（歌手） 上原まり（琵琶奏者） 荒俣宏（作家） 中原誠（将棋棋士） 小田和正（歌手） 北方謙三（作家） 金井美恵子（作家） 西田敏行（俳優） 森進一（歌手） 池田理代子（漫画家） 布施明（歌手）・・

一九四八（昭和二三）年生まれ・六九歳に。

高橋三千綱（作家） 輪島大士（大相撲） 毛利衛（宇宙飛行士） 里中満智子（漫画家） 赤川次郎（作家） 五木ひろし（歌手） 赤松広隆（政治家） 江夏豊（プロ野球） 都倉俊一

(作曲家) 沢田研二 (歌手) 上野千鶴子 (女性学) 井上陽水 (歌手) 鳩山邦夫 (政治家)
 (作家) 橋爪大三郎 (社会学) 糸井重里 (コピーライター) 由起さおり (歌手) 舛添要一
 (都知事) 谷村新司 (歌手) 内田光子 (ピアニスト) . . .
 一九四九 (昭和二四) 年生まれ・六八歳に。
 村上春樹 (作家) 鴨下一郎 (政治家) 林望 (国文学) 海江田万里 (政治家) 高橋真梨
 子 (歌手) 平野博文 (政治家) 武田鉄矢 (歌手) 高橋伴明 (映画監督) 萩尾望都 (漫
 画家) ガッツ石松 (ボクシング) 矢沢栄吉 (歌手) 佐藤陽子 (バイオリニスト) 堀内
 孝雄 (歌手) 松崎しげる (歌手) 森田健作 (政治家) テリー伊藤 (演出家) . . .
 一九五〇 (昭和二五) 年生まれ・六七歳に。
 残間里江子 (プロデューサー) 舘ひろし (俳優) 和田アキ子 (歌手) 坂東玉三郎 (歌舞
 伎俳優) 東尾修 (プロ野球) 中沢新一 (宗教学者) 池上彰 (ジャーナリスト) 姜尚中
 (政治学者) 八代亜紀 (歌手) 辺見マリ (俳優) 塩崎恭久 (政治家) 梅沢富士男 (俳
 優) 岩合光昭 (写真家) 綾小路きみまろ (漫談家) 神田正輝 (俳優) . . .

いかがですか、頼り甲斐のある人びとでしょう。

みんな等しく貧しかった戦後に育った子どもたちのころの記憶を共有している人びと。

そこからそれぞれに個性的な人生をつくりあげ、熟成期をすごしている「平和団塊の世代」

(日本の戦後ツ子)のみなさん。この約九七〇万人の一人ひとりを、敗戦後のきびしい生活環境の中で育ててくれたご両親の「平和へ思い」。それを思い起こして、本稿は新世紀の国際平和を体現する「平和団塊の世代」と呼んで注目しています。「団塊世代」では即物的にすぎて、また「平和世代」では理念的にすぎて、いずれもご不満かもしれません、あわせて「平和団塊の世代」のみなさんと呼ぶのをお許し願いたい。

先進諸国の戦後には同じ経歴のベビーブーマーの人びとがいます。

その人びととともに、「平和団塊の世代」(日本の戦後ツ子)が、この地で穏やかに安心して後半生をすごせる社会をみずからの力で形成し、長寿を全うすること。それが前世紀の世界戦争の惨禍の記憶を胸の奥に秘めて両親が希い求めた「平和に生きる」ことの証にちがいないからです。それはまた次の世代へ、途上諸国へ持続可能な姿で伝わることになるでしょう。

一人ひとりが世紀をまたいで長寿を体現する。こんな役回りは願って求めても得られるものではありません。

そして二一世紀半ばの二〇四七年、世界平和のシンボルでありつづけた「日本国憲法」は制定一〇〇年を迎えます。その間、日本が持ちこたった誇るべき「世界平和の証」となりつづけます。一年又一年と保持しつづけて「百寿」を迎える平和憲法は、国際社会からのスタンディング・オベーションを受けて大歓迎されることになるでしょう。

「日本国憲法制定一〇〇周年」記念祝典。

これはわが国主催の二一世紀最大の記念祝典です。この晴れの舞台まで、あと三〇年。「平和団塊」のみなさんは、亡き先輩の願いを胸に刻み、同輩とともに激励しあって、後輩の希いを引き連れて、世紀の証人として参加するために、「人生一〇〇年」をめざして歩みつづけることになるのです。

世界初の「三世代平等型社会」の達成へ

「高齢化先行国」（まだ先進国とはいえない）として世界初の「長寿社会Ⅱ三世代平等型社会」を創出する事業は、一九九五年一月に「高齢社会対策基本法」を制定してまずまずのスタートを切ったのでした。見栄えのする眉雪の持ち主である村山富市さんの内閣のときでした。

それから二〇年。

「高齢化社会」を創出する事業は、「高齢者対策」では完熟といっていい成果を達成してきましたが、一方の「高齢社会対策」はよくて半熟という状態にあります。いまそのことを責めても後悔してもあまり意味がありません。

「日本高齢社会」創出の事業は、世界で初めての事業であるゆえに、二〇年の準備期間を要したと現実を前向きに理解すべきなのでしょう。

世界最速で「高齢化率」が超二五％に到達して人口の四人にひとりというポリウムになるのを待って、

「四人にひとり型の高齢社会⇨長寿社会を国家事業として本格的な実現にはいった」

というふうに考えれば、だれも責められずに済んでいいのではないか。実際にそういう事情にあるからです。

もうひとつたいへん説得力のある理由があります。

それは戦後生まれの「平和団塊の世代」の約九七〇万人のアクティブ・シニアの高齢者加入を待って本格的にという特別な事情です。一九九九年の「国際高齢者年」のあと、この国の高齢化対策のありようをつぶさに観察してきた本稿は、「団塊の世代」が六五歳を迎えるとき、老後を過ごす社会ができていないだろうことを予測してきました。

今からならぎりぎり国際的な成功事例（二〇二五年問題への対応）をつくることは可能です。ただし高齢者層が何もしないでこのまますごせば、残念ながら遠からず国際的な失敗事例となることが次々に露呈することになるでしょう。

国際的な評判を失墜するようなことがあってはなりません。

この国で暮らす高齢者一人ひとりの意識的自立的な活動によって成立する「日本高齢社会」の総体的な姿を、個人が推察するのはむずかしいですが、「日本長寿社会ブランドデザイン」を旗印として掲げて達成にむかう先には、晴れやかな未来の姿が見えていなければならぬでしょう。それが何かを見てみましょう。

*すべての世代が等しく参加して

二〇二〇年（東京オリンピックの開催年）をまたいでの内輪な推測としますが、高齢者層の意識的で自立的な生産活動・消費活動・社会活動によって、次のようなことのうちいくつかは達成にむかっているでしょう。どれも行く先明るい展望です。

・一過性の「アベノミクス」（女性と若者の成長力経済）が停滞期に達して失速にむかうとき、成熟力＋円熟力によるモノ・サービスを中心にした「エイジノミクス」（高齢化経済）が各地各界に登場して、日本経済をデフレーション（萎縮）から救済するでしょう。これが第一。

・「超一〇〇〇兆円」の財政赤字の解消つまりプライマリーバランスは、持続可能な高齢化経済の推進によって大幅な縮小ができるでしょう。「新三本の矢」の六〇〇兆円は「介護離職ゼロ」のためではなくここで発揮するならクリアできるハードルの高さです。

・「超一四〇〇兆円」といわれる家計黒字は高齢社会形成のための出資にむかうでしょう。家計から国家財政への資金の流れは、「日本長寿社会」達成への新たな事業が呼び覚ますもの。

・アジア唯一の「先進的政治・経済・文化国」として途上国が範とする日本でありつつづけるでしょう。もちろん一〇倍の人口をもつ中国・インドといった途上大国も含めてです。

・高齢世代の次世代支援により、「少子化」に歯止めをかけ、「新三本の矢」の出生率一・八を回復し、自助・互助によって「介護離職ゼロ」を実現。しごとと子育てで多忙な女性に多様性

のある生きがいを与え、脱M字型の就労ができるようになるでしょう。

・「好専門を出でず、悪事千里を行く」という世相の悪化を防止できるでしょう。

・「高齢弱者」から不安を拭い払って、だれもが敬意をうけて安心して生涯を送れる「長寿社会」をもたらすでしょう。

・世界がモデル事例とする「日本長寿社会（三世代平等型社会）」が各地各界にわたって姿をみせているでしょう。

・数多くの国際機関・会議・大会を国内に招請し、常態として各種の国際イベントが行なわれ、世界中からだれもが訪れたい国としてやってくるでしょう。

そういう国が可能であり、それを成し遂げることで、のちの歴史書は誇らかにこう書き記すでしょう。

「二一世紀初頭の日本は、先進的経済国としてアジアの近代化（モノの豊かさの共有）に貢献しました。また二〇世紀の世界大戦のちに国際平和の証として灯した「平和憲法」の明かりを一〇〇年護持して「日本国憲法制定一〇〇年記念式典」を国際的オベイションのもとで開催し、二一世紀の国際平和の礎をつくりました。と同時に世界に先駆けて「三世代平等型の長寿社会」を実現しました。さらに地域においては「地域包括ケアセンター（健康）」「シルバー人材センター（就労）」「生涯学習センター（知識・技術）」の三センターによる高齢化対応で、地

域社会の活性化にも成果を残しました。これらの事業は、アジア後進諸国にとってのモデル事例を提供し、国際平和と地域民主主義に寄与しました。」と。

□ あたかな「地域生活圏」の創出 地域の歴史をつくる劇的な実感

現役中年のときの楽しかったしごとのひとつに画家の中川恵司さんとつくった『江戸東京重ね地図』（朝日新聞社刊）があります。江戸時代の山手、下町の古層の上に現代の東京が重なって見えるように印刷された地図帳で、地図出版の武揚堂の現場にはご苦労いただいた力作です。その中の何枚かは江戸時代の海の上に、現代の東京がまるごと浮かんでいます。この部分は明治・大正・昭和期に人びとがこの地域で活動して新たに創った都市空間なのです。当たり前といえばそれまでですが、一つひとつの小さな事業活動や暮らしの集積が新しい歴史をつくることの劇的な実感があります。

現代の日本で暮らす約三四〇〇万人の高齢者（六五歳以上）は、これまでの歴史にまるごとなかった存在です。史上に新たな成果として得た「人生九〇年」時代を体現している一人ひとりの高齢者が、これまでになかった新しいモノ・居場所・しくみをこしらえながら暮らすことで達成されるのは、新しい歴史空間なのです。

一人ひとりの高齢者が行く先に「人生九〇年」の到達点を想定しながら、目前の日又一日を「地域生活圏」で迎えていていねいに過ごす。この現役長生「人生九〇年」型の高齢者が形成する成熟＋円熟した社会は、これまでの引退余生「人生六五年」型の高齢者による社会とは異なつた姿になるはずだ。

新しい歴史空間――

それは新しい成熟＋円熟した「モノ・居場所・しくみ」を現在の生活圏の上に構築していくものと想定されます。その主体者であるみなさんに実感はあっても全体像まではわからないでしょう。それでいいのです。

この新しい社会を「超高齢社会」というようですが、何事にせよチヨ―には行きすぎた語感がありますから、この呼称は適当でない。「本格的な高齢社会」あるいは「長寿社会」というべきところでしょう。本稿では高齢者の新しい活動が成熟＋円熟型の存在感を示すとともに、青少年Ⅱ成長期、中年Ⅱ成長＋成熟期が意識されて、三世代のすべての人が等しくかわることで成立する「三世代（成長＋成熟＋円熟期）平等型」社会を、素直に「日本長寿社会」と呼んでいます。

*「昭和丈人」層の暮らしが歴史に

みなさんにはご自分の来し方の青少年Ⅱ成長期と中年Ⅱ成長＋成熟期にいまの高年Ⅱ成熟・

円熟期を重ねて、「長寿社会」のプロセスをここでしっかり理解しておいてほしい。

ご存じのように、「高齢化率」（六五歳以上の人口比率）が七%から一四%までを国際基準で「高齢化社会」と呼びます。高齢者の存在が目立ちはじめたとはいえ、まだちらほらの段階で、余生も長くはなく、後人は「時代をつくってくれた功労者」として敬愛し、介護・医療・福祉・年金などで慰労し支えることができました。わが国では一九七〇年から一九九四年までの二四年がその期間に当たっています。この期間が一〇〇年を超えるフランスをはじめヨーロッパ諸国に比べると、はるかに短く急速な高齢化であったことがわかりますが、戦後にご苦勞された方々は後人の対応に納得して亡くなることができた時期であったといえます。

その後の「高齢化率」が一四%から二一%の間を「高齢社会」と呼びます。この間は高齢者意識をもつ者同士による高齢期のための「しくみ」や「居場所」や「モノ・サービス」づくりを展開する段階で、将来に後人の手を煩わせないために自力で新たな「高齢社会」の形成をすすめることとなります。わが国では一九九四年から二〇〇七年までの一三年がこれに当たっていました。

世紀をまたいだこの一三年間になされるべきであった「高齢社会」の形成にむけた対策、とくにたいせつなのは増えつづけた高齢者自身の高齢社会意識の醸成でした。さまざまな分野での社会参加や世代間交流、そして高齢者の生活感を充足する「モノ・サービス」の形成が要請された時期でしたが、まことに残念なことには、リードすべき政界は離合集散を繰り返し、

世代交代の大合唱のはてに小泉チルドレンが登場して若返りが図られ、笑いをとれる若者バカ化が幅をきかせ、日用品の途上国化も進むといった「高齢化」（成熟・円熟化）活動には逆風の世情のなかで、手つかずのまま過ぎてきたのです。

一九九六年の「高齢社会対策大綱」で指摘されたに課題は、二〇〇一年一二月の改定大綱に持ちこされています。「高齢者対策」では成果をみましたが、「高齢社会対策」はその後も延滞することになってしまっています。そのひずみがさまざまに露呈しはじめているのです。

いまや世界最速で「高齢化率」二六％を越えて、三四〇〇万人、四人に一人に達しているわが国は、高齢者はもちろんのこと、三世代のみんが参加して形成するオールエイジズの「長寿社会」にむかっている時期にあります。わが国が独自に保有している経済、文化、伝統のもとで独自のプロセスを案出しながら達成にむかわねばならないのです。とくに世代間交流が新たな課題となっています。それは世界のどこにも先行例はなく、わが国が踏みだす一歩が新たな時代を切り開いていくことになるのです。

さまざまな高齢社会構想

本稿は一九九五年の「高齢社会対策基本法」、一九九六年の「高齢社会対策大綱」、一九九九年の「国際高齢者年」、二〇〇〇年の「介護保険制度」、二〇〇二年「世界高齢者会議」（第二回・マドリッド）、二〇〇一年と二〇一二年の「高齢社会対策大綱改定」までのこの国の「高

「高齢化」の経緯を見つめつづけてきましたが、政・官・産・学・民それぞれの対策のなかで、主だった成果を上げているいくつかの事業を紹介いたします。

これらはみなさんが活動をするにあたってのモデル・サンプル・シンボルあるいはパイロット的な内容をもっています。

＊「環境未来都市」と「環境モデル都市」(内閣府)

世界的に進む都市化を見据え、持続可能な経済社会システムを実現する都市・地域づくりをめざす「環境未来都市」構想を内閣府が進めています。

「環境モデル都市」は、持続可能な低炭素社会の実現に向け高い目標を掲げて先駆的な取組にチャレンジする都市で、目指すべき低炭素社会の姿を具体的に示し、「環境未来都市」構想の基盤を支えています。

「環境未来都市」は、環境や高齢化など人類共通の課題に対応し、環境、社会、経済の三つの価値を創造することで「誰もが暮らしたいまち」「誰もが活力あるまち」の実現を目指す、先導的プロジェクトに取り組んでいる都市・地域である。

これらの「環境モデル都市」と「環境未来都市」を一体的に推進することで、「環境未来都市」構想の理想とする都市・地域の早期実現を目指している。

「未来都市構想」は「環境未来都市」11都市と「環境モデル都市」23都市がセット。「環

境モデル都市」が二〇〇八年、「環境未来都市」が二〇一一年にスタートした。

「環境未来都市」は一一都市のうち六都市が被災地から、五都市が被災地以外から。

「未来都市構想」のビジョンには柱が三つある。第一が高齢化社会対応、二つ目が景観環境問題、三つ目がグリーン・イノベーション。みな都市単位で選ばれている。内閣府地方創生推進室が担当している。

「環境未来都市」一一都市

・北海道下川町 集住化モデル 森林バイオマスとともに新たな地域モデルを構築

・柏市 トータルヘルスケア・ステーション 人とまちがともに成熟する未来へ

・横浜市多摩プラザ 若い人と高齢者が交わって住む 一歩先を行く環境の中で市民が安心して暮らすために

・富山市 中心市街地活性化で高齢者優遇 公共交通で暮らせるコンパクトな街に

・北九州市 健康づくり生きがいづくり 公害を乗り越えた市民力が、アジアでの可能性をひらく

・気仙広域被災地（大船渡市・陸前高田市・住田町） 医療・介護・福祉の連携先進モデル 歴

史的つながりを軸に二市一町で復興へ向かう

・釜石市被災地 被災地

・宮城県岩沼市 被災地 住民の思いを新しいまちの土台に

- ・宮城県東松山市 被災地 創造的な未来へ向かう東松島
- ・福島県南相馬市 被災地 希望の光輝く未来の故郷を創る
- ・福島県新地町 被災地
- 「環境モデル都市」二三都市
 - ・下川町 人が輝く森林未来都市しもかわ
 - ・帯広市 田園環境モデル都市・おびひろ
 - ・つくば市 つくば環境スタイル“SMILE” みんなの知恵とテクノロジーで笑顔になるまち
 - ・千代田区 かけがえのない地球環境をみんなを守るまち 千代田
 - ・横浜市 環境未来都市・横浜くひと・もの・ことがつながり、うごき、時代に先駆ける価値を生み出す「みなと」
 - ・新潟市 「田園型環境都市にいがた」く地域が育む豊かな価値が循環するまち
 - ・富山市 コンパクトシティ戦略による富山型都市経営の構築くソーシャルキャピタルあふれる持続可能な付加価値創造都市をめざして
 - ・飯田市 市民参加による自然エネルギー導入、低炭素街づくり
 - ・御嵩町 活力ある環境にやさしいまち「みたけ」く地域資源を活かした低炭素コミュニティの実現を目指して
 - ・豊田市 「ミライのフツー」を目指す、環境先進都市とよた

・京都市 DO YOU KYOTO? (環境にいいことしていますか?) を合言葉に、京都から世界へエコ活動を広げていきたいと思います!

・堺市 「快適な暮らし」と「まちの賑わい」が持続する低炭素都市「クールシティ・堺」の実現

・尼崎市 「ECO未来都市あまがさき」へのチャレンジ

・神戸市 人に、自然に、地球に、未来に貢献する「環境貢献都市KOB E」―エネルギーのベストミックスとともに、みどりあふれる、生活を楽しむ都市をめざして―

・西粟倉村 限りある自然の恵みを大切な人と分かち合う

・松山市 環境と経済の両立を目指して「誇れる環境モデル都市まつやま」

・梶原町 木質バイオマス地域循環モデル事業

・北九州市 北九州市環境未来都市

・水俣市 人が行きかい、ぬくもりと活力ある「環境モデル都市みなまた」

・宮古島市 島嶼型低炭素社会システム「エコアイランド宮古島」

・小国町 地熱とバイオマスを活かした農林業タウン構想「ゼロカーボンのまちを目指して」

・ニセコ町 国際環境リゾート都市・ニセコスマートチャレンジ86



・生駒市 日本一環境に優しく住みやすいまち「いこま」市民・事業者・行政の“協創”で築く低炭素“循環”型住宅都市

・「環境未来都市」構想推進国際フォーラム

- 1 千代田区 平成二四年二月二一日（火）
- 2 下川町 平成二五年二月一六日（土）
- 3 北九州市 平成二五年一〇月一九日（土）
- 4 東松山市 平成二六年一二月六日（土）
- 5 国際フォーラム in マレーシア ジョホールバル市 平成二七年二月八日（日）

*「高齢社会領域一五プロジェクト」(RISTEX)

RISTEX（科学技術振興機構）の「高齢社会領域」がおこなった一五プロジェクトは創見に満ちたプロジェクトです。領域担当は秋山弘子東京大学高齢社会総合研究機構特任教授。

高齢社会領域について。研究開発領域の目標。

- (1) 高齢社会に関わる問題について、地域やコミュニティの現場の現状と問題を科学的根拠に基づき分析・把握・予測し、広く社会の関与者の協働による研究体制のもとに、フィールドにおける実践的研究を実施し、その解決に資する新しい成果（プロトタイプ）を創出します。
- (2) 高齢社会に関わる問題の解決に資する研究開発の新しい手法や、地域やコミュニティの

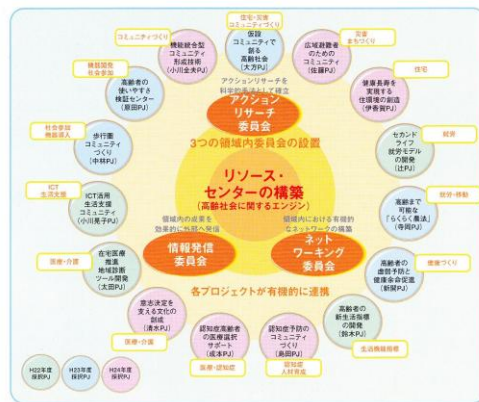
現場の現状と問題を科学的に評価するための指標等を、学際的・職間的知見・手法に基づき体系化し提示するための成果を創出します。

(3) 本領域の研究開発活動を、我が国における研究開発拠点の構築と関係者間のネットワーク形成につなげ、得られた様々な成果が、継続的な取り組みや、国内外の他地域へ展開されることの原因力となること、また多世代にわたり理解を広く促すことになげます。

地域やコミュニティの現場について…行政区、学区等に限らず、共通の目的、価値に基づいて活動する人々の集まりや、企業、コンソーシアム等の団体、関連する職種等のコミュニティに関わる現場も対象とします。

平成二二年に四、平成二三年に五、平成二四年に六の三年間で15プロジェクトを採択。

- ・ 一五プロジェクトについて 数字は採択平成年 敬称略
- ・ 22 「新たな高齢者の健康特性に配慮した生活指標の開発」 鈴木隆雄
- ・ 22 「在宅医療を推進する地域診断標準ツールの開発」 太田秀樹
- ・ 22 「ICTを活用した生活支援型コミュニティづくり」 小川晃子
- ・ 22 「セカンドライフの就労モデル開発研究」 辻哲夫



- ・ 23 「社会資本の活性化を先導する歩行圏コミュニティづくり」 中林美奈子
- ・ 23 「「仮設コミュニティ」で創る新しい高齢社会のデザイン」 大方潤一郎
- ・ 23 「高齢者の虚弱化を予防し健康余命を延伸する社会システムの開発」 新開庄二
- ・ 23 「高齢者の営農を支える「らくらく農法」の開発」 寺岡伸悟
- ・ 23 「高齢者による使いやすさ検証実践センターの開発」 原田悦子
- ・ 24 「高齢者ケアにおける意思決定を支える文化の創成」 清水哲郎
- ・ 24 「認知症高齢者の医療選択をサポートするシステムの開発」 成本迅
- ・ 24 「認知症予防のためのコミュニティの創出と効果検証」 島田裕之
- ・ 24 「健康長寿を実現する住まいとコミュニティの創造」 伊香賀俊治
- ・ 24 「広域避難者による多居住・分散型ネットワーク・コミュニティの形成」 佐藤滋
- ・ 24 「二〇三〇年代をみすえた機能統合型コミュニティ形成技術」 小川全夫

＊「プラチナ大賞」(プラチナ構想ネットワーク)

プラチナ構想ネットワークによる「プラチナ大賞」。未来のあるべき社会像として描く「プラチナ社会」は、成熟社会における成長の一つのモデルであり、日本が先進国として直面する課題の解決と、新たな可能性の創造によってもたらされる、豊かで快適でプラチナのように威厳をもって光り輝く社会です。会長は小宮山宏元東京大学学長・三菱総研理事長

「プラチナ社会」の必要条件。

- ・エコロジーで（人間にとって快適な自然環境の再構築、環境との調和・共存）
- ・資源の心配がなく（エネルギー効率の向上、自然エネルギー活用、物質循環システムの構築）

- ・老若男女が全員参加し（生涯を通じた成長、社会参加の機会創造、健康で安心して加齢できる社会）

- ・心もモノも豊かで（文化・芸術に彩られた暮らし、飽和・停滞を打破する「限界を超えた成長」）

- ・雇用がある社会（イノベーションによる新産業の創出）

プラチナ大賞運営委員会（プラチナ構想ネットワーク）

審査委員会 敬称略

委員長 吉川弘之 副委員長 吉川洋 委員 秋山弘子 西條都夫 増田寛也 松永真理

箕輪幸人

・ **第一回プラチナ大賞（発表順）**

平成二五年七月二五日 最終審査発表会 都市センターホテル

団体名 取り組み名

1 香川県 特別賞 かがわ遠隔医療ネットワーク「K-MIX」を活かした遠隔・在宅医療

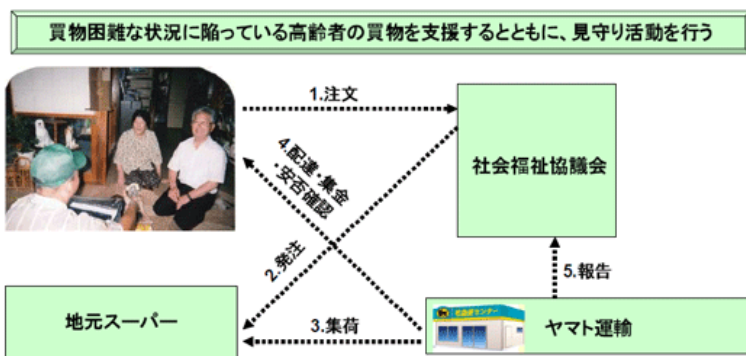
の推進

- 2 雲南市 特別賞 小規模多機能自治による持続可能型“絆”社会の構築
- 3 上勝町 優秀賞 ゼロ・ウェイスト政策から考えるサニテーションシステム
- 4 柏市 特別賞 柏市における長寿社会のまちづくり
- 5 海士町 大賞 総務大臣賞 魅力ある学校づくり×持続可能な島づくり×島前高校魅力化プロジェクトの挑戦
- 6 東松島市 プラチナ・イノベーション賞 東松島式震災ごみリサイクル（東松島方式震災がれき処理）
- 7 富山市 優秀賞 コンパクトシティ戦略による富山型都市経営の構築×ソーシャルキャピタルあふれる持続可能な付加価値創造都市を目指して
- 8 徳島県 優秀賞 とくしまサテライトオフィスプロジェクト×地域再生のための新たな戦
略
- 9 最上町 プラチナ・イノベーション賞 サステイナブルタウン最上×木質バイオマスエネルギーが地域産業を興す
（一二四件のエントリーから）

・第二回プラチナ大賞（発表順）

平成二六年七月二二日 最終審査発表会 都市センターホテル

- 団体名 取り組み名
- 1 ヤマトホールディングス株式会社 大賞 総務大臣賞 地域に密着したヤマト流CSV
（まごころ宅急便）
 - 2 自治医科大学 優秀賞 スマートヘルスケアシテイ 天草から始まる安心安全で豊かに成長する街づくり
 - 3 埼玉県 審査委員特別賞 世界に羽ばたくグローバル人材の育成
 - 4 流山市 審査委員特別賞 流山市における真のコアコンピタンス経営／公共施設マネジメントにおける挑戦／
 - 5 東日本旅客鉄道株式会社 審査委員特別賞 「COTONIOR（コトニア）吉祥寺」／子どもたちとシニア世代の交流／
 - 6 横浜市、東京急行電鉄株式会社 審査委員特別賞 「次世代郊外まちづくり／郊外住宅地の再生モデルの構築／」
 - 7 下市町 優秀賞 「らくらく」で、プラス10年イキイキ元気！働く老若男女が笑顔で集う町 下市町
 - 8 香川県 審査委員特別賞 世界をリードする香川の希少糖
 - 9 豊田市 優秀賞 「自立×つながり」でシニア世代を地域の担



い手に！「ミライのフツー」な自治モデル

10 北九州市 大賞 経済産業大臣賞 都市間連

しているのではないかと携を通じたアジアのグリーンシティ創造

(五八件のエントリーから)

* 「高連協高齢者憲章」(高齢社会NGO連携協議会)

国連は平和裏での「高齢化社会」が新世紀の国際的潮流となることを予測して、一九九〇年に一〇月一日を「国際高齢者の日」とすること、一九九一年に「高齢者五原則」(自立・参加・ケア・自己実現・尊厳)を提唱し、一九九二年に一九九九年を「国際高齢者年(International Year of Old Persons)」と定め、一九九五年にテーマを「すべての世代のための社会をめざして」とし、「国際高齢者年」の活動を一九九八年一〇月一日から開始するよう要請しました。

わが国でも高齢化がすすみ、一九九四年には高齢化率が一四%を超えて「高齢社会」にはいり、一九九五年には「高齢社会対策基本法」を制定し、一九九六には「高齢社会対策大綱」を閣議決定しました。国連の提唱に共鳴する関連団体が、「国際高齢者年」を前にした一九九八年一〇月に「高齢者年NGO連絡協議会」(代表・堀田力さわか福祉財団理事長)を設立、一九九九年の「国際高齢者年」事業の民間団体の中心として活動、その後名称を「高齢社会NGO連携協議会」(高連協)と改めて発足しました。

参加団体はその名のとおりに、社団・財団・NPO、協同組合等のNGO（非政府機関・団体）を正会員とする連合組織です。なお二〇一〇年度に新設された「個人会員」として「オピニオン会員」があります。

代表は樋口恵子（高齢社会をよくする女性の会理事長）と堀田力（さわやか福祉財団会長）のお二人。

最近の活動 「高連協オピニオン調査」（対象者2,000名以上）の結果内容を基にして、

- ・ 「社会保障制度改革への提言」総ての世代が安心して暮らせる社会づくり」（2001年）
- ・ 「高齢者（シニア）の社会参加活動に関する提言」（2004年）
- ・ 「アジアのシニアの生きがいづくり宣言」（愛知万博、2005年）
- ・ 「環境問題に取り組むシニアの行動指針（宣言）」（2006年）
- ・ 「総ての世代の人々が生きがいを持ち、心豊かに暮らせる社会の実現」（2009年）
- ・ 「高連協提言」「高齢社会対策大綱」の見直しを指示した野田総理へ高連協提言（2012・1・12・憲政記念館会議室）

「シニアの社会参加活動の推進」のための啓発事業としては、内閣府（高齢社会対策担当）との共催で、

- ・ 「高齢社会研究セミナー」：1999～2008年、毎年開催
- ・ 「高齢社会フォーラム」：2009年～2015

- ・ 「高齢化に関するグローバル・パートナーシップ・シンポジウム」：2003年・2004年
具体的なテーマによるイベントとして、
- ・ 「高齢者と社会保障制度の在り方」研究集会：2000年東京駿河台
- ・ 「経験の分かち合い集会」：2002年高齢化に関する世界会議・マドリッド
- ・ 「EXP02005・アジアのシニアの生きがいフォーラム」：2005年愛知万博
- ・ 「シニアと環境 国際シンポジウム」：2007年東京有楽町
- ・ 「リタイアメント再創造 (Reinventing Retirement)」：2007年AAFPと共催、東京国連大学
- ・ 「シニアの環境問題取り組み」：2008年、東アジア国際シンポジウム、東京江戸川区
- ・ その他、「成年後見制度普及（市民後見人養成）」事業、等。

* 高齢者憲章

高連協は、国連提示の「高齢者の自立、自己実現、参加、ケア、尊厳（五原則）」とともに、「高齢者の役割」も踏まえて、「すべての世代が生きがいある生活を追求できる平和な社会」、「年齢差別のない社会」の創造をめざしています。そして、この運動の基本的指針を「高齢者憲章」として、ここに提唱します。

< 提言 >

- 1 尊厳…個人の尊厳は他の世代の人々と同様に高齢者についても重んじられる。
- 2 社会参加…高齢者が生き生きと暮らすことは、すべての世代の人々が安心して暮らせる社

会をつくるために不可欠である。そのためには、高齢者の能力を活用する事業や職種を社会全体で開発するなど、高齢者が意欲を持って社会参加できる機会を広げることが望まれる。

3 社会貢献…すべての世代にとって住みよい社会をつくるために、高齢者は若い世代と交流しつつ、その経験を生かして社会福祉、環境整備、コミュニティづくり、文化の伝承、国際交流などの社会貢献活動に積極的に参加する。

4 健康づくり…高齢者は、地域社会において充実感を持って生きることができるよう、自らの身体的機能の維持に努める。そのために、保健センターや健康づくりネットワークなど、地域における仕組みや環境を整備することが望まれる。

5 まちづくり…身体的能力や生活能力がいかに異なっても、安心して暮らせる社会にするために、バリアのない住宅やまちをつくることを公共事業の重要なテーマとすることが望まれる。また、すべての人々は、心のバリアを取り払い、地域社会において助け合って生きるよう努める。

6 社会保障制度…年金、医療、介護などの社会保障の制度は、国民の生涯にかかわる制度として確立され、これによりすべての世代が安心して暮らせる社会にすることが必要である。これらの制度は相互扶助の精神に立ち、負担の公平と効率的な運用の確保に努め、社会全体の活力を失わせないように総合的に構築されなければならない。これらの制度によりサービスを受けるものは、可能で適切な範囲において、その費用の一部を負担するとともに、その自己決定

権は最大限に尊重されなければならない。

7 生涯学習・生涯学習…高齢者の多様な生き方を支援するため、生涯にわたり学習できる仕組みの整備が望まれる。また、高齢者の経験や知恵が子供や若者の教育に活用される仕組みも、つくられなければならない。

高齢者をはじめ総ての世代の男女は、共同参画して以上の提言の達成に努める。

一九九九年九月一五日 二〇〇五年九月一五日 前文一部改訂

活動の現場からの発言 この人の声を聴くべし

すでに述べてきましたが、新たな歴史をつくりつつある日本の高齢者の一人ひとりが、「三世代平等型人生」を意識して暮らすことで「高年世代」が形成され、新たなモノやサービスや居場所を形成することで存在感を示すこととなります。

すでにそれに足りる人的ボリューム（四人にひとり・三四〇〇万人）に達していることは周りを見、統計を見ることが確認することができますが、TVの画面や生活圏のしくみなどからは存在を感じることができません。むしろ後退しているようにさえ思えます。社会のしくみの「高齢化」対応が人的高齢化に追いついていない証です。

「青少年世代」「中年世代」そして新たに「高年世代」が参加することで、初めてオール・ジャパンつまり「一億総活躍」体制そして「三世代平等型社会」が成立するのですが、残念なこと

には安倍内閣には「高年世代」の潜在力に期待し留意して社会参加を呼びかけるといふ姿勢が見えませんか。

本来なら、政府の「一億総活躍国民会議」の中心にいて発言されるべき方々が、野に置かれたままであることは、何より政権の側が霞が関から見える範囲での人選に終始しているためなのです。若い政界人は「山中宰相」ということばの意味を知らないのでしょうか。

女性と若者をおおるようにして目先の経済成長に期待するあまり、成熟・円熟した人生を送っている人びとが展開している高いレベルの経済成長の姿が見えないのでしょうか。成熟力・円熟力は新たな経済成長力であることに思い及ばないのです。

「一億総活躍」といつているのですから、三四〇〇万人の高齢者を除外しては成り立たないはずなのに、現役官僚にもそういう認識が欠けています。霞が関からは見えていないのです。

ここではこの国の将来に確かな構想をお持ちの方々をご紹介することにします。耳を傾けてその発言の一端をお聴きください。それぞれに確かな将来構想をお持ちであるとともに、そこにいたる手立ても示しておられます。

まずは「高齢社会をよくする女性の会」の樋口恵子理事長の将来像から。

樋口さんの将来像は、歴史上で初の「人生一〇〇年社会」です。

女性リードで「人生一〇〇年社会」をめざす樋口さんご自身は、まだ「傘寿期」に到達したばかり。お仲間とともに初代として「一〇〇歳」の到達



点を見据えています。

内閣府が「高齢社会対策大綱」で、一〇〇年から一〇一年を差し引いて「人生九〇年」時代としたのは、官僚の男性的指向性ゆえであると評しておられます。

「いまわたくしたちは、『人生一〇〇年社会』へという、人類の歴史のなかで初めての長寿を普遍的に獲得した社会を生きる、そしてそれにのつとめた地域であろうと国であろうと、生きる主人公は人間であります。その人間の幸せのために、わたくしたちは初代として今日も一歩一歩努力をしているのだと思うと、『なかなかいい時に生まれちゃったじゃないか』と、わたくしなどはよろこばしく思うわけでございます」（内閣府「高齢社会フォーラム in 東京」基調講演「シニアの社会参加で世代をつなぐ」二〇一三年七月）

そして「戦後七〇年」に関しては、

「わたくしたちは『人生一〇〇年』のモデルをつくっていく幸か不幸か初代という光栄を担ってしまいました。人間さまざまな選択ができますが、生まれる時と場所は選ぶことができません。幸いにも幸いにも戦争が終わって平和が訪れた中で物ごころつき、あるいは生まれました。

そして戦後七〇年、ここにいらっしやるほとんどすべての方々は、『戦争を知らない大人たち』として七〇年を生きてきたわけでございます。・」（内閣府「高齢社会フォーラム in 東京」基調講演「シニアが主役 地域創生く出かける、出会う、何かできるく」二〇一五年七月）

男性たちが多く「戦場」をいうのに対して、命の尊さをいう「生む性」としての女性の発言

には遠く未来が示されています。

次は「さわやか福祉財団」の堀田力会長の講演から。

二〇一四年七月二十九日、同じ内閣府主催の「高齢社会フォーラム in 東京」での講演で、堀田さんの声は囁かれていました。この夏は東奔西走といった忙しさで、全国の自治体をまわって、「新地域支援構想」についての説明・講演をしておいでだったからです。「支えられる高齢者」のための要支援などの事業が、「地域医療・介護推進法」の成立（二〇一四年六月）とともに二〇一五年四月から地域自治体に移行しました。住民のうちの元気な「支え手の高齢者」の介護予防（自助）とともに介護支援（互助）の自主参加が広く求められることになります。自治体ごとに「地域支援コーディネーター（地域支え合い推進員）」と地域協議体を設置することで、かつては地域では当たり前だったお互いさま意識での助け合いのしくみ（共生社会）を、自治体ごとに住民の活動でつくりだそうという事業です。

堀田さんはこういいます。

『『共生の文化』』というの、どういうことか。中身に即して簡単にいえば、定年退職をして家に籠っている、あるいは外へ出て行く場所は居酒屋程度、あるいは家族で旅行はするけれども近所とのつきあいは一切なく、通りで顔をあわせれば目礼するだけ。こういう暮らし方は『恥ずかしい』、そういうふうにみんなが感じるような風習、それを『共生の文化』というふうに呼び



たいと思います」

とくに「毎日が日曜日」といった暮らしに慣れ親しんでいる六〇〜七〇歳代の退職後の男性に、堀田さんは「月月火水木金金」といった忙しきで全国各地をたずねて、「社会参加による共生の文化」の創出を説いておられます。

住んでいる地域に関心が薄く、自分の「介護・医療」のときだけ地域に頼るといふ内向的で自己中心的な暮らし方が「恥ずかしい」と感じるような生活意識を「共生の文化」と呼んで、元気な高齢者へ自主参加を呼びかけているのです。

元気な高齢者が協力して、介護者ばかりでなく子どもでも障がい者でも困った人を支え合い助け合おうということで、新しいしくみである「生活支援コーディネーター」（地域支え合い推進員）と地域協議体を活かして、地域の活性化の核になるワークショップづくりなどについて全国をアドバイスしてまわっています。

元東大学の小宮山宏プラチナ構想ネットワーク会長は、「プラチナ社会」を推進しています。「プラチナ社会」というのは、成熟社会における成長の一つのモデルで、先進国として直面する課題の解決と新たな可能性の創造によってもたらされる、豊かで快適でプラチナのように威厳をもって光り輝く社会であると説明しておられます。

『長寿』というのは人類が文明を進展するにしたがって得た成果で、その



『長寿社会』をどうやって活気あるものにしていくかに先進国は力をそそいでいる。これまでの物量的な豊かさでしたが、これからはQOL。よりよい生活、誇りある人生が個人としての目標であるとともに、社会あるいは産業としての目標となっていく。」

「個人がQOLを高めることの可能な社会が『プラチナ社会』。QOLを求めることと、省エネルギーとか省資源とか自然共生とかは同じ轍を持っている。いい生活をしようとするればエネルギー消費が減る。ここが重要なポイント」（産業革命からプラチナ革命へ） 日本「再創造」――活力ある長寿社会へのイノベーション RISTEX「コミュニティで創る新しい高齢社会のデザイン」基調講演（二〇一四年二月一日）

と「産業革命」から「プラチナ革命へ」の推移を説き、「プラチナ構想ネットワーク」を通じて毎年、優れた事例を選考してプラチナ大賞・優秀賞を贈呈して活動の推進につとめています。

東大高齢社会総合研究機構の秋山弘子特任教授は、高齢社会活動の成功事例を集めた「リソースセンター」の設立を提案しておられます。

「さらに研究活動や事業をおこなっている組織もふくめて、ネットワークの拠点を構築すること。知見を集約して使いやすい『リソースセンター』をつくる。コミュニティの課題解決のための『リソースセンター』です。さらに、ここにくれば課題解決の具体的な方策、情報、支援がえられる。主なミッションとして、アーカイブの作成です。日本中の成果を一カ所に集め



る。長寿社会のまちづくりを志している自治体あるいは町民のコミュニティに啓発、情報の提供、できれば人を送って支援をする」(RISTEX「コミュニティで創る新しい高齢社会のデザイン」 第3回領域シンポジウム)二〇一四年二月一日)

東大リーディング大学院での国際的人材育成や「高齢社会検定試験」(高齢社会検定協会)による「高齢社会エキスパート」の認定、柏市でのまちづくり、RISTEX「コミュニティで創る新しい高齢社会のデザイン」の領域総括として全国一五プロジェクトの推進などを通じて成果を積み上げておられます。「ああいう国になりたいという国」がつくれるかを課題としておられる秋山教授の「アクション・リサーチ」を手法とする活動は、サンプルとして後追いしかならず成果に結びつくにちがいありません。

目 新入りの国際人として

国民性としての「ホスピタリティー」

二〇二〇年のオリンピック東京招致が決まって、世界中から選手だけでなく数多くの客人がやってきます。その中にテロリストが紛れ込んでくると想定しての法整備が進んでいますが、ここでは国民性としての「ホスピタリティー」(「おもてなし」の心)について触れておこうと思います。

二〇〇二年六月に日韓の共催でおこなわれたサッカー「ワールドカップ」の折りの熱気はな

つかしい。ホスト国として、参加各国チームの選手を迎え入れて、みごとな「ホスピタリティー」（「おもてなし」の心）を發揮した二八市町村。

「アリガトー」は世界語になる勢いでしたし、街の清潔なこと、花の多いこと、礼儀ただしこと、どこにも温泉があること、列車が時刻通りに動いていること、スシが「トテモ、オイシイ」など、物価が高いことを除けば「おもてなし」の心は十分に実証されたのでした。

競技場の内外で示したように、日本各地の人びとには世界中から訪れた人びとに、おのずから溢れ出る親和の感性によって国際交流を友好的にすすめる潜在力があることを、世界中に証明する機会となったのでした。子どもたち、女性、高齢者が、それぞれの場でみせた国際交流での「お国ぶり讃歌」でした。

とくにアフリカのカメルーン・チームを迎えた大分県の中津江村と、二〇一三年に引退しましたが当時は人気NO1だった「ベツカム様」がいるイングランド・チームを迎えた兵庫県の津名町が話題になりましたが。

おのずからの「ホスピタリティー」（「おもてなし」の心）はどこから生じるのでしょうか。

この国が外国からの影響を断って鎖国状態にあったころ、七つの海を舞台にして大航海時代があつて、国際交流が進んだのですが、その間を閉ざしていたことで地域に潜んでいる国際交流への期待感には計り知れないものがあるように思われます。これこそが地域資産として活かされるべき潜在パワーなのではないか。

「地域から地域へ」のつながり、とくに海外の都市とのヒトとモノの自治体間の交流には、労苦をはるかに越える成果が実現される可能性が見えています。

想定外の「金融緩和」（潜在国力の放出）による「アベノミクス」の円安効果で、海外からの旅行者が増えました。とくにアジアからのお客が多いというのは注目していいことなのです。

日本企業が海外進出をおこなって、アジアの民衆の暮らしの近代化、豊かさに貢献していません。豊かさを手に入れたアジアの人びとが、「暮らしの先進国」を成し遂げたわが国に来てくれることで、「平和主義の国」の評価がアジアの人びとに理解されることが何よりなのです。

*自然にあふれ出る「おもてなし」の心

日本人の心の深い層に培われている繊細さや優しさは、四季折り折りに変化する風物との出会いがもたらしてくれた自然の恩恵（天恵）といえるものに違いありません。

人生に何度となく繰り返される新たな季節との出会い・・・。

- ・ 春は桜前線（三月～五月）が北上し、秋には紅葉前線（一〇月～一二月）が南下する。
 - ・ 南からは春一番が吹き荒れ、北からは木枯らしが吹き抜ける。
 - ・ 八十八夜の晩霜を気にかけて、二百十日の無風を祈る。
 - ・ 南の海に大漁を伝えていわし雲が湧き、北の海にぶり起こしの雷鳴が轟く・・・。
- わが国の自然は、みごとに四季の変化に調和がとれている。それはまた海の幸・野の幸・山

の幸を豊富にもたらしてくれる。「平分秋色」というが、秋には収穫を等しく分け合い、奪うよりは譲り合い、見捨てるよりは助け合う、といった「国民性としての和の心」（温和、穏和、調和、親和、平和、協和、総和・まだある）が、自然のうちに育まれているようです。

と、この「和の心」は海外の日本研究者が等しく指摘するところです。

だれかれの分け隔てなく萎えた心を励まし、痛んだ身を癒してくれる風物。どこも温泉や特産物に事欠かない。それとともに先人が貯えてくれた歴史・伝統遺産も数多く残されています。

二〇一三年には、「富士山」が世界文化遺産に登録されました。自然遺産ではなく文化遺産であることに納得がいきます。また「和食」が世界無形文化遺産に登録されました。「和食」は、さまざまな知識や技術が人から人へと受け継がれ磨きあげられて成立しています。「地場産業」や「お国ぶり」として地域がみずからの暮らしを豊かにしてきた成果です。

だれかれの分け隔てなく等しく親切な高齢者。国際交流が進めばすむほど、「日本高齢社会」へのプロセスは高い国際評価を受けるでしょうし、それを成し遂げつつある長寿者への国民各層の敬愛の情は、他国の人びとからも評価が寄せられることでしょう。

外国人リピーターを増やす接客法

自治体が海外にふさわしい相手を見出して、地域から地域へとお互いの住民同士が親しく行き来し、異質な文化コラボや特産品の共同製作をおこなう。そんな姿から将来への成果がうか

がえる。ホームステイで訪れる青少年は第二のふるさとを感じて帰っていく。

常に開かれた不凍港のように、頼りがいがある存在としての日本の都市、町、村。それぞれの海外との世紀にわたる交流は将来かならず双方の豊かさを生み出す源泉となるものです。

いま「姉妹・友好自治体」は一七〇〇ほどですが、まだ多くはありません。複数都市にすることや合弁企業や物産の共同開発といった経済活動や個別分野のさまざまな交流が進めば、数も内容もおおいに広がるのが予測されます。

とくに長い民間交流の歴史をもつ日本と中国の場合には、国家間の不和・齟齬の時期を乗り越えて、すでに三五〇余の「友好都市」があり、信頼をつなぎ、友好の成果をもたらしてきました。太い友好交流のパイプになっています。戦後これまでに研修生として訪れた中国側の多くの若者たちが、いまや各地の都市で第一線で活躍しているのですから。

歴史に学ぶとことの第一は、両国の政治と軍事にたずさわる者が、その友好の絆の邪魔をしないことです。

いくつかの友好都市の例をあげてみましょう。

首都の東京（各区も）と北京（各区も）、近代港湾都市の大阪・横浜と上海、神戸と天津、福岡と広州、歴史文物の京都・奈良と西安、名古屋と南京をはじめ、産業では鉄の大分と武漢、石炭の大牟田と大同、伝統物産の金沢と蘇州、瓷都の有田と景德鎮、ぶどうの勝沼とトルファン、牡丹の須賀川と洛陽、紙の富士と嘉興、酒づくりの西宮と紹興といった特産物。そして人

物を介した絆による交流では留学生魯迅のふるさと紹興と藤野巖九郎先生の生地あわら、亡命期の郭沫若にちなむ市川とふるさと楽山、中国国歌の作曲者聶耳の終焉の地である藤沢と生地昆明、孔子ゆかりの足利と済寧など幅広い関係を持っています。

そしてそれを地道に支えつづけているのは、長い日中交流の歴史を思い、大戦時の不幸な記憶を忘れずに信頼を積み上げてきた両国の各地のみなさんです。

「国際交流課」が設けられている県、市、大学は少なくありません。現地のことばに堪能な職員「国際交流員」が常駐して対応しています。市に滞在している外国人滞在者には、各分野の研修者や留学生や企業人などがいて、さまざまな国際交流圏をつくって暮らしています。多くはありませんが結婚して定住している人もいます。

海外の姉妹・友好都市から友好・参観にやってきた人びとは、まず県都で交流の時をすごし、地方を代表する文化に接する。それから交流の市町村にはいります。

*領土小国を四倍に見せる法

海外からの客人たちは、それぞれの「友好市町村」を訪れて、目的である文化やスポーツや物産に関する交流の時をすごします。各地にある温泉施設に案内されて、日本式のもてなしを受けることとなります。これが何より楽しいといえます。市町村が設けるのは、四季折り折りの美しい風物や料理や温泉を活かした「地域の国際交流施設」です。

海外からの訪問者は、

「一生に一度は行ってみたい」

と心躍らせてはるばるやってくるのです。

「人生っていいな。日本ってすばらしい。別の季節にまた来たい」

と、野天風呂につかって、暮れなずむ異郷の空の星を眺めながら、母国語でつぶやいてくれる。それが本音の交流です。

そして「和食」のおもてなし。宿のおかみさんをはじめ、地元の高齢者のみなさんがだれをも等しく親しく迎える姿は、海外から訪れた一人ひとりの友人の心に、母国の暮れなずむ星空を見上げるたびに、「アリガトー」とともに一生のあいだ輝きつづけていることでしょう。

わが国の高齢者が持つ「モノづくり」の能力やモノに込める「親和」の情は、「シニア海外ボランティア」のみなさんや海外進出企業の高齢社員の実績が示すように、途上国の人びとにとっては生きがいと発想の原動力ともなるものなのです。

これはとくに重要な視点ですが、迎える側の各地のみなさんが、日本の四季を「四つの変化」として際立たせることによって、遠来の客人たちは春・夏・秋・冬（新年）の四回は訪れる楽しみを持つことになります。いふなれば、四季を時節の刻みとして活かす人びとの暮らしの知恵が、ここでは「優れた小国」の知恵として「国土を四倍に見せる法」となるのです。

そして何よりも喜ばしいことは、海外の市町村との地道で実質的な交流活動が、わが国が「恒

久平和をめざしている優れた文化大国」であることを、海外各地からの発信によって明らかにしてくれることです。「文化大国」ならどんなに大国意識を競っても誇ってもいいのです。

「1999 国際高齢者年」からのメッセージ

新世紀に迎える地球規模での「高齢化社会」を国際潮流として予測し、国連は一九九二年に一九九九年を「国際高齢者年」(International Year of Older Persons 1999)と定めて、一九九五年にそのテーマを「すべての世代のための社会をめざして」(towards a society for all ages)としたのでした。

国連がテーマを「すべての世代のための社会をめざして」としたのは、世代を越えた人びとの賛同と参加を期待したためであったでしょう。活動の中心となるのは、世紀の初頭に高年期を迎える高齢者であり、最初に迎えることになる先進諸国であり、なかでも大型で最速で進む「日本」がさきがけとなる立場にあったのです。

一九九〇年代から新世紀にかけて、そういう明確なメッセージが警鐘にも似た強い風圧として、この国で高齢期を迎えようとしていた人びとにしっかりと受け止められていたならば、新世紀一〇年の取り組み方もその結果も大いに異なっていたことでしょう。

そうならなかったことの背景についてはすでに述べました。

*国連「高齢者五原則」が国際指針

各国が新世紀を迎える「高齢化社会」にむかってスムーズに移行できるように、国連から次々に取り組みが提案され、一九九〇年代を通じた国際的テーマとなっていたのです。

一九九〇年の総会で、毎年の一〇月一日を「国際高齢者デー」(International Day of Older Persons)と定めたあと、運動の国際的な展開への願いを込めて、

自立 (independence)

参加 (participation)

ケア (care)

自己実現 (self-fulfilment)

尊厳 (dignity)

という五つの「高齢者のための国連原則」を採択したのが九一年であり、そして「高齢者に関する宣言」とともに九九年を「国際高齢者年」と決定したのが九二年のことでした。

一九九九年の「国際高齢者年」の各種行事に参加した記憶をもつ人は少なくないはず。

わが国も当時の総務庁を中心にして自治体や民間団体も参加して全国的な活動を展開しました。当時の民間の活動団体が結集した高連協(当時は「高齢者年NGO連絡協議会」のちに「高齢社会NGO連携協議会」)が結成されたのもこの時のことです。

こう見てくると、毎年一〇月一日の「国際高齢者デー」に、他国に先んじた活動を展開し、

実質的な成果を積み上げて、国際的に発信するのは、わが国の高齢者の役割だったのではないだろうか。

前述したように、一九九九年の「国際高齢者年」をきっかけに新世紀へむかって「日本高齢社会」のブランドデザインが提案され、高齢社会への具体的な取り組みが次々におこなわれていたなら、「長寿社会」への国民の意識もまた広く醸成されていたことでしょう。

自治体によっては、すでに九〇年代に、たとえば東大和市、春日市、枚方市、新居浜市、柳川市など先駆的に「高齢者（高齢社会）憲章」を定めたところもあつたのでした。

「長生きは命の芸術品」ではじまるのは、「南国市高齢者憲章」です。

しかしながら全国的な活動にまでは進みませんでした。これは明らかに将来構想を示せなかった政治の側の責任です。国連の「高齢者原則」の五つを意識して活動することがそのまま「高齢化」への参加なのです。

わが国の場合は、「自立・参加・ケア・自己実現・尊厳」の国連五原則のうち、わずかに「ケア」だけは国際的レベルの実質をもって官民協働で推進されてきたといえます。「国際高齢者年」に参加して高連協を支えてきた福祉関係の団体、とくにさわやか福祉財団（堀田力会長）は、その後も一貫して活動を継続しリードし成果を示してきているからです。

「国連五原則」のそのほかの課題、高齢者の「自立」意識の醸成、就労や学習といった「社会参加」、円熟した技術や知識の集大成としての「自己実現」、敬愛される人格の達成である「尊

厳」などはまだこれからといったところにあります。

延滞や欠落をる述べてもしかたがありません。この二〇年余りを準備期と考えて、人口の四人にひとり達して世代的ボリュームを得たところからの本格的活動として、「三世代平等型長寿社会」の達成をめざすこと。高齢者みんなが「わたしの高齢期」を意識して、地域生活圏にみずからの暮らしを充足させる「モノやサービスや居場所」をこしらえるために努めること。「社会の高齢化」を実現させていくなれば、企業や組織もまた「高齢化対応のリストラ」に努めていくことでしょう。

そして「1999年国際高齢者年」をスタートとして、新世紀を迎えて着実に推進していくなら、高齢者がしわ寄せを受けて苦難を強いられることなどありえないはずなのです。「高齢化先行国」のモデルとしての役割は十分にはたせるはずのものなのです。

㊦ 不戦不争の灯かりを伝えて

「ノウサギ平和主義」

夏のある日の午後、続いていた干天に「如滴の雨」があつたあと陽がさして、快い風が生育期の稲にとつても、また人間（ここは「じんかん」にも心地良く吹いていました）。

カフェ・Hの屋外のテーブルでのお茶のひととき、「あ」と連れがいい、見ると風に乗って草の間をノウサギが跳んでいたのでした。その姿がここにひとつの構想をもたらしてくれたこと

を、「如滴の雨」に感謝いたします。

それは「ノウサギ平和主義」です。

外敵の多い原野で、戦う器官をもたないノウサギは戦わ(え)ないで生きながらえています。危険を察知する長い耳、跳んで逃げる後ろ足、そして隠れるための三つの逃げ場をもっていて、ひたすら外敵から逃げることで「平和」を保ちつづけているのです。この兎の生き方を「狡兎三窟」というようですが、ずるがしこいではなく、かしこいではないのです。ずるがしこいというのは、見つけても捉えられない人間の側の評だからです。

「平和憲法」を保持するこの国での「ノウサギ平和主義」というのは何か。

① 「戦争反対」をいいつづけること。

前世紀の世界大戦の戦禍を繰り返さないための叡知として敗戦国のわが国に託された「日本国憲法」。日本国民のものであり日本国民だけのものではない史的モニュメント。

闘う術を持たない「平和」保持の条文「第九条」をあと三〇年を保ちつづけて、「日本国憲法制定」世界平和一〇〇年記念式典」を、圧倒的な国際的オベイションを受けて行うためには、いまから「二〇四七年記念式典」の実現を国際的に広報をすること。国連を通じて、あるいは国家間の交流を通じて、わが国の「平和主義」への国際的な支持を取り付けて、この誇るべき日本主催の二一世紀最大の式典を成功させること。「憲法改定」の意図の先回り

をして、世紀にわたる国際平和の旗じるしとしての「九条旗」をかかげる。そのときをまつて「第九条」を世界文化遺産に申請する。「♪原爆ゆるすまじ」を添え歌として。

② 「三大隣国」の国民に国際的平和を守らせること。

いま現実の三窟は三つの大国であるアメリカ、中国、ロシアです。この三国にかこまれて「平和憲法」を保持するノウサギ主義日本は、この三大隣国の平和を希求するグループと結んで、等距離の自主外交によって国際平和を守ることになります。

③ 多彩な「国際会議」「展覧会」「展示会」「スポーツ大会」を開催すること。

東洋のスイスとして、全国各地に国際会議場を設けて、常時さまざまなテーマの「国際会議」「展覧会」「展示会」「スポーツ大会」を開催すること。国際医療センター（会議にきたメンバーが信頼してカルテを残す）も。

④ 「和食と日本の四季」を活かす。

世界各地からの観光客が「和食と日本の四季」を堪能して、暮れなずむ温泉につかって、自国語で「ニッポンっていいな」といつてくれるように。一生に春夏秋冬の四回は訪れるのを楽しみにして。その「ホスピタリティ（おもてなしの心）」はすでに備わっています。

⑤ 「ローカル・ローカル交流」

友好都市・姉妹都市を結んで地域と地域が連携すること。

これまでも「海外のよいもの」をとりこんで保存してきた国民性を活かして、世界の文化・

情報を保持し公開する。各分野での「正倉院化」は国是としてあっていい。モノばかりでなく、国際カラオケセンターといった世界の音楽が聞けて歌える施設も設ける。

欄外 ただし自衛のための軍備は国民の自衛意識と国力に応じての保持を論ずるべきであり、国際平和のために掲げる国論とは別個のものである。

*国際平和会議と「第三回WAA会議」の招致

この「国際平和」と「普遍的長寿社会」の推進を合わせもつ国際的な活動が、二〇二二年に開催が想定される「第三回高齢化世界会議（WAA22）」の日本招致です。

この国際会議は、東京が二〇二〇年のオリンピック・パラリンピック開催で精いっぱい時期なので、首都圏（一都三県・成田国際空港や幕張メッセをもつ千葉県や友好の船が訪れる神奈川県は地の利を活かす）を中心にして共催する。「世界高齢社会宣言」の起草を目標にすえて、政・官・産・学・民の代表による準備会を起こし、全国三四〇〇万人の高齢者が参加して「先進的高齢社会」を支えることで存在感を示すこととなります。

二〇二〇年には四年ごとに世界のアスリートが力と技を競うスポーツの祭典「第三二回・オリンピック・パラリンピック」が東京で開催されます。それに向けてJOC（日本オリンピック組織委員会）が設置され、エンブレムを決め、東京は会場の設置を急いでいます。

それと重ねての国際的活動になるわけですが、第一回は一九八二年にウィーンで、第二回は二〇〇二年にマドリッドで開催されて、二〇年ごとに開催が予測される第三回・二〇二二年の「高齢化に関する世界会議」(World Assembly on Aging)を、「高齢化」のトップランナーである日本へ招致し開催することは期待される重要な国際貢献です。

二一世紀の潮流である「地球丸ごと高齢化」という課題を取り上げて、各国の政府関係者、専門家、経済人、報道人、NGO、市民の代表が一堂に会して、一九九九年「国際高齢者年」、二〇〇二年「第二回高齢化に関する世界会議」以来の成果を共有し、将来構想を討議する機会とすること。わが国の高齢者の知識と経験による「すべての世代のための高齢社会」形成への活動を公開しながら、世界から招いた優れた友人とともに、「国際平和と普遍的長寿社会」の新たな構想を掲げることは、平和国家・長寿社会のリーダーとしてのわが国の責務でもあり、前世紀から引き継いだ歴史的事業であるといえます。

会議は国連の指針として「高齢者に関する国連五原則」にうたわれた「自立、参加、ケア、自己実現、尊厳」の精神を基調として、一人ひとりの高齢者のだれもがどこでも充実した人生を享受できるように、新たな行動計画を練り上げることとなります。世代間・男女間・民族間・地域間の協調を実現するこの第三回日本会議の成功は、「人類の平和的共存」の将来を明るくもにす礎になるでしょう。

「会議名」

I 第三回「高齢化に関する世界会議」(World Assembly on Aging' WAA) 2022

- ・国内会議としての「高齢化に関する国内会議(地方都市)」
 - ・地域会議としての「高齢化に関する東アジア地域会議」
- を合わせておこなう。

各国の実情に関する情報収集・リソースセンターの設置を要請しつつ第三回 WAA の中心議題を「(仮) 高齢化と社会経済の革新」とする。

II 「世界平和会議」―平和共存への道― 2022

世界大戦後の「平和日本」を推進した各界代表者および元大統領・首相・学者・宗教家ほか国際的な高齢リーダーを招へいする(この会議は日本で継続して開催も考慮)

III 「世界高齢社会活動家会議」―すべての世代のために― 2022

NGO、学者、経済人、報道人など各界の高齢社会活動の実践者・市民が地域の成果・課題を語り合う。 「高齢化世界会議」招致推進の会(仮称) 二〇一四年八月

「戦後七〇年目」の八月の心

「戦後七〇年」の二〇一五年八月一五日、そして「憲法制定七〇年」の二〇一七年五月三日。このふたつの記念すべき日を、みなさんはどういう思いで過ごしたのでしょうか。

戦後七〇回目の八月一五日「終戦記念日」を前にして、村山富市(五〇年目)・小泉純一郎(六

○年目）両首相の談話の継承が注目されていた安倍晋三首相による「戦後七〇年首相談話」が八月一四日に閣議決定されて、夕刻に安倍首相から記者発表されました。

TV会見で全文を聞きましたが、主要な課題は網羅されているものの、間接表現が多く首相の思い（心臓音）がどこにあるのかが伝わってきませんでした。何か欠けていたとすれば、それは戦後七〇年にわたって平和を守りぬいてきた国民へのねぎらいと誇りが心をこめて語られなかったせいでしょう。

翌八月一五日正午の黙とうを終えてから新聞で読み直してみました。が、「植民地支配」「侵略」「痛切な反省」「心からのお詫び」といった文言は入っているものの、「二一世紀構想懇談会による提言の上になつて」（記者会見での冒頭発言）いるためか、「こういう理由でこうなつた」という有識者的な発言になつたからでしょう。付されていた英訳でも「H」はたつた四カ所だけ、あとは「We」か「Japan」が主体者でした。『朝日新聞 二〇一五年八月一六日付』
「憲法制定七〇年」の二〇一七年五月三日に、安倍首相は二〇二〇年を「改正憲法」施行の年にし、第九条の1項「戦争放棄」と2項「戦力の不保持」を残しつつ「自衛隊の存在」を記述することを議論してもらいたい旨の発言をしています。『読売新聞 二〇一七年五月三日付』

*「命」をいう女性と「戦場」をいう男たち

「戦後七〇年」についての発言では、前述しましたが、内閣府主催の「高齢社会フォーラム i

n 東京」での「命が主人公」をいう樋口恵子・高齢社会をよくする女性の会理事長の基調講演が思い合われます。樋口さんは、

「わたしたちは平和の証として戦後七〇年を迎えており、自分で選びとった人生が画ける『命が主人公』が平和の証であり、このことは若い人にも共通で、一〇代の少年少女にも、そしてこれから生まれる人びとにも『人生一〇〇年』がある」という発言をしていました。

日本人の長寿を支えたものは平和と一定の豊かさ。その結果生じている新たな問題が社会システムの修正や新設であり、社会システムを「人生六五年型」から「人生九〇年型」へつくり変える活動、これを成し遂げて初代として金メダルにふさわしい生き方若い方をしなければ、という覚悟を樋口さんは実感をにじませて語りかけていました。

前述した古希世代の上田恒一さんも、国会前での安保法案阻止の抗議集会にアンポ世代として参加した折りに、かつての騒動の学生と違って若い母親の姿に多く出会ったといいます。

大正生まれの青木志げさんは次の戦争への予兆を感じる女性のひとり。青木さんの思いは「反戦」を叫ぶ若い女性たちに繋がりはしますが、平和を当然の情景として暮らしてきた彼女たちに心の芯まで通じること無理といえます。母の胸中に居座っていたような過酷な戦争の記憶がない若い女性たち。それでも他国の戦場で死ぬ若者たちの姿に心を痛めて、いつか現実に子どもが同じ道をたどる「生む性」としての危機感は理解できるといいます。「戦場」での戦死の可能性ばかりを議論する男たちと違って、根源的な「平和」を望む「生む性」としての声として。

「日本国憲法一〇〇年」を国際的に祝う

「不争」（争わず）でおわる書物をご存じですか。『老子』です。

何もしないで「不争」（争わず）ではなく、「為而不争」（なして争わず）です。争いが常態だった不幸な時代（周朝末期から戦国時代）に生きた老子（李耳）は「不争之徳」（六八章）をこう記しています。

まず「善く士たる者は武ならず」（ほんとうの武人は武力をかざしたりしない）、「善く戦う者は怒らず」（ほんとうに戦う者は怒りによつてはしない）、怒りは怨みを残すからです。さらに「善く敵に勝つ者は与（くみ）せず」（ほんとうに敵に勝つ者は四つに組んで完敗させたりしない）、そして「善く人を用いる者は之がために下となる」（ほんとうに人を納得させる者は相手の言い分を聞いて下につく）といえます。「武ばらず、怒らず、完膚なきまでにせず、下手に出る」、この四つが「不争之徳」です。

「不争（平和）」の側から掲げたわが国の「憲法」は、世紀を越えて世代を重ねて守るべきものであり、「平和」を崩そうとする側の論理・営為を「不争之徳」をもって論駁・停止させつづけねばならないのです。

衰亡の淵にあった周の都洛陽にいて、蔵書室の官として古今の冊簡を涉獵しつくし、王都にいて現下の世情を知りつくした哲人老子は、一個の人間としては人生がかかり、人類にとって

は行方がかかる至言として、「善く戦う者は怒らず」といい切って去りました。

怒りによる戦いは勝利してもほんとうの勝利者にはなれない。敗者による新たな怒りを呼び起こすだけだということ、だれもが体験として知っていること。勝利者としてあるいは敗者としてひとときの鎮静は得られても、紛争の根本的な解決にはなりません。では紛争の解決策として、ほんとうの成果（勝利）を得る極意は何なのでしょう。怒りでなくて何によって戦えばよいのでしょうか。

「怒」（いかり、憤懣）ではなく「恕」（ゆるし、思いやり、憂慮）だというのが、実践者としての東洋の哲人の覚悟です。

漢字というものの不思議な存在感がここにありません。

このふたつの字をよく見てほしい。下に心のついたよく似たふたつの文字は、人間の「心」の働きのどこか同じところから発するものなのです。ですから「怒」も「怨」もそして「恕」も、人の心のはたらきの「多重標準」ということができます。「怒」（いかり）を発しようとするとき、人は「怒」（いかり）ではなく「恕」（ゆるし）として発することができます。漢字をつくり用いてきた先人はそうしてきたにちがいありません。

「恕」については、孔子もまた弟子の子貢から「一言にしてもって終身これを行うべきもの有りや」と問われたとき、「それ恕か。人の欲せざるところを人に施すことなかれ」と答えています。百寿期にあった日野原重明さんも「恕」への思いを述べておられます。

この終章で、人生の高年期の「尊厳」をいおうとして、「怒」（いかり）から始まったのは、一気に「尊厳」にいけないからです。いま高年者は「憤懣」を抑えきれないところ입니다。

前世紀の終わりに、この国の先人は、「長寿をすべての国民が喜びの中で迎え、高齢者が安心して暮らすことのできる社会の形成」（「高齢社会対策基本法」前文）を思い描いてめざしたのです。二〇年を経てその姿が見えないどころか方向さえはつきりしません。

本稿はここではだれの心にもある「怒」を活かして「怒」を鎮める叡智として先人のことばを読むことにし、わが心のうちの「怒・憤懣」を「怒・憂慮」に転ずる心のはたらきを、ここでは「尊厳」と呼びたい。お互いが新世紀一〇年余をやりすごしてきて胸中に溜め込んだ「怒・憤懣」の思いを黙止せず、「怒」を呼び起こして深い「憂慮」によって動く。一人ひとりの「憤懣」をみんなが「憂慮」に変えるとき、世は「尊厳」によって安寧さをとりもどすでしょう。多くの高齢者が高年期を「怒と憂慮」を守りぬいて暮らすなら、舞台は回るでしょう。人生終章の舞台を、みずから「円熟期ステージ」の主演として演じきる。演じきるというのは、高齢者としての自分を見ている自分の目を意識するということです。

*不戦不争の灯かりを伝えて

原子爆弾という人類を滅亡させる可能性のある最終兵器が登場したのが先の世界大戦です。広島と長崎の無辜の民を殺傷して立ちのぼった原子雲は、そのシンボルとなりました。その

あとに「恒久平和」を掲げた「日本国憲法」は、戦乱で亡くなった世界中の人びとへの「哀悼のモニュメント」（歴史的記念碑）であるとともに、戦争による「人類滅亡」という究極の暗黒イメージを振り払う希望の灯火として掲げられた「人類生存」への聖火です。

憲法が誕生した歴史地盤まで根が届かない底の浅いこの国の政治家が、改正するなどともいえるものではありません。

それとともに、もはや人類は国際的紛争を解決する手段として、戦争や武力による手法が不可能になったことを宣告する時代となっているのです。

とくに「第九条」は、世界大戦の犠牲者の「心火」によって燃えつづけ、後人の心に戦争の悲惨さ愚かさを伝えつづける「不戦不争の灯」として、われわれ日本人に託された「人類の遺言」ともいうべきものです。

いまや人類を破滅させる戦争という紛争解決の手段は、個人にとって、そして人類にとっての悪夢です。悪夢ですから現実にはありえないのですが存在はしています。

問題は個人でも人類でもないその中間の存在である「国家」にあります。日本国の国民は「日本国憲法」のなかの「第九条」を、各国の国民に伝え、国の法として掲げて共有するよう働きかけなければならぬ役割を負っています。

いまの天皇・皇后は戦争の惨禍を繰り返さないための慰霊の旅をなされています、長崎、広島、沖縄、サイパン、パラオ、フィリピン・・・。

日本国民としてできることは、「不戦不争の灯」である「第九条」を守り、お互いを励まし、平和の証としての「心火」を胸から胸に灯しながら「長寿」でありつづけることです。

日本の首相は、外国訪問の機会を多く持っているのですから、その際に行く先々で貿易交渉もさることながら、「平和憲法」を保持する「平和国家」であることを伝えて、各国民にわが国の唱える世界平和の立場に賛同するようメッセージを出すべきでしょう。

日本国憲法 第九条

第一項 日本国民は、正義と秩序を基調とする国際平和を誠実に希求し、国権の発動たる戦争と、武力による威嚇又は武力の行使は、国際紛争を解決する手段としては、永久にこれを放棄する。

第二項 前項の目的を達するため、陸海空軍その他の戦力は、これを保持しない。国の交戦権は、これを認めない。

敗戦の惨禍から七〇年を越え、新世紀を迎えて一五年余り、国内には「憲法改正」の議論をすすめようとする勢力の台頭がみられます。「第九条」については、安倍首相は第三項として自衛隊の存在を加えて（加憲）二〇二〇年までに国会を通して国民投票にかけようと要望しています。違憲をいわれつづけてきた自衛隊を一気に護憲の自衛隊にしようという策略です。成立

の経緯を確認し、党派性を排して衆議して、新世紀を通じて引き継ぐべき国是としての「第九条」は、そのまま国際的歴史的文化的遺産として護りつづけることを確認する機会とすべきでしょう。自衛隊を追認するための第九条ではありません。「国際平和」のシンボルです。

あと三〇年、制定一〇〇年までは制定時を知る長寿者がそのまま保持し伝えるべきものです。そして「国家」による戦争の兆しがあるかぎり、次世代が引き継いで訴えるべきものです。「太平洋戦争」のあとも国際紛争は絶えることなくつづいてきました。軍事技術は仮想敵国を想定しながら発展・増殖をつづけています。それは朝鮮戦争、ベトナム戦争、イラク戦争でその恐るべき一端をみせつけてきました。いまま局地戦・自爆テロは後を絶ちません。原爆・水爆の製造と保有はつづき、北朝鮮のような独裁者による危険な手段として用いられています。

戦後七〇年。

いま確認すべきことは、憲法の条文の改変をおこなうことではなく、条文の裏に燃えつづけている「先人の心火」を感得し、みずから引き継ぎ、国際平和への灯として伝えることです。戦争を知らない若い人たちは、先の戦争の惨禍を知っている七〇歳以上の先人から戦禍を聞き取り、胸中から胸中へと引き継ぐこと。それが「平和」を引き継ぐことに通じます。

内なる平和を外なる軍隊によって守るのではなく、内なる戦禍によって外なる平和を護るのです。そうすることで、日本国会での「安保法制」の議論は紙上の議論でしかなく、現役政治家の想像力の深度も構想力の精度も問題の根幹まで届かず、「日本国憲法」を改変する能力も

資格もなかったことを知ることになるでしょう。自分が納得できるレベルの認識で改憲を实行しようとするれば必ず歴史的過ちをおかすことを知るべきでしょう。「自主憲法」と称して根幹に傷をつけるとすれば、先人にも後人に対しても、これほど恥ずべき行為はありません。

憲法は、今ある人びとのためのものではあるが、今ある人びとのものではない。

たいせつなので繰り返しますが、いま日本の政治家が謙虚になすべきことは、平和を希求する世界中の人びとの願いを引き寄せて共有し、戦禍の歴史を未来につなげる日本国憲法の趣意を「国際世論」とするために努めて、三〇年のちに迎える「日本国憲法施行一〇〇年記念式典」を、国際平和のもとで世界の国々のオベイションに迎えられて実現できるように支えつづけることなのです。

国際的に先行してたどる「日本高齢社会」形成への歩みを、そのまま「世界平和のメーセージ」として認知すること。天年（天寿）を全うする一人ひとりのわが国の高齢者の日又一日の命の灯が、そのまま歴史を貫いて流れる不戦不爭の叡智に託した「戦争放棄・恒久平和」を実証する明かりとして灯りつづけていることを確認することです。

「日本国憲法」の「不戦不爭」の明かりが途絶えたとき、わが国はまた半世紀あまりを積み上げて得た国際的な評価を閉ざし、歴史的な輝きを失うこととなります。

耳をすまして過ぎこし百年の声を聞き、目を見開いて来たるべき百年を見透かせば、選ぶべき道はおのずと明瞭なはずなのです。

△ 「寿終正寝」(天寿九〇)を全うする

「人生の達人」としての八面玲瓏

深夜に、無理かなとは思いつながら、指なれしたパソコンを前にして「八面玲瓏」と書こうとして「REIROU」と打ったら、なんと「冷老」と出ました。

眠気覚ましにしては「冷老」とはいささか過剰な応答ではないですか。

そう言い含めたところで、機械に何ほどかのお詫びと学習を求めることでもありませんが。パソコンの辞書から学ぶところもないではないですが、気ままな応答にはたびたび辟易させられます。「玲瓏」くらい一発で出なくては辞書として失格ですし、「冷老」では失格のうえにさらに失礼です。

そこでペーパーの辞書を開くと。れいろう「玲瓏」には「玉などの透き通りあきらかなさま」とあります。さらに「だれに対しても曇りなく応対できて、処世が円滑であること」といったあたりが、ここで本稿がほしい解説です。

「玲瓏」を好んで揮毫する人に棋士の羽生(善治。永世名人)さんがいます。盤上の争いとはいえ、真剣勝負を前にしての澄んだ心境が示せる、含みのあるいいことばなのです。

夜も三更(これも一発では出ません。夜五更のうちのまんなか、いわゆる午前さま)に至って、思い立って、日録に「八面玲瓏」と書こうとしたわけは、

ひとりの「人間」として、
ひとりの「親」として、
ひとりの「働き手」として、
ひとりの「住民」として、
ひとりの「市民」として、
ひとりの「国民」として、
ひとりの「国際人」として、

そして、ひとりの「現代人」として、

八面から「高年円熟期」をすごすわが身を省みて、出会うだれかれに対して曇りなく「八面玲瓏」に対応しなければと思いつたからなのです。思いつたとはいえ、われながらやや大振りな表現かなと思いつしながら、そんなフルスイングに近い心境になるのは、羽生永世名人なら「玲瓏」としたためて向かう「名人戦」のときかななどと勝手に思いを寄せたりして。

ところで名人と達人はどう違うのでしょうか。

「名人」とは、技芸にすぐれて名のある人。

「達人」とは、広く物事の道理に通じた人。人生を達観した人。

と、ペーパーの辞書にはあります。

とすると、「名人」のバーは高くてもなれるわけではなく、「永世名人」ともなれば

雲上の人、勝手に思いを寄せるのはパソコン的失礼に当たってしまいます。

「達人」になら、これから限りある生涯その気になって努めれば、だれもがなれる。そこまですらなんとか跳べると思うところに「人生の達人」のバーはあるようです。

ここで「達」について、東洋屈指のというより随一の哲人孔丘先生から習うことにしましょう。（『論語「顔淵一二」』から）

弟子のひとり子張に「達」とはどういう姿をいうのですかと問われて、こう答えます。

なにより質朴で正直なこと（質直）、だれのどんな言いぶんも有意義であると思うこと（好義）、人のことばをよくわきまえて（察言）、表情やふるまいをよく見定めて（覲色）、配慮して人の下につくこと（慮以下人）だね、といっています。（カッコ内の原文からご自分で想定してみてください）

右のような生き方ができている人も、なお途上にある人も、これから努めてやってみようとする人も、そろって「達人」でありえます。目標値までは未達成でも、それを生涯にわたってめざしながら、だれとも等しく親しく接する人生を送ろうとしている人を「人生の達人」と呼ぶことができそうです。これなら特定の能力の人だけではなく、だれもが「人生の達人」になれると理解してよさそうです。

三更でのひとり語りをここでまとめますと、「人生の達人」というのは、よくよく見定めた人生の目標を生涯にわたって質直に達成をめざして努めつづける人、の意となります。不足の

ところはご自分で補足して納得しておいてください。

ここで「八面玲瓏」であろうとするのは、本稿が終章に当たって、同時代を生きるだれとも曇りなく応対しながら「人生の達人」をめざそうとするものだからです。

棋道の永世名人である羽生さんなら、盤の向こうに対面するのは、いずれ劣らぬ好敵手でしょうが、願って「人生の達人」をめざそうとする当人が盤の向こうに対するのは、他でもないもうひとりの自分なのです。

もちろん先手はこちらにあります。

「おまえが達人にだって？ 丈人までは納得できたが・・・」

そう口撃の先手を打たれて、一瞬「挙棋不定」となります。コマを手にとって挙げたもの、さて打つ心が定まらない。打たなければ先へ進まない。

「まあ、いいか」

初手ですから定石中の定石である2六歩にコマを置きます。

将棋盤をはさんで、自立できない息子のこと、認知症のすすむ友人のこと、繰り返す小地震でゆるんだ屋根瓦のこと、まちの緑化のこと、「憲法」のこと・・・八方塞がりにも思える目前の課題にどう取り組んだらいいのかの策を練り、「達人談義」を交わしつつ、一步をすすめるのは自分自身なのです。

＊高年期の充実にむけた自問自答

これまでの「人生六五年」その後は余生の意識を、「人生九〇年」に延ばして改めたうえで、その期間を身の周りと地域社会を暮らしやすい姿に変えながらすごしてほしいという懇請に近い要請を、高齢者一人ひとりに対して内閣府が出したのは、先にも記したように「高齢社会対策大綱」（二〇一二年九月改定）においてです。

こんな要請にひとりの住民として、市民として、国民として、質直にどう対応すべきかと思いついて悩んでいるうちに、三更をすぎて前記の「八面玲瓏」の心境に達したのです。

手厚い介護など、国庫に余裕があったころに決めた「社会の功労者」としての高齢者をねぎらい「温存」するしくみが、新世紀になって一〇年余り、どこまでつづくかに不安は感じながらも、多くの高齢者は六五歳から支給される「年金」を頼りにこのまま生きられるところまで生きればよいと考えて、さしたる切迫感を感じてこなかったのです。国からそんな苦渋に満ちた指摘や社会参加の要請が、「支え手」としての高齢者にむかって出されたことはありませんでした。

「大綱」に示されている要請はいろいろです。

まずは「人生九〇年」への「高齢者意識」の醸成、健康づくり（自助）、その上での就労、社会参加（互助）、学習活動（知識・技術の習得）、生活環境（住まい）、市場の活性化（モノの製造と利用）、全世代の参画（世代交流）といった各分野への積極的な関心と参加です。

これまで「高齢者意識」については、多くの国民は、定年が延びて年金が支給される「六五歳から」と意識することはあっても、「人生九〇年」の幅で考えることはありませんでした。この唐突な二五年の延伸こそがこの間の高齢化対策が延滞してきた証なのです。

すでに指摘してきたように、今世紀にはいつて以降の高齢社会対策担当大臣にはこぞって対策延滞の責任があるのです。政治の側がこんな認識だったからこそ、多くの高齢者は六五歳の高齢期に達したあともは黙止されてきて、いま唐突な国家の要請に直面しているのです。「高齢者意識」は未熟かせいぜい半熟で、質直に応じたくとも応じられないのが実情でしょう。

みずから意識して努めて青少年期、中年期とは一味違った成熟・円熟期の生活感性をだいにしして、「現役長生」型の暮らし方を選択してきた少数の人びとは、「やっとなびいたか」

と、遅すぎた要請を質直に受け入れようとしているというのが実感でしょう。

「人生六五年」を過ぎ終えてやれやれと「引退余生」期を迎えて、けっこう長かった現役時代のトップギアからミドルあるいはロウにまでギア・チェンジしてしまった多数の人びとにとっては、「いまさら何を」の思いがあるにちがいません。

とはいえ、高齢者（六五歳以上）が三四〇〇万人、二六％にまで達してなお増えつづける社会では、一人ひとりの高齢者の二〇年を越える「余生」に、高いレベルの介護や医療を提供しつづけて、穏やかに終末を看取するという「社会保障」ができなくなるということは、周りを見、

総体を考えれば、だれもが納得せざるをえないことでしょう。

そこで「自分だけはなんとか」と考えるとき、そこから「格差」を認める思考過程に入ることになり、「温かな助け合い」（互助）の輪から抜け落ちることになるのに気づきます。

先に芥川龍之介が書いた「蜘蛛の糸」の主人公、犍陀多の心の動きに触れました。

『蜘蛛の糸』の作者は糸が切れるのを待たずに自死したのですが、お釈迦さまがおいでになる極楽へもその対極にある地獄へも行きたくなかったのでしょうか。

極楽と地獄というのは、鋭敏な作家芥川がとらえた当時広がりつつあった「格差」の表現であり、その途中で一筋の蜘蛛の糸にすがって「自分だけは」と考えたことで、犍陀多は地獄へ落ちていきました。その後、関東大震災という生き地獄を体験したあと、芥川を自死にいたらしめた「唯ぼんやりした不安」についてはその場ではないので深入りしませんが、その後の生きづらい時代を芥川が予見して出会うことを拒否したことは確かです。

ここで再びなゆえ「自分だけは」と考えた犍陀多の心の動きに触れるかといえますと、「格差」が広がる世相が際立っているからです。

大戦後の国づくりは「均衡ある国土の発展」でした。個人的に豊かになれるものからなれとはせず、横並びでみんなで等しく豊かになろうとしてきました。国のリーダーも企業の経営者も店主もみんなしてそう努めた成果が、「近似大同社会（九割中流）」でした。いまや「自分だけは」と思わざるをえない世の中で、「人生九〇年」を前提にして社会参加をして暮らせ

というのは酷な話ということなのです。といってみんなが「人生六五年」から余生を送りながら、「自分だけは」という思いですごすというのも罪な話です。

酷でもなく罪でもない穏当な話にならないものかということなのです。

どうすればいいのでしょうか。

これまで復興期、成長期、繁栄期をうまくこなしてきた社会のしくみをそのままに、晩年期を格差の広がる時代と意識しながら「自分だけは」と考えて暮らす多数の人びとは、自分が極楽に到達することはできないことはわかっているでしょう。

人を差別なさらないお釈迦さまが悪人だった犍陀多をなぜ助けようとなされたのかというと、一匹の蜘蛛を踏み殺さないで助けたからでした。健康がつづいて「フレイル」（筋肉が衰えて活力に自在性が失われ暮らしに支障が出る）状態までは「自分だけは」と考えずに、可能な範囲で蜘蛛を踏まないほどの助け合いの活動（互助）に参加をする。淡々とそうして暮らして気づいてみたら「人生九〇年」にまでたどりついていたら、それは幸せな晩年期であったということになります。

そういう人びとを、お釈迦さまはきっと極楽からご覧になっていて、一人に一筋の蜘蛛の糸を垂らしてくださるにちがいないからです。

どなたかそんな『蜘蛛の糸』を子どもたちのために書いてください。

いま「引退余生」タイプであった人が地域デビューするのにむずかしいことは何もありません

ん。どこの自治体も「高齢施策推進課」「長寿社会推進課」「健康福祉課」「まちづくり推進課」といった窓口を用意して待っているのですから。現役時代に身についた「自閉的な暮らし」をそのままつづけることが恥ずかしいと思えるほどなのです。自閉症が解ければそのまま地閉症は消えてしまいます。

無病のうちから介護予防（自助）に努めながら地域での介護支援（互助）に参加する。みずから「有訴」（症状が元にもどらない）となり、「フレイル状態」を自覚するようになり、「介護」を受けざるを得ない側に移るプロセスを想定しながらすすごすこと。「人生の達人」をめざして、ここは盤を挟んで自問自答がつづく局面なのです。

「寿終正寝」（天寿九〇）を全うする

「寿終正寝」の項を書くに当たって、亡くなって日が経つのに高倉健さんと蛭川幸雄さんのおふたりがしきりに思われます。日又一日を一筋に質直に生命の躍動感を測りながら燃えつづけて生きることに。「寿終」のときまで、こころざしは「芸」の道一本を専らにして。

第一章の「カレイな加齢はみんなのもの」で古希を迎えた吉永小百合さんにご登場いただいたので、最終章のここでは、だれより健さんのことをひとこと。

俳優高倉健（小田剛一さん）は二〇一四年一月一〇日に亡くなりました。

そのときは「尖閣」問題や「政冷経冷」までいわれて日本ぎらいの中国でも、「文温」とし

ての存在を素直に表現して、硬漢高倉健の去世は全土で惜しまれました。大地から湧きあがるように、ニュースとして全土に広がりました。かつて文革のあったあと、一九七八年に中国で最初に上映された外国映画が「君よ憤怒の河を渉れ」（中国名は「追捕」）であり、その主演者としてよく知られていたからでした。主人公の検事が着たコートは半月で一〇万着も売れたといいます。

温家宝前首相は「追捕」はもちろん、「三丁目の夕日」（「永遠的三丁目的夕陽」）や「おくりびと」（「入殮師」）をみて、戦後日本の大衆の暮らしや共有する死生観を映画から理解しています。

その後も中国では高倉健主演の「幸福の黄色いハンカチ」（「幸福的黄手帕」）や「遙かなる山の呼び声」（「遠山的呼唤」）が上映され、二〇〇五年には張芸謀監督による合作映画「単騎、千里を走る」（「千里走単騎」）が撮影されています。張監督は、その公開にあたって、高倉さんは眼ではなく心で泣く（心在哭泣）演技者だったと紹介しています。

二〇一三年の文化勲章受章のときに、高倉さんにはすでに症候が顔に現われていたといいます。式後の「日本人に生まれて本当に良かった」ということばは静かに実感をもって離世の思いを伝えていました。

「往く道は精進にして、忍びて終わり悔いなし」

は、高倉さんが数多く演じた任侠に生きる男の「忍辱負重」（辱めを忍んで重責を負う）を

生き抜いた人生を思わせませす。

「おしん」がそうであったように、健さんは自分が演じた「忍辱負重」の人物が、今の日本人びとにはなく、東アジアの途上国で苦勞して暮らしている人びとを励ます人間像であることを知っていたからでしょう。アジア共有の盟友だったのです。

「不器用ですから・・どうぞお幸せに」（コマーシャル）

と行って去っていくうしろ姿を残して。健さん、現世で演じなかった幸福いっぱい（幸福開心）の人間を、ぜひ天堂で演じてください。

おつかれさまでした。享年八三歳。

「一以貫之」、天寿を全うした健さんをここに記しておきたい。

*「自己実現」と円熟エンディング

「寿終正寝」というのは、成すべきことを成し終えて、住み慣れた家で、部屋で、親しかった人びとに囲まれて、眠るようにして命終える姿をいいます。

「寿終正寝」を願わない人などありません。

長い平和を保ちつづけているこの国の平和は、「天寿を全うする」ことが一人ひとりの願いであるとともに、みんなの願いであることによって引き継がれていきます。

高齢者のだれもがどこでもおだやかに暮らしながら、一人ひとりが天寿を全うすることで、

国際的潮流を先導する「日本長寿社会」は、高齢化途上国の羨望するものとなります。「戦争放棄・恒久平和」保持しつづける「日本国憲法」への賛同とともに、高々と掲げられる「日本長寿社会ブランドデザイン」構想への信頼を明らかにして追いつづけるでしょう。

隣人が穏やかに天寿を全うする「寿終正寝」を願わない隣人などありません。

庭越しに声をかけてくれた少年は、青年になり、父親になり、市民になりました。時の流れははやく、「歳々年々」人同じからずです。

大戦後生まれの人たちはだれもがよく働いてこの国を豊かにし、いま高齢者になって平和の証である「高齢社会」を構成する国民・市（町・村）民・住民のひとりとして過ごしています。住み慣れた地で、満足して暮らして、天寿を全うすることが、そのまま次の世代への、また国際的な信頼を引き継ぐ「平和のメッセージ」となることを確信しているのではないのでしょうか。

小さな水玉模様のような「尊厳人生」

毎夜、横になって静かに心音を確かめて眠りにつきます。

きょうのさまざまな出会いを愛しんで、あすの出会いに繋ぐために。

そっと胸に右手を押し当てて心音をさぐります。

たしかに、戦後七〇年余のあいだ、とくに激励も感謝も受けずに刻みつづけてきた頼もしい平和のリズムには、今夜も変わりがありません。

こうして八面玲瓏の「人生の達人」をめざしつつづけて、日又一日を努めて、新たな明日を約束してくれるエイジングの響きです。

目標とした九〇歳に達したときに「一以貫之」、生涯を通じて一筋に貫いた何かを納得し、そのことを知る人びとに囲まれて、永遠の別れを惜しまれる瞬間を共にすること。

「寿終正寝」、それが後人への最良のはなむけとなります。

小さな水玉模様のような「尊厳」ある人生。

高齢者みんなが等しく指針とする国連の「高齢者五原則」のひとつに「尊厳」があります。

水玉模様のような小さな「尊厳人生」を重ねて、円熟エンディングである「寿終正寝」のときまで送りつづける。

この国の新たな歴史に連なることをひそかな誇りとして。

* 指針の「老中八策」を傍らに

明治維新の坂本龍馬の「船中八策」に因んで、国連の「高齢者五原則」のひとつ「尊厳」のある「寿終正寝」をむかえるために、ここまで本稿が論じてきたさまざまな課題を整理して、平成シニア維新の指針「老中八策」としてここに提供しましょう。

眠りにつく前に口ずさむことができる形にして。

尊厳ある高齢期を送る指針

- 一 六五歳から九〇歳までの二五年を他力依存でなく過ごすため「自立意識」を確立中
 - 二 「引退余生」でなく「現役長生」で社会参加を続けながら「高齢期人生」を実現中
 - 三 培ってきた知識技術を活かして高齢期の暮らしを豊かにする「優れモノ」を制作中
 - 四 体(Ⅳ病気) 志(Ⅳ認知症) 行(Ⅳ介護) 三つのバランスで「包括ケア」を体現中
 - 五 「三世代(青少年)三〇歳 中年)六〇歳 老年)九〇歳+) 平等型」社会を創出中
 - 六 高齢者がつどう「居場所」でそれぞれの自己目標やみんなの課題の解決策を談議中
 - 七 日また一日欠かさずに出て「地域生活圏」(「支え合い」の現場)の形成に参加中
 - 八 「水玉模様のような小さな会」に加わり成果を語って各地各界の仲間同士と連携中
- 注 「自立・参加・ケア・自己実現・尊厳」(高齢者五原則)は国連が提唱する国際的指針。

国連が提唱する国際的指針である「自立・参加・ケア・自己実現・尊厳」(高齢者五原則)を活かして暮らすことで、一つまたひとつ国際的な活動に参加していることとなります。

「八策」を掲げているものの、すべてをとということではありません。

ひとつずつ、ひとつでも実現にむかうなら、それは歴史的「日本長寿社会」の形成に参加していることになり、「ニッポン発二一世紀オリジナル」の基盤を支えていることになるのです。

おわりに

二〇〇〇年の歴史遊行の旅

洛陽（ルオヤン）。

いまでも現代都市として輝いている中国・中原の洛陽市には申し訳ないですが、若年のころからわたしが関心を寄せつづけたのは、歴史の底に輝く文明揺籃の地であり、周公旦が「土中」と呼んだ洛邑でした。

そして何よりも二〇〇〇年ほど前の後漢時代に倭の奴国王の遣い（五七年）が、さらに三国時代の魏に女王卑弥呼の遣い（二三八、二四三年）がはるばると朝貢に訪れた都、「日中交流の原点」ともいえるべき古都としての洛陽でした。洛陽（洛邑）を訪れるという「二〇〇〇年遊行の旅」は、若い日からの志として、心の奥のあちこちに移動させながら持ちこたえてきました。

「初志」というよりは夢の領域に近かったから、実際に果たすとなると外から呼び覚ましてくれる何か特別の力が必要でした。

そんな衝撃的な力が何度かやってきて、契機はこれと行って明確ではありませんでしたが、いくつかの力に合わせ押されるようにして、古都洛陽へと出奔しました。

一九九四年の秋、定年を待たずに五五歳で、通い慣れた新聞社を自主退社して、遠い日の夢であった「二〇〇〇年遊行の旅」を果たすことになったのです。かつて日本からの遣

使が足跡を残した古都を訪れて、この国と大陸との関わりの原点に立つことで、大陸とこの国の将来を見はるかす糧を得るといふ漠とした目標を課しての出奔でした。そんな唐突な来訪者を温かく迎え入れてくれた洛陽外国語学院での外籍専門家（客員教授）として長期滞在することとなりました。

いまは城壁のほか何も残らない「洛陽漢魏故城」。

夏はとうもろこし、冬は麦の畑中の道を歩きながら、倭国からの遣い人を思い、邪馬台国からの難升米や都市牛利（どう読むのか）を偲び、王城跡から漠として東方に思いを馳せたとき、「東京」は奈良や京都に対応する東都であるとともに、当然あっていい現代の「東アジアの大都市東京」として多重化して意識されたのでした。かつて若い日に奈良や飛鳥の地をたずねて畑中の道を歩きながら東方をみたとき、日本の歴史と東京の役割が納得されたように、現代アジアでの日本のなすべき役割が発見できるような予感がありました。

*「洛邑土中」で得たふたつの課題

五五歳で、そのころめずらしかった「早期自主退社」をしてまで、しかも欧米の都市ではなくなぜ「洛陽」に？

長く「平和」でありつづけた時代が「長寿」として与えてくれるその後の人生になすべき課題とかかわってはいましたが、三年の滞在を終えて「洛邑土中」の地から帰国したあ

とも、なぜ？と問われてなお漠とした答えしかありませんでした。「平和裏」にこの国で暮らす国民（市民・人民）としてなすべき役割ということだけは確かでしたが。

そして世紀末に還暦とともに一九九九年の「国際高齢者年」を迎えたことで、この国に綺羅星のように輝く人びとともになすべき事業、平和の証である「日本高齢社会」形成への参画がひとつ明らかになりました。それと同時にもうひとつ、平和裏での「アジア共生への貢献」（先行国日本の「アジア化」によるアジア途上諸国の「日本化」）。

「日本長寿社会（高齢社会）」と「アジアの共生（ものの豊かさ）」。

このふたつの事業は国際的にも注目されるわが国の役割であり、「平和裏」になすべきその事業に体现者のひとりとして力を尽くして参画するというのが、世紀を越えて一〇年余をへて、わたしの確とした信念となっています。先達のご努力でどちらも具体的に明確になりつつありますが、どちらも後人の厚い支持をえて、誇るべき時代の成果としての姿はまだみえてはいません。（『頑張って生きよう！ ご同輩』 高連協編 二〇一二年一月二〇日・博文館新社より）

赤い兎の目と戦争の記憶

灯火管制の下で

昭和一三（一九三八）年の暮れ近くに東京の渋谷区で生まれました。

子どもの目に焼きついた戦争の鮮明な光景があります。その夜、灯火管制でうす暗い家の中が急にざわめいて、大人たちみんなが二階にあがり、物干しや道路側の雨戸を細くあけて夜空を見上げました。わたしも雨戸の隙間からおそるおそる夜空を見上げました。何本かの探照灯に照らし出されたB29。迫っていく日本の戦闘機。高射砲弾の煙と音。子どもの目でそれぞれの距離感は測りようもありませんでしたが、B29はゆうゆうと上空を横切っていくきました。

父と母の挫折

それからまもなく、母と子どもたち（わたしと妹）は父方の実家がある群馬県の農村に疎開することになりました。父は農家の次男坊で、東京へ出て小さな工場を経営していました。母は勝気な江戸娘で、銀座のデパートづとめをしていたころ、有名な女優さんが買い物をする場面に出演したことが自慢で、何度も繰り返し聞かされました。少年のわたしは両親の持ち味の違いに戸惑いましたが、無口で実直な父のほうに味方しました。父の実家近くで借家暮らしをはじめてほどなく、東京大空襲で父の工場は焼失し職人たちは散っていききました。東京での父の労苦は跡かたもなくなり、都会育ちの母は暮らしの基盤を失いました。

疎開先での暮らし

榛名おろしの空っ風、八幡さまの杜と杉の並木、信越線の細く長い線路、野外映画会を見た校庭、墨を塗った教科書、すぐ破れてしまった運動靴、春風と疾風のようなふたりの女先生、ドドメ（桑の実）、モモの摘果、ウメのひこばえ、道祖神の火、「鐘の鳴る丘」、草を食む兎、ぶ

つちめのスズメ、流し針のウナギ、田んぼのヒル・・・。

戦争を避けて父の実家がある農村で過ごした日々。わたしは本家のいとこたちや学校の仲間とすぐに馴染んで暮らすことができました。しかし自分には見えない都会少年のシッポを付けていたにちがいません。将来のためといって母が着せた“衣装”です。小学校に入ったときが終戦の年で、終戦の日は学校に呼び出されて、校長や先生方からいろいろな話を聞かされて、わけがわからないままひたすら明るい気分になって家まで走ってかえったことを覚えています。

赤い兎の目の記憶

ある日、家の壁に寄り添って小さな兎小屋ができました。妹が求めたものだったのでしょうが、摘んできた草の束を扉を開いて放ると、奥から兎が跳んで出てくる。赤い目でじっとこちらを見つめてから草を食べました。そのようすをこちらもじっと見つめました。危険を察知する大きな耳と跳んで逃げる後ろ足。戦うべき機能をもたない兎。ぴくぴく動く鼻とじっと見つめる赤い目が記憶に残りました。ある日、草の束をもって小屋にいくと、もうそこに兎はいませんでした。死んだのか逃げたのか他の動物に襲われたのかはわかりませんが、そのまますぐに忘れられました。にもかかわらず、その姿がその後いくどとなくよみがえります。

「ふるさと」の喪失

小学五年生の一学期の途中で、わたしはみんなと別れて東京に戻ることになりました。母の

意向だったのでしょうが、将来の不安は胸のなかに渦巻いていました。担任のK先生は親しかった何人かの仲間といっしょに信越線の踏切まで見送ってくれました。線路を渡ってひとりになったわたしは、振り返ることもなしに八幡さまの杜に向かつて走りました。背中に感じたK先生の視線と親しかった仲間との「別れの感覚」はいまも忘れられない「ふるさと」喪失の記憶です。

「雪中高士」のように

その後借りていた家は朽ちましたが、わたしが植えたウメのひこばえは老樹のたたずまいを立て立っていると聞きました。わたしもあれから六〇年余を都会で過ごして、いま此処に立っています。願わくば親木がそうであったように、冬の野に「雪中高士」として立ち、幾輪かの香りのいい花をつけていてほしいものです。〔続 頑張って生きよう！ ご同輩〕高連協編 二〇一四年四月八日・博文館新社より〕

「三世代平等型長寿社会」

本稿は新社会論です。「高齢社会」が高齢者による高齢者のための社会であるとすれば、その上で本稿は、「高齢者によるすべての世代のための社会」という国連の「1999高齢者年」の呼びかけと重ねて、史上にも国際的にも新たな「三世代平等型社会」を主題としています。「長寿社会」は三世代による三世代それぞれの、そしてみんなのための社会だからです。これまで

になかった社会をつくる当事者という意味で高齢者を主な対象としているとはいえ、新世紀の「日本長寿社会」を青少年期に過ごしている大学生のみなさんにも関心を持って読んでもらうことを切望しています。

啄木や李賀やラディゲとともに、漱石の『こころ』やドフトエフスキーの『カラマーゾフの兄弟』を読み砕いて人生の糧としている若い魂にも呼びかけたいのです。なぜと云って、「ニッポン二一世紀オリジナル」を見据えている本稿を人生の糧として、芽を出し秀（穂）を出し実をむすぶのは、いま青少年期にあるみなさんだからです。

ここでの大振りな論争は避けましたが、西洋の「物心二元論」（モノから人間への進化論）と東洋の「体志行三元論」（生命体の常在論）とは、人生に対する規範として欄外に置くことのできない論点をもっています。

また「東洋の原理（理屈）」について本稿の提言を納得して暮らしの場で活かすことができるなら、「あなたの人生はおしまい」どころか「あしたがあるさ」ということになるでしょう。

「エイジノミクス egenomix」は、狭義の意味ではアベノミクス（青少年・女性主導の経済）に対応する高齢者主導の経済ですが、ここではモノづくりだけでなく活動や人生論での高齢者主導の立場でもひろく用いています。

あとがきに高齢期に得たふたつの課題について述べましたが、共生としての「アジアはひとつ」が統一されたテーマです。

堀 亜起良

一九三八年（昭和一三年）十一月一日

東京生まれ

東洋哲学者



堀内正範

一九三八年十一月一日、東京生まれ。都立両国高校、早稲田大学文学部卒業後、朝日新聞社に入社。現代用語事典『知恵蔵』編集長などを務める。一九九四年に早期退社して中国中原の古都洛陽市へ。洛陽外国語学院外籍專家を経て同学院日本学研究中心研究員。洛陽国際龍門石窟研究保護学会本部顧問。

日中文化交流（文温の絆）・アジアの共生（モノの豊かさの共有）と日本高齢社会（三世代平等型長寿社会）がテーマ。

著書に、『洛陽発「中原歴史文物」案内』（新評論）、『中国名言紀行 中原の大地と人語』（文春新書）、『人生を豊かにする四字熟語』（ランダムハウス講談社）

『丈人のススメ 日本型高齢社会 平和団塊が国難を救う』（T R H・J）などがある。